

輯編說解 男 乙 井 藤 士 博 學 文

集 本 稀 璃 瑰 淨

(全)

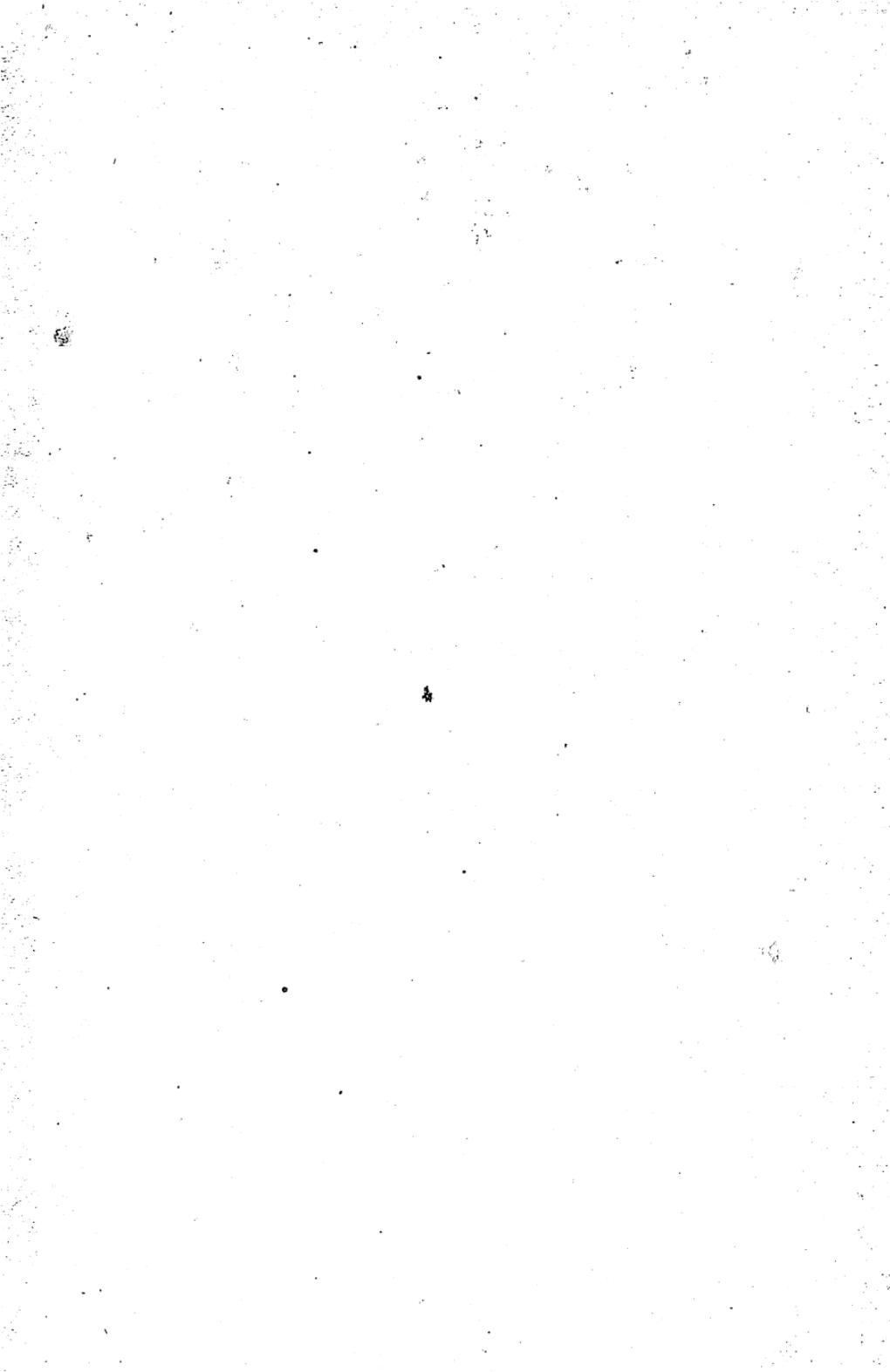


文學博士 藤井乙男氏〔編輯及解說〕

校註淨瑠璃稀本集全



株式會社 文獻書院發行



凡 例

一本書には淨瑠璃として稀覩に屬するもの十一種を選んでこれを收めた。

一、原本はいづれも假名書の部分が多く、送假名・假名遣等は全く不規則であるが、今翻刻に際し、便宜上漢字交りに書改め、又送假名・假名遣等もすべてこれを正した。但し助動詞の「なり」をも「成」とし、感歎詞の「のう」を「なを」と書くなど、當時慣用の汎かつたものは、そのままにして改めなかたのもある。

一、句讀は原本には語る上の句調によつて附してあるが、今は普通の文章の句讀に従つた。

一、原本には地・中・ハル・フ・シ・詞等をはじめ節譜を施してあるが、今すべてこれを

本書の校訂は穎原退藏氏を煩はした。
省略し、平家・謠・アミドブシ等の類だけ残しておいた。

藤井乙男識

目 次

解 題

伊 勢 物 語

初段目

二段目

やへがき姫道行

三段目

四段目

五段目

大 曾 我

ふじのまきがり

中之段

三四七

鬼王園三郎道行

三七

下之段

四二

時宗三部經

五二

新版腰越狀

第一

五七

第二

六七

第三

七四

若草姫道行

七七

第四

八四

第五

九二

源賴家鞠始

第一

一〇一

第二

一〇七

第三.....	一四
第四.....	一二二
まんじゅのまへ道行	一二五
第五.....	一二七
辨慶誕生記.....	

武藏元山寺兒.....	一三五
第二.....	一四二
第三.....	一四八
なぎのまへ道行.....	一五二
第四.....	一五六
第五.....	一六〇
大福神社考.....	
第一.....	一六七

第一	100
第二	101
第三	102
第四	103
第五	104

曆

第一

一一一

一一二

一一三

一一四

一一五

朝顏嬪道行

東山殿追善能

第一

一一九

第二	一一三四
第三	一一三九
第四	一一四五
第五	一一五一
道中評判敵討	一一五六
一心五戒現	一一五六

賴光跡目論

上之段	一一六七
-----	------

中之段	一一七五
-----	------

しほがま	一一八〇
------	------

下之段	一一八二
-----	------

冬牡丹女夫獅子

上之卷	一一八九
-----	------

中之卷	一一〇二
-----	------

牛若ひたゝれの模様

下之卷

閑十三段

一一〇五

一一一四

一一一五

解說

伊勢物語

藤原繼蔭が持ち傳へた都鳥の傳授一巻を、大鶴鶴刀禰太郎が奪ひ取つた事に端を發し、繼蔭の女八重垣姫が紀有純に嫁して、業平の幽靈に見え、伊勢物語を作つて女院に差上げることを骨子とした作である。それに繼蔭の遺子松壽兄弟が父の仇刀禰太郎を討つことがからまつて、最後は曾我の十番斬をもちつた日出度い仇討で終つてゐる。全篇に亘つて所々に伊勢物語の歌や文句を取り入れた點が、作者の最も趣向を凝らした所で、近松の作と推定される「徒然草」や「龜谷物語」など、同様の行きかたである。隨つてこれも亦近松の初期の作ではあるまいかといふ疑も持たれるが、遽かに決し難い。業平の幽靈は謡曲「井筒」からの着想であらう。

原本は八行四十九丁の大型巻上本。刊行年代不明であるが、八行本の板式は延寶七年の「牛若千人切」が最初であるから、延寶八・九年頃の刊行であらう。加賀掾の正本としては「外題年鑑」にも見

えず、稀覯の書といふべきである。

大曾我富士の牧狩

曾我兄弟の仇討として殆んど本筋だけを運んだもので、曾我物語の外に特に趣向を設けたといふ程の所はない。近松の頼朝演じ・百日曾我・曾我五人兄弟等は、この大曾我に據つたと思はれる所が多いが、近松自身の作とは認められぬ。只曾我物として大曾我が最も汎く知られて居たので、特にこれに據つた事が多かつたのだと見るべきであらう。帝國圖書館本には時宗三部經の一節が多く、百日曾我の三部經も勿論これを踏襲したのであらうが、流石に近松は本文と巧みな連絡を取つて、唐突な不自然さをいくらか除いてゐる。

原本八行九行十行取交三十丁(帝國圖書館本は八行三十二丁)。正本の所屬は奥附を缺くため明かでないが、上の段の幕盡しの一節は「古播磨風筑後丸」中に收められた富士の牧狩幕づくしと全く一致し、「富士の牧狩」と題する繪入本とも全部同文である。又「外題年鑑」にも井上播磨の正本としてあげてある。

新 版 腹 越 狀

平家物語を題材として仕立てた義經物の一つである。與一の妻若草をして全篇を通して巧に平家方と義經と關係を保たせる役を勤めさせ、又逆櫓・那須與一・大原御幸等平家の文句を多くとり入れてゐる所などに作者の苦心が認められる。種々の題材をとにかくこゝまで纏めあげたのは、相當の手腕ある作家でなければならぬ。しかし文體から見ては近松の作とは思はれぬ。或は錦文流あたりの作か。

原本八行六十丁。竹本義太夫の正本で、「外題年鑑」によれば元祿十年四月六日の興行とある。

辨 慶 誕 生 記

室町時代の作たる「辨慶物語」をもととして、これに多少脚色を加へたものである。廣盛を終始敵役に使つたり、なきの前といふ姉を點出して柔か味をつけたりしたくらゐが趣向で、文章も内容も拙劣といふ外はない。

原本十行二十八丁。山本角太夫の正本である。「外題年鑑」の義太夫の條に「辨慶出生記」として

元祿七年正月九日興行のものが見えるのは、これと同一であらうか。

大驅神社考

將門の非望と秀郷の蟻蛭退治とを骨子とし、これに豊日皇子とつぐ姫との情事をからませた作である。趣向は拙劣といふ程でもないが、長門の局と賤男との情事が唐突で且つ全體の筋と密接な關係がなかつたり、秀郷の蟻蛭退治も獨立した一挿話の如き感があつて、全體としての統制を缺いてゐる。殊に末段の豊日王子は西宮の恵比須、將門は八頭大蛇、つぐ姫は稻田姫の再來だと落ちをつける如きは、そこが即ち作者の眼目であらうが、あまりに荒唐無稽と評せざるを得ぬ。第一段に八人藝の盲人を忍び込ませるなどは、當時の流行をあてこんだものであらうか。

原本八行五十六丁。義太夫の正本であるが、「外題年鑑」などにも所見がない。刊行年代も不明である。但し末段の都の惠方を云々して居る所から、ほゞ推定する事が出来るかも知れぬ。

暦

西澤一風の「操年代記」に西鶴の作と記されてゐる「暦」が、即ちこの正本である。義太夫に拮抗

すべく特に加賀掾のために作つて與へたといふのだから、西鶴もかなり骨を折つたものであらうが、何分西鶴の素質はかの多くの浮世草子を見ても分る通り、まとまつた長編の作には適しなかつた。この「暦」は彼の淨瑠璃の作として殆んど唯一のものであらうが、やはり構成上の統一は決して成功してゐるとはいへない。彼の才にしてこの外には全く淨瑠璃の作に手を出してゐないのを見ると、彼もまた自らその短所を自覺して、敢へて近松と覇を争ふ如き野心を起さなかつたものと思はれる。

「暦」は從來「操年代記」によつて名は知られてゐたが、原本の傳はるものなく、僅かに「小竹集」の中に、しやれ物語・朝顔姫道行・富士の十二月等の景事道行が收められてあるだけだが、先年越路太夫の藏架中からその丸本が發見されたのである。而して「操年代記」によれば加賀掾が大阪に下つたのは貞享三寅年とあるが、「暦」もこれと對抗して語つた義太夫の「賢女手習并新暦」も共に、貞享二年正月の刊行であるから、その興行もまた同年の事と思はれる。原本八行四十二丁大型献上本。

源 賴 家 翠 始

千葉介胤政を主人公とし、義秀万壽等の人物を配して比企能員の隠謀を發くといふ筋である。脚色

も文章も共に相當の出来栄であるが、作者は何人とも推定する事が出来ない。或は近松の作でないかとも疑はれるが、近松としては些か拙だと思はれる節もあるので、遽かに決し難い。第四段の胤政が萬壽の家で義秀に見あらはされるをかしみは、狂言花子の翻案であらうが、「凱陣八島」の第四段や「吉野忠信」の忠信が貞順と知らずに席の悪口をいふ滑稽程原據には忠實でない。

原本八行五十五丁奥附を缺くので正本の所屬を明かにしないが、繪入本には巻首に加賀據正本とある。

東山殿追善能

萬榮丸と直衣前との戀物語が主で、題名に相應する追善能のことはむしろ添へ物といふ形である。

按ふに京都で義政の何百回忌かが修せられた時、それをあてこんだ興行で、その爲に全體と殆んど何の關係もない第一段をとつてつけたのであらう。末段の富士十二月は前出「暦」の一段をかり用ひたので、萬榮丸の預けられた所をだしぬけに清見寺としたのも、この十二月をこゝで語らせるためである。近松作と推定される「東山殿子日遊」とは別に關係はないらしい。

原本八行四十三丁。加賀掾の正本である。刊行年代不詳であるが、かりに義政の二百回遠忌の時とすれば、元祿二年に當ることとなる。

道中評判敵討

元祿十四年五月九日伊勢の龜山で石井兄弟が親の仇を討つた一件を脚色したものである。この事は都の錦も「元祿曾我物語」と題して書綴つて居り、當時世の耳目を集めた事件なので、早速これを淨瑠璃にとり入れたものであらう。石井兄弟が草履取に住込んでからの事を主題とし、守介と敵波之丞の娘との戀をからませてある。しかしこの戀は結局どうなるのか、最後は仇討だけで終つて戀の結末をつけてないのは些かあつけない。

原本繪入十二行九丁。近松の「一心五戒魂」の切淨瑠璃となつてゐるが、文章は拙劣でこの方は到底近松の作とは思へない。刊行年代不詳であるが、仇討のあつた翌十五年の興行と推定される。利太夫といふのは義太夫の弟子で、當時切だけを語つたのであらう。

頬光跡目論

近松の作と推定される「多田院開帳」の粉本となつたもので、「多田院開帳」では橘姫の趣向を加へて多少の色を傳けたり、子四天王の脚色を設けたりした外、筋は殆んどそのままであり、文章まで跡目論と同一な所が多い。加之「文武五人男」もまた跡目論によつた所があり、又「關八州繫馬」の伊豫の内侍の不例を四天王の女房達が慰める條は、跡目論の頼光の病を慰める爲め遊びの趣向を書附で伺ふのを翻案したやうなものである。これ等の點から見て、跡目論も近松が初期の作ではあるまいかといふ疑は十分持ち得る。しかし海音にも「新跡目論」があるし、只古淨瑠璃として最も名高いものゝ一つであつたから、近松もこれを題材としたとも解せられる。なほ傍證を得て定むべきであらう。原本八行三十丁。筑後掾の正本であるが、これはもと井上播磨の正本で五段本である。(五段本は新群書類從第五に收められてある)それを後に三段として義太夫の正本に用ひたものと思はれる。文章は段の終りが少し異なる外全く同一であるが、只五段本の第三段にある馬ぞろへの景事がこれには除かれて居る。馬ぞろへは「古播磨風筑後丸」にも收められてあり、播磨の語り物としてその曲節のまゝ汎く口ずさまれてゐたので、筑後は特にそこだけ除いたものであらうか。

冬牡丹女夫獅子

近松の作にかかる「孕常盤」を改作したものである。即ち「孕常盤」の第一段を上之段、第二段を中之段、第四段を下の段として、第三段と第五段とを全部省略し、そのかはりに第四段の終りに、「かかる所へ鞍馬山」以下(三二二頁)
(七行以下)の文句を加へて、結末をつけてゐる。外題年鑑にも所見が無く、その興行年代も明かでない。しかしその内容から見て、これに加筆して「孕常盤」となつたのではなく、寧ろ「孕常盤」を勝手に省略して、三段物にしたのことは明かである。隨つて「孕常盤」より後に興行されたものではなければならぬ。然るに外題年鑑によれば、「孕常盤」は正徳三年七月の上場となつてゐるが、その信ずべからざる事は、正徳元年刊行の「鸚鵡が袖」に「孕常盤」の模様づくしと露のくつわ虫が採録されてゐる事でも、直ちに証せられる。況んや本曲が加賀様の正本として現存して居るのを見ると、更に「孕常盤」興行の年代は溯らねばならぬ。近松全集第九卷所收「孕常盤」の解題の如く、これを寶永七年八月の上場とすれば、まだ加賀様の生前の事であるから、その改作が加賀様の正本として存してゐても差收へない。而してこの改作も近松自身の手によつたのでなく、誰

かと勝手にやつたものであらう。題名も牛若と淨瑠璃姫と二人の仲を匂はせたのであらうが、近松の命名とは思はれない。

原本八行四十八丁。すでに述べた如く加賀様の正本である。

原本こゝに題名なし
今これを補ふ。

淨瑠璃稀本集

伊勢物語

内に怨の女なく云々
1當此時也、内無
怨女、外無三職夫(孟
子、梁惠王下)。
しるよし故一しるは
知行所の義、伊勢物
語の、昔男ありけり
初冠して、奈良の京
春日の里に知る由し
て狩にいきけりの文
を採れり。

錦雞一もと外國の鳥
形雞に似て冠毛黃金色
にして黒斑あり、
身鰐尾紅鰐尾等の色
雜りて美麗なり。
河鷗白澤一伏羲の時
河中より龍馬園を負
うて出できといふ、

扱も其後序昔大御息所と申いまそかりけり。宇多の帝の中宮に立たせ給ひ、皇太后宮藤原の温子(おんし)と聞えあげ、目出たく時めき給うげる。天皇御遁世(まし)て、仁和寺に移らせ給ひ寛平法皇と申せしより、此女院は延喜帝の御養母として、國母の號を蒙ぶらせ給ひ、七條の后共申奉る。持統皇極の例にならひ、屢々天下の政を聞召し、君を補ひ給ひければ、内に怨みの女なく、外に曠しき男なく、天下太平長久と明渡る春こそ長閑なれ。かゝる所へ女院の御弟枇杷の左大臣仲平公、春の始の御禮とて御院参なされつゝ、つきせぬ年始の御壽(ことぶき)申納候と、御盃も事終り、仲平仰上らるゝは、扱も大和ノ國春日の里は某がしるよし故、かの里の狩人今朝希有の鳥を持參致し候。吉凶いかゞ心得がたく御伺ひのため召つれて候也。それくと召るれば、五色の斑ある錦雞を、獵人抱き罷出、やがて御前に差上ぐる。女院御感限りなく、唐土の聖代には麒麟・鳳凰・河圖・白澤現はれしと傳へしが、

三才園舍に、東雲山に
に瀧歌默り、一名白音
瀧とも能く、音韻詠
す、王者有徳明照御
遠なる時は則ち至る
昔黄帝巡狩して東海
に至る、此數言ふこと
あり、時のために
害を除く。

我日の本に於てかゝる靈鳥出る事、君賢王の名を残し、御代萬歳の例ぞや。されば周公は粟を得て其書に名づけ、漢武は鼎を以て其年に名づけしとや。此喜びもさの如く、物にぞへて今年より年號改元然るべし。能々奏聞し給へや、あらめでたやとの給へば、仲平悅喜まし／＼て直に參内なされけり。其後女院は女房達を召れ、自ら此春大願あつて伊勢參宮の望み有り。幸ひ此鳥を太神宮への御土產に、伊勢のお山へ放ち神の鳥となすべし。ついては數多の鳥の中に、若都鳥といふ鳥の色音や知つ、あの狩人に尋ねよとの給へば、畏て人々右の次第を問はるれば、さん候、某は大鷦鷯の利根太郎とて、數年の狩人にて候へ共、都鳥といふ鳥は名さへ今が初にて候ご謹而申上る。げに／＼さもこそあらめ、若其鳥の子細ばし聞出して有るならば、早速注進申べし。過分の御褒美なさるべし。是は當座の價とて、黄金十斤給り、汝も此鳥を持たせ御參宮の御供し、神に誓ひ今より後殺生をとゞまりて、慈悲の門に入るべしと、世に有難き御諫め。扱吉日を擇ばれて、神祇の大夫助近路次の祓へ供奉の裝ひ、挿頭の榦影青き、柳を折れる鹿島立ち、めでたかりける三重次第也。是は扱置、爰に伊勢國二見が浦の傍に、木工の尉藤原の繼蔭とて文武に富める侍有り。種性ゆき人なれ共、時に遇はねば家貧しく、朝な夕なの煙だに絶間がちなる軒の草、漁村の宿の樂しみに、太公望が釣はれど、ア、わくらはに御幸する文王のなき世の中を怨

都島一武藏國と下總の國との中に、いと大きな川あり、それをすみだ川といふ、白き島の嘴と足と赤き島の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ、京には見えぬ島なれば、皆入らす、渡守に問ひければ、これなむ都島といふをきいて、名にしねば、いざこと問はん都島わが思ふ人はありやなしやと(伊勢物語)

みて暮し給ひしが、此事を傳へ聞き、姉に八重垣十六才、次男松壽十四才、乙に梅壽十三才、母諸共に招きつゝ、此度女院の御前御參宮に付、兩宮の御山へ諸鳥を放ち給ふて、都鳥といふ鳥を御尋ねなさる由、そもそも都鳥といふ事は歌道の祕密日本の寶也。昔業平の中將隅田川にて見たるより、恐らく世上に知る人なし。され共某不思議に是を傳へたり。今御尋ある事は、武運の花の開くべき瑞相、さいはひ今宵齋宮にお宿を召すと聞てあり。急ぎ参り注進申し、世に出ん嬉しやと、かの祕傳の一卷を守袋に入給ひ、追付めでたく歸らんと立出給へば、人々は門出祝ふ暇乞ひ、是今生の別れとは後にぞ思ひ三重知られける。既に其日も暮方に齋宮には女院の御泊りとて、人を拂ひ立騒ぎたる折柄に、件の鳥を檻に籠め、荷はせて、刀禰太郎後に警固し來りけり。繼陰御覽じ刀禰太郎が袖をひかへ、某は此邊の浪人者にて候が、都鳥の子細存じたる者あらば、御褒美望次第との院宣也と承る。我等が家に都鳥の傳授の一卷候故、差上げん其ために參上申候へば、宜しく御披露頼奉ると懇懃に述べらるゝ。刀禰太郎横手を打て、扱々結構成物を所持せられて有ものかな。あつばれ無類の忠節よろしく申上ぐべきに、暫くそれに待たれよと、奥をさし入りけるが、中にてちやくと思案し、いや／＼此事披露申さば、彼奴に過分の御褒美有べし。所詮彼めを打殺し、かの巻物を奪ひ取り某が差上げば、いよ／＼御褒美厚く給はり、大福長

たまことに手なし一歎
くには防ぐべき手段
なし。(説)

者と仰がれん。天の與へ是なりと、ひとり喜びおもてに出、是々御注進の人、只今の趣披
露申て候へば、近頃神妙の至り此上は何にても望みを叶へ下さるべしとの御事也。急ぎ祕
傳の巻物を此方へ渡されよ。献上せんといひければ、纏陰喜び守袋よりかの一巻を取出し
渡さる。太郎請取り懷中し、腰の刀をすばと抜き、飛びかゝつて纏陰の心元を突通す。

こはいかにと飛び退り、拔合せんとせられしを、疊みかけて打つ太刀は、欺すに手なし足死
も、弱々と成所を、押伏せてとめを刺し、草叢に隠し置き、心静かに汗押拭ひ、さあら
ぬ體にて入りけるは、情なうこそ三重見えにけれ。去程に刀禰太郎は女房達に近付、今日某
道中にて不思議の一巻買ひ得て候。宜しく御披露頼み上ると、やがて御前へ上にけり。女
院いよ／＼御感あり。時しもあれ此道にて、歌道の實を得る事は神慮の納受、且は又狩人
が正直天道に叶へりと、かの巻物を頂戴あり。開き給へば不思議やな、一巻さつと血に染
まり、俄に虚空震動し、大雨銀河を覆へし、雷火亂れて三重おびたゞし。内宮外宮の禰宜
神主我も／＼と齋宮に出向ひ、是しかしながら太神宮の御咎め、御供の人々に穢れたる者
やあると、上下騒ぎて評定す。神祇の大夫申やう、詮ずる所刀禰太郎が日比殺生の罪深き
其御咎めさぞあらん、是聊かの義にあらず、先々罷歸れとて御暇給れば、是非なく都に歸り
けり。され共雨風止まざれば、社人達申さるるは、此所に神代の昔明星の天降り影を宿せし
しかしながら全く

明星云々多氣郡明
星野(明野とも)の事
をさするべし。

八乙女一神社に奉仕し神樂など奏する八人の少女。

池水の候。かの水を掬び當所の火にて湯を沸し、是を飲む人胸中の汚れを拂ひ、火を清め候よし、召上られて御覽ぜよ。此義尤然るべしと、四邊の家より湯を調じ、君をはじめ奉り供奉の人々是を飲み、一度に神を拜すれば、忽ち空晴れ雨收まり、各々心地清まりし神變自在ぞ有難き。それより所を今之世に明星の名にし負ふ明野原と申也。女院いよ／＼渴仰の袖を連ねて兩宮の御宮めぐり遊ばされ、天の岩戸の明け初めし、其吉例に任せんと、神すゞしめの大々神樂を参らせらる。巫八乙女獅子頭青幣白幣、其役々を揃へしは殊勝なりけり。ちはやる神と君が世千代萬歳、動かぬ國こそ久しけれ。

二 段 目

扱其後松壽・梅壽兄弟は、父上歸り給はぬを心もとなく思ひつゝ、女院のお宿と聞く齋宮に立越えて事の由を尋れ共、はや女院は昨日御下向ましませしが、さやうの人は知らぬと云へば、痛はしや兄弟は何所を尋ねんやうもなく、呆れ果ててぞおはしける。然る所に草叢より大二三疋駆け出、肉をひつ咬へ、彼方此方へ争ひけり。こは不思議やと兄弟は、草押分け見給ふに父上の死骸也。南無三寶情なや。如何成者の仕業ぞと、死骸にかはと抱き付前後も分かず泣き給ふ。松壽涙を押へ、やあ如何に梅壽丸、父上の御運の程我々が行く末の

侍は闕を越すより七
人の敵あり。俗諺な
りともいふ。

侍冥加も是まで也。いざ刺達へ御供せんと涙と共に之給へば、梅壽聞給ひ、尤也、去なが
ら我々是にて自害せば、身の一分は立べけれ共、母や姉を見捨てゝは其一分立難し。先此
度は故郷に歸り、足弱達を片付て其後はともかくも、いざゝせ給へ、いや暫らく、父の死
骸を曝し置き、虎狼の餌食となさん事口惜しく候へば、いざゝ如何にも收めんと、あた
りの石を轉ばし寄せ土砂掩ひ竹垣し、兄弟目と目を見合せ、拗しなしたりく、こはそも
如何成因果ぞやとて、地に伏し沈みて泣き給ふ、今は歎きて甲斐あらじ、いざさらばとて兄
弟は互に諫め諫められ、一見をさして歸らるゝは痛はしかりける三重風情なり。かくとは
知らで二見にますます八重垣は母上に近付て、拗も父上は今日三日に及べ共歸らせ給はず。
其上又迎へに出し兄弟もいまだこすゑの鳥の聲常ならず候へば、心にかゝり胸騒がしやと
のたまふ所へ、兄弟は惜々として歸らるゝ。やれ氣遣はしや父上は如何にくとのたまへ
共、兄弟とかうの返事もなく伏し沈みてぞ泣き給ふ。母上興覺めこは如何に、何とて子細
を申さぬぞ。はや疾くと責め給へば、なふ恨めしやかやうく、と言ひも果てず聞もあ
へず、それは誠か悲しやと、聲を揃へて泣き給ふ。げに理とぞ聞えける。されども母上
甲斐ゝ敷、やあ何を歎くぞ兄弟よ。それ侍は闕を越すより七人の敵有り。門を出るたび
毎に是を別れと思ふとかや。汝ら幼なきとても侍の名を汚せば、父の命を惜まずとも我が

吼面一泣き顔。

吼面一泣き顔。
前へ歸り吼面は何事ぞや。エ、おくれたり卑怯者、未練なる心底や。親と思ふな子とも思はじ、七生までの勘當ぞ。此方へ來れ八重垣、奥をさして入給ふは苦々しくこそ見えにけれ。兄弟呆れておはせしが、オ、實御尤過つたり。如何に梅壽丸、母の仰の通り武道も孝行も敵を討たでは立つべからず。去ながら名も知らず見も知らぬ敵の行方、何をしてるべに誰をやは狙ふべき。討たでは又道立たず、是非の料簡當惑せり。いかにと申さる。梅壽聞もあへず、いや、敵を見知らぬとの言譯は立まじき。此度我々一人なりとも、父上の御供せず出し奉る故なれば、所詮越度は我々兄弟遁る所候はねば、畢竟父の敵は兄上と某、外に恨みん人もなし。二人是にて打果し、互の憤憤晴らし申さん。御覺悟あれとぞ申さる。松壽につこと打笑ひ、いしくも申せし梅壽かな。然れば御身が親の敵は某、某が敵は御分よな。はづんだる料簡微塵遁る所なし。時刻移るにいざらばと、左右に別れ身繕ろひし、總じて親の敵には聲をかけて討つものと聞く。兄なればとて用捨すな。日頃は兄弟今はかたき、他人より猶恥かし。尋常に打果さんと、互に太刀を抜きかざし、やあ親の敵遁さぬぞ。なふ父の敵遁さじと、兩方聲をかけ合せ打合せし太刀音に、八重垣驚はづかし一塵恥を重んすべし。

き走り出、なふ情なやこはいかにと、二人が中へ割つて入、オ、健氣成とよ方々よ。去な
がら人言に能死したりとは言はずして、狂氣して死したるか、大死など、言はれては、な
まなか死しての耻辱也。誠さほどに思ひなば命限りに尋て見よ。親孝行の道なれば、など
か佛神三寶も憐れみ遇はせ給はざらん。平にとまれと制すれども、思ひ詰めたる一人の者、
翻へすべき氣色なし。八重垣重ねて、扱はみづから女なりとて兄弟の數に入れざるか、女
成共恐らくは心は男に變るまじ。死して譽に成なば妾が先に死すべきぞ、一先妾が思案
も聞け。たとひ敵を見知らず共、天下に一つの巻物を討つて取たる事なれば、やれ水を潛
り地を分けてもそれをしてしに尋ねなば、いかでかめぐり合はざらめ。よし、それとても
遇はずんば其時こそはともかくも、是非此度は静まれとさまく教訓し給へば、思ひ切つ
たる兄弟も姉の諫めに納得し、惜々として静まりし心の内こそ殊勝なれ。八重垣大悦かぎ
りなく、誠に姉を姉と思ひ諫めにつくこそ嬉しけれ。さあらばかたぐは何方をも尋ねよ
や。妾は母の御供し上方をと有ければ、此上はともかくも御はからひに従ふべし。去ながら
母上の御勘當を蒙ぶりては行末とても頼みなし。門シ出いかゞと有ければ、八重垣聞召し、
其段はみづからが申宥め得さすべし。いざ此方へと打つれて母のお前に出給ひ、右の次
第を申さるれば、何々敵を尋ねんとて松壽梅壽は旅立つとや。オ、さもこそあらめ神妙さよ。

千世もと祈り一世の中にさぬ別れのな
くもがな千世もと祈る人の子のため（伊勢物語）の歌に據る。

一度勘當しけれども、敵を尋る門出とて、姉が深く詫びる故、只今は許すなり。本望遂げ
て歸る迄は必ず／＼勘當ぞ。許すとばし思ふな。片時も早く罷立と、愛相なげにはの給へ
共、さすが別れの悲しさに、包むとすれど恩愛の涙は袂に餘りけり。兄弟も涙ながら御心安
く思召せ。露の命のあらん限り敵を討たでは歸るまじ。母上の御事は姉君頼奉る。もはや
お暇申とて、立出給ふ後姿母上は御覽じて、ア、情なきは武士のならひ、いとほし可愛い
と思ひ子の東西だにも辨へぬを、敵を討たでは歸るなとて、勘當しける母が身を、さぞや
つれなく思ふらん。千世もと祈りそだてしに、何憎しみの有べきぞ。是も家名よこを汚さじた
め、もしやは母に心引かれおくれをや取べきかと、心に思はぬ勘當を神も佛も憐れみて、
敵に廻り合はせてたゞ。扱恨めしの世の中やと、焦がれ／＼て泣き給ふ。されども八重垣
まさる宮の内、年經てすみし伊勢の番も舟流したるふ地して、寄らんなく悲しきに、涙の色の紅
は我等が中の時雨にて、秋ののみぢと人々はおのが散り／＼とあるに據る。かひこそなけれ一甲
斐と貝とかく。甲斐と貝とかく。

沖つ波荒れのみ増さる草の戸は、かひこそなけれ一見漏、秋の紅葉と人々は、おのがちり
／＼別れゆく。親子の縁こそ果敢なけれ。世をも人をも忍ぶ草、露は袖涙は襟に包まれて、
いつ濡れそめし我身とも、思はで過ぎし故郷を、今を限りと眺むれば、月は東の山の端に

伊勢物語やへがき姫道行

沖つ波荒れのみ増さる草の戸は、かひこそなけれ一見漏、秋の紅葉と人々は、おのがちり
／＼別れゆく。親子の縁こそ果敢なけれ。世をも人をも忍ぶ草、露は袖涙は襟に包まれて、
いつ濡れそめし我身とも、思はで過ぎし故郷を、今を限りと眺むれば、月は東の山の端に

藤方一安濃郡、今藤
水と改む。
波のうね／＼しげ、
れば云々一謡曲羽衣
の、雲の浮浪たつと
見て、釣せで人や歸
るらんの文句を模
あこぎに一地名と深
く物を思ふとかく。
あらし／＼風と有らじ
とにかく。
笠を今宵の一徳度の
「行幕て木の下かひを
宿とせば花や今宵の
主ならまし」をもぢ
大龜谷一狼にかく。
井出一出でにかく。
玉水一奈良海道の地
名。
嵐一不有にかく。

鳴き渡りつゝ初雁の、別れ／＼の身の上に、何を二葉の松坂や藤方鳴海うち過ぎて、あれ
御覽ぜよ夕潮の、波のうね／＼しげければ、釣せで歸る蟹の業、均らせや均らせ鹽濱均ら
せ、網引く浦の名に寄せて、阿漕に物を思ふよな。ア、一夜たに／＼床も離れぬ兄弟を、枕
の餘所の旅寢には、宿もあらしにもまれたる笠を今宵の主にて、明しかねたる笠竹の、近
江路過て是や此、逢坂山の岩清水、關の明神伏拜み、行くも歸るも皆人の待ちつ待たるゝ、
道を急げば駒を早めて追分や、我は徒步路の草鞋の、足を食ふも恐ろしき、大龜谷に日は
暮れて、暫しはこゝに伏見山、松の煙か夕霧か雲な隠しそ、せめて都の空を見ん、靡けや
靡け竹田の里、宇治の川風風の懸けたる柵も、今の憂き身はよも止めじ、堤傳ひの長繩
手、山城に井手の里、岸根の草に波かけて、夕日こぼるゝたま玉水のむすぶ契を頼みつゝ、
母をも身をも慰めに語る名所は生駒山、立田の峯や三輪の山、いかに待見ん年經とも、尋
る人も嵐吹く、春日の里に着給ふ親子の人の御有様、げに世の中の物のあはれは多けれど、
是ぞ涙の限りならんと、聞く人袖をぞ絞りける。

去程に昔紀の有純といふ人あり。三代の帝に仕うまつりやんごとなき身なりしが、時移り

三 段 目

山梁の雌雉めいし—山梁雉
雉めい、時哉時哉論語、
鷄鳴篇けいめい梁は橋なり。

おのがありかを人に
知れつゝ春の野に
あさる雉子の妻戀に
おのがありかを人に
知れつゝ（拾還、家
持）

罪も報も云々論曲
鷄鳴の文句。
十二の雉めい—雉は十二
子を産むと言ひ傳
すけて一さし込みて
つけること。

衰へ世に經るたつせんかたなく、晝夜獵りやくをぞ營みける。今日は長閑ながのんけき春の空、雉めいを取
らんと春日野や飛火の野べの若草に、繩なわをさし網あみを張り、我身は案山子にかけ籠かごり雉笛めい笛を
吹き鳴らせば、山梁の雌雉めいし時を得て、おのが在所あひかを人に知れつゝ、妻戀の雉子のあさる有様
は、罪も報も後の世も忘れ果てつゝ面白や。爰に又八重垣はるべは遙々の長旅に、痛はしや母上
の深く惱ませ給へども、宿求むべきよすがなく、薄すこが本に立隱れおはせしが、あれ御覽ぜよ、
焼野の雉子めいしは世の中の物憂きものに名は立てど、十二の雉めいを揃へたり。いかなれば我々
は、親子兄弟引別れ、かばかり物を思ふぞや。昔はすげて羽子に突き、よう舞ふ小羽子
と遊びしが、今は中々かこち草、ア、羨ましのあの雉めいやと、暫まことにしながら立給ふ。時に案
山子の内よりも、聲をかけ鳴子を引けば、はつと立て逃げさまに、雛鳥二三羽網こねに入る。
父鳥母鳥悲しみて、鳴き騒ぐこ見えけるが、何とかしけん母鳥係蹄わなに縊くびれたり。父鳥猶も
立ちやらず身を悶え鳴き叫ぶ。獵師りやくしはをも取らんとて、頻りに聲をかけるは、あさまし
かりける風情なり。八重垣はるべあまりの不便ふびんさに、走り寄りて係蹄わなを解き網あみをさばきて放さる
れば、親子の鳥は喜びて行方知らずなりにけり。獵人りやくじん飛んで出姫君いりひめを取つて伏せ、おのれ
はいづくの女めぞ。晝強盜がんじやくのいき盜人ぬすびめ。エ、腹立はらだや打殺さんと手を捻ひねり曲げ、笠の内を見
て、や、はあ是は大事ない盜人ぢや。なふさもあれ御身は何人なれば折角寄せし鳥をむざ

蔽に馬杷一馬杷にて
蔽を銷き耕すこと困
難なり、無理なる意
の跡。
つまの殿一夫の殿。

狩り暮らし云々一狩
りくらし樋機つ女一狩
宿からん天の川原に
われは來にけり(伊
勢物語)
舟流したる云々一古
今集十九伊勢の長
歌、伊勢の垂も舟流
したる心地して寄ら
ん方なく悲しきに云
々とあるに據る。
あるじ一主と有とか
く。

／＼と放さるゝぞ。惣而此所のならひにて、鳥を逃せし女をば妻にする法にて有り。それ
に合點なきならば、以前の鳥をもとの如く網にかけて返されよ。さあ是非の返事を聞かん
と云へば、姫君につこと笑ひ、しゃほに蔽に驚愕なお人かな。鳥を逃せし曲事とて妾を
とゞめ、鳥のかはりに立ならば、いかにもとゞまり申さん。去ながら御連合のつまの殿、今お
返事がなるものか。ならばぬ旅に疲れたる母を伴ひさふらふが、是だに痛はり給はらば、
其後はともかくもどうぞ談合なるべきとあれば、有純聞て、何母をだに痛はらば心に従ひ
給はんとや。扱殊勝なる思ひ入、どれおふくろはいづくにぞ。いざ此方へと手を取て、よ
し鳥は取らず共かへまく惜しや狩り暮し、七夕づめに假の宿、不思議なりける三重次第也。
舟流したる伊勢の蟹の、寄る瀬あるじの情にて、思はず日數を送らるゝ。或時有純姫に向ひ、
扱も御身はつれなくも我に従ひ給はねは、貧しき獵人を侮り給ふか。曲もなや是非此上は
と口說かるれば、姫君は聞召し、誠に母への御痛はり身に餘り有難く、尤御心に従ひたく
は候へ共、さりがたき大願にて精進勤め候へば、つれなき振舞御免有。とかく下人と思召
し使はれて給はらば、御恩は報じ申さんと、世にしみぐとぞ仰ける。主聞給ひ、扱も餘
義なき仕合かな。其義ならば明暮の身をまもるは恥ならず、菜摘み水汲む業をして、共に營
み給ふべし。やあ忘れたり夕凧の狩の時分と出けるが、いかさま彼等が振舞を試して見ん

曉毎の照廟の水月も
心や澄ますらん一謡
曲井筒の文句。

たれかあぐべき一く
らべこし振分變も肩
すきぬ君ならずして
誰かあぐべき（伊勢
物語）

よし一蘿と好。

筒井筒云々一筒井筒
井筒にかけしまろが
だけ老いにけらしな
相見ざるまに（同前）
水の底にも物思ふ一
われはがり物思ふ人
は又もあらじと思へ
は水の下にもありけ
り（同前）
枝の朝露云々一露な
がら折りてかざ、む
菊の花おいせぬ秋の
久しかるべく（古今
友財）に基く。

と思ふにや、狩には行かで我門の一叢薄に身を隠し、事の體をぞ三重見られる。曉毎の閑伽の水月も心やすますらん。さなきだに物思ふ身にしならばぬ閑伽の桶、柄杓の露の玉
樽、寝れ果てたよおどろのナ髪もむすぼゝれ、誰かナあぐべき誰か引く引くべき眞菰草、よ
しと言はれん身にしあらねば、ア、戀をする身でもなや、筒井筒井筒にかけしまろがたけ、
老いにけらしな我姿、影をうつせば水の底にも物思ふ人は有けり、恨めしの水の深さや釣
瓶の繩の短かさよ。汲めばくるくるり車は廻れども、返らぬは昔なりけり。月を釣
瓶に汲み浮けて、袖打絞るぞあやなけれ。かゝる折節あてなる男の氣高きが、菊の花桶手に
觸れて摺違うてぞ通りける。姫もいづれ生心あと見送りて、扱見事な花のといへば、かの
男につと笑ひ、さればこよ此花は思ふ方へ贈らんと求め得ては候へども、うつろふ色の見
えければ、其水少注ぎかけ給はれかしと打濡るゝ、枝の朝露やれ其儘に贈りたいその白菊
の色有方へと申さるゝ。姫片笑みてお易い事や、去ながら思召す御方へ贈り給ふ其花に、妾
が水を參らせなば、人の戀に水をさす懸知らずとや笑はれん。いや成ませぬと有ければ、
御仰はさる事なれ共乞食翁の事なれば、言葉のあやまり候とも、只花故と思召し、情の露の
一秉積りて淵は末の事、是非にといへば姫君も、今は心の弱々と、げに自分が夷心の片絲に
節有る詞面無やな。さのみはいかゞ惜まんと、柄杓にたんぶく汲み入て、男の袖にさつと懸

武藏燈云々一むさし
燈さすがにかけて頬
むには跡はぬもつら
し誇ふ臥うるさし
(伊勢物語)
井筒によりて云々一
諦曲井筒に、井筒に
よりてうる子の友
達からひて、互に
影を水鏡、面をなら
べ袖をかけとあり。
そまーそなた様。

くる。なふ是は扱花の水を乞ひけるがお心にさはりしか。餘りつれなき仕方やと、顔うち赤めて云ひければ、姫はしあつと笑ひ、いや是なふ、妾が目には菊よりも持ける人のお姿を花と見て懸けけるが、憎しと思召けるかと、云ふしほらしき顔ぶりに、猶まめ男堪へかねて、いつまで包みさふらふべき。我は君故憧れて亂れそめに忍摺、心ひとつに綻びて、よしなきたはぶれ申せしそや。御身に望有事も委しく存候へば、必ず叶へ世に立てゝ參らせん。我が思ひを晴らしてたべと、袂に縋り口説かる。姫ももとより心ある男の色に、等閑の己が望の叶ひなば、いなにはあらば武藏燈、さすが別けても皮薄な顔の紅葉や涙ぐむ、目交ぜ手を締め襟を引き、井筒によりて袖を懸け、互ひに影を水鏡、面を並べしやよい殿ぢや、いやそさまこそ美しけれ、命ぞ變るな變らじと、につこと笑ひ筒井筒井筒の水も契約も、淺からずとこそ聞えけれ。此體を有純見て、扱腹立ちや討つて棄てんと飛んで出れば、彼男はつと計の一聲にて、井筒の陰に三重失せにけり。こはいかにと呆れ果て、苦り切てゐる所に、其様化したる姿にて又忽然と現はれ、あら恥かしの我姿や、何をか終にゆく云々一末句
きのふけふとは思は
ざりけり。
あくた川一木と贈と
かく。

の齋垣さいがきを越え、主ある女を奪ひ取、百年に一年足らぬつゝも髪、亂れ心の邪姪じゃひの罪妾婆の樂み冥途の仇呵責あひかしゃくの責を受くる也。此數々の玉章は數多の女に川島の水莖みずいんの跡なるぞ。御身是を書集め筆を加へて草子となし、慚愧懺悔の弔ひし、苦患くわんを助けてたび給へと、涙に萎しおるゝ袂より文の數々取出し、泣くく姫にぞ渡さるゝ。有純も涙にくれ、扱は昔に業平の其幽靈にてましますか。あらいとほしや我こそは御身の舅紀有常の末孫なれ。しかば草子を作らせ懺悔して參らせん。あさましの御姿や。歸らせ給へと有ければ、いや歸れとはあだ波の起居に物を思へとや。我にひこしき人しなければ、我忘るれど人焦かがれ、人忘るれど我忍び、其執心の地獄の責、扱恐ろしやと夕闇の臘月夜の木蔭より、頭かしらは女身は蛇身異類異形の惡靈共、影の如くに現はれて、縦ひ懺悔はし給ふ共、六道四生の其間爰に消えてはかしこに現はれ、煩惱の惡鬼と成放ちはやらじこおつ取廻せば、ア、悲しやと叫べる涙、饑ほと成て身を焦し、彼方あんなへ纏ひ此方こなへ縋り、引立て行くよと見えけるが、なふ苦しやといふ聲の木魂ばかりこ業平の、二世を一世に見る事は前代未聞の次第なりとて、二人は庵に

入給

昔男…女はらから
住みけり 伊勢物語
の本文なり。
しるよしゝて一所領
ありたれはの意。
春や昔一月やあらぬ
春や昔の春ならぬ我
身一つはもとの身に
して(伊勢物語)
富士や浅間の雪煙
時知らぬ山は富士の
ねいつとてか鹿子ま
たらに雪の降るらん
信濃なる浅間の嶽に
立つ煙をうち人の
見やは咎ぬ(同上)
立返る波一いとゞし
く過ぎゆく方の戀し
きに羨しくも返る波
かな(同上)
とまり一止りと泊り
とかく。
武藏野に一武藏野は
今日はな燒きや若草
の妻もこもれり我も
こもれり(同上)
露と答へて一白玉か
露と答へて滑なまし
ものを(同上)

角て其後背男初冠（うみかうぶ）して、奈良の京春日の里にして狩に往にけり。其里にいと
なまめいたる女同胞住みけり。此男とは業平の浮名を筆に匂はせて、かく物語に作りたり。
善惡判じ給へやと、姫は机に倚添ひてあらましをこそ語りけれ。そもそも西の對（むかし）の夜の梅、
春や昔の月やあらぬ、我身一つもあるとだに定めなき世の教へかや。富士や浅間の雪煙、
立歸る波を恨みしは、旅寢の枕假の宿、こまり果てぬは憂き命、あるは武藏野に今日はな
焼きそ若草の妻を重ねて戀衣、怨みつ忍びつ逢うつ別れつ亂れしも、露と答へてあだなれ
や。鬼一口に食ひてげり。是を見彼を聞時は、昔男は名のみにて、本有毗盧遮那佛法身の
内證（ないせう）より、愚癡顛倒の出離（しりつ）の要（よう）を示すかや。治生産業實相に漏れず、読み置く和歌の言の
葉までも皆大乘の妙なる法、説くに詞もよも盡きじ。されば思ふ事言はでたゞにや止みな
んと、書き果したる物語、我も現の心地して其私を忘るれば、各々あつと感歎し、在五中
將南無幽靈頤證菩提と手を合せ、一度に回向なし給ふ。姫はしばし涙ぐみ、なふ此中にも
母上さま、嘴（くちばし）と足とは赤くして、白き鳥の鳴（しき）の大きさなる、是なん都鳥と候は父上の御形
見、怨めしの都鳥やこ、親子は文にふし沈み流藻（りゅうざ）焦れ歎かる。有純眉を掣め、都鳥とい
ふ事に父を思ひて歎くとは心得がたしとありければ、母上聞給ひげに御不審は御理、何を
か包み申べき、此子が父は前の木工（もくこう）の頭藤原の繼蔭（つぐのかげ）とて、伊勢の國の者なりしが、家に傳

鬼一口一盃み出した
る女を取戻されし事
を、「鬼はやれ女を一
口にくひてけり」と
物語に書けるをい
ふ。内證の陀の自己心
中に證悟せる妙境は
佛陀以外の者の窺ひ
知る所にあらざるを
いふ。治生産業一派世の
きばひをいふ。沙石す
集の序に、無言軟語
みな第一義に歸し治
生産業しかしながら
實相にそむかすと見
ゆ。思ふこと云々一思ふ
こと謂はてぞ唯にや
みねべき我と等しき
人しなければ(伊勢
物語)

妻一夫なり。
あぶれギ一もてあま
し者。こくう一遠方の意。

へし都鳥の一巻を、一年女院御參宮の時捧ぐるとして持出しが、齋宮にて何者にか討たれさせ給へ共、敵を知らねば力なく、かやうにさまよひさふらふ也。なふ實は仇とは此事よと又絶え入てぞ泣き給ふ。有純横手をはたと打、扱は先年齋宮にて討たれ給ふは御身の妻か。も狩場の遺恨あり。かやうに因み申からは片時も堪忍成がたし。いで踏ん込んで討つて棄て、本望遂げさせ申さんと太刀おつ取つてかけ出る。姫君暫しと引止め、御志は有難けれども、去ながら恨めしや只今は討たれぬ事の候ぞや。それをいかにと云に自らが弟に松壽梅壽とて二人の若者候が、親の敵を討つまでは母上勘當し給ふ故、虛空に出て候が、討たせ給ふと聞ならば、さぞや本意なく妾を怨み申べし。とてもの事に兄弟が行衛を尋ね討たせてたべ。あつたら敵を目の前にしばしも助け置かん事、思へば／＼無念やと、涙にくれて申さるゝ。義理を感じて有純はげに尤理りと、獅子の怒りを鎮めらる。母上喜び、あら嬉しの御詞や。扱頬もしの御心入や候。それにつき自ら今宵不思議の御告有。此物語を春日の社へ奉納せよ。猶行末を守らんとあらたに靈夢蒙れば、いざ／＼參詣申さんと打連れ宮居に三重參らるゝ。是は扱置松壽梅壽兄弟は、近國殘らず尋れども本より敵の名を知ら

奈良坂へ近くなるに
かく。ふり袖一降るにか
く。肱笠一肱をかざして
二時に雨を凌ぐこと
有徳人一宮着。

ねば、尋るに甲斐ぞなき。され共憂き身を惜まばこそ、谷を越え峯を分け、都も近く奈良坂や、春日の里に入給ふ。先々宮居に参詣し、敵を討たせ給はれと、深く祈誓し立歸らんとし給ふ所に、俄に村雨振袖の、肱笠被ひ藤の花繁れる松の下蔭は、雨のためなる三笠山、さして行べきやうもなく、立寄り晴間を待給ふ。しかる所へ有徳人と打見えて、供人引具し來りしが、是も雨を凌ぎかね足早に駆け來り、やあそれ成童共早くそこを立退け、はや立去れとてはたと睨む。はて我儘成お人かな。御身が濡るゝをいやなれば、我々も同じ事、外に木蔭があらばこそ入替りても參らせん。いや只ならじと有ければ、彼者大きに怒り、エ、存外成奴めかな。我を誰とか思ふ、大鷦鷯の刀禪太郎見知らぬと覺えたり。足元の明き内はや立去れと怒れ共、兄弟ちつとも臆せず、いやさ我々は旅の者大鷦鷯にも小鷦鷯にも、つひに恩は蒙らず、土に生えたる松蔭に立寄るは我らが得、天よりも降る雨に濡れらるゝは御身の損、人の知つたる事かとて嘲笑うてぞおはしける。いや口過たる悴奴やと、郎等共飛びかゝり、兄弟の小腕取り、難言吐かば踏み殺せと、無體に取て引出すは、扱理不盡なる仕業なり。とかくする程に空晴れ雨は止みにけり。刀禪太郎肱を張り、あの餓鬼共めが爰を退かじと争ひしに、望を叶へくれんとて、又兄弟を引立て無體に木蔭へ押付けて、松は千年といへば、いぬめらが好き次第いつまでも居れやとて、どつと笑うて歸りけり。

彼等しき一彼等ぐら
みの者。

梅壽は齒噛はをし、いかに兄上今の如く雜言ざふんせられ生まきて生甲斐候はず。エ、口惜しや界討さんと、飛とんで出でるを取とつて押おへ、ア、暫く待たんりよて短慮也。我わも無念に思おもへ共、大事の敵の敵のを持ちながら彼等のしきと討うち果たしては、大死おおしと言いはるべし。唐土とうどの韓信かんしんは市人いちじんの股またを潜かつて、終に天下ぜんわを治はめしとや。尤も彼かれめは憎にくけれども、かたきには換かへられず。所詮敵の敵のを討うつまでは大切な一命ひとみぞ。平ひらに静しづかれくと、是ぜを敵のと知しらすして、返かすかの教訓きょうくんに、實じにあやまつたり忘うれたり、後あとれも恥はずも父ちちのため、とは思おもへども無念むねんやと、兄弟いりどり諸よ共とも牙はを噛かみ、泣なくより外ほかの事ことぞなき。ア、よしなしいざさらば、神かみへお暇申まさんと、又また神かみ前に參まいらるる。時に有純ありのぶは親子しんしの人々打うつれて、宮居みやいにもなりしかば彼物語かれものごとを供そなへつゝ、姫鰐ひめこ口くちの緒おを取りて打鳴うちねらさんとし給たまへば、松壽まつじゅも同じく手てをかけて互たがに顔おほを見合あわ、なふ松壽まつじゅにてあらざるか、何なに姉君あねか、やあ梅壽丸めいじゅまるか、母上おはか、是ぜは誠まことにか現あらかと、思おもはずひしと抱いだきつき、悦うれび涙なみだは堰せききあへず。有純ありのぶも悦うれび、扱あつは内うち々聞及きぶ御兄弟ごいりどりにておはするかや。是偏ひざきに大明神だいみょうじんの御引合ごひんあと覺おもえたり。御出世ごしゆの瑞相ずいじょうと互たがに積たまる御物語ごものごとに、母上おはの給たまふは、やあ有純殿ありのぶだのお情じやうにて敵のあり所名ところをもとつくと聞きてあり。何なにとぞしてかたたぐを尋たずね討うたせたく思おもひしに、今爰あにて逢まふ事ことも是ぜ神かみの御惠ごひみ、則も敵のは當所とうしょにて、大鷦鷯だいじゆの刀禰太郎とねたろうと、語かたりもあへぬに兄弟いりどり横手よこてをはたと打う、何なに敵のは大鷦鷯だいじゆの刀禰太郎とねたろうと、語かたりもあへ

人は智あるを以て貴
み云々、山島故不
貴、以、有、樹爲貴、
人肥故不貴、以、有、
人肥故不貴(質語數)

論し、生甲斐もなく思ひし故、討果さんとしけれども。いやいや大事の敵をさし置、大死して詮なしこ、敵と知らでおめぐと、討漏らしぬる我々が武運の程の拙さを、思へばく口惜しやと、人めもわかず泣き給ふ。かゝる所へ枇杷の左大臣仲平公、女院の御代參としてざんざめかいて見え給ふ。人々いかゞと立退きて、社の脇に忍ばるゝ。左大臣殿御奉幣事終り、神前に供へたる件の草子をおし開き、やゝ暫らく御覽じて、是は希代の一物と大きに感じ神主を召れ。誰人が奉納ぞと御尋有ければ、さん候あれに見えたる人々の捧げられしと申上る。さあらば其者召せ。畏て人々をやがて御前に召れつつ、事の子細を尋らる。時に有純能出人々の氏系圖、搢業平の物語始め終りを言上ある。左府殿御感限りなく、末世稀成かたゞかな。凡人にてよもあらじ。いざゝ都へ誘引し院の御覽に供へつゝ、よく計ひ得さすべし。それゝ馬よ輿よとて、打つれ上洛なされける。天の下せる生民は、心の中に朽ちずして、人は智あるをもつて貴み木あるをもつて三笠山、貴き春日の御恵み、おしなべく今世までも仰がぬ人こそなかりけれ。

五 段 目

去間延喜七年三月七日枇杷の左大臣仲平公、五人の人々召具せられ女院へ御参あり。

一

年齋宮にて繼陰が討たれしやう、扱刀禰太郎が罪科の次第詳かに言上あり。就中業平の幽靈は姫に見え、斯様くの通りとて、書きあらはしたる物語御前に披露ある。女院聞召、扱は其時天災に遇ひしは其祟りにて有けりと思召合されて、さぞな自らを怨みつらん、ア、不便の者共やと、悉くも御袖に御涙をかけさせ給ひけり。せめて亡父が思出にと、松壽をば伊勢守、梅壽をば大和守、扱有純を上北面に補せられて、其後草子を御披見あり、誠に業平が歌の體、心あまりて詞少なく、人知れぬ心中の密事、幽靈の授けしに疑ひなし。書き加へたる詞私を捨て、本文を助け、すべからく業平が辭宜と見せんため、謙退卑下の詞花言葉、あつばれ優なる物語こ甚だ感じ思召、則姫をば伊勢の内侍と召れ、代々の集にも載せられし伊勢といへるは此姫なり。扱大内記紀の友則御書所の紀の貫之凡河内の躬恒を召れ、右の次第を仰られ、此草子に名を付て參らせよとの院宣也。三人鳥帽子の雛形を揃へ、轉是を吟覽し、扱々めでたき作意にて候物かな。丈高くよせ多く和國の至寶是なめり。唐の文にも例し多く候へば、則作者の名によそへ伊勢物語と召さるべしと謹で言上ある。院げにもと思召、則外題を御自筆にて奏覽諸社の御奉納、中宮姫宮内親王局々に書き寫し、扱こそ今の代々までも吹傳へたる神風や、伊勢物語は是なりけり。かゝる所に春日の里の土民共我もくと參上し、扱も大鷦鷯の刀禰太郎、日比御恩賞をかうに被て、

ひたかぶと一司甲
甫をつたるもの。
鹿を待つ間の狸一諺
なり、源平盛衰記二
十に思ふ敵にはあ
らすして同郡源二郎
なり、あな無僧や
鹿待つ所の狸とは此
事にやとあり。
へんはい一大股に歩
むこと、和訓榮に、
へんはい下學集に
遅闇は天子出御之時
陰陽家の行ふ事也又
禹歩といふと見えた
り。軍家に眞眼と
いふ之を譲れるに
や。 よろひづき一鎧の着
振を整ふること

やうやく神一不詳。

田畠を踏み荒し我儘いたすのみならず、此頃は近邊の獵人浪人を集め徒黨を結び、一揆の用意と見え候故、御領内の騒動もつての外に候へば、早速討手を給るべし、入替へく櫛の歯を引が如く訴ふる。時に兄弟罷出、さなく共親の敵申受けんと存しに、天の授くる所なれば、恐れながら我々に仰付られ下されかしと謹而申さる。左府殿聞召實尤潔し、しからば勢を加ふべしと、在京の武士の内、若武者の直甲八十餘騎揃へつゝ、紀の有純に先手を給はり、大和路としてぞ三重押寄せける。去程に大鷦鷯が境内方一町に構をなし、鳥網・差竿・獵道具をひつしと飾らせ待懸たり。角て松壽兄弟は大勢を引具して、敵陣近く成しかば、先闇の聲をぞ上させける。闇の聲も静まれば、兄弟駒の鼻を並べ大音あげ、先年勢州齋宮にて理不盡に討たれたる繼蔭が二人の子、定めて覺え有ぬべし。親の敵の鬱憤なれば尋常に名乗つて出、相手業の仕合にて脇負を決せんとありければ、刀禰太郎聞もあへず、やあ鹿を待つ間の狸、よき慰みござんなれ。いで某荒斬せんと、大太刀抜いてへんばかり。軍家に眞眼といふ之を譲れるにや。 よろひづき一鎧の着振を整ふること

呼吸のかね一呼吸のかねあひの意。

かんづか一堅束。譽

さいふ。臍落一臍瓜さいふ、熱して熟落つるに至

る義。一頭一瓜を數ふるに一頭二頭といふ。揚卷一鋪の背に結び下がれたる組。

中一ちう(讀方)

刀禰からくと打笑ひ、手にも足らぬ腰折武者にあつたら太刀を汚せしと、しんづくと
引けるはさも憎體にぞ見えにける。松壽腹に据ゑかねて、餘さじと追つかくる。刀禰が小
姓に小鷹の才藏駆け出て斬り結ぶ。嵩にかゝつて打来るを、ひつばづし後より袈裟にすつ
ばと斬られけり。舞三番には瓜生の小源次十六才と名乗て出、素槍を提げ梅壽丸に渡し合
ふ。兩方器量の若侍花めづらしき見參に、偃月水月呼吸のかね、祕術を盡して突きけれど
も、梅壽軽げにひらりと飛び、槍の鹽首むすと取、手繰り寄せてかんづか攔み、瓜生が細
首打落し、なふ輕微ながら臍落の手作の瓜生一頭、是々進上申さんと敵の中へからりと投
げ、靜かにこそは引かれけれ。四番には鷲攔みの鷲の助と名乗て出る。紀の有純御覽じて
オ、事々しそこ引なと聲をかけ、二打三打は打つぞと見えしが、引組んで揚卷攔み、目より
高くさし上げ、大地へどうど打つけ給へば、微塵に成てぞ失せにける。五番には綱平太、
大鉄提げ出けるを、松壽是にありやとて、走りかゝつて丁ど斬る。眞向より弱腰まで梨削
に斬り据ゑられ、弓手馬手へぞさばける。六番には刎係蹄の亂酒坊とて強力者、大鉄を
振擣げ、一軍と進みける。もとより彼奴は強力と名にし負ふ者なれば、兄弟共に渡り合ひ
疊みかけ捲り立て、しと、受けてはひらりと外し、はつしと打てば中に拂ひ、木の葉隠
れの神妙劔、獅子の洞入夢想の太刀、剎那の隙もあらせねば、兄弟あぐんで見えける所へ、

有純中に駆け入て、斬結べる其隙に、兄弟亂酒が左右へ廻り、兩の腕を斬落し敵陣へ追返す。羽拔鳥の報かと籠をたゝいて味方の勢、いやくどつとぞ笑ひける。今は兩陣入亂れ切尖よりも火炎を出し、花を散らして三重戦ひけり。寄手は多勢敵は無勢の事なれば、皆悉く討たれけり。今はかうよと刀禰太郎の棒を振り廻し、只一挫ぎと打てかゝる。三人の人々は大勢に渡り合、疲れたる腕なれば、暫し支へし其隙に、味方の軍兵虜の突網持來り、いきほひかゝりし刀禰太郎が後よりかつばと被けけり。こは無念と悶ゆるを踏み倒し取て伏せ、兩腕兩足引張れば、兄弟悦び立かゝり、日頃己が好みたる悉皆鳥の料理よな、よくもく我父の科もなき身を討ちけるよ。廻る因果を思ひ知れと、づた／＼に斬散らし、勝鬨どつと作らせ、本望／＼千秋樂とわが本領に入部ある。それ日本は神國の神の名に負ふ伊勢物語、めでたし／＼とて貴賤上下おしなべ皆感ぜぬ者こそなかりけれ。

右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開版者也

加賀掾(はせゆ) 囂

二條通寺町西入町
山本九兵衛刊

大

曾

我



大曾我

ふじのまきがり

三浦黨・原本以下黨
を皆等とせり。

中條・原本中將とあ
り。鎌織・原本西二りと
あり。

惟任・惟住・原本是等
是也。

既年號は建久四年五月下旬の事成に、右大將頼朝は富士の御狩有るべきよし、梶原平藏景時兼て詫意を蒙り、國々へ觸れける故、遠國波濤に至る迄、我もくと馳せ集り其勢雲霞の如くなり。景時着到御前に披露する。頼朝御覽してそれにて讀めとの御詫なり。畏て候と、さつと披いて高らかにぞ讀上げける。先一番に御舅北條の四郎時政・嫡子江馬の小四郎義時・畠山の庄司重忠・嫡子六郎重安・三浦黨には和田の義盛一門九十三騎、御家の子宍戸安藝の四郎を初め、其外の諸大名、一々に讀み上げたり。駿河の國には吉川・舟越・高橋黨、遠江の國には横地・勝俣・伊野八郎、三河國に足助・中條・星野刑部、尾張に本部・海東・熱田の大宮司・山田の左衛門、美濃の國に戸木・遠山・平野の平次・八矢の冠者、近江に錦織・佐々木・山本・柏木・木村の源藏、伊勢の國には加藤の彌太郎・伊賀に服部黨、大和の國には宇野が一黨三千餘騎、筑紫大名に大友・しよきやう・菊地・原田・松浦黨、惟任・惟住・別記・山住、丹後に田邊の小大夫・凡河の末竹、若狭の國にはあがのかうげんでう國政が末子青の

鷹南一原本長なん。

安西一原本安在。

土肥一原本土井。

御寮一原本御寮とあ

り頼朝といふ。

一持一逸物の宛字。

打刀一鐔を入れたる
長い刀、後世の大小
といふ大にあたる。

土禪定立山禪定など
いふは、高山に登り
世間を離る、をもて
禪定三昧に入る意に
心得たるなるべし、
又絶頂の禪者なりと
もいへり、和訓惑

大郎鳥羽の兵衛、越前に雨谷・白崎・堀江・本庄、加賀の國には富樺のぶんせい・林の六郎・井
上左衛門、能登に土田・竹邊、越中に石黒・宮崎、越後に五十嵐、信濃に仁科・高梨・酒野
望月・根津の甚平・上の諏訪・下の諏訪、甲斐源氏に取つては一條・板垣・南部・下山・小笠原、
下野に那須の鹽谷・宍戸・佐竹の人々、上總に廳南・廳北、下總に安西・金切丸、武藏に横山
黨・平山黨・私の黨・丹の黨・兒玉黨・清の黨・七黨是等惣じて四十八黨の人々、相模の國に土
肥・土屋、伊豆の國には工藤左衛門助經、惣じて馬上歩武者百七十三萬人とぞ讀上げたり。
頼朝御機嫌淺からず、さあらば打立者共と、既一御狩と三重聞えける。去程に御寮の其日
の御裝束青狩衣に立烏帽子、尾花蘆毛の一持に白鞍置かせ召れたり。御馬副には五郎丸赤
地の錦の直垂を、下し給て是を着る。力は八十五人が力崩黄の腹巻着込にし、四尺八寸の
大太刀一尺八寸の打刀十文字に指すまゝに、白柄の長刀馬手の小脇に搔込うで君を守護し
奉る。秩父殿は狩裝束鷹据ゑて御供なり。和田の義盛狩裝束、千葉・小山・宇津宮、何も狩
場の出立にて鷹据ゑて御供なり。犬の鈴鷹の鈴響の音がざぐめいて、さしもに廣き富士の
裾野に、駒の立所は三重なかりけり。去程に三千人の列卒の者、三日かけて以前より峯へ
分け登り、ぜんぢやうを眞下りに、岩を起し枯木を叩いて喚き叫んで三重狩下す。かゝり
ける所に、幾年経るとも知らざりし野猪一つ、主知らぬ猪矢二つ三つ負ひながら、大に猛

つて出たりけり。列卒の者共是を見て、我留めんと諍ひて出る所懸倒し、四五人迄ぞかけたりける。貴賤群集の列卒の者、四方へばつと逃散りて近付者はなかりけり。爰に伊豆の國の住人仁田の四郎忠綱此由を見るよりも、縦鐵銅を丸めたる猪なりとも、いかでか以て餘さんと、云ふより早くつゝと寄るを、乗つたる馬を主共に中にくうて投上げ、落ちばかけんとする所を、向様に乘移る。されども逆様に乗つたれば、猪は乗られて腹を立て虚空を飛んで廻りしは、身の毛も彌立つ三重ばかりなり。仁田は手綱の名人にて、腰も切れよと挟み付、尾筒を手綱にむんすと取り、樂天傳へし三頭命限りに乘たりける。猪はいよいよ猛りをかけ、岩巖石をも嫌ひなく、中に飛んで懸廻れば、今は早大童に成て落ちじとばかり心得けり。されども此猪數多手を負ひぬ。少撓む所を腰の刀を引ん抜いて、胸中に突き立て肋骨四五枚はらりこ搔切れば、何かは以て堪ふべき、四足を土に踏立て立ち竦みにぞ死んだりける。忠綱急ぎ飛んでおり、下人共に擔せつゝ御前をさして參りしは、前代未聞の高名やと褒めぬ者こそ三重なかりけれ。是は扱置、曾我兄弟の人々は猪に心は付かされは、鹿の子の壹つも留め得ず、いかにもして敵助綱に廻り逢んと計也。爰に弓手の側を見て有れば、射手の數多有る中に、四十ばかりの男子三つ有る鹿に目をかけて、雁股番つて追つかくる。時宗誰そと見るに、あは助綱と見るよりも、氣もそぞろき身震ひして、

なふ鹿こそ連れ十郎殿、御覽せられて候か。鹿ぞと云ふに心得て、見れば敵助經爰にあり。天の輿へと嬉しくて、弓と矢取つてうち番ひ兄弟共に追づかくる。十郎は兄なれば一の矢をと心がけ、敵の矢つぼばかりに目をかけ馬の足元見ざりけり。弱き馬に強く手綱を乗る程に、とある伏木に胸を突き真逆様に落ち給ふ。五郎あまりの悲しさに急ぎ馬より飛んで下り、祐成を引立て馬起さんと尋めく間に、助經名馬に乗りたれば谷峯隔てゝ落延びたり。行方知らねば尋ね行くべきやうもなく、竇の山に入りながら空しく歸る兄弟の心のうちこそ三重無念也。扱其後曾我兄弟の人々は、心盡せし甲斐もなく祐經を打洩らし、とある所にたゞみて口説言こそあはれなれ。祐成仰けるやうは、あらゆしき敵の果報や。扱も拙き我々が運命かな。今はいつをか期すべきぞ。人目つゝみて腹切らん。五郎いかにと有ければ、時宗承り、仰の如く弓折れ矢盡くるとはかゝる事をや申すらん。さりながら爰は人目も繁ければ、閑所を求め御自害候べし。扱も一五つや三つの年よりも、十八年が其間心を盡せし事どもは、濱の真砂は盡くるとも我等が思ひはよも盡きじ。などや佛神三寶も捨て果て給ふか怨めしやと、猛き心もしほゝと泣くより外の事はなし。かゝるあはれの折節に、秩父殿と和田殿は此有様を見給ひて、扱も不便の曾我兄弟が風情かな。弓矢取る身の心さし尤もかうこそあるべけれ。我々も若き子供の候へば、人の上とも思は

むかはきつづみ一
行藤を鼓として打ち鳴らすなり。

上もなきこよひの1
こよひはこひの謀な
るべし、こひに火を
かけ、煙に氣振を言
ひかけたり。

けこ一聲固。

こくうに存じ一く
うは虚空。心の浮れ
立ちしなり。
松川一松皮。

いたら貝一いたや貝
ともいふ、帆立貝に
似たり。

れず、いざや彼等に力を添へ、夕さり夜討にせさせ申さん。尤の次第とて行藤鼓打鳴らし、重忠發句にかくばかり、夏山や思ひ繁みの焦るゝは。義盛やがて付け給ふ。今宵富士野に飛火燃え立つ。曾我兄弟はこれを聞き、此言葉は我々をとぶらひ給ふと覺えたり。今宵富士野に飛火燃え立つとは、夕さりの暮程に夜討にせよとの言葉也。いざや我等も連歌申さんと、祐成やがてかくばかり、上もなきこよひの煙のあらはれて。時宗やがて付けにけり。天の岩戸をあけて訪へ君。和田秩父は聞召し、刦は今宵を限りなり、明けなば跡をとぶらへとや。哀れなりいたはし。世に憚りのなかりせばとぶらひ矢をも射つつべきに、不便なる次第にて涙と共に歸り給へば、此人々も嬉しくて、柴折り結ぶ草屋形に泣くべく歸らせ三重給ひける。去程にかくて祐成は敵のけこを見んその爲に、密に庵を立てて屋形を立てる。見給へば、明日は鎌倉入有るべしとて、馬の湯洗ひ庭乗して隣めく所もあり、又或方を見あれば、大鼓小鼓六の緒の調を立て、大勢どめいて遊ぶ屋形もあり。祐成餘りにこくうに存じ、拵それよりも東へ廻りて家々の幕の紋をぞ見たりける。まづ一番に釘貫・松川・黄村濃、此黄村濃と申は三浦の平六兵衛義村の紋にてあり。石疊は信濃の國の住人根井の太夫大彌太、扇は淺利の興市、舞うたる鶴は飯原左衛門、庵の内に二つ頭の舞うたるは駿河の國の住人に天智天皇の末孫竹の下の孫八左衛門、いたら貝は岩永黨、綱の手は須貝黨、

大一、大萬、大吉
これらの文字を教所
とせるもの。

大洲流は安田の三郎、月に星は千葉殿、傘は名護屋殿、團扇の紋は児玉黨、裾黒に鱗形は北條殿の紋にてあり。繫馬は相馬殿、折鳥帽子立鳥帽子大一大萬大吉。白一文字黒一文字は山の内の紋にて有り。十文字は島津の紋、車は濱の龍王の末孫佐藤の紋、竹笠は高橋黨、龜甲輪違花うつぼ三本傘雪折れ竹二つ瓶子川越、三つ瓶子は宇佐見の左衛門、二つ頭の右巴は小山の判官、三頭の左巴は宇津宮の彌三郎友綱、鏑矢伊勢の宮方、水色は土岐殿、四目結ひは佐々木殿、中白は三浦の紋、秩父殿は小紋村濃、割菱は竹田の太郎、梶原は矢筈の紋、下白は折御所の御紋と見えにける。爰に又庵の中に木瓜あり／＼と打つたるは、我等が家の紋ぞと思ひ一入懐しくて、祐成は少し休らひ見給ふ所に、敵の嫡子犬房丸幕の内より一目みて、父に向つて十郎の御通りと申す。祐經聞てやあ十郎とは誰が事ぞ、相澤の十郎か豊後に白杵の十郎か、此度富士野へ御供したる十郎はその數あまたあるぞかし。汝はいづれの十郎を申ぞ云へば、いや曾我の十郎の御通りと申す。おゝその者は昨日某谷越に見てあれば、瘦せたる馬に腰張鞍、雜人ばらにうち交はりし有様は、山田の畦の案山子にことならず。國よりもよほ者はなし、疲れに臨んで推參にや来るらん。さもあらば此方へ召して一つ盛れとぞ申ける、犬房なゝめに悦び急ぎおもてにたち出で、父の仰にて候、御入あれと申す。祐成誰と見れば敵の嫡子犬房也。内へ入らぬも何とやら氣を持ち

もよほものはなし
儀しつれ來れる從者
なし。

奥野—伊豆赤瀬山の
炎の地名か。
すぢなき事—條理の
立たぬ事。
さかい—後か。領
内之意なるべし。
わやう—和様か。

顔に益なし。心得たりとそれよりも大房おほふうちつれて幕の内へぞ入りにける。祐經片膝押立て忍小太刀に手をかけて、これへくと請じける。折節備前の大藤内おほとうないがあり合せ、祐經の色代しきだいちつと様ある人よと見てあれば、御客ごきたゞこれへくと請じければ、その時に祐成は祐經が馬手の對座に直らるゝ。いまだ祐成の膝ひざも直らぬ其先に、祐經が初對面の詞こそ推參なれ。誠や聞けば面々は、此祐經を親の敵かたとの給ふよし、もつての外の僻事ひがじごなり。御身の父の河津殿は奥野おくのの狩にて股野またの相撲の遺恨にて、兄の大庭おほばが打たとも申し、又弟の股野が打たとも申す也。すぢなき事を誤つて僻事思ひ給はんより、常に立入りて駒に水桶みずひをするならば郎等とはよも云はじ、家の子ここそいふべけれ。方々が乗馬なくは、さかいに多き荒馬一疋取つて乗り給へ。直垂ただたれなくは大房が脱替ぬきかへ取つて着給ふべし。今日よりしては祐成と祐經が中に意趣いじはあるまじき、わやうの盃さすぞとて、十郎殿にさいたるは無念たゞひはなかりけり。祐成は聞召し、えゝあつばれ口惜しや、をんしておかん、いや家の子にせんなどいはれては、たとへ敵かたならずとも死なではいかでおかるべき。酌くちんだる酒を祐經が面おもてにさつと投げかけ、眞向まっか二つに切割つていかにもならんと思ふが、いや待てばし我が心、時宗一人残し置き雜兵の手にかけん事の口惜しさよ。とやせんかくやあらましと、酌くちんだる酒をほしかねてぞ見えにける。祐成心こころを取直し、よしゝ時は變ると日は變

らじ、今宵討たん敵なり。此世の内の思出に何といふとも咎むまじ、されども心ぐるしきは大藤内が見る所、西國武士の見る目也。現在親の敵を目の前に置ながら、かゝる推参いはせつゝ聞きながら立ちぬるといはれん事も口惜しや。よし／＼それも言はば言へ。夕さり恥を濶ぐべし。とかく座敷に長居して、無念度々重なりて所々の死をせば、五郎が恨みん所もあり、立たばやと思召し、拵續けさまに三献酌んでさらりと干し、祐經に戻し、今宵はこれに宿直申さんが、北條殿の方様に聊か所用の候へば、明日五郎を召連れ参るべし。暇申してさらばとて座敷を立つて出様に、敵のけこを思ひのまゝに見すまして草館にぞ歸られける。かの祐成の心の内口惜しかりともなか／＼申すばかりはなかりけり。

中之段

庵にありし時宗は祐成を待ちかねて、既に出んとせし所へ、十郎やがて歸り給ひ、時宗を見給ひてそぞろに涙を流さるゝ。時宗此よし見參らせ、こは怪しからぬ御風情、何事か候らん覺束なしと申ければ、祐成聞給ひ、さればこそとよ思はずも敵の屋形に立入て祐經に對面し、初對面の詞の無念なりし其時は、刺し違へんと思ひつれ共、おことに名残が惜しき故、つれなき命長らへて再び逢うたる嬉しさに、今の涙やこぼるらん。時宗承りこは有

慈悲は上より降る
慈悲は上より降る

きまん國一不詳。

やツす／＼易々。

龍門に云々一遺文三
十軸、軸々金玉聲、
龍門原、土埋名不
埋名(白樂天、和漢
朗詠集)
さんしょぢくーさん
しふぢく(二十軸)の
説。

難き仰かな、慈悲は上より降るとは今こそ思ひ知られたり。かく申す時宗ならばたまに遇うたる敵と思ひ、座敷に直らぬその先に、只一太刀に本望遂げ、とにもいかにもなるべきに、五郎が事を思召し出されて、これまでの御歸りはよに有難き次第也。とてもの事に敵の様態、ちと御物語り候へ、承り度候。祐成聞給ひさればその事敵の體は、馬は築土人は亂れなれば、たとへばきまん國の鬼王、羅刹國の羅王、鬼を揚めし白澤王、挾本朝にては定光・季武・綱・金時・田村・俊仁・餘五將軍、一二相を悟る人なりとも、たやすく此陣にて親の敵を打おほせ、やツす／＼と出でん事は思ひも寄らぬ事なれども、それは和殿と某が心一つに有るべきなり。敵のけこはよく見たり、五郎いかにとありければ、挾は案内疊りなし、夜更ければ思ひ立ち申さん。宵の程のつれ／＼に、故郷へ文を認めん。此義尤然るべしとて、矢立巻物取り出し、燈火微かに搔き立てゝ、ありし昔の思ひより、今の憂き身の果までを思ひ／＼に書かれたり。十郎はともすれば、大磯の虎が名残を書かれたり。五郎が筆のすさみには、箱根の別當の御事、挾其外はいづれも同じ文章也。取分け五郎が悦び申すは、不思議に母の御不興を許され申、父母孝養の命をば富士の裾野に捨て置きぬ。骨を野外に埋めども、名を萬天に揚ぐる事、父が子たればとり傳ふ家引起す弓矢の名、龍門に骨は朽ちながら家門の名を埋まず。金玉の聲はさんしょぢく遠島まで疊りなし。密に是を

惟みれば、刀を握り剣を帶し、弓馬の道に携はり、戰場に出て命を棄つ。これ高名の爲なりき。五つや三つの時よりも十八年がその間、思ひ歎きはわれ／＼二人て留めたり。年長月日去つて後建久四年五月下旬八日の夜、天は暗しと申せども思ひを今宵晴るゝなり。祐成判、時宗判とばかり留め、次第の形見取集め筆を捨てゝぞ泣き居たる。さて祐成には鬼王丸、時宗には園三郎とて、二人の者を召され、いかに汝等古里に歸り文をば母に奉れ。弓と韁は會我殿へ、鞭と牒は二の宮の姉御前、馬と鞍をば和殿原、恩愛主の形見ぞと思ひ出さん折々は念佛申得さすべし。わざと文には書かぬぞや。扱又母上に申べきは、給はる御小袖參らせたくは候へども、最期に着て死なんため參らせす候。その恐れ候へども、御小袖を身に纏ひ死なん事は、最後に母上を拜み申す心地して立出候と必ず／＼申すべしと、言ひも果さず又はら／＼とぞ泣き居たる。鬼王も園三郎も涙にくれて居たりしが、酌とり直し申すやう、えゝ口惜しや、何處にていかほど見落され奉り、かゝる御讒の候ぞや。御兄弟の人々のあれほど多き敵を討たんと思ひ立ち給ふに、只二人有る下人が見捨てゝ歸る法や候べき。仰に従ひ故里に歸り候へて、はじめて人を頼むとも譜代の主を見捨てゝ死ぬ程の言申斐なしが、何の益にか立つべきと目かくる人も候まじ。たとへ入道つかまつり世を厭ひ候とも、恩を知らぬ奴原が、道心如何有るべきと、後指をさゝれなば出家しても

面目なし。上膚も下郎も死ぬべき時に死なざれば、生きたる甲斐も候はず。いかに團三郎、たとへ夜討の御供こそは叶はずとも、臆病至極の我々が腹切るやうを見せ申さんに、爰へ寄れやと云ふまゝに、大肌脱ぎに肌脱いで、刺違へんとしたりけり。祐成も時宗も憤てて中へ割つて入り、二人を左右へ押分けて、おゝ思ひ切つたり、汝等よ。されば梅檀の林は荆棘けいせきまでも香し。我等が思ひ切りければ、汝等までも思ひ切りけるか。やれ見落す事はなきぞとよ。國へ形見を届けずは、時の珍事口論ちんじこうろんにて死したりと人も思ひ、また母上も思召されん口惜しさにわざと下すぞ。只下れ。たとへばな、味方に千騎萬騎せんぎばんぎあるとても、此富士野にては思ひも寄らず、一人なり共忍び入らば討ちおほせん。人數多ひとすうたにては叶ふまじ、はや疾くかとの給へば、二人の者承り飽かぬは君の御詫かな、此上はともかくも仰に従ひ申さん。形見と文を給はりて主なき駒の口を取り、涙ながらに立出れば、是が此世の別れかや、さらばくかとの涙の別れぞあはれる。別れくかに三重なり給ふ。

鬼王團三郎道行

行かんとすれど五月闇さつきやみ、涙にくれて道見えず。思ひ駿河の富士の根の煙は空に横折れて、隔ての雲となりにけり。裾野の草は露滋ひざなく、まだ秋ならぬ道の邊に、螢微ひすがに飛びつれて、

身より思ひの餘りつゝ虫さへ胸や焦すらん。いとゞ涙の多かるに、何と蛙の鳴き添ひて、井出の屋形を別るらん。馬も心があればこそ北風に嘶ひけめ。實心なき畜類も馴るれば慕ふ習ひあり。ましてやいはん我々は、形に影の添ふ如く、明くれば鬼王暮るればまた、園三郎と召されしに、今宵離れて明日よりは、祐成とも時宗とも誰をかさして申すべき。同じ淨世に生るゝとも、曾我の祐成時宗の、その殿原にてなかりせば、かほどに物は思ふまじ。我等ばかりと思へども、昔を傳へ聞く時は、悉陀太子は十九にて王宮を忍び出で。檀特山の賓嶺、阿羅々仙人を師と頼み、御出家ならせ給ひし時、玉の冠石の帶御衣もろともに脱棄てゝ、きんさつと書き添へ、健陟駒諸共に王宮へ返し給ひける。健陟駒も車匿も君の別れを悲しみて、山谷に嘶ひ悲涙涕泣せし事も、今の別れにあひ同じ。それは佛の濟度にて終には廻り逢ひ給ふ。かの祐成や時宗に、今宵離れて其後に又と逢ふべき君ならず。かゝる憂き身の思ひの果何となりなん悲しやと、泣くく曾我へ歸りける。ともにかくにもかの鬼王園三郎が心のうち、これぞ誠に世の中の物のあはれはこれなりき。

かくて其後曾我兄弟の人々は、あら嬉しや此者共、今はや富士の原をや過ぎぬらん、いさや最期のいで立せん。此義尤然るべしとて、やがて支度をせられける。祐成その夜の裝束には、肌には母上より給はる小袖引違へ着るまゝに、上は群千鳥の直垂、下は絹の小袴

かいこうで一撃き込
みての音便。

ごうの火一強
ガンドウ
燈の火か。 監撃

の稜高らかにさし挟み、箱根の別當より賜はつたる黒鞘巻の刀をさし、三尺五寸の赤銅造りの太刀を佩き、巻松明弓手の脇にかいこうで、火はもつたるか時宗とて、先に進んで出らるゝ。五郎がその夜の装束には、是も母上より給はる小袖引違へ着るまゝに、貢布に蝶を二つ三つ所々に付けさせ、下は紺の小袴の稜高らかにさし挟み、赤木の柄の刀をさし別當より給はつたる兵庫鎧の太刀を佩き、どうの火もつてぞ出でにける。忍びて敵を狙ふには、暗きにしくはあらねども、辻々の篝火は天をも照らすばかりにて、草の下なる細道迄も隠るべきやうあらざれば、たゞ日中の如く也。され共舍人草刈の馬飼ふ體にもてなして、屋形の前を過ぐる。あやしや誰そと咎むれば、これは御内の草刈と答へ給ひ、御寮の假屋の御所中へ忍び入ること危うけれ。され共世間靜まり人影も更に見えざれば、扱松明に火をつけ静かに振つて見てあれば、南無三寶祐經屋形を替へて爰に寝す。兄弟大きに呆れ果て、扱いかになりなん弓手はやがて御所なり、妻手は秩父、前は和田、後の陣は横山黨、警固の武士は篝を焚き、矢先を揃へ楯を突き、御用心と呼はるは、たゞ鳴神の如くなり。運が盡きてさとられ敵屋形を替へたりと、兄弟の人々は羽抜の鳥の中空に、立ち煩うてぞ居られる。かゝりける所に誰とは知らず、腹巻着たる男子の、長刀もつて寄りければ、兄弟あは敵と思ひ太刀抜きもつてかゝり合ふ。されども此男子長刀取りも直

さす、近々と立寄り小聲になつて云ふやうは、いや苦しうも候はず、秩父殿の後見本田の次郎親常と申す者にて候。昨日狩場の言葉弓矢の情とはん爲め本田を出し候。宵までは祐經此屋形に候ひしが、大藤内に諫められ、御所の左の妻戸の脇に宿して候。まづ松明をもしめし、刀も鞘に納められよ。たそといふとも物言ふな。此親常に言はせられよ。此方へ

／＼手をぞ引く。嬉しさたゞひはなかりけり。中門わたりを打過ぎて、あやしやたそと咎むれば、秩父殿の後見本田の次郎親常非番なりと言ひければ、さして咎むる人はなし。拵祐經が臥したりし妻戸の脇に押入り、なふ人數に親常も御供せんと申す。兄弟聞召され、誠の時の志、秩父殿の御芳志、本田殿の御情とかう申すに及ばれず。もしも此事しおほせで、難兵の手にかゝらん時、必ず御手にかけられ亡き跡をもとり隠してたまはらば、最期の供には拔群にまさりなん。人數多にて叶ふまじ、はや疾く／＼とありければ、親常承り、拵も是非なき次第かな、その義にて候はゞ弓矢の禮儀これまでなり、お暇申候と本田は宿所に歸りける。拵それよりも兄弟は、互にとり傳へたる弓矢の禮儀これまでと、二人目と目を見合せて、口説き事こそ哀れなれ。風はいつも吹きけれど、今宵の風ぞ身にしみぬ。名残はいつも惜しけれど、今宵ことさら惜しき也。七度契りて兄となる、六度陸びて弟となる。今宵離れてその後に未來の契り定めなし。いまだ敵に逢はぬその先に、別れの姿よく

行方もしらぬ一「ざ
この馬の骨とく分ら
ぬ」といふ程の意。

あゆみの板一通路の
爲に渡せる板。

見よや。父幽靈が見たくは此祐成を見給へ。母かうぞと思ひ、時宗を見んと松明ばつと振り立てゝ、互に顔を見合せて、脆きは今の涙なり。諸事の哀れと聞えける。かゝるあはれの折節に、不思議や風も吹かぬに妻戸がきり／＼ばつと開く。あはや敵と見る所に、さはなくて大磯の虎が妹龜壽と申す女也。人々の夜打のよし夢ばかり承り、もしさもあらば此妻戸の懸金外さんため、宵より待つこそ久しけれ。此方へ入らせ給へとて、祐經が寢屋に導き、今ははやこれまでなりお暇申候と、行方知らずになりにけり。兄弟なゝめに思召し、さて松明振立て見てあれば、祐經と大藤内たゞ二人ばかりぞ臥しにける。祐成仰せけるやうは、いかに時宗、幸敵も二人我等も兄弟、御邊はの大藤内を斬るべし、我は祐經を討たんといふ。えゝこは口惜しき仰かな、五つや三つの時よりも、心を盡し狙ひたる親の敵をさし措きて、行方も知らぬ瘦男子斬つては何の益あらん。總領にてましませば一の太刀を遊ばされよ、二の太刀に於いては某仕らんと申す。おゝあやまつたり時宗、たゞし寝入りたる者を斬らん事、死人を斬るに異らず。あつたら親の敵を生顔見ていざ斬らん。尤然るべしと、跡や枕にさし挟み、三千年に一度花咲き實のなる西王母が園の桃花の節會優美華の親の敵に遇ふはまれなりといへども、思へば易かりけるぞや。いかに祐經、大事の敵もつ者がかく不覺には見えけるかと、歩の板をどう／＼と踏んだ。祐經さ

かた一肩。

しょけん一初見にて
明日第一番に見参せ
んとし意か。

しつたりと云ふまゝに、太刀おつ取り起上らんとする所を、祐成もつて開いてちやうど打ち、弓手のかたより馬手へ斬つて落せば、時宗これにありやとて腰のつがひを斬り離す。五郎が太刀はつるぎにて疊三疊裏返し、歩の板に切付けえいやつと引くまゝに、鍔を返してちやうど切る。せめては斬つて慰み、日頃の念を晴らせやと、躍り上り飛び上りすん／＼に斬るほどに、果報いみじき祐經も、遂に空しくなりにけり。側に臥したる大藤内太刀風に目を覺し、かつばと起きて逃げけるが、夜討は曾我の者共なり、明日のしょけんは大藤内と誓つて、揉みに揉うでぞ三重逃げにける。さる程に兄弟の人々は、しょけんと云ふが憎ければ、餘さじと追つかけ、高股斬つて落せばのつけに反す所を、時宗これにありやとて、細首中に打落す。おとゝい安堵を賜はり、證ない者にかたらひて、非業の死をしたりけり。かの兄弟の心の内、嬉しかり共中／＼申すばかりはなかりけり。

下 之 段

曾我兄弟の人々は親の敵祐經を思ひのまゝに打おぼせ、小柴の陰にさつと引て、暫らく息をぞ繼がれる。祐成仰せけるやうは、いかに時宗本望は遂げつ、いざや爰にて腹切らん。時宗承り、御説にて候へども、御寮は祖父伊東の敵なれば、御所中へ亂れ入り、頼朝

卯の花くだし—卯の
花くた(屬)しの誤、
梅雨をいふ。

を一太刀恨み名を後代に揚げんと云ふ。おゝよく言うたり時宗、さりながら祐經にはとゞめを刺して有りけるか。あれほどになす上は何の子細の候べき。いやそれはさもなし時宗、明けて質檢あらん時、慌てたるか怯れたるか、あつたら親の敵にとゞめを刺さで打捨てにしたるなどゝ言はれては骸の上の不覺なり。五郎いかにと有りければ、その義にて候はゞそれに暫く御待ち候へと、扱有りし所にたち返り、松明振立て見てあれば、跡も枕も見えわからず。されども死骸を引返し、空しき顔をつくゞ見て、構ひて冥途黄泉までも我等を恨むる事なけれ。日頃造りし罪科の只今報ゆと思ふべし。我等が父の河津殿に手向けんための名刀也。さぞや尊靈河津殿嬉しく思召されんと、言ひも果さず腰の刀ひん抜いて、いかに祐經、此刀こそ御邊が秘藏せし刀、いつぞや頼朝箱根詣での有りし時、御邊は時の御供にて、此山に河津が三男あると聞く。對面せんと呼び出し得させたる刀也。御邊は本の主なれば、返さんがその爲に失はでもちし也。金はかねて知つゝらん。試み給へといふまゝに、馬手の小耳の下よりも弓手へ通れと三刀刺し、これまでなりといふまゝに兄弟もろとも御所をさして切つて入る。背には晴て有りけるが、敵打ちけるその時に、俄に空かき疊り五月雨卯の花くだしぞ三重降りにける。さる程に辻々の篝火一度にばつと消えければ、東西俄に暗うなつて、落ちんとだにも思ひなば心にまかせて落ちぬべし。され共思ひ切

つたる事なれば、只今御寮の假屋の前にて、親の敵祐經を打つて出づる兵を、いかなる者と思ふらん。伊東が孫河津が二人の子、十郎時宗こゝに有り。當君の御内に弓取はおはせぬか。などおり合ひて打留め名を後代に揚げぬぞと、聲々に呼ばはらる。暗さは暗し雨は降る。御陣俄に震動し、弓一張太刀一口に二人三人取付いて、わがのよ人のと奪ひ合ひ繁馬に乗りながら、鞭を打つ所もあり。上を下へと三重かへしける。さる間爰に武藏の國の住人新開の荒四郎と名乗つて、敵は何十人もあらばあれ、それがし一人にや越ゆべき。對面せんとぞ申しける。祐成此由聞召し、やさしき汝が言葉かな。そこを引くなといふまゝに透もあらせす飛んでかゝる。詞は主の恥をも知らず、御免あれと言捨てゝ取つて返し逃げにける。十郎あまさじと追つかくる。逃げ所なくして小柴垣を引破り、高這してこそ逃げにけれ。され共一番に大樂の平馬允と名乗つて、夜討は誰そめづらしや、我々が目の前にて狼藉はせさすまじ、手並のほどを見せんとて、大聲あげて切て出づる。祐成は聞給ひ、かほど多き人中に、一人名乗て出づること類少なき弓取なれ。曾我の十郎爰にあり、受けて見よと言ふまゝに、小柴の陰よりつつと出で、もつて開いてちやうど打つ。弓手の腕首打落され、詞には似ざりけり、早御内をさして引きにける。二番には愛甲の三郎と名のつて、五郎にもすと渡り合ひ、頬先切られて引て入る。三番に御所方の黒彌五と名乗て、十

郎殿に渡り合ひ、肩先切られて引て入る。四番にはもてきどの五郎にむすと渡り合ひ、膝口割られて御内をさして引給ふ。五番の度には伊賀ノ國の住人吉田の三郎諸重、十郎殿に渡り合ひ、諸膝薙がれて引て入る。六番に吉川と名乗つて五郎にむすと渡り合ひ、高股切られて引て入る。七番に品川と名のつて十郎殿に渡り合ひ、馬手の小脇を刺されて幕の内へぞ入りにける。八番の度には紀伊の國の住人市川別當太郎忠純、大音あげていひけるは、夜討と言はんに何程の事の有るべきと大聲あげて切つて出る。時宗これを聞き、やあ汝は音に聞えたる碓氷の峠などにて盜みこそは能なり共、晴業の切合はこれがはじめて有らんに、手並の程を見せんとて、もつて開いてちやうど打つ。細首中に打落され朝の露と消えにける。扱九番には筑紫武者臼杵の七郎諸重十郎殿に渡り合ひ、真向割られて引て入る。十番の度には仁田の四郎忠綱大音あげて言ひけるは、何さま東西暗うして物のあいいろが見えざるに、松明出せと呼ばはつたり。祐成は聞き給ひ、かほど多き人中に松明好みする奴に手並の程を見せんといふその隙に、松明をわれ劣らじとさし出す。簾・鞆・蓑・笠まして傘などをば、よき松明と火をつくる。萬燈會に異ならず。扱祐成と忠綱は鎧を削り鎧を割り、追うつ捲つそれよりも暫しが程こそ三重戦ひける。され共仁田は新手なり、十郎は脅よりの疲れ武者、多くの人を斬りければ太刀より傳ふのりにて手の内や廻りけん、

陵王の一還城樂に陵王入日を鉢にて招きかへす事あり。ひとをざり一躍犬居一犬のつくはひたるやうに臥すこと。

太刀鍔元より折れにけり。祐成差添ひん抜いて爰をせんと切結ぶ。少し足立肩下り上手になつて十郎殿、仁田を白洲へ追ひ下さんと走りかゝつて打つ太刀を、仁田さらりと受流し柄を突いて裾を薙ぐ。十郎の馬手の力足膝の口をさし上げて、すんど切つて落しける。弓どり後を防ぎ越す刀、百手を碎き戦へど、弓手の足ばかりにてさのみはいかでござるべき。犬居にどうど轉びつゝ口説言こそあはれなれ。やああたりに五郎や有る、祐成こそ仁田に合ひて打たるゝ也。御邊は命を全うして君の御前に参り、我等が有様申して死ね。はや首取れや忠綱、心得たりといふまゝに、やがて首を打落す。満する年は二十二、あつたら剛の若者やと惜まぬ者こそなかりけれ。あら無慚や時宗は、弓杖二杖三杖隔てゝ戦ひしが、祐成の最期の由を聞くよりも、はや打つ太刀も弱り果て、是非をもさらに辨へず。かくては叶はじと御内をさして切て入る。爰に御所の五郎丸薄衣取つて上に掛け、とある所にひつ添うて今や遅しと待ち居たり。これをば知らで時宗戸をばつと蹴破り、御内をさして切て入る。五郎丸やり過し、えたりや應こいふまゝに弓手すがひにむすと抱く。えゝ女と思ひ見損じて抱かれぬこそ口惜しけれ。されども事ともせず中にひつ立て七八間ぞ走りける。五郎丸かなはじとや思ひけん、夜討をば組留めたり、下合へやつと呼ばはつたり。大

らいてう一話勢にて
普渡するなり。折

下り上り一原本「折のぼり」とあり。

勢はつと折り重なり、手取り足取り繩をかけ、大將殿へ追立つる、無念なりける三重次第
なり。さる程に時宗を高手小手にいましめて、君の御前にひつ据うる。頼朝御覽じて、時
宗とは汝が事か。さん候といふまゝに、繩取中にひつ立つる。警固の者共狼藉なりとて引
据うる。その時新開の荒四郎狩野助が館より、やあ申上る事あらばたゞ今申せといひけれ
ば、時宗聞いて大の眼を見出し二人をはつたと睨んで、やあ見苦しきぞ汝等、御前遠くば
さもあらん。ほど近ければ人傳は頼むまじ。骨折りにそこ立退けとぞ怒りける。君聞召し
げに／＼頼朝直に聞くべき也。いかに時宗親のかたき祐經を打つは道理といひながら、京
鎌倉の下り上り道の末にても討たずして、頼朝が祝ひの座敷に血をあえす條いはれなし。
その上祐經一人討たずして、當番の者どもに手を負ふするは僻事也。いかに／＼と御詫あ
る。時宗承り、さん候祐經を京鎌倉の下り上り道の末にても討ちたく存じ候へども、君の御
覺えめでたうて、うつ時は五十騎百騎うたぬ時も二十騎三十騎には劣り申さず候。我等は
君の御不審蒙むりて。身は獨身となり果て、兄弟より外陸ぶ者もあらざれば、つき添ひ狙
ひ廻れども折を得ざれば打ちも得ず。此狩倉の人ごみを幸と存じ紛れ入て打て候。御詫
の如くかねては祐經一人をこそ討たんと存候處に、當番の面々が慄ひに名乗て出で、臘病
刀使うて逃足踏むが憎さに、そつと太刀風を負ふせつるにて候。誠に重恩を被ぶり、妻子

たばん一喝ばん。

憤りをたて一憤りを
絶つて
報いは一原本「むく
ゑは」とあるを今改
む。

責一人歸して一人
の下「に手を脱せる
なるべし、論語録曰
篇「百姓有過在子一
人で增銭費一人に
といふらん事にや」

扶持し身を立つる方々が、夜打の入て亂るゝに、誰あつて君の御前に立たんと存する者
も候はず。外様なれども仁田と御内の五郎丸より外、御用に立つべき者もなし。その外の
手負ひ共皆召寄せて實檢候へ、向ふ疵は候まじ。かほど臆病なる人々に、あつたらしき御
所領たばんより、我々にすこし賜はり御芳志に預からば、これほどまでは憤まじや。たと
へば祖父伊東は不忠の者にて候程に、子孫我等に至るまで御憎みあるは御道理、さりなが
ら文書には憤りをたて恩に報いば又敵も味方となる。親子兄弟なれども、隔心内に含めば
とに敵對と書かれたり。先非を悔い古語の書に従へと、古人も教へ置かれたり。それに伊
藤が子孫をば疎み果てさせ給ひつゝ、命をつぐべき便りもなく、籠鳥の雲を轡ひ。罟中の
魚の網に息つぐ風情にて、生きてかひなき浮身となる。とても消ゆる露の身の親の敵と打
死し、名を後代にあげんため也。我が君いかにと申しける。賴朝聞召しさばど剛なる者が
何とて五郎丸には捕られけるぞ。又敵打て後内證をさして切て入り、われに敵をなす條い
はれなし。此義いかにとの御詫也。さん候祐經は親の敵と申しながら、さして怨みも候は
ず。責一人歸して御怨み盡きせぬは、わが君にてとどめたり。それをいかにと申すに、名
ある者の子孫をばいかでか絶やし果てんと、二人が中に壹人召出され、懸命の地の片端に
安堵をなしてたぶならば、たとへ祐經討ちたくとも、本領に思ひかへても過ぎぬべし。さ

て」か
とくして——「疾くし

れば侍の命にかへても欲しきは懸命の地の本領なり。それに一つも残らず召上げらるゝのみならず、あまつさへ敵祐經に一圓に下し給はり、上見ぬ驚と振舞ひし、かゝる怨みの數々は君の御身にとゞめたり。祐經より先にご存じ心がけしに、五郎丸衣引かづき居たりしを、女と思ひ見損じて、左右なく捕られ候なり。五郎丸と知るならば、たゞ一太刀に打て棄て、おほそれながら君の御佩刀の金かなをも見奉り、此時宗が腐り太刀の刃やいばのほどをも御目にかけ申さんものを。とかく君の御運強き所と覺え候と、憚りなくこそ申しけれ。頼朝聞召しあつぱれ大剛の者かな。思ひの色を残さず申す事こそ神妙なり。時宗が最期に祐成が首の見たくや思ふらん。仁田はなきかと仰せければ、忠綱承り群千鳥の直垂に包みたりし祐成の首に、打損じたる太刀をそへ時宗が前に置く。あらむざんや時宗は一目見るよりも、今まで剛の眼まなこを見出し、猛き氣色きじゆくも變り果て涙をはら／＼と流し、さても／＼早くも變らせ給ふ御面影や、竹馬たけばに鞭むちを打ちしより一つ所に起き臥して、少しも見えさせ給はねば、とやあらんかくや渡らせ給ふかと、心をそへて思ひしに、悲しきかなや今ははや、ありし形も變りはて、いたづら事となりけるよ。とくして我もかくなりて同じ道へと思へば、包めどこぼるゝ涙には、庭の白洲しらすも濡れぬべし。諸事のあはれと聞えける。爰にタベ柴垣しばべ破つて逃げたりし新開の荒四郎、祐成の太刀をつく／＼見て、人々に向つていひけ

るは、曾我の者共は敵を打て高名はしたれども、よき太刀はもたざりけり。かゝるえせ太刀にて本望遂げしは不思議なりとぞ申しける。時宗聞て、やあ汝はそれをえせ太刀と申すか。只今申して無用の事とは思へ共、侍の悪き太刀を持たるは恥なる間申すなり。ヤレその太刀はな、平家に聞えし新中納言知盛の太刀なるが、八島の合戦に船中に取落し給ひしを、曾我の祐信取て九郎判官へ参らせしを、義經神妙なりさりながら御分が高名して取りたれば、汝に得さするとて給はりし、それは奥州丸といふ太刀よ。祐成元服せし時に父祐信の賜びたるなり。思ひのまゝに敵を打ち、其外兄弟が手にかけて、切留むる所の奴原大方一貳百人もあるべき也。これほど堪へたる太刀をばえせ太刀とは、おのれ推參なりと怒りをなす。いやさ既に折れける上はと言ひければ、五郎からくこ打笑ひ、オ、人の太刀を悪しといふ人、定めて御分はよき太刀持ちぬらん。但しあのえせ太刀に合ひ追はれて、柴垣破つて逃げたれば、御分がよき太刀も近頃心にくからずと、嘲笑つて言ひければ、荒四郎は言はれぬ事を云出し、面目なさに赤面して、有りし所を立ちけるを笑はぬ者こそなかりけれ。其後頼朝の御詫には、大剛一の時宗なれば鷹が岡にて切れとの御詫也。すなはち繩取は堀の小二郎承り、時宗を引立てゝ鷹が岡へと三重急ぎける。かくて時刻も移りければ太刀取背後に廻り、すでに打たんとせし所へちん平かけつけ、やあ其時宗な斬つそ。安堵の

見聞衆—原本假名にて「けもんしゆ」とある

御教書に有り。これ／＼拜み給へとて時宗が膝に置き、やがて繩をぞ解きにける。さつと開いて讀うだりけり。下す狀相模の國の住人會我の五郎時宗はやく寛宥す。本領なれば宇佐美南美河津三箇の庄宛て行ふ所なり。源の賴朝判と讀み上げたり。貴賤上下の見聞衆は一度にあつとぞ感じける。時宗御教書三度おしいたゞき、涙をはらくと流いて、あら有難や同じくは舍兄祐成諸共に拜むとだにも思ひなば、いかばかり嬉しかるべきに、總領の祐成今は浮世におはせねば、時宗一人ながらへて總領を繼ぐ事本意と更に思はねば、生きたる甲斐も候はず。たゞ／＼斬つて給はれ。又此御教書は冥途のみやげに仕り、父河津や兄祐成に拜ませ、本望遂げさせ申すべしと、拵太刀取の脇差を乞ひ受け、腹十文字にかき破り臓を摑んで投げ出し、其跡へ御教書を押込め、さあらば介錯を賴み奉ると首をのべてぞ待居たり。太刀取力及ばず、やがて首を切りければ、檢視の人々急ぎ御前へ立返り、かやう／＼と言上す。賴朝あはれに思召し、かほど剛なる侍上古も今も末代も例少なき者なれば、あら人神と祝ふべしとの御諱にて、富士の裾野に社を立てさせ給ひ、兄の宮弟の宮といはゞせ給へば、貴賤是をぞ感じける。末代末世にいたる迄親の敵を打つ者は、此社に參り祈るとかや。かの會我兄弟の人々、例すくなき侍にて猶々源氏の御繁昌めでたかりとも中／＼申すばかりはなかりけり。

時宗三部經

とつとしー「たつと
し」の謙か。ほうまんとくー寶滿
徳か。直道ー迂曲せず直に
涅槃に至る道なり。
ときんばー時は。

これはさておき、むさんなるかな時宗は、鷹が岡になりしかば、九本の松の下に敷皮敷か
せ、西に向き直りいふやうは、幸ひ時宗が九本の松の下にて斬られんことは、ひとへに
九品の淨土とおぼゆる也。いかに太刀どり繩どりよ、すこし暇を得さすべし。時宗が最期
に淨土の三部經をあらへて説いて聞かせ申さん。ヤア見聞衆の人々も、なりを鎮めて聞き給
へ。それ法華一乘の功力はとつとし、有難きは彌陀ゑしやうほうまんとくの位、三世の諸
佛出世の本懷は衆生成佛の直道なり。經にあらはすときんば妙法蓮華經の五字につゞめり、
名にとく時は南無阿彌陀佛の六字に攝する也。趣意といつぱ座禪の異名、座禪の修行のて
んぢにいたり難きものは、六字を誦して極樂に往生す。愚痴なる凡夫にいたつては、向
上の法門なり。一指を捧ぐる其時は、大千世界もこゝにあり。たけをうちもゝをみて
悟道すること分明なり。妙樂大師の御釋に曰く、しよきやうしょさんをさい彌陀西方を
もつてさきとせり、己身の彌陀唯心の淨土なれば、本來無東西何處有南北と觀すべし。
それ六字の名號を集むる時の經文は、華嚴經にて南の字を作り、阿含經にて無の字を作り、
方等經にて阿の字を作り、大般若にて彌の字を作り、法華經をもつて陀の字を作りて南無

妙樂大師ー天台の六
祖荷溪湛然。
しよきやう云々一諸
經諸體多在か。

阿彌陀佛と申す也。十方三世佛、一切諸菩薩、八萬諸聖教皆是阿彌陀と説く時は、さやうもんの老若も頭を地につけ、時宗を拜まぬ人こそなかりけれ。かの時宗と申すは幼かりける時よりも、勤行怠らず、一心三觀の月は無明の闇を照し、觀念の窓の前には眉に八字の霜をたれ、一じらうとうの車は、無二無三の門に轟き、一乘菩提の駒は、平等大慧の園に嘶ふ。等覺一轉の時鳥は、妙覺大乘の峰に鳴き、入重玄門の鶯は下化衆生の谷に囁り、諸行無常の春の花は是生滅法の風に散り、生滅々已の秋の月は寂滅爲槃の雲に隠る。ばんさんにふんくしかくのことくと有るものを持て念佛申すべしと、及ぶも及ばざりけるも皆念佛をぞ申しける。

新
版
腰
越
狀



新版 腰越狀

竹本義大夫正本

風月の本主文道の大祖一以下官丞相の記事は、太平記十二、食内裏造営の事附書の御事の條に據れり。鹽梅の臣一書經説市祖三和笑爾惟鹽梅の語より起り、食味を調ふる意より、政事を料理する義に用ふ。

序 孝子は父の美をあげて父の惡をあげずとかや、穀梁傳の十一字今此將の事なんめり。扱も源九郎義經公先祖の仇に命を輕んじ、さしも固めし兵庫の岬、經の島の新京を逆落して押破り、平氏の一類悉く西海に追ひ下し、猶船造り有るべきため福島に御陣を召れ、元暦二年の初春をめでたく迎へ給ひけり。時なるかなや本陣より吉方に當らせ給ひければ、天満宮に參籠有て朝敵退治の御祈り、御湯御神樂を捧げらるれば、神職の中務幣帛を奉る。柏手遠く銘して、松の春風吹傳へ、梅綻ぶる神垣は、宮さびてこそおもほゆれ。扱御供には龜井・片岡・伊勢・駿河・鷺の尾・熊井・鈴木の三郎、其外御旗の手の諸大名、鎧脱ぎ捨て衣更始、いづれも鳥帽子をかたぶけ謹而畏る。時に大將仰下さるゝは、我いとけなりしより文武兩道に心をよせ、此御神を信仰す。其神徳の明らかな事言語筆紙に盡し難し。理なるかな風月の本主文道の大祖たり。天にあつては日月に光を顯はし、天降らせ給ひては鹽梅の臣三成、群生を利し給ふ。遠つ昔を窺ひ奉るに、菅原の宰相是善卿の南庭に童子と現じ降誕有り、恩愛の衾の下に菅丞相こならせ給ひ、習はずして道を悟り、御才覺

世に越えて、弓馬の道も暗からず、既に大臣の大將に至らせ給ふ。又貞觀年中の事なつしに、都良香の御許にて、始めて五度の十を射させ給ふと也。何と方々幸是に的矢有り、神いさめ弓始いざ一拳と仰らるれば、梶原平藏景時・猪俣・小玉・野井の六郎重清を以て御弓初めらる矢を持ち塙の前に居流れたり。大將遙かに御覽じて、龜井の六郎重清を以て御弓初めらるべしと有りければ、景時何の會釋もなく、一禮にも及ばず、よつ引てひやうと放つ。此矢塙を打越して後の松にはつしと立つ。二の矢をせいて打番ひ暫しかためて切つて放つ、矢取の男が髻を射削りて七八間外れたりけり。彼男ぎよつとして首の骨を撫で廻し、扱も危し恐ろしし、あまの命を拾うたり。扱も射たりや御弓取、いや／＼ど／＼とぞ笑ひける。梶原大きに立腹し、イヤ推參なりおのれ、弓矢は離れ物にて有り、たとひ逸矢を射たればとて、諸侍の面前にて恥辱を與ふる慮外者、弓矢八幡堪忍ならじと太刀の柄に手をかくる。男少も騒がす、賤しき者の高笑ひ思慮も工夫も候はず。神前と云ひ御祝義と申し眞平御免と手をつかね、さしうつぶいてぞ居たりける。景時猶も勝に乗り、イヤサ只今の的矢全く射損じ申す所でなし、それをおのれが人一番に笑ひ出し、塙の前をあばきありき、人影のまぎろしき、紛らしさに思はぬ恥辱を取りし也。おのれ犬蠅の高上り、飛びすぎるべしうつけ者、サア今一言吐き出せ、素天邊を踏み碎かんと怒りをなす。矢取の男撫ぢ戻り、何と候梶原殿、人ふ。すつべい一頭をい

あはきありき一ひろ
がりて歩む。
まぎろしき、紛らし
さに同じ。
すつべい一頭をい
ふ。

くらがさ一鞍壇に同

かつふつ一少しも、
全く。あぜり一枝倉（アゼ
クラ）に同じ
小串一小串懸は繪の
板にて作り、串に挿
み地に立つるなり。
圓物一圓形の的。

かけ島一かけ島とは
がけり島なり、島の
高みにかけり飛ぶを
射る心なり。（貞丈
雜記十二）
一間（一尺の折日
と折りとの間。
格一鐵砲的（いふ
が常なれど、弓的見
にも通用せしと見
ゆ。）

影のちろつく故思はず弓を射損じた。ア、事あたらしき仰かな、何と戰場に打向ひ生きた
る人の動くも、射にくして許さるべきか。落人など止むるには鎧踏張鞍橋につつ立上
り、駿馬の四足を拍子に取り、馬上ながらも拳を定め、逃げゆく敵の後様弱腰母衣付嫌ひ
なく、鞍の前輪に射付けてこそ弓矢取身と云ふべけれ。狼狽へたる言葉の末、察する所御
自分は弓矢の道かつふつ御存知なきと見えたり。左候へばこそ的前故實に合はず、それ楊
弓は公家の御業、塚をば弓杖九丈弓鉢は三尺六寸、雀小弓が貳尺七寸、四寸の的を中に吊
り五間を隔て是を射る。刲笠懸は貳丁半あぜりの形は三角也。小串の會は大弓也。的は六
寸遠近は其家々に定有り。圓物は尺二寸、塚を築く事七丈也。別而は御射初の是弓法の一
大事、御大將の弦音にて三々九度の禮義有り。是が弓取候か、イヤ是が的場の作法なるか
ミ、詰めかけ云ければ、景時今は堪へ得ず討て捨てんと飛びかゝるを、大將暫しこ止め
給ひ、射場の男を近く召れ、おのれ辯舌賢く弓矢の作法をのゝしるが、若弓もや仕ると御
尋有りければ、さん候小兵には候へ共、翔鳥などは申すに及ばず、眼にだに遮らば、恐
れながら蚊のよろ骨も遁ははやらじと言上す。君廣言の憎しみにや、皆紅の御扇を投げさ
せ給ひ、然らば是を的立て、骨を避げて一間（一尺の折日と折りとの間。）を射揃へよ。若射損する物ならば方々遁
せな、射取れとせき給へば、彼男おし戴き、さつと開きて格に立て、野弓に野矢を取

ゆんがふし弓たなしの課。

五善一太平記十二聖廟の御事の條に、雪崩の如き齒を押脱ぎ打あけて引おろすより、暫くしばりて固めたる體切て放したる矢色弦音弓倒し五善いづれも速しく勢ありて、矢所一寸ものかず、五度のつゝをし給ひければ云々とあり。五善は論語集解に馬融曰、射有五善焉、一曰和、志閑和也、二曰容、能容體也、三曰主皮、能容體也、四曰和頤、合雅頤也、五曰興武、與舞同也と見ゆ。

添へてやがて射場にぞ直りける。雪の片肌押脱ぎやゝ打上げて引下し、暫し固めて切て放つ、矢色弦音弓どふし五善いづれも速しく、矢壺違はず射揃へしは、ためし少なき三重弓（かたよこまわら）勢也。君を始め一座の諸武士、思はず聲を立合せ、いや／＼射たりと褒むる聲、暫しは鳴も靜まらず。男扇を開きながら御前に返上す。君御悦喜のあまりにや、是を汝に與ふる條、（ほまれしるし）譽の印と致すべし。其上汝心あらば此度八島の供をせよ。本國生國はいづくの者ぞ、弓はいづれの誰が弟子ぞ、氏やあらん名乗れ／＼とせめ給へば、有難の御詫や候。我こそ御家人下野國、那須の太郎祐高が一子與一宗高と申す者、親にて候祐高は故殿義朝公の御勘氣を請け、幾程なくて相果て候。それより保元の亂出来り、野間の内海の御最期より源氏は日々に衰へて、平氏盛んに候へ共、父祐高が遺言にまかせ二君にも事へずして、一度舊主に召出され、かゝる御詫を蒙る事是天神の御利生也。此上は只軍門に骸を曝し、父が末期の望を叶へ申さん事有難くこそ候へと、悦びあふこそ道理なれ。君も御心よく見えさせ給ひ、誠に以て初春の弓矢始むるまでたさに、猶めでたさを重る事、是ぞ吉左右面白しと、

御土器を傾けさせ宗高に下されつゝ、又納まれるは君が世の久しきるべき三重ためし也。世の例ともならばなれ、濡れぬさきこそ厭ふらめ、濡れての末は戀草の、露と消えなば消えましよ。可愛がらるゝ事一つ、是を浮世の樂みと、男次第になるは只、女心の習ひかや。

いたはり一病氣、所
勞。都崩れ一都落ちない
ふ。

我夫一原本我妻とる
り。應所がなかせぐらん
一遊里なびへでも出
かけしならん。

若草姫と申せしは女院の御所女、御側そく去らぬ宮仕へ時めき給ふ身成しが、折からのいたは
りにて都崩れの御供も叶ひ難さの里住居、平家二度安穩に都へ歸し給はれと、此御社に詣
でしを的矢の興一に口説かれて、忍びくの假枕馴染み易きはいもせの中、世帶姿とはや
成て、共に營む世ぞつらし。いかなれば我夫の射場は飾りて有りながら、いづち行くらん
見えざるは、又悪所がな稼かせぐらん。ろくな事では有るまいと思へばいとぞ嫉しく、暫し佇
み居たりしが、よし、言うても詮なき事。戻らぬ内に賣勝ちて、お錢あゆくらべて厭がらせ
ん。只商ひこそ仕勝なれ。天神花や花召せく、花召さぬかと商ひけり。かくとは知らで
與一宗高、御盃はには醉ゑふ心は勇む、下し給はる色よき小袖小袴あさな小高く引違ひだりへ、太刀脇挾む
立姿男盛りや器量好し、我男自慢や業平わざひらも有るまいものと思ふにぞ、若草はット驚きて、コレ
れ程にはあるまい。ならぬ世帶一苦しき
くらし。壇垂らさす一汚らし
き服装きわぎさす。

肩に喰ひ付おもかげのそぞろ震ふも恐ろしし。與一可笑をかしたまられず、オ跡先おとせきも聞かず合點ごんてんの行かぬは道理也。是は大きな君達きみだひ、其有難い君と申すは源氏の大將義經公、又は某は下野しもつけノ國那須の太郎祐高が一子與一宗高と申す者、意趣いじゆはかやうの子細にて御勘氣おとせきを請けし身なれ共、今日不思議に召出され戰場に趣く也。然れば今日より大名ぞ、龜相そさうな待遇ごくわいし給ふな。さすればそなたは奥様也。前垂姿も今ばかり、どれ見納めにと抱きつく。女房思はず手を打て、扱は左様にましますか、知らぬ事とてよしなくもあられぬ疑ひ許させ給へ。ナ、それに付き、少訴訟ちうそそうの候が、若聞いてもや給はらん。與一重て、ハテ何事もつゝむに及ばぬ夫婦の中、語り給へといひければ、そも自らは若草とて左京の大夫顯輔けんぶが一人婢めい、父母身まかり給ひしより、女院の御所方にて召使はれ候が、心地悪しさに引籠り、都落させ給ふにも里に留まり、剩へかうした色に糾くされて、御音信も絶え果てたり。八嶋とやらんに越し給はゞ、何とぞ御身の計らひにて、女院様と尼公をどうぞ助けて給はれと、涙ながらに頼みぬる女心ぞ愚かなる。宗高大きに驚きて、扱もく心に任せぬ世の中や、かく敵味方と別れては女院様でも親にても助くる法はなきぞとよ。とりわき名乗合ひぬれば其方とも許されず、いもせの契も是迄ぞ、必ず恨み給ふなよ。是は又離別の印しるし、則君より給はつて譽ほまれの印也けれど、なき身の印と思はれよと涙ながらにさし出せば、若草とかうの

詞なく、夫の膝にひれ伏して歎き沈みて居たりしが、漸として顔振上げ、實武士のいきど
ほり尤かうこそ有るべけれ。何が扱此上はふつゝ歎き候まじ。サア是からは敵味方、未練
の振舞なし給ふな。與一遁さぬ宗高やらぬと振上る。扇小太刀に打つくるを小腕取つて組
み敷いたり。若草下より聲をかけ、最前名乗れば名乗るもくどし、ヤレ首を討て首取らぬ
か、怯れたか宗高殿、腰が抜けたか與一殿、敵を助くる法や有る、何とて首を召されぬぞ。
主様ならで我命やるべき人は持たぬぞや。はや殺してと言ひ残す跡は涙に咽びぬる。與一
もうろ／＼目も合はず、袂を顔に押當てゝ、オ、思ひ切たり出來したり、去ながら爰を聞か
れよ、假令敵の娘をも女につれまい物でなし。併しながら某は新參者、平家にかゝる縁有
りとて御疑ひの深かるべし。然る上は是忠功の妨げ也。妨げは又親への不孝、とかく添う
ては侍立たず、爰にて殺せば卑怯の至り、よし此上は是非に及ばじ、和御前も八嶋へ下ら
れよ。源平兩家の戦場にて潔く死を定めん。先それ迄は命を預けた、中々命を預つた。そ
なたの命も預しそ、構ひて粗末にし給ふな。さらば／＼／＼と別れぬる、詞ばかり
がすゞしくて、心の内のせつなきは戀の責めける三重故ぞかし。戀といふ字の無い國があ
らばや生れ變りたし。取分きて又色里は、こてもかくとも止め難き迷ひの中の迷ひにて、
起きては現寝ては夢、結び止めたき假枕、夕の實は今日のあだ、あだし浮世と思ふより、

親のいさめ云々一徒
然草「親のいさめ世
のそりをつゝむに
心のいとまなく」

親の諫め世の誹り己が心とわざくれて、ぞつとして来る戀風の思はず知らず吹き分くる吉
原の里とかや、色の初明初景色、堅い所の春よりは餘情勝れてゆたか也。さればにや義經
公御船卸の暫し間と、御物の具の上の帶心の外としやら解けて、下紐ゆるき寢屋の伽、初
代といへるにぞ、御心をかけまくも神かけ變らぬ私語、判官仰下さるゝは、思ふ子細の候
へば御身の名を改むべし。故は今度の舟軍に驕る平家の一門を海底に追つばめて、追付
凱陣致すべき、是は船路の門出なれば、只波風も靜くと召さるれば、コハ添き御詫やな、
誠に上つ御方の自ら如き賤しきに、御心を寄せさせ給ふも一世ならざる御縁也。此上只自
らが二つ共なき命かけ、君にとばかり其あとを言はぬ所が物ぞかし。靜重ねて小聲に成り、
扱それに付疾くより申上ぐべきを、人目繁さが障と成遅なはり候也。何とやらん今宵の景
氣、主が風情も常とは變り、殊には知らぬ男共宵より多く入込みていと騒々しく候也。ど
うで一度の別れしな、辛いは同じ事ぞかし。歸らせ給ふまじきやと頻りに伺ひ奉れば、判
官御思案ましますに、いかさま是は心ならず、武藏くと召さるれ共、これにとれたる一
睡り高鼾して居たりしを、判官靜と諸共に漸々としてかき起し、かやうくと言ひければ
辨慶目をすり欠ながら、それ何よりも面白からん、此比軍事絶えて、腕骨痒くうちつくな
是能程の春慰み、君達見物し給ふべし。去ながら是は是主の長めが平家に頼まれ、我々組
とれにとれたるい
たく寝入りたるい

しめさせ一滑させ。

給ふまじ一給ふ勿れ
の意。上する女子一上女
中。

ふに紛れなし。大方の仕組には毒酒などを盛る物ぞ。聞召さるゝ事なけれ。只燈火をしめさせ給ひ、御寢所見せさせ給ふまじ、何事も此武藏めに御任せ候べし。はや御入とすゝむるにぞ、連れて忍ばせ給ひける。既に其夜も更け行きて丑三つ告ぐる比しもや、上する女子と見えけるが、銚子盃携へて、辨慶が前後に居寄り、宵よりの御宿直さぞ御淋しく候はんに、御酒一つとぞもてなしける。辨慶につこと打笑ひ、近比の心さし誠に正月と云ひ夜中と申し、先御亭主方より初められよと云ひければ、いや別條も御座なきに只召されよとさし出す。辨慶盃押戻し、今宵の様なる盃は必ず別義の有る物也。是非心みとつ返せば、すは顯はれしと左右の腕しつかこ取る。辨慶くつくと笑ひ出し、興がる女中の強洒落やと小腕もちりに取て投げ、胸板をどつかと踏へ今一人をつつこさし上げ、車輪の如く振廻し、大地も抜けよと打ちつければ微塵に成てぞ失せにける。とかくせし間に下成敵跳ね返さんくと身を蹴けば、爰な女中の身もんだけはしたなしく、こてもの事に置手拭取つて御見に入れべいと、かたつばしおつ手縄れば、有りしは男の姿と成。是我々は平家方の者にてなし、皆此所の若い者、今宵の大將越中の次郎兵衛盛次殿、判官是にまします由何とぞ毒酒を参らせて、討て出する者ならば恩賞過分に給はらんと、御頼み候故かくはしつらひ候也。御免下さるべし。扱も苦しう候と手を合せてこそ居たりけれ。辨慶懲と聞え。も身んだえ一身悶え。

別足一姫の足を庖
の家にて別足といふ
より足にて踏むを、
かく戯れる也。

かぬ顔、珍しやく、末代末世に至りぬれば、女の元服する世有り。いで御祝義に此別足、少分ながら參らせんと、肋の骨を踏み碎けば、あつとばかりを身の一期、朱に成てぞ失せにける。所へ雜兵取懸けて面も振らず斬り入うだり。時に辨慶足踏み直し、大の眼をくわつと見開き、いや推參也おのれら、一院の御使檢非違使五位の尉、九郎大夫の判官義經公の御座近く、いはれぬ己等が太刀三昧。サア引くまいかと怒りをなし、鍔元くつろげ睨め廻せば、あへて近付く者もなし。庭に控へし大將盛次縁のはなまで駒駆けよせ、さも穢なしがたぐよ、身動きもせぬ辨慶に後を見する卑怯の至り、返せくと下知すれば。詞にや恥たりけん、又おづく取つて返すをまだうせぬかと反うてば、鍔音に氣を取失ひはふく逃げてぞ歸りける。然る所へ鈴木ノ三郎・龜井・片岡・駿河の二郎・鷲の尾・熊井・江田の源藏、迎ひのため參上し抜きつれく斬つて廻れば、暫しが程もたまり得ずして逃げて行く。大將盛次馬乗捨て御寢屋深く斬つて入りしを、辨慶柄にて太刀打落し、片腕取つて捩ぢ据ゑたり。かくとは知らで龜井を始め皆おひくに取つて返し、口惜しや盛次めを見失うたる殘念さよと、尋ね廻れば、辨慶上より聲をかけ、こりやく盛次尋ねるな、欲しくば得させんそれ計らへと投げ出す。勢ひ虎の毛を振ひ千里を走るもかくあらんと、語り傳へ書き傳へむべ武夫の手本なりとて、寫さぬ人こそなかりけれ。

後朝の涙の程をくらぶれば、歸る袂は何處やらが物に紛れて切離れ、強い所も有りつるが、跡に止まる枕こそ朽ちぬが物の不思議なれ。靜は寢屋に只ひとり涙にくれておはせしが、さすが別れの悲しさに寢巻搔取駒下駄に、霜踏みわけて松の陰、爪立てゝ見つ伸び上り、心ばかりの遣瀬なき所へ主駆け來り、おのれ女めいき盜人、我々平家に頼まれて判官殿を打殺し、大分褒美に預らんと折角巧む謀ようもく知らせたな。褒美を取らぬ事のみか、汝奴が頬折きし故、盛次殿迄殺させて、大きな罪を作らせし其科をおのれに報へよと、髪を取つて引倒しさんくに打ちければ、靜は杖に取付て、何々の誓文ぞさらく私は覺えなし。許させ給へと手を合せ泣くより外の事ぞなき。主の長腹を立て、いやおのれが空誓文つねぐ立つる口譖言、聞きたくもなし面倒也。所詮おのれを生け置いては平家の聞えも恐ろしし。いつその事に討て捨て宗盛公へ首を捧げ、右の通を言上せば身の難遁れて、折よくはせめての褒美や給はらん。立上らぬかと引起し、松の下枝に縛り付け、既に討たんとせし所へ、女房驚き走り出で、コレ爰な氣違ひ、何ぢや靜が首を切り、宗盛公へさし上げて御褒美に預らん。あたかな、ナフ平家さま褒美所へ行く事か、一日暮しの舟

あたかなー「虫のよい」といふ程の意。

今一昔より分とおへる君有、是も十分にあまりては宜しからおとて分て價五分宛に定めありし、近頃和氣と嘗て湯泡。

住居、主さまたちの御身さへいつを限りの波枕、願ふにかひはなきぞとよ。只近道がよい程に鎌倉方へ賣てやりや。それ下部等と呼ぶ内に、靜が繩を切解き、やれ御事等は此女をつれ下り、大磯にては玉屋の長鎌倉にては龜が谷、何れへなりとも賣つて來よ。年期の間がいやならば分と極て置いて來い。急げ／＼と云捨てゝ夫婦は奥に入りければ、靜は涙にくれながら春を見棄つる雁がねに聲を比べて、吉原を立つは物憂き三重姿かな。すでに時去り如月や中の六日の事也けり。御大將義經公御舟揃有るべきとて、福島の川岸迄御出陣ましませば、御旗本は申すに及ばず東國の大名小名、思ひ／＼に物具固め皆々御前に相詰めらる。時に大將仰出さるゝは、誠に某院宣を承り鎌倉殿の代官として西國に發向す。されば源平兩家の晴業殊更天下分目の勝負、是非此度に極りたり。然る間備への立様軍船の番組攻口の相詞、萬混亂なきやうにかねゞ評定致さるべきとの御諛、いづれも畏而申さるゝは、誠に我々東國者舟軍の様いまだ調練仕らず候。只御采を相守るべき由言上す。時に梶原進み出、此度の兵船には道船を仰付けらるべし。陸の軍は馬上徒步立駆引自由に候へ共、舟は行く事ばかりにて引くべきをより候はず。とかく艦舡に艦を立達へ脇楫を入れ候ひなば、懸引心のまゝにして甚だ勝利候べし。常の艦權を頼んで罷向ひ候段、何共愚案に落ち申さずと嘲るやうにぞ申しける。判官やゝ打笑せ給ひ、いや／＼戰場の習ひにて、

御采一命令、采配を
ふりて號令するより

片趣一方にのみ偏すること。

かのし、一鹿。
みよし、一船。

引かじと思ふ軍さへ折悪しければ引くもならひ、ましてさやうの逃支度、向はぬさきより捨へて何と軍が成べきや、あら心憂や汚はしや、殿原達は逆艦をも反様艦をも入れ給へ。此義經はいつとても只無二無三に攻め入て、軍に勝つこそ面白けれ。逃ぐるは嫌ひで候物をこ嘲笑つて仰せらるれば、梶原大きに氣色を損じ、いや是大將軍のよきと申すは懸くべき所は懸けても乘取り、引くべき所は引退き、命を全う敵を滅し世の亂逆を治むるを良將名將とこそ申せ。左様に片趣きの大將は猪武者とてよきにはせずとぞ申しける。義經猶もせかせ給ひ、ゐのしゝかのしゝはいさ知らず、それはわ殿が發明にて軍理に叶ふ所なし。そもそも舟軍の大事といつば、互角の争ひとて軍勢共を表に立て、みよしと／＼を突合せ少しも舟の歪まぬやう、是軍船の祕密とす。隨分向ふの歪を見すまし胴腹を貫き、忽ち舟を覆へす、是機取のはたらき也。左様に艦舳に艦を立てなば、軍勢共はいづくに立てん。皆胴の間に立つべきか、何とそれでも勝利や有や。おのれが軍慮の疎きは言はず猪武者とは舌長也。只今討て捨つべれ共、大事を前に置きながら同士軍せんやうもなし。疾う／＼鎌倉へ罷下れ。さあ行くまいかとせき給へば、梶原とかうの詞もなく、もぢ／＼として歸りしを笑はぬ者こそなかりけれ。折御大將義經公水主機取御前に召され、多くの舟を待合せ日數程經るばかりにて、八嶋へ着く事有るまじきぞ。殘るは追々出船すべし。先手廻の舟

船の間一船の中腹。

ばかり出せぐとの給へば、さん候順風にては候へ共普通に少過ぎて候。暫く風を御待ち有て御舟仕らんと申上ぐれば、判官大きに怒らせ給ひ、いや臆病也おのればら、乘懸りたる海上にて風強きとて止まるべきか。野山の末にて命の終るも又海川にて溺るゝも是皆前世の宿業也。向ふ風に渡らんと言はゞこそ義經が僻事ならめ、順風成が過ぎたりとて舟出すまいとは怯れたり。急いで船頭仕れ、さなくば其奴めら一々に斬つて棄てよとの給へば、御近習の侍共御詫成ぞ早く御舟仕れ、さなきにおいてはおのれらが命を取らんと太刀の柄に手をかくれば、水主機取力及ばず、何れの道でも命は無いもの只馳せ死仕らんと、縋解いて押し出す。先本船は紫の裾紅に中白や紺と柿との一重幕、金の采の舟印に伏鎧伏弓飾りしは御大將の御召舟、雨にも風にも怯まばこそ、羽搏が如き早舟とて翼丸と名付けり。其次に出潮の波に兎の浅黄幕、三蓋笠の舟印に貝鐘太鼓を並べしは、淀の郷内忠利とて此度の舟奉行、御座舟の跡を守護し靜まり返つて漕ぎ出す。爰に垣櫛かきならべ無紋の幕の紅を半紋つて結び上げ、金の馬簾の舟印に鬼神の首を貰きし大の鉾をさし添へしは後藤兵衛實元が韋駄天丸と漕ぎ出る。沖つ波間の蟹小船うらみし程に遠ざかり、よるべをぞ待つ難波江の、蘆に千鳥を染分けて裾立波の地白幕、花籠の舟印に般若丸と打つたるは金子十郎家忠、揃水色に吉野川櫻流しの染幕に、矢車の印を立て、船拍子揃へて押し出

ひた甲一一同甲冑を
替したるをいふ。

せがい一船の兩側に
船縁のやうに取付け
たる板。

傾城一美人。

手だれ一然練者。
召らるゝにぞ一召さ
るゝにぞの誤なら
ん。

おほくびは袖一お
ほくびはくみに同
じ、はた袖は直衣、
直垂なびの袖を長く
する爲に、袖の端に
又半幅につけたる
袖。

すは、田代の官者信綱の小鷹丸とぞ聞えける。總じて兵船貳百餘艘が中よりも、思ひ切つたる五艘の舟、帆を八分に引かけて普通に過ぎたる荒追手、暫しの撓みもあらばこそ、波切る音のさつ／＼さ、さつと吹上げ吹下し三日に渡る海上を、二時ばかりに馳せ着きしは恰も射る矢の三重如く也。かくて平家の人々は思ひよらざる事なれば、度々の軍に利を失ひ剩へ内裏をも後藤兵衛に焼き出され、皆々舟に取乗つてよるべ定めぬ磯の波、心を冷すばかり也。源氏方には次信討たれたりければ共、少も怯む氣色なく直甲三百餘騎、總門の渚に控へ素引して待懸けしが、何かは知らず小船一艘汀へ向て漕ぎよせたり。陸には源氏の兵共我射取らんと待つ所に、甘たらずの女房の尋常に出立ちしが、皆紅の扇をば舟の櫂にさし挿みて陸の勢をぞ招きける。判官後藤兵衛實元を召され、あれはいかにと仰せらるれば、さん候、大將軍矢表に進ませ給ひ傾城を御覽候はんを、手だれに仰せて射落すべきとの謀事とこそ存じ候へ。去ながら扇をば射させらるべうもや候はんと申上れば、味方に此矢射つべき者與一ならでは有るまじきぞ、それ射させよと召らるゝにぞやがて御前に參上す。判官與一を近く召され、あの扇の眞中射て敵味方に見物させよと仰せらるれば、一定仕るべきとは存ぜず候へ共、御詫にて候へば一矢射てこそ見候はめと、すでに御前を下りけり。其比與一廿餘りの優男禍に赤地の錦を以て大領端袖色へたる直垂に、萌黃緘の鎧

足白の太刀一太刀の金具
帶坂を通す所の金具
を白銀にし、總頭の
金具を金又は赤銅に
したるもの。
切斑一腰の羽の斑
の、上下黒く中間白
きもの。
一もへ一逸物の宛
字。
丸ぼや摺つたる一老
御鼠の形を摺りしも
のか(平家考證)又和
名抄に寄生木を保夜
といへるより寄生木
を丸くしたる紋を貝
にて摺りたるなりと
もいふ。
くつはみくつわに
同じ、口食の義より
いづ。

を着て足白の太刀を佩き、廿四差いたる切斑の矢を負ひ、重籠の弓小脇に挿み、一寸斑の
一もつに丸ぼや摺つたる金覆輪の鞍置かせ、手綱かい繰り歩ませけり。思ふ矢頭や遠かり
けん、海の中一段ばかりぞ打入たる。折節磯吹く夕嵐に舟をゆり上げゆりおろせば、扇も
定かならざりしが、宗高弓と矢打番ひしばし固めてよく／＼見れば、こはいかに若草姫打
恨みたる風情にてしほ／＼と佇みしが、さしもの與一途方にくれ、引も引かれず放ちもや
らでぞ控へける。沖には平家舟を並べ、陸には源氏銜を並べ、今や今やと見物す。與一は希
有の晴葉に引きは返さじ武夫の、やたけ心の一筋に縦へ女は打殺す共、おのれ家名は汚さじ
ものをと思ひ定むる心の内にも、殘るか戀よ情の道、南無八幡大菩薩別而氏神那須野の權
現、女の命安穩に扇の正中射させてたべと心中に觀念し、しばし固めて切つて放せば、過
またず要際を射落して、鏑矢海に入りければ扇はさつとぞ散りてげる。敵も味方もおしなべ
て、神代は知らず戦場にてかゝる晴葉よもあらじ。さつても射たりや若者と簾を叩いて褒
めにけり。若草猶もせき狂ふ姿あらはに物の具かため、長刀引さげ陣頭に躍り出で、那須
の與一宗高に見参やつと呼ばはつたり。源氏方には興がる敵の願ひやう、我討取らんと先
を争ひ駆け出れど、彼女びく共せず長刀杖につきながら、方々には手向ひせし、自らが一
命は宗高殿に先約有り、傍輩達にてましまさば一目逢はせて給はれと、しやんと立つたる

身振にはいかぬ劍もよも立たじ。大將遙かに御覽じつけ、重ねて與一を御前に召され、敵に詞をかけられて源平見る目も恥かしし。急いで搦め來るべしと仰下るを幸に、太刀ひつそばめ斬りかくれば、若草長刀取直し、てう／＼と打つ手もたゆく返す所を打落し、取て押へて繩をかけ御前に引出す。義經公馬上ながらそもそも汝いかなる者ぞ、是程多き寄勢より與一を選ぶいぶかしさよと仰せらるれば、さん候自は那須の與一が離別の女若草と申す者、飽きも飽かれもせぬ中を平家に仕へし者なれば、御疑ひ候はんと暇をくれし其辛さ、とても死せんず我命馴染の夫が手にかゝり、未來の縁を結び度是迄參候也。與一殿早う殺して給はれと、しつと睨めたる目の内にあらゆる思ひを含みつゝ、涙にくれてぞ居たりける。君もあはれとおぼされけん縛めを許させ給ひ、あつばれ賢女や武夫や、去りも去つたり立ても立てる貞女の道、末頼もしし出來したり。此上は義經が媒をして得さするぞ。夜討駆けの一戦に互の勝負を決せよと、御たはぶれと諸共に頃而御陣に具せられけり。然る所へ渚より徒步立の武者四五十騎、其女返せ／＼と追駆けたり。源氏方には田代の冠者・金子の十郎・後藤兵衛を先として騎馬の武者七八騎取つて返し、イヤ返せとは心得ず、若草姫は與一が妻女御用があらば返し申さん、サア請取るかと乗り崩せば、此勢ひに駆け立てられ後をも見ずして逃げて行く。源氏彌勇みをなし障泥を打つて追かけたり。渚近くは逃げ

延びたれ共舟に乗る間もあらばこそ、せめて命や助かると前なる海に崩れ込み底の水屑と成にけり。人々鞍の前輪を叩き、心地よし潔し、軍は明日いざ先此方へと、返す手綱を直様に輪乗四五遍乘廻し、乘戻しては乗廻す轡の音高嘶き、洲崎の松に聲添へて、さつと引たる武者振は、四天龍馬に打乗りて阿修羅を追ひし勢ひも、かくやと覺えてすさまじし。

第三

げにや世の中のうつる夢こそ誠なれ。保元の春の花めでたき眺めなりけるも、今元暦の春の風花の敵と吹き變り、ちり／＼に成給ふ平家の御運ぞいたはしき。すでに屋嶋も攻め落され潮路遙かに漕ぎ越えて、長門國赤間が關に御陣を召す。中にも御所の御舟には主上女院二位の尼、其外の女房達、御心を痛ましめ歎き暮させ給ひけり。しかる所へ知盛卿大童に戰ひなされ御所の御舟に來らせ給ひ、扱も味方の軍勢共度々の軍に利を失ひ、或は落ち失せ討死し殘り少く相見えて候。いと心の怯る、折節熊野の別當湛増も、平家の重恩深かりしが忽ちに心を變じ、貳百餘艘の兵船に若王子の御正體を乗せ奉り、金剛童子の旗をさし源氏へ參候へば、うつろひ易き浮世の有様、阿波の民部重能を始め阿野の一族さし加

山鳩色の御衣一麿座
の抱もひ天皇の
常の御服。

はり、彼是兵船七千餘艘味方の舟をおつ取巻く。多勢に無勢叶はずして遂に軍に打負けて、大臣殿父子時忠卿其外の人々も、皆生捕と成給ひ、残るは某能登の守御防矢を仕らん。はや御最期も只今也。見苦しき物候はゞ残らず海へ捨てさせ給ひ、とく〳〵御用意候べしと申上れば、上萬達じやうとうハそもそも夢かと聲をあげ歎かせ給ふぞ哀れなる。中にも二位の尼君は思ひ設けし事也とて、鈍色の衣二重に練の裳袴もろはま稜高く、結び上げさせ給ひつゝ、寶劍は腰にさし神璽しんじを脇にさし挿み、さも甲斐々々しくつつ立ち上り、自ら女の身なれ共敵の手にはかゝるまじ。主上の御供申す也。心ざし有る人々は急いで續かせ給へやと玉體に近付き給ひ、誠に前世十善の戒行にて萬乘の御位には生れ出させ給へ共、惡縁にひかされて御運も盡きて候也。先々東に向はせ給ひ伊勢太神宮にお暇申させおはしまし、其後は西方淨土の來迎に預らんと御念佛候べし。此國は粟散邊土と申しつゝよろづ物憂き所也。又あの波の下にこそ極樂淨土とて不生不滅の都有り。去によつて玉體を彼方へうつし奉ると様々慰め奉れば、御勅じゆぢつをもましまさず御舟端よしへ出御なる。御年いまだ八歳にていと美しう照り輝き、御髪じゆぱ黒くゆう〳〵と鬟ひんづら結はせ給ひしが、山鳩色の御衣もたゞ御涙に濡れながら白う細やか成御手を合せ、東に向はせ給ひて後、又西方を伏拜みよにいたいけなる御聲を上げ南無阿彌陀佛〳〵と諸共に二位殿抱き入り給へば、御母女院女房達共に勧むる御念佛、

分段一六道の衆生が
その業力に随つて感
する所の果報の身に
分限あり形段あるを
いふ。

印一選。

是が限りか悲しやと御席せきを打ち身みを闊かえ、流涕こが焦じやうれておはします。中にも御母女院はさもすさまじき海上を怨めしげに御覽めらうじて、定めなの世の中や、君玉樓の内にして誕生ならせ給ひし時は、百官百寮ことぶきて殿をさしては長生と名付け、長き住家と是を悦び、門をさしては不老と號し、老いせぬとさしと祝ひしも、いつしか今日は引變ひへんへて、分段の荒き波玉體奪ふ世となれば、十善帝位も頼みなし。悦びし事も飾りしも皆徒事あむごこ成けるは、そもそもいかなる因果ぞと、かき口くちぐち説きひれ伏して嘆き沈ませ給ふにぞ、知盛卿ちぜいを初めとして上萬局に至る迄、こは御道理じのう斷きりやと御有様を身に比べわつと叫ばせ給ひける。是ぞ哀れの限りなる。扱有るべきにあらざれば印の御箱かき抱き、南無阿彌陀佛と諸共に海へさつふと入り給へば、有りつる人々御跡慕ひ物の具碇しづをかき抱き、飛び入りいり給ひしは、目も當てられぬ有様也。源氏は兵船漕ぎよせよせ御所のお舟に乗り移りて、神寶あらんと尋ねる所に、御母后女院はいまだ沈みも果て給はず、内侍所の御箱に取付き流れ給ふを、判官早くも見咎め給ひ、あなあさましや女院にて渡らせ給ふぞ、過ちなしと、それ引上げよと仰せも果てぬに、多くの陣勢波おに下り立ちなんなく引上げ奉る。伊勢の三郎義盛も二位の尼公神璽寶劍小船に乗せ奉て、是も御舟に移し入るれば、三種じゅの御寶事故なく納り揃はせ給ひけり。所へ忠信龜井の六郎御前に參上し、去程に能登の守教經、安藝の太郎同二郎を

左右にかい込み、只今海底に沈み候て、はや御敵も是迄也。御凱陣のやういかゞ仰付けられ候べきやと申上れば、判官御悦喜まし／＼て那須の奥一を近く召され、汝夫婦の者共は女院二位の尼公を急いで都へ具し奉れ。道中船中心を付け隨分効り申さるべしと、はや御暇を下されけり。扱本船には三種の神寶眞先に押立つれば、七千餘艘の兵船は生捕八十三人を眞中に押込み、勝鬨の聲諸共に凱陣有ること三重常ならね。

若草姫道行

頃は彌生の末つ方春の形見と後咲、花まだ若き山々の笑ふが如き風景も、心ならざる詠には物の哀れに思ほゆる。御痛はしや門院は、御母尼公諸共に八重の潮路を漕がれ来て、御津の浦曲の此方より、陸路を過す御有様、去し昔に似もやらず、御幸車に引替へて牛飼舍人もあらばこそ、武夫共に守護せられ、憂さも辛さも悲しさも、今の御身にとどめたり。され共興市若草は御先に立ておいらへを申上ぐれば、御車の物見々々を晴れらかに、南の方に御指をさゝせ給へば、宗高はされば候、薄霞そびき渡れる山陰に九輪ばかりのほの見えて、青葉勝ちなる高根より蔓續きて松深く、念佛吹きこそ一風し、間遠に鉢のチャシ、ちやんとして扱聞ゆるは、高きが佛法最初の靈地下は有栖山の寺、爰は一年法然上人流離へ

さびく一舉く。
九輪一塔の九輪をい

小早一舟の種類の名
松の落葉四、岡山通
ひ跡に、岡山通ひの
六ちよ小早に船を八
丁立て、朝のおまへ
の三ぼが湘戸を小女
郎懲しきとな、歌う
て名のりてお清ぎや
るはえい、云々。
ねよけに見ゆる若草
うら若みねよけに
見ゆる若草を人の結
はん事をしぞ思ふ。
(伊勢物語)

給ふ舟待に、御法を説きし靈場と、詳しく述べ、佛の御名と諸共に、御手を合
させ給ひつゝ、ウタヒ誠に平家都を出し門出に御血脉を給はり鎧に入れて下りぬれば、此本
願の力にて、佛果の程も頼もし。跡に残りし我々はいが成憂を見もやせめ。なり行く果
の淺ましと、御涙せきあへさせ給はねば、宗高若草東武士、共に涙の瀬を比らぶ。苗代水
に鳴く蛙かゝる思ひはよも知らじ。鳴く音止めよ暫し間も、おぼし忘るゝよすがぞと、跡
振返り眺むれば、歌尼が崎からコツチノお舟がく、來るとヤツシシ、艦權を揃へて一丁二丁、
三丁の四丁の五丁、六丁小早で押せヤツサ難波艶江の月を見しよ、オホ、シしつとんオホ、シ
つとん、しつとん唐鶴の音のよさと、君に語れば夫は猶御つれぐを推量り、取交へたる
道の草、袂に入れて奉れば、少の憂さも忘れ草、思ひ草とて露草の寝よけに見ゆる若草は、
名にめでゝやは摘み残す。忍ぶ草かとの給ひし御言の葉の恥かしく、妹背雲雀の友呼ぶに
紛らはしつゝ行末は躊躇色濃き長繩手、茅花交りに咲く草、誰が紫に染めなして畫くばかり
に見えけるは、ア、小袖模様に生寫し姿寫してとてもなら、着せて立たせて歩ませて、
連れて行きたの男山、隔てぬ中の水入らず、二人連れなる旅ならば、名所尋ねて折々は夕
べの私語語るよすがあらなんに、人の見る目を恥らへば、目で締め心ばかりにて締
めて寝る夜はなきものを、賤の女が裏の茶園にナ晝寝してナ、殿とコノ寝たといナア、夢

を見る夢も結ばぬ我はたゞいつを伏見と里間へば、淀野の渡りとけしなく牛の運びの遅きにぞ、心の駒の鞭に打つ竹田を越えて見渡せば、はや九重のしるしにや行きかふ人の品かたち、田舎めかぬを見るに付け語るに付けて變りしは、君が面影なりけるよと、思ひ出すも露涙止めかねたる三重袂かな。

引手數多の憂き身にも、實は實にて連れとは誠也けり。靜御前鎌倉の龜が谷萬が本におはせしが、其別れ路の程暫し忘れかねつゝ、うかくと外の勤めもそこくに思ひ煩ひ給ひしが、いつを限りの御便り、待つ間命も定めなし。とにかくもなればなれ、此身一つは棄て物よ、死ぬる共生くる共もはやそれからそれ迄と、廓忍びて出でけるが、見咎められじと思ふにぞ、泥土を以て面を掩ひ髪はおどろの如くにし、木葉衣を身に纏ひ、道のほとりに佇みて庵なければ露霜や雨三けんに聲濡らす、此一節はかかる身の上を助くる便也。

歌所縁求めて若紫の草の籬を今來て見れば、花か紅葉か其面影の見えづ隠れづ木の間の月よ。浮氣ならねど身は高瀬舟、上りつめたる身の果に、物たべなふと立寄れば關守共立てて、こりやく狂女、關所にて有るぞ、急いで跡へ戻れとこそ。是は不思議の御仰や、扱は狂女をとむる關か。いやく狂女を止むる關にはあらねど、鎌倉殿の御弟九郎太夫の判官義經公西國の合戦に打勝ち、生捕共を召連れられ鎌倉へ入り給ふを、囚人斗を請取て

白波の云々一此數、
新古今十六にいづ、
第三句世をつくすと

舍弟義經公御謀叛の其聞え、鎌倉殿より御詮義強し。去によつて老若男女の貴賤を分かたず、手形を以て出入也。何と汝も手形や有ると尋ねれば、靜ははつと氣上りて、扱もく嬉しやな先々御身は恙なし。是幸也去ながら、關の此方に控へては御目にかゝらんやうもなし、何とぞ宥めて越えんと思ひ、こは仰共覺えぬものかな、其義經を止められんに此物狂が入る事か。義經共判官共いさ白波の寄する渚に世を過す蟹の子なれば宿も定めず。宿がなければ所縁もなし、何とそれにも手形の入るべき物か、をかしの人の云事やとせよら笑うてゐる所へ、關屋の大將立出でて、いか様是は乞丐人故も所縁も有るべからず。いかにも通して得さすべし、しかしながら白波の寄する渚に世を過す蟹の子なれば宿もなしとや、アレ遊君のなれる果世界の陸の脱殻ぞ。よく見置け若黨共、可笑い物かこそ蔑すれば、彼女取つて返し、こゝな殿様譯しらず、其陸と云ふ詞こそとりも直さぬ誠なれ。廓へ通ふ色人の見付所の一大事、是領國の傳授事情争ひ意氣比べ、指切髪切入黒子、爪を放すの心中死、血文日文の付届け、七枚起請金手形、是は勤の習ひなり。見付所の秘密とは戀といふ字につゞまりぬ。其戀故に巧ますも千萬無量の陸をつく。是誠より出し陸・可愛男り立てたさよ。さのみな穢み給ひそよ。陸と誠の其二つ、こゝを悟らぬ其時は、地獄の釜

色人一絲客をいふ。
血文一血にて認めし
文。女より深く恨む
事ある時送る(色
道大鏡)。
七枚をつぎ合せて書
きたる誓詞。
日文一ひぶみ、毎日
遣はす文。

色道修行の能化一能
化は所化に對して師
匠先達をいふ。

申は一申せ候。

遂而一たつて。

へほつたりと落ちてはまりが強いぞや。此外萬廓沙汰いへばいふ程古めかし。色道修行の能化達歌にも詩にも俳諧にも、又草紙にも作り置く、番所の隙にそろ／＼と勤學をして置かしやんせ。あつたら御器量よい殿御まちつと粹にしたいまで。玉に疵ぢやこ打笑ひ、行方知らず成にけり。すでに判官腰越に着き給へば、五十嵐の小文次は關所の前に畏り、拋も我君賴朝公いか成御所存候にや、此小文次めに仰付られ牢輿共を請取て、君は是より都へ返し奉れとの御事にて罷向ひ候と申上れば、判官大きに立腹有り、こはされば何事ぞや、
去年の春木曾義仲を追討せしより此かた、今年の春に至る迄野に伏し山を家として、又或時は漫々たる海上に風波の危うきを凌ぎつゝ、さしも手剛かつし平家の一類悉く討滅ぼし、
三種の神寶事故なく都へ還し入れ奉り、剩へ大將軍大臣父子を始めとして、多くの平家を生捕て遙々下りたらんをば、一度の對面にも及び給はずおつ返せとは何事ぞ。たとへばい
か成憎しみ有りとも、此度の勳功には九國の總追捕使にも仰付らるゝか、さなくは山陰山陽南海道何れ成共預置かれ、一方の御固めにもなされんするを、僅かに伊豫の國ばかりを
ば知行すべき由の給ふのみ、鎌倉へだに入れられず追出さるゝはいか成事ぞ。申は過言に似たれ共、凡そ此日本國中を鎮むる事は此義經が所爲にあらずや。先に生るゝが兄なれば弟も變らぬ父が子よ、達而恐るゝ所にあらず。イテ此關を踏み破つて、兄佐殿に對面し、お

此關破つて入り給はんは何より以て易く候。將又人數ならぬ某、此所を承り罷向て候へ共、
さへぎつて一強ひて
親兄一肉親の兄。

恨の様承らん。人々續けと駆け出で給ふを、小文次暫しと押止め、こは勿體なき御風情や。此關破つて入り給はんは何より以て易く候。將又人數ならぬ某、此所を承り罷向て候へ共、
何もお主の事なれば敵對申さんやうもなし。罷向ひし印には鑄矢一筋射かけ參らせ、直に御供申さんに何條事の候べし。去ながら某推量仕るに、是は正しく梶原めが讒言したるに紛れなし。然る所を遮つて無體に入らせ給ひなば、却つて狼藉の沙汰に落ち給はん。たゞ親兄の禮を重んじ、是非此度は御歸京有て然るべう存候。此小文次めが御爲悪しくは仕らじ、御身にあやまりなき旨を一通残し下されなば、老中共に申合御中直し奉らんと、涙を流し理を盡し様々諫め奉れば、判官打うなづかせ給ひ、オウ、誤まつたり小文次、此上はともかくもよきに計らひ申さるべしと、思召るゝ事共を残し留むる筆の跡、末の世迄も義經の腰越状と三重申す也。かくて靜は御歸るさを待受けんと、ある松が根に寄添ひてさしうつぶいておはせしが、先陣既に行過ぎて、御大將義經公御先道具徒侍御馬廻り跡備へ、御勢三千七百餘騎静まりかへつて打給ふ。靜は今や名乗らんと小松の蔭より這出づれば、御先拂ひの侍共、御目通見苦しし罷退れと追拂へば、重而名乗らんやうもなく、涙にくれて逃げ轉び薄が隈に身を隠し、震ひ戰く其隙に御陣は過ぎさせ給ひけり。靜は御跡見送りて、口惜しや恨めしや眼前側に有りながら、それ共見えぬ面影は變り果てたる故ぞかし。變り

果てしは何故ぞ、御目にかゝらん爲ばかり。コレへ後陣の侍達申届けて給はれと、聲をはかりに泣き叫び慕ひては又伏轉び口説き立ててぞ嘆かる。所へ六郎重清は後陣に下つて打て通る。靜それよと見るからに、コレ龜井殿六郎殿と呼びかくれば、重清ハツト振返り見れば女の乞丐人、やら不思議や某が名を呼ぶべきはれはなし。そも先おのれはいか成者ぞと咎むれば、ナフ見忘れ給ふも斷よ。是は靜がなれる果、か様の子細にて、又鎌倉へ賣渡され憂きを勤めて候ひしが、とてもかくとも君の御事思ひ忘る隙もなく、廓を忍び出様や道の程人目の程のがれん爲めの謀事、かくはしつらひ參りし也。どうぞ逢はせて給はれと又さめぐと歎かる。それでも六郎合點行かず、いやく詞が靜でも顔が靜で候はず。所詮あれなる川岸にて面を雪いで見せられよ。それく櫛笥といふ隙も、有りし川瀬にさしかゝり水を濺けば、土は流れ落ちて面影殘る水鏡、恥かしながら櫛取て引裂紙の引扱、二重廻してしやんと締め、結ぶ片手に脱棄つる、木葉衣の下一重取繕ろはぬ風俗は、雨雲覆ふ月影の晴間を得たる如く也。重清先陣呼返せばすは事こそよと引返す。靜嬉しく走りより判官の直衣の袖に縋りつゝ、嬉しさも悲しさも恨みも懲も懲も憂き事も情も仇もつれなさも、又ゆかしさも戀しさも涙ばかりで知らせたり。

第 四

嘉辰令月歎び極りなとかや。兵衛の佐頼朝公御舍弟三河守範頼九郎御曹司義經に御代官を給はりて、驕る平家を討亡ぼし征夷將軍に居官有り。凱陣の御家人には恩賞厚くなし下され、日々夜々の御祝ひ萬々歳とぞ奏かねでける。中にも與一宗高を召れ、誠に此度不思議に九郎が手に屬し、源平兩家の戦場にて類稀成弓勢先達て隠れなし。去によつて故殿の御勘氣を許すの上本領下野國を得さする條、急いで入國致すべきと御暇まつまつを下さるれば、其外の人々も皆々御前を下りつゝ本所もとに歸りけり。扱其後に二階堂土佐房を召され、扱も九郎義經院の御氣色よきに誇つて世を亂さんと欲す。仍此度生捕共を引具し腰越迄下りしを、五十嵐の小文次を差遣はし、囚人ばかり請取つて九郎はそれより返す。事延引に及びては是又天下の騒動也。汝は京の案内者急ぎ帝都に馳せ上り、九郎を討て下るべし。其勳功には安房下總兩國を給はるべきとぞ仰せらる。土佐房謹而承り、誠に人多き其中に此入道めを召出され、御一門を滅ぼし奉れとの御仰承候事歎き入存する也。其上御謀叛と仰せ候へ共、そして見えたる御事とても候はず。あはれ今一度御詮義の上仰付けられ下さるべうもや候らんと申上れば、梶原平藏進み出で、いや／＼御謀叛なきとは申されず。義經公の

蛭巻一捨、長刀等の柄々、間をおきて銀の延板又は簾にて巻きたるといふ。
千手院一剣工の名。

我儘は是御謀叛の致すの所、先此度の生捕にも女院の御所二位の尼大納言の介の局、是等は鎌倉へ引きも給はず直に大原へ送らせ給ふ。其上西國の合戦に城の三郎高家本三位の中將以下を擄め取り、範頼公の御手に渡し候へば、判官大きに怒らせ給ひ、奇怪の者の振舞かな、いざ押寄せて蒲殿討たんとの給ひしを、此景時が宥めてこそ判官鎮まり給ひつれ。殊更平家を討取りなば關より西は九郎が物、天に二つの光なし地に兩星はましまさねど、此後は天下に二人の將軍あらんとの給ひしを思へば／＼恐ろしし。武功は古今の御達者、鶴越の坂落し其外八嶋壇の浦、所々の詰軍に一度も弱氣を見せ給はず、漢家本朝にかかる名將よもあらじと、東國西國の兵共何も心を通はせり。本より世に望み有る大將なればたゞ人毎に情深し。是士卒を思ひ懐けん謀定めて御謀叛遠かるまじ。此君天下を知り給へば、其方や我々は一番駄に首がない。何と狼狽へ申さるゝご重而譏し奉れば、入道大きに驚いて、いかにもさうよ梶原殿、首が有つての賢人だて、何しに御説を背き申さん。たゞともかくもよきやうに御前を頼み存すると、謹而こそ居たりけれ。頼朝御機嫌麗しく、納戸の御方より蛭巻白き手鉢を給はり、是は大和の千手院に鍛はせ秘藏して持たれ共、頼朝が敵討には柄の長きを吉例とす。是にて九郎が首を貰き追付凱陣致すべしと、御座を立て給ひければ、土佐は都へ三重上りけり。かくとは知ろしめされずして、九郎御曹司義經公

氣の毒一心を悟ます

こと。洗轡一鐵の轡をい

おがみ一尾聲。

吉凶を判断するこ

と。御判はんじ一印判の
一算おくべい一算
べし。

震下連一印判

卯腹辰腰寅背中未の
頭に中の尾一鉄炎に
日によりて忌む所な
り、申の尾は申の腰
ともいふ。

都へ入らせ給ひしより四海波風吹治まり、豊か成世の例ぞと、夜晝分かず御酒宴にて明し暮させ給ひしが、武藏坊辨慶は物事油斷なき心底にて、御酒宴の座に心も留めず、いまだ平家の討洩らされいか成事をや仕出さんと、毎日姿を窺つゝ町々里々野はづれにて事を窺ひ居たりけり。然る所を土佐房は四五十騎にて打つて通る。辨慶すはやと見る所に、熊野詣でと思しくて、淨衣烏帽子は申すに及ばず、長櫛乗替乗馬迄いづれも幣を切りかけさせ、さも殊勝氣に行過るを、辨慶遙かに見送りて、イヤ心得ぬ土佐が風情や、つくづく事を案するに、我君と鎌倉殿御中不和に成給へば、今さらかゝる物詣でも心にかゝつて覺ゆる也。問はばやなんだ思へ共、土佐めが辨慶見知つたらん。ハテ氣の毒やと思ふ所に、暫し下つて舍人共、黒き馬の逞しきに洗轡を食ませ、是もおがみに幣切かけてぞ通りける。辨慶ちやくと居直つて、御年八卦當年中の吉凶を知る事、御判判じ即座のト形失物相性何にても御手の筋を考へて其儘生死を見る奇妙、ト算／＼とぞ呼びかけり。男共立寄りて、扱々是は幸や、いで／＼一算置くべいと馬繫ぎ捨て捩ぢ据れば、辨慶書物を繰り廣げ、お年は何と卯の年な。八卦のおもては震下連、是卯の方を司さどる。震下は則雷にて只黒雲を走るが如し。扱も危い御身の卦體や。卯腹辰腰寅背中、未の頭申の尾、申酉荒れて戌温し。犬には犬の聲有て、一犬吠ゆれば萬犬叫ぶ。扱は其方主人たる人は、人の討手に

向ふと見えたり。其主人の一犬動く故に士卒の萬犬共に動く。一犬却つて犬の體、人道を離れし畜生道、是はまさしく主か親か何分道に當らぬ討手成べし。何と違ひは有るまいがと譯もない事云散らせば、流石下蘿のあさましさ、拗も見通し／＼と舌を卷いてぞ居たりける。辨慶猶も可笑しがり、とてもの事に生死至極を見て取らせん。いづくよりいづくへ通る人成ぞ、有體に申されよ。されば候、我々は二階堂土佐房正尊殿の馬屋の者、頼朝義經御中違ひまします故、堀川殿への討手を蒙り罷越され候也。構ひて御披露詮なしと言はせも果てず取て伏せ、あら無慚や八卦の表絶對絶命と占うたり。念佛申せと首捻ぢ切つて捨てゝげり。辨慶につこと打笑ひ、御所迄歸るも手間遠也。直に土佐めが宿所へ踏ん込み、事の様子を見届けん。是幸ひこ馬引寄せゆらりと乗りて打つ鞭に煙を立てて飛ばせしは、只稻妻の三重如く也。程なく辨慶土佐が宿所に駆け付け、と有る所に馬乘棄て、案内もなくつつと入る。折節土佐房一家の武士、車座に居並びて夜討の評定有る所へ、辨慶ぬか／＼とさし入て、入道が馬手の座敷にどつかと直り、これさ土佐房、惣じて御當家の御作法にて、是より關東へ下る輩は京都の子細を取敢へず鎌倉殿へ訴る。又關東より京へ上る輩は一番に堀川殿へ子細を云ふ。それを御邊も知りながら、只今迄の遲參近比無禮千萬以外の御機嫌也。早々罷出られよと襟上擗

んで責めつくれば、さしもの土佐房返事にあぐみ、先々こゝを許されよと、もちくとし
て居る所へ前後の若黨反を打ち、参れとなれば参らんに是は餘りの狼藉也と、つめかけく
云ひければ、いや推參也蛆虫奴等、此辨慶に立つ刀、おのれら如きは得差すまじ。黙れと
いふに黙らぬと、片端素頭を撲り碎かんと睨め廻せば、あへて近付く者もなし。元來土佐
房思案者、やれ慮外也おのればら、武藏殿の御使は義經公の御名代、それに向つて太刀三
昧、掲々いはれぬ力み立、それゝ馬に鞍を置け。辨慶殿の御供して申上げんと云ふ所を、
小腕もつて引立て、馬はこなたにお供は辨慶、かたゞお構ひ有るべからず。いざ御立と
引すり出し弱腰攔んで馬に乗せ、其身も續いて乘たりしを、末の世迄も辨慶が後馬とぞ三重
名付けける。御所にはかゝる御沙汰もなく、靜を始め多くの遊君其外家の諸侍、南面の廣庇
に酒宴してこそおはしけれ。所へ辨慶土佐を具し御前に参上し、概略を訴ふれば判官御盃
をさし置いて、いかに土佐房、おのれ義經追討の使として遙々罷上る由、勢はいか程持たるぞ、
軍は明日何時成ぞとの給へば、土佐謹而申上るは、全く左にて候はず。我君三の御山へ御
宿願の事候ひて、御代官を承り熊野へ参詣仕候。早速登城仕り御断をも申上んと存する
所に、路次より風氣五體を苦しめ候故、今晚養生仕り明日お目見え致すべき旨申含め候所
に、辨慶殿のお使故延引ながら参上仕て候。追討の御使とは大權現も御照覽、ゆめく存

候はずと辯舌賢く言上す。義經聞きもあへ給はず、何と西國のかんせんに創を被る軍勢共、
生創を持ちながら熊野參詣苦しからぬか。何共おのれが面魂思案に落ちぬ所有り。眞直
に白状せよと御氣色變つて仰せらるれば、土佐房重而左様の仁一人も具せず候。津の國和泉
を打越て紀の路にかゝり候へば、山賊みちく候由承候間、若き奴原少々召連れ候なり。と
かくか様の無實を受け私には申開き難し。あはれ御免を蒙つて神文を書認め、御申譯仕度
候と申上ぐれば、判官御氣色直らせ給ひ、神は非禮を受け給はず、疾くく神文致すべしと
仰下れば、土佐房は牛王を以て書認め御前に献上す。判官是を盃となし三献酌みて罷立てて
御盃を下さるれば、コハ忝しとさらりと干し、御土器を懷中し、土佐は旅宿に歸りけり。武
藏を始め龜井片岡一座の諸武士口を揃へ、神文起請は小事にこそ、是程の御大事に輕々敷
御振舞、今宵は御用心候べしと申上れば、シヤ土佐房めが寄せたり共、勢二百騎にはよも
過ぎじ。只義經に任すべし。方々は六條にて心任せの酒宴せよ。疾くくとの給ひて、は
や御枕召さるれば、皆々お暇賜うでける。され共靜心賢しき女にて、うちも寝入らぬ添臥
しは袂片敷くばかり也。すでに其夜も丑三つ告ぐる比しもや、闇をどつとぞ上げにける。
靜驚き走り寄り、御敵寄せて候ぞや。起きさせ給へくと動かせ共、醉ひ臥し給へば夢と
のみ現心もつかざりけり。靜は餘りのせん方なさ、御所中を駆け廻り、人はなきか侍達は

おはせぬか、敵の寄せしを知らざるか。御召なるはと呼ばはれ共、宵にお暇賜びければ音する人もあらばこそ、たまゝ寝覺むる女房達、軍といふが恐ろしさに深く忍びて影もなし。靜は度々の寄聲に彌々心せき狂ひ、又ゆり起せど機れど叩けど折れどうつゝ事、只寝よ／＼とばかり也。せめての事に御寢姿敵に隠し参らせたく、衣に包みてかき抱き一間に隠し奉り、振返り見る細殿脇、イヤ人影のとさし覗けば、下部の喜三太叫きて何事かはと立寄れば、こは喜三太か嬉しやなふ、是々敵の寄せけるぞや。かゝる時こそ男の役、コレ是を着て軍しや。其間に御目も覺むべしと、御着背長を投げかけて上帶しむるその隙に、兜打着せ馬引寄せ、さあ／＼是に打乗て急ぎ表に駆け出し、檢非違使五位の尉九郎太夫の判官、源の義經と大音聲に名乗られよと、馬引寄すれば、コハ靜さま、軍するまで候はず。先此具足ばかりでも中々身動き成申さず。其上に又此長名是が何とて覺えられん。いやもう許して給はれと逃げんとするを引留め、ア、辛氣やの爰な人、和御前ばかりを遣るではなし、自ら共に行く事ぞ。はや／＼馬にとかき抱き打乗する間も有りやなし、其身も物の具さし固め、長刀ふつて立添ひしは男勝りの女也。去程に辨慶は己が宿所に臥したりしが、夜こそ寝られぬ土佐めも京に有るぞかし、御所の御事氣遣はしと太刀脇挟み棒突鳴らし來りしが、土御門は御門さよりぬ、東の小門をつつと潜つて入る所に、靜は何の心もなく駒の口

のせんす勢一長刀に
のせて斬らんす勢。

取り駆け出る。兩方一度に出給ひしが、喜三太土佐よと見るからにぞつとして來る臆病風、わな／＼震ひて目眩めき馬より下へどうど落つ。武藏は君と心得て立寄り見れば喜三太也。こはいかに喜三太／＼と引立つれば、やう／＼心や付きたりけん、檢非違使／＼五位の尉、ござ名乗りける。辨慶靜可笑しがり、いやはや弱き大將軍、扱も似もせじ似氣なしとぞつと笑うて立つ所へ、判官御目を覺ませせ給ひ物の具固め御出で有り。法師々々と召さるれば御前に畏り、さしも申上る事を御承引もましまさで、腕にも足らぬ奴原を、門外迄馬の蹄ひづめを向けさせぬこそ安からぬ。いざ蹴散らさんと主従三人、辨慶御先給はりて一度にどつと駆け崩せば、むら／＼ばつとぞ逃げにける。喜三太やう／＼思ひ出し、大手の櫓やぐらにかけ上り早鐘を撞き鳴らせば、御内の侍在京の武士すは事こそよと駆けつけ／＼參り合ひてぞ三重戦ひける。さしもに勇む鎌倉勢、此一戦に切立てられ、今は土佐房只一騎鞍馬かにの方へと落ちて行く。熊井・片岡・龜井の六郎向じかぶよりおつ返す。後には鷲の尾・鈴木の三郎・忠信・義盛・源八兵衛、鎌かまを揃へ待懸けたり。下には辨慶車の如く長刀ふり立て、落ちばのせんす

なつて、行方は嵐吹く木の葉の如くに成にけり。

第 五

御給事一御奉公。

長か「長かる」の誤にて、增長跋扈する意。

守る人も据ゑなで過る世の日數、はや其年も暮れ／＼て又明渡る春も立ち、水無月はじめの事成しに、義經公の御方には武藏を始め諸侍、いづれも御前に相詰めて、土佐房を討ける上又ぞやいか成御沙汰あらんと、證議區々成所へ那須の與一が妻女、聊か御訴訟の事有りとて一通を献上す。判官何事やらんと開かせ給ふに、何々此度生捕の内女院ならびに二位の尼公・大納言の輔・阿波の内侍、我君の御情によつて御命恙なく小原の奥寂光院にて御出家有り、中にも二位の尼公は世を早うし給ひて、女院の御惱み以ての外に候由國にて傳へ承り、閑居の御有様をも訪ひ参らせたく候てはる／＼參候へ共、今比御家人の妻女と成参らせて候へば、夫にて候宗高が後日の御咎めを恐れ存じ、一通を捧げ伺ひ奉候き。あはれ御許されを蒙りて、今はの時の御給事致し参らせたく候まゝ御披露を頼み奉る。靜様へと書たりけり。判官あはれと思されけん、若草を近く召され、誠に舊主の捨て難く遠くも来る心ざし、女ながらもしほらしゝ。讒臣長ず浮世の中與一が思ふも道理、某とてもさの如し。十善天子の御母公なれば棄て参らするにあらね共、世を憚かりて延引す。いか

臺破れては一平家物
語小原御幸の條によ
れり。
瓢箪空し云々一瓢
箪庭空草滋々顔淵之
巷（義慈深鎮雨澤）原
蓋之樋（橘直幹申
文）この邊の文章
べて平家物語の小原
御幸に據れり。

にも許すぞはや參れ。いか様是は能折からいざ野遊に事よせて、我も共にと行く道の御供
とては嵐吹く野路の若草（なよ）嫋かに、御先に進み出でければ、跡は靜（しづか）の立姿（たつしき）變し（かわ）て三重野飼
の牛を、引くかと見れば引くではあらで、ム・ヤアコレノ、色に追はるよの、ム・ヤアコレノ二つの
綱をほどいて見れば、思ひと戀とム・ヤアコレノ、あだと情をの染め分けて、青葉に變る茂みこ
そ春の名残と惜まるれ。茂りにけりな夏草の、葉末の露を分けくへて、行けば程なく今は
はや寂光院に着き給ふ。こ有る櫓の木の本に牛の綱手を結び置き、若草靜立寄りて御寺の
方（かた）を打眺め、あさましの御有様、世を厭ふ御習ひとはいひながら、かくも變らせ給ふ物か
な。臺（いからか）破れて扉落ち軒には葛の葉葛（かづら）や、忍交りの名無し草、瓢箪屢々空し草顔淵が巷に滋
し、藜藿深く鎖せり雨原憲が樋を濕（ぬる）ほす。時雨も霜も置く露も漏る月影に爭ひてたまるべ
し共見えざりけり。アレ御覽ぜよ、後は山前は小笠野風騒ぎ、世に堪へぬ身の方便（だいぎ）とて憂き
節繁き竹柱、都の方の音信は間遠に結へるませ垣や、僅かに言問ふものこては、峰に木傳
ふ猿の聲賤が爪木の斧の音銛（いのこ）くらぶる外はなし。ハテ人がなといふ所へ四十餘りの尼一人、
手馴れぬふりや閑伽桶に水を掬びて戴きて、岨（さば）を傳ひに來りしを、是幸と立寄れば阿波の
内侍のなれの果、互にそれと見るよりも、こは珍しやと立添ひて先立つものは涙也。内侍
やう／＼涙を止め、思ひよらずや若草姫、扱只今は何のため是迄御入り候ぞ。されば候御

御一門を一御一門の
とあるべきなり。

夏の花一夏百日中
佛に供ふべき花。

一念一念佛を一返す
ること。聖衆の來迎一佛菩薩
の來迎。

莊嚴領一佛を莊嚴す
ための領地。

惱み次第に重らせ給ふと聞き、遠き田舎の果よりも遠々參候也。此方に渡らせ給ふこそ我君判官義經公、訪ひ入らせ給ふはと申しも果てず立寄りて、さて忝な御入や、女院の御命又我々が一命迄御許しなし下され、御念佛を修行して御一門を菩提を弔ひ、佛果の縁を結ぶ事は大將の御恵み、いつの世にかは忘るべし。彼方さまにも幾程か御悦にて候也。此比迄御いたはりにて渡らせ給へど、廿日ばかりも此方かたは御心地よげにまし／＼て。夏の花手折らせ給はんとて上成山へ入り給ふが、定めて追付御歸りにて有るべき間、御入有て待たせ給へと申しも果てぬに女院歸り入給へば、内侍の尼は立寄て御花筐かたふね給はりか様／＼と申上ぐれば、誠に一念の窓の前には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御訪ひ返す／＼も嬉しけれ。去ながら今かゝる身を見え参らする恥かしさ、昔懲しき御涙止めかねさせ給ひけり。判官謹而涙ながら、扱々變れる御有様や、疾くにも登山申すべきを、明暮と禁庭に膝を屈し候へば存じながらも禮を失ひ候也。去にても只今迄は誰か言問ひ参らせしぞ。さればこそとよかゝる身を訪ふとし人はなけれ共、信高高房の北の方絶え／＼申送る也。あはれ實其昔あの人共のはごくみにて、世を過さんとは思はずよ、生きて甲斐なき我身の果。恨めしの浮世やと又御涙堰せききあへず。判官も共に涙の隙よりも、こは御道理去ながら某かくて候上は只御心安かるべしと、莊嚴領三百丁御墨付を參らせらるれば、御志は

天下は一人の云々一
六書文師篇・呂氏春
秋晉公篇等に出づる
語。

三時一朝晉夕の三
時。

嬉しけれ共、一度敵よ味方と分れ今更施物は受け難しと、御手にも觸れ給はずし戻させ
給ひければ、義經嘲笑はせ給ひ、何と敵の布施物は堅う御受け有るまじとや。御身は墨に
染まれ共いまだ染まらぬ御心、さすが女中の御身なれば尤とは申しながら、事の道理を御
存知なし。夫天下は一人の天下にあらず、則天下の天下也。敵味方と分れ源氏の天下と成
けるは、是清盛の政道正しからざる故天是を免し給はず。草木國土悉皆成佛と聞く時は敵
もなし味方もなく、只平等施一切同發菩提心の往生安樂國にてあらざるや。然ば此度の戰
は御身の爲には善知識、かゝる憂へに遇ひ給へばこそ不思議に釋迦の遺弟に列なり、忝く
も彌陀の本願に乗じて五障三従の苦しみを遁れ、三時に六根を清めて一筋に九品の淨刹を
願ひ、もつばら一門の菩提を祈り常に佛の來迎を待ち給ふを、何と有難いとは思召されず
や。但し御身を助けん空道心か、其御心にては中々往生は遂げられまじと座を打てすゝめ
給へば、女院ハット御手を合せ判官を合掌有り、扱有難の御教化今日の釋迦只今阿彌陀佛、
僧僧にあらず俗又俗にあらずとはかゝる事を申すらん。ナフあやまつたり許させ給へ。南
無阿彌陀佛へと歡喜の涙止めかねさせ給ひしかば、二人の尼も諸共に手を合せてこそ泣
き居たれ。義經重ねて、誠に一念の御發起世に有難う存する也。彌々怠りましますな又こそ
登山し奉らん、はや御暇と夕日影山の端近く入相の鐘の鳴音を限にて別れ出でさせ三重給
すゝめ一進みの誤
か。或は眞の道心に
入るべきを勧めの意
か。

夕日影一言ふにか

しぶり。おろしやう一輕麗の
おろしやう一輕麗の
しぶり。

御上使一原本御説便
とあり。峯山上一入峯のぼ

ひけり。後は彌陀山・鐘鼓峯・花園近き山限より、武士とも社とも知れぬ者、四五十騎おつとり捲き、闕をどつとぞ上げたりける。義經少しも騒ぎ給はず、若草静を後に圍ひ早御太刀の鍔元四五寸おしくつろげ、イヤ推參也山賊奴等、暮にかゝりし山間を足弱連れて行く者が、おのれら如きの瘦盜人に恐るべきか。鯉口の離れぬ先そこ押開いて通すべし。さなくはおのれら素首を落し獄門の木に曝さん物をとの給へば、大將と覺しき者小高き所につつ立ち上り、山賊盜人とは近比餘りのおろしやう、身不肖ながら某は去年堀川の夜討駆け、御身に討たれし二階堂正尊が一子土佐の太郎近則也。其節は折悪敷此山蔭に引籠り、興力の勢を相待て折を窺ひ居る所に、幸の御通まだ天道にも棄てられず、一つには父が敵且は又頼朝公の御上使成ぞ。急いで御腹召さるべし。我々が介錯し御首を給はらんと、前後左右より討つてかゝる、所へ山伏數十人どかくと駆け來り、是は北國方より峯山上の客僧、何事かは存ぜぬ共此喧嘩は貰ひ申さん。何と早々呉れ召されうか。否でも貰ひ申すとねぢ据われば、近則急いて身を蹴き、いや面倒成山伏共、そいつら共に討取れと群りかかるを前に受け、大石大木投げかけ〳〵隙あらせす打撃ぐは、人間業とは三重見えさりき。され共近則危うき命を搖潛つて義經を目がけ飛んでかゝるを、先達の法師と見えしが忽ち天狗の姿を現はし、羽風を立てて追懸來り中に擱みて上りしは、凄じかりける三重

勢ひ也。雲中に聲有て、いかに義經御身遮那王丸の其昔平家追討の大願有り、我に祈りの深きによつて是まで付添ひ、其危うきを救ふ事彼是七十三度に及ぶ。正に成就致せし也。去によつて今より後、御身を離れて此僧正是本の鞍馬へ歸るぞと飛去り給へば、有りつる客僧皆悉く羽叩き來り、敵を引裂く其血煙は只紅の雨と車軸し、立添ふ魔風に谷風川風山嵐、木の葉吹立てゝて山路遙かに入り給ふ。義經を始め奉り御迎ひの武士、同音にあら有難やと伏拜む、天長地久の君が御代、五穀豊饒に民安く、榮え榮ゆる豊津國、限りなきこそめでたけれ。

右此本者依爲懇望文句音節等悉校合加秘蜜令開版者也

竹本義太夫

本竹

繼義

京二條通寺町西入町北側

山本九兵衛板画

大坂高麗橋壹町目

山本九右衛門板画

源 賴 家 鞠 始



源 賴 家 鞠 始

かなばざらんやーか
なはんやの誤なるべ
し。

望願書—禮記曲禮下
に、侍^ミ於君子^{ハニ}不^ミ
願望^ハ而對^ハ非^ハ禮也[。]
注に願望^ハ而對^ハ後^ハ對^ハふ
るは、敢て他人^ハに先^ハ
たちて言^ハはざる也[。]
同書に、立則^ハ磬^ハ折^ハ垂^ハ
佩^ハ注に僕^ハ折^ハ磬^ハの背^ハ
の如くにして、玉佩^ハ兩邊^ハより懸^ハり垂^ハる、
これ立容^ハの常なり。
しな一譽、姿^ハざの
をりしか一折柄^ト同

親愛^{しんあい}を以て是に從^ハふは私情^{しじやう}の與^ハする所、豈是正理に叶^ハざらんや。爰に鎌倉一代の名將左衛門督源賴家卿、征夷大將軍に任せられ父賴朝卿の跡^をつぎ、四海を鎮め御代安全の勳功^をは、四民こそつて千代萬歳と仰ぐに飽かぬ時とかや。幕下^の徒に彌增して問注所^を新造り、百姓の訴へも直^ハきを本の御政道、天性賢くましませば、たけき道芝踏み分けて八雲の道も淺からず。蹴鞠^をは又紀内行景^とて、名を得し鞠^の達者^をば都より召置かれ、御指南申上^げければ世に勝^ハれさせ給ひけり。扱御舍弟千幡公十二歳、御器量他に越え智惠敏く、是御成人の後鎌倉右大臣實朝公と申せし也。御乳人子には大和前司友行晝夜御側を離れ奉らず。同御一子一幡公三歳にならせ給ふ。是は比企判官能員が娘若狹局の御腹也。扱又天下の執權には御母方の御祖父北條の四郎時政、並に一幡公の御親戚比企判官能員兩將として執り行はる。比は正治二年改まる元日の御儀式、大名小名残なく望願書折^はりて賴家仰出さるゝは、誠に毎^ハ陽^ハの式法例^に違^ハぬめでたさは、治まれる代の例文^を以てしなとせり。されば海内^{かほく}靜謐^{せいき}の春文に基くをりしか也。聞けば來る四日こそ大内の鞠始^ハ、いざこなたにも

かはらか一清爽に。

意趣一遺恨。

蹴初せんと御機嫌ます／＼うるはしく、御簾下れば揚巻と共にゆるぐや注連飾、げに永き日の長閑かに治まる御代こそ三重めでたけれ。既に御會の日にもなれば、在鎌倉の諸大名出仕遅しと出でらるゝ。爰に千葉の介常胤の嫡子千葉太郎胤政とて、文武に達し器量は又世に類なき美男也。今日蹴鞠の御詰とてかばらか成し裝束にて、三十餘人に前後を打たせ馬上ゆゝしく登城ある。然る所に向ふより、笠ふかぐと顔隠し清げ成若侍二人左右に立別れ、行違ふさまにて胤政の馬の兩口引止む。供の者共こは狼藉と騒ぐを千葉しばしと鎻め、してかたゞは何の意趣有てかく振舞ふぞ。子細を聞かんとあれば、いや別義にも候はず、千葉の太郎さまと見受け奉り少頼み上度事候て、卒爾ながら御馬を止め候といへば、千葉聞給ひ、何某と見請け頼み度事とは、若人を討つて追手のかゝれば影を隠してくれよとの事か、但し敵には行合うれども多勢に無勢叶はずして加勢を乞ふか。遠慮なく申されよ、本意を達し得させんと有り。拵頼母敷お詞なれどもさやうの事にて更々なし。只御一言にて侍のあく事にて候といへば、千葉眉をひそめ、汝らが申條一圓合點ゆかず。先侍の笠をも脱がで頼む事とは法に背く緩怠者、誠頼む事あらば笠を取つて申せと赤面して怒らるれば、御腹立の段至極仕候。去ながら深く人を忍ぶ身にて候へば無禮は御免なされ、只頼まれんとの御詞承りたう候といふ。胤政いよ／＼せきにせき、おのれらは某が

武勇を引見んとの巧、弓矢八幡慮外千萬それ侍共笠もぎとれ。畏つて立ちかゝり笠もぎと
ればこはいかに、四十餘りの女房と二八の春の花過ぎて廿に及ぶ上臘の、山の端出でし月
の顔雲のびんづらぞつとして覚えず馬より轉び下り興さめ顔にて立たれけり。時に乳人と
見えし者千葉に向ひ、妾はあのお子を育て上げし者なるが、いつぞや大山詣での時御姿を
見そめられ戀焦れさせ給ひ、文の數々参りしは定めて御覚えましまさん。しかるに一度つ
れなくも御返事だに候はねば、今は憂き身をなき物にと歎かせ給ふうたてさに、やう／＼
と賺し参らせかやうにしつらひ申したり。頼み上度御事とは是にてこそ候へと、涙にくれ
て口説きけり。さしもの胤政呆れ果てしばし返事もなかりしが、扱々思ひまうけぬ御仕方
ほうど困つて候よ。いかにも／＼再三の御文は得たれども、武道に背ける事なれば御返事
せざりしづ。とかくお許し／＼と振切り行かんとし給ふを、姫君袖にすがり、こはそも新
らしき御仰、出家沙門の身ならばこそ。武士の女に相馴れて道に背き申すとは、いつの世
よりも始まりて誰の撻て候ぞと少色だち見えければ、モ、是はおせきと見えし先鎮めて聞
給へ。某やもめの身にしもなし、たゞひ妻なき身なりとも人の知らぬ縁組は侍の本意なら
ず。まして正しき妻ありて二歳になれる子までもち、今まで御身に従はゞ二妻狂ひこ名の
立たん。いかに御志の切なればとて武士の法は破られじ。思召しきりてたべと云捨てて、

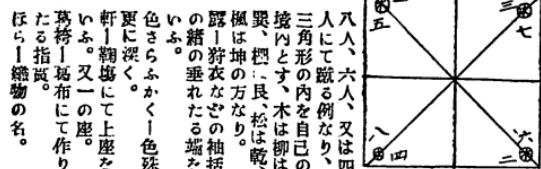
待つ一松にかく。

お道具一揃をいふ。

駒引寄せ乗らんとすれば、こはいかにそれはつれなき御仕方、今暫らくと縋らるゝを若黨共押隔て、なふあれ見給へ後よりもどなたやらんお道具の見ゆるに、先重ねてといふ隙に胤政駒を早むればせんかた名残惜しげにて、跡を見送り歸らるゝは、本意なさうなる三重有様なり。

鞠の亂曲

ウタ鎌倉の御所のお庭に、あらたまの年の始まり蹴初とて、軒はことさら領垂れて、君待つ色に千世ぞ知る。軒の向ひの七重なほ常磐の影に色深し。軒脇柳下座楓、深き心に吹きと吹く風も穏やか未共に、萎むも知らぬ時受けて、治め知る世ぞ久しけれ。折しも長閑けき春の空霞たなびく山の端に、朝日の出る御有様、御装束の結構には爵金小袖一重紫紋紗に金絲を入れ、朽葉の袴無文の露、烏帽子の懸緒紫の色さら深く大様に軒に移らせ給ひけり。千葉の太郎胤政は縲色なる緹の社、梅に鬱羽を休め、獅子に牡丹稻葉に雁、雪折竹の笠分けて時求むる群雀、四季の色香をあり／＼と筆を盡せし繪袴や。錦の露の光添ふなる風情して軒向ひに伺候せり。北條の義時は雲龍織りし紋紗の上、崩黃裾濃の葛袴有文の露葛袴一葛布にて作り、又の座。葛袴一葛布にて作り、ほら一繪物の名。



うつたがはん一疑は
かゝり一鞠を蹴る事
序破急一鞠には序破
急あるべし。初は木の下深く立ちて分
に隨て、鞠たけのびやかに殊更自他分見
分けてのぎやかに蹴
べし、是は序分の如
なり、破分には鞠かへて、
時々曲をまじへ蹴べ
し、晩氣に及び急分
歌をも勵み、木にかけず猶鞠たけをもつ
めて、互に曲をつく
し興を催すべし（鞠
指南大成）
鳥帽子付、
額付、大流といづれ
も曲鞠の名稱。
高足一高く蹴上ぐる
鞠。あり（一鞠を蹴る
時の掛聲。）

の下に畏まる。其次は小笠原綱の上に白袴色猶深き藍の露、跡に續いて富部五郎簞金檜皮に織分は、桔梗と人やうつたがはん、紺の袴を着したり。其外お詰の人々も思ひの装束し、懸の内に伺候ある。軒の移りや軒向ひ鞠に心も浮き立ちて、露打拂ふ地鞠や序、拍子ゆたかにどんくくと蹴上げてうつほすり、破に移り急になり鳥帽子流しや鳥帽子付け、額付に大流し受けて蹴上ぐる高足の、くるり／＼あり／＼と聲をかけ、一つ二つ三つ四つ五つ、或ひは三間一二間、もしは四五間大延の切るれば受け、流して渡し、やをら落つるといふ期なし。各々はつと感に堪へ終るを惜める三重ばかりなり。

去程に朝比奈の三郎義秀もとより鞠は無好なれば時刻移して館を出で、馬も靜かに乗りながら築土の外面を行く所に、蹴切りし鞠がかゝりを越し朝比奈が馬の鼻に落ちかかる。馬は驚き跳上ればさしもの朝比奈仰向にどうど落ち、直垂は泥まぶれ鳥帽子の緒も切れちぎれ、さも見苦しき有様なれば、義秀大きに腹を立てむく／＼と起上り、鞠踏み潰し立たる所へ内より小坊主駆け來り、なふ其鞠は君の遊ばす御鞠なるに、狼藉也と立寄れば、何君の遊ばす御鞠とや、それは足にて蹴給はん。我は手鞠を突かんとて、彼小坊主を引寄せ二三間投り上げ、落つれば中におつ取り投上ぐれば、彼小坊主やれ人殺しよとわめく聲御殿の内に聞ゆにぞ、各々驚き走り出見れば朝比奈、こはいかに呆れて佇むばかり也。中に

も秩父立寄給ひ、いかに義秀狂氣にては有るまじきが何としたる體。たらくぞ。近比見苦しきと宣へども聞入れもせず、小坊主を又片足にてどうど踏まへ、鏡の様なる兩眼をくわつと見出し睨め廻し、立ちすくんでたじろかず。こは狼藉と思へども、さすが天下の大老義盛の子なれば何と批判も成難く、只まもりつめて居るより外なし。苦々しくも笑止なり。父義盛たまられず、やあそこな狼狽者おのれは氣ばし違ひたるか、誠にめでたき御鞠始とて上下悦び合ふなれば、たとひいか成事有りとも堪忍ならずは後日の沙汰にも成べきに、何ぞ見苦しき田夫野人の振舞、近比尾籠千萬そこ立去らぬかと怒らるれば、朝比奈苦笑ひにて、ホ、様子御存じなれば御尤も、某は此鞠故落馬致し、腰骨を打ちたれば今更僻事共存せず、して先武家の遊びに蹴鞠始とはさらに合點参らず、鞠を蹴歌を詠むは公家殿上人の業、武家ならば弓始か馬の乗初若是初狩などとぞあらめ。但し強敵向うても鞠にて防ぎ給はんや。先以て此有様我なればこそ堪忍すれ、心短き大名ならば目前の騒動ならん。然るを拙者が誤りとは聞き惜き仰やと、臂を張つて置れば、義盛齒嚙みし、やあそれは私の宿意、たとひ心に染まずともめでたき御遊を蔑するは上を輕しむる緩急者、おのれ手討にと思へども、御悦びの庭なれば一命は助る也。七生迄の勘當ぞ、やあ侍共あの道具を奪ひ取れ太刀刀抜き取れと、猛つて下知をなし給へば、怖々ながら侍共、御太刀を

と立寄れば朝比奈はつたと睨み、いっかに父の仰とて侍の太刀刀渡せとはいかに。義盛彌々立腹有り、おのれ何の侍、父が勘當受けし上天下に對せし慮外者、いづくにありて侍を立てん。早く刀を渡せ、渡さずは押へて取るぞと詰めかけく宣へば、さすが親子の間とて鬼を欺く朝比奈も、惜々として渡しぬる父子の禮儀ぞ殊勝なる。各々是は餘りなりと色々に詫び給へど、義盛かつて受け給はず。それ侍共追拂へと言捨てて入り給へば、力及ばず人々は、笑止ながらも入り給ふは苦々しくこそ見えにけれ。時に朝比奈突立ち上り、エ、無念や親なればこそならぬ所の堪忍すれ。成程勘當蒙りたり、朝比奈が源氏の奉公是迄ぞ、あはれ頼朝公の御代ならばかゝる事はあらじをと、怒れる眼の内よりも涙をはらりと流し、行方知らず成たりける、彼朝比奈が振舞は粗忽とやせん誠とや言はん、其評とりゞさまぐながら、先はやさし殊勝なりとて感する人こそ多かりき。

第二

頬川に耳を洗ふ一冥
山の隠士許由堯の
天下を譲らんといふ
を聞きて、耳の汚な
りとて、頬川に耳を
洗ひたりといふ。

頬川に耳を洗ひし賢人の、名のみ殘るを今世に恥ぢぬ私欲の人心、扱も比企判官能員は嫡子富士太郎を密に招き、情我君の御餘命伺ふ程頗少し。若御他界あつても一幡公いまだ幼少なれば、北條一家として千幡公を代に立てんといふは必定、然らば我々が日來の忠

戀せずは第一。三
句「人の誠は知られ
まじ」ともいふ。一
種の諺的に俗間に傳
はれる歌。

白波の1知るにか
く。色をも一右ならで誰
にか見せむ梅の花色
をも香をも知る人ぞ
知る(古今)。わんざく
れ1ま。

功無になし北條に従はんも無念、とかく千幡公が有る故なれば、汝密に本國につれゆき人
知れず討て棄てよ。然る上は一幅公を代に立て、我將軍の御祖父と人に崇敬せられ、おこ
とも天下の御伯父ご諸大名に仰がれんは掌の内なるぞ。いかにくと有りければ、父に
勝れる無法者何辨へもなく打領づき、日本一の御手立、かれ一人を殺さんは本國迄も候は
ず、拙者が袂の内にても捻り殺し申さんが、盜出す手だて何共心得がたしといふ。やれ是
程の一大事思立とて其思案もなくいふべきか。心安く思ひ必ず人に悟られると、相圖を極
め能員は御所をさしてぞ三重上りける。戀せずは人は情のなからまし、物の哀は是よりぞ、
知るも知らぬも人毎に、迷ふは色の道ならめ。爰に千葉太郎胤政の北の方漢鹽の前と申せ
しは、李夫人貴妃も面を恥ぢ志の深き事賢とやいはん貞とや書かん、筆もしばくためら
へり。一子玉若とて未二歳成ければ、夫婦の寵愛淺からず、ある時北の方胤政に打向ひ、
思草葉末に結ぶ露の間も忘られもせず切なれども、お主様の御心いかでか汲みて白波の現
なやと宣へば、拙あらたまる仰かな、我ごてもいかで粗略に思ふべき。色をも香をも知る
人ぞとあれば、いやなふそれにつき申したき事侍らへども、其御返事には何共と様有りさう
に見えければ、フ、何事は知らねども詞の殘るは異なるもの、さあはや語られよとあれば、ア、
しんき申さねば埒明かず、わんざくれ申さんが、しかしあ腹を立てられず、御了簡なされ

給はらばとあれば、はていかやうの事成とも談合づくぞいの。はあいや別の事でも侍らはず、此年比自らを懲焦るゝ者侍ふが今ははや玉の緒も絶え入るばかりと告げ侍ふ。哀れお許し給はらば、一夜契りて彼者の命を助け得させたう侍ふがと、わりなき體にて宣へば、胤政興さめ暫しいらへもなく、たゞ咳拂ひして居られしが、はあ是は凡慮の外の沙汰、して御身の心に其者と我ご思ひくらべてはどうぞとあれば、いやなふ先様はいかやうの人か終に見た事も侍らはねども、たゞあこがれて身も絶えぐと聞傳へ、不便のあまりにかくは申候也。よしそれとてもおのさまの御許しなきものを是非とは申侍らはずとあれば、それは言はるゝ迄もなし。尤御身先様を見ぬ事も有るべし。しかし名を聞かれぬ事あらじ、是非名ばかりをと尋ね給へば、いや／＼それは明し申されず、畢竟仇名立つ事ならば何にかくは申すべき。たゞ御許しと強ひ給へば胤政は聞給ひ、扱々言ひにくき所を明らかによく言はれたり。誠に我妻程ありけるよ。よし此上は世に聞え人非の沙汰にもならばなれ、ともかくも其方の心に任せ給へとあれば、扱も嬉しや去ながら、逆もの事に御誓言にて聞きましたう候。何がさて弓矢神も照覽あれ。ふつと妬み申さじとある。こは有難い此上は、先様より參りたる文を読み聞け申さんと、袖の内より取出し押開いてぞ讀まれける。懲すてふ我身の遣る方なきまゝに、御妬みをも推し量らず、恥かしながら染め參らせ

泣沈む一無きにか
く。いとせめて一系にが
く。御つもり一心に思ふ
すもじ一推量の女
御かもじ一おかみさ
ま。

候。さいつ比大山詣での折柄に、御方様の御殿御ちらと見染め参らせて、束の間も忘られず深き思ひの數々文して申侍らへども、遂に返しも泣沈む戀の淵瀬の涙川。堰くにとまらぬ心から、いつぞや鞠の御會の折、御馬に縋り女の身の有るにあられぬ思ひのたけ、明し参らせ候へども、御方様へ深き思はく有るなれば思ひ切れとの事なれども、切るに切られぬいとせめて戀しさも猶増鏡、曇りを晴らすお情とはなか／＼に及びなし。只お盃ばかりこそそもじさまのお情に數々頼み参らせ候。御つもりをも憚らず筆に餘れる涙をば御すもじ／＼、こかく情は方様へ任せ参らせ候かしく。胤政さまの御かもじさまへ、數ならぬ身と読み給へば、胤政横手を丁ど打ち、こは大き成はまり扱も／＼面目なや。いかにも度々文もこし又鞠の御會の日路次にて逢うたも定なれども、御身の嬉しからぬ事を言聞けいらざる事、我だに心亂れずはと隠せし事も顯はれて、いやはや詞も候はず。其段は許されてとかく捨て置き給へとあれば、いや是なふ初めより御誓言をと申せしは爰にてこそ侍へ。さなきだに執心深き女の身の思ひを空しう過しなば、いとほし可愛と思ひ子の行末とても覺束なし。先は妾を大切に思召さるゝ御心底、此文にて見えたれば、たゞ外様と覺さずとも、妾に一夜のお情と思し叶へ給はれと、餘義なき體にて申さるゝ。胤政しばし感に堰へ、さりとては昔よりかゝる例は聞傳へず。エ、我妻ながら恥かしき心根かな。然らば御身の

詞に従ひたんだ一夜は靡かうが、必ず後にせかるゝなや。ア、ひよんな事後にせく氣の候はゞ、何しにかくは申すべき。思へばゝ嬉しやな、我目にばかりよい殿と見えしかと思ひしに、人もさこそ見るかと思へば其上萬の大切さ。片時も早く告げ知らせ悦ばせ申さんと、文こまゞと書き認め、急いで送らせ三重たまさかに松の落葉の落ちてだに、離れぬ中立にて、人の思ひや晴るゝ夜の月に嘯き、胤政は肘突かしておはする所へ、障子押明け藻鹽の前かの人伴ひ、申し／＼客人の御出とあれば、胤政今更氣の毒さうに、只ようこそばかり也。北の方わつさりと一つ二つ挨拶し、御心置かれずともゆる／＼とお語りあれ。わくらはのお客なればあるじまうけの用意せん。中人は脅の程と言棄てゝ立ち給ふが、いや是大事の殿御なれども今宵は貸し参らす。情の枝は折らるゝとも、根引には成ませぬと戯れながら入り給ふ。扱彼上萬少震へる聲音にて、誠に恥をも恥とせず心をつくすを察せられ、奥様のお情にて是まで参り侍ふに、否應の事もましまさぬは餘りつれなきお心と、こんともたれかゝるれば、胤政むづ／＼せん方なげに、尤奥が差配ながらいかにしても氣味悪し。許してたべと立ち給ふを引止め、こはいかに今宵は奥様より借參らせ侍へばあなたへ返し申す迄は妾がまゝこは申しながら、御心に染みませずはさぞるさく思されん。よしや、憂き身はあだし野といはゞタの露の世に、消ゆるを哀れと思さずやと、汗

夕の露一言ふにか

ふづまりーきまりの
わるきこと。
やりくりーきづか
ひ、かけひき。
うたかたの一歌にか
あはれー泡にかく。
白波のー知にかく。
そこはんーそこはの
音便。底にかけたり。

を浸して縋らるゝ。いやとよ我身も岩木ならねば御志いかばかり忝く候へども、妻の手前
ふづまりなれば今宵はひたすらお許しと、宣ふ所へ北の方銚子土器携へ出で、なふ輕忽是
はどしたる御仕方ぞ。自らがさばきの上何の遣練ましまさん。先々酒一つ妾試み致さん
と、たぶ／＼受け流し亂政へさし給ひ、それあなたへと挨拶し、聲張上げてうたかたの、
あはれ情を白波の、沖の石とは何をかいふ。戀をする身のそこはん扱袖を見よ。れろ／＼
れれんぼれ／＼つろち／＼んでれちてんつんと通らぬは神そ氣の毒夢の世にたゞと、歌ひ戯れ
しみ／＼と北の方宣ふは、率爾ながら御身様はいか成方にてましますぞ。包まず明し給へと
あれば、恥かしや古を語るもつらき自らは、頼朝卿に召仕へし唐糸が娘萬壽と申す女な
るが、君亡くならせ給ひてより、寡住こそましならめと思ひ定めて侍ひしに、いか成縁に
や此殿を垣間見しより遣瀬なく、むすぼれたる糸筋を、分けてや深きお情にて、今宵御
見の嬉しさをいつの世にかは忘れんと、語り給へば北の方、何萬壽の姫にてましますとや。
さればこそはじめよりたゞ人とはおもほえず。今よりしては自らを御身の姉と思召せ。妾
もそさまを妹のいき契約にと盃を取りかはし、夜も更けゆくやかはたれ時、少まどろみお
はしませ、言ふはくだかは知らねども、どちもお心置かれずとしつばとやとて入り給ふ藻
鹽の前の御貞節、類もあらぬ賢女やと聞く人感する三重ばかり也。是は扱置朝比奈の三郎

かはたれ時一黎明の
また薄暗き時をい
ふ。

義秀は、とかく浮世は喧しと伊豆の高根に引籠り、誓切て様をかへ我と其名を改め、義秀を其まゝに義秀法師とつて行ひすまし居たりけり。抑此高根と申すは前には海水淨々として月眞如の光をかゝげ、後には靈松巍々として風常樂の夢を破る。松にだに馴るれば慕ふ思ひあり。奥より奥の山陰に柴の庵を引結び、石を金輪に土釜一つ、小さき桶に竹柄杓昔に變る住居也。壁には達磨の繪像をかけ、桶を叩いて木魚とし唐音にて經を読み、つくと御影を守り、我も達磨を師匠とし座禪して見ばや思ひ、衾と名づけ席を被り、繪像を見合眼をくばつゝ見出し半時あまり坐しけるが、エ、悟つたり眼に風の沁み渡るは一睡せよとの悟道ぞと、肱を曲げつゝ枕とし暫くまどろみ居たりけり。扱も比企の富士太郎は千幡公を輿に乗せ、甲斐々々しき若黨四人に昇かせ此山陰に輿を据ゑ、若君を引出し御裝束を剥ぎ取れば、若君輿さめこはいかに何たる事ぞと宣へば、富士太郎聞きもあへず、オ、合點ゆかぬはことわり也。北條の四郎時政謀叛を起し、頼家公を失ひ我一家をも滅し御身を代に立てんとの謀、然れば其方一人故多くの者の討たるゝ事歎かしく思ひ、只今爰にて害するぞといへば、若君途方にくれながら、やあ人非人め、たとひいか成事有りとて、主たる者の弟を殺し天道にかなはんや。エ、口惜しやたばかられ無念の死をする物かな。あたりに人はなきか、折合はぬかと宣ふ聲、義秀寢耳にほつと入り、むくくと起き見奉れ

ば主君千幡公、南無三寶と駆け出で飛懸つて富士太郎を俯伏に蹴倒し、藤繩にて縛むる。郎等とも遁さじと弓手馬手に組付くを、取つては引寄せ引伏せ押伏せ一つ繩に搦みつけ、扱若君のお前に參り事の由を承り、扱も危うき御命、不思議なるは某勘當の身ならずは、いかでか爰に有合ふべき。御壽命めでたき若君やと、扱富士太郎が髪束取つて引仰向け、人の皮着る四つ足め、忝くも三代相傳の御主をよくも失はんとはしけるよな。おのれすだくに刻みても飽き足らぬ奴なれども、思案あれば先只今は殺さぬぞと、残る四人の若黨共には大石を括り付け、中に提げ前成海へどうくくくくと投込みて、扱もよき音候と戯れながら若君を先に立て參らせて、富士太郎を引立て庵をさしてぞ歸りける。朝比奈が勇力には獅子象虎も逃げぬべし。心地よし共中々申すばかりはなかりけり。

第三

比企の判官員は嫡子富士太郎翌日暮れに及べども歸りもせず便もなれば、心もとなきあまりにや、郎等早瀬の新左衛門景次一人引具し密にかしこへ立越えて、爰かしこと尋ねれど深山廬や磯打つ波の音凄きばかり也。彌々不審晴れやらず猶山深く尋ねれば、千幡公の烏帽子狩衣御重代の御佩刀松の下枝にかけて有り。扱はしおほせしにまがひなし。去な

狗賓・天狗をいふ。

（和訓榮）
語なり、紅蓮は地獄の名にて、物を尋ね求むる事にいへり。

がら富士太郎が行方の知れぬは、エ、思ひ付たり、爰は名に負ふ魔所なれば狗賓の所爲にありもせん。よしそれとても力なし、先よき手立の種こそあれ、それ／＼とて景次に御太刀装束取持たせ、鎌倉としてぞ三重歸りける。是は拵置朝比奈の義秀坊つくべと案ずるに、尤。若君の御命は救ひたれども我一人さへ狹き庵、もし又追手のかゝらん時隠し奉らん所もなし。いかゞはせんと思ひしが、オ、究竟の事を思ひ出せし。爰に駿河國木枯の森に頼朝卿の思ひ人萬壽こそ居れ。男勝りの者なればかれが方へと案じ付、拵若君の御供申密にかしこへ立越えて、萬壽の前に對面し、初終をつぶさに語り偏に頼むと有りければ、こは情なき浮世の中やと暫く涙にくれながら、先はいたうも御成人なされしものかな。誠に朝比奈殿のましまさずば危うかりける御命御武運めでたし我とも御恩の君の御子なれば、何しに疎に存すべき御心安く思召せ。妾こそ女なれ心は男に劣るまじ。先々爰は端近し、此方へ御入ましませと奥をさして請すれば、朝比奈大悦限りなくお暇申し歸らるゝ、兩人の忠義の程頼もしかりける三重次第也。去程に鎌倉には千幡公見えさせ給はねば紅蓮をかへす騒動にて、大名小名御殿に詰め詮義評定取々也。頼家仰せ出さるゝは、誠にいか成天災ぞや。某病惱重ければ餘命更に頼みなし。一幡いまだいとけなければ千幡に天下を譲り、近き内方々へも披露せんと思ひしに、こはそもそもいか成事やらん。御母公聞召され

なば我を恨み給はんに、何と答へんよしなやと、悉くも御涙に咽び歎かせ給ふにぞ。御前
伺候の各々座席に涙を浸さる。時に北條宣ふは、誠に不慮の御歎き推し量り奉り、何も
途方にくれて候。とかく先國々へ申遣はし、御有所注進の輩には數多の御褒美下されん
と急ぎ觸れさせ候はんとあれば、比企の判官押取つて、成程此義然るべう候。急に仰付け
らるべし。して先御乳人子の大和の前司は此御座敷に見え申さず、出で會はぬは心得がた
し。いかさま子細候はん。呼びに遣はし詮義を遂げんとやがて使を立てらる。無慚やな
友行かねて覺悟やしたりけん、白衣に淺黄の上下着、しほくとして御前に出で、涙を流
しあしうつぶきとかうも言はず居たりけり。能員居直り、如何に友行、何と千幡公の見え
させ給はぬを其方は知られぬか。誠に是程鎌倉中上を下へこかへす所に、御邊はどなたの
御乳人子にて出仕をも致されず、只今お尋ねに付き上らるは何共合點ゆかす。定めて千
幡公の御在所知らる。故に騒がれぬな、君御心もとなく思召せば包ます申上げられよと云
ふ。されども友行とかうの返事もせざりければ、頼家御氣色變らせ給ひ、必定彼奴が知つ
たれども思慮あつて隠すと見えし、有のまゝに申さぬかとあれば、友行少頭を擡げ、恐れ
ながら御詫とも覺えず、何故に若君を隠し置き奉らん。とは申しながら御道理、晝夜御近
習離れぬ身が今更存じ奉らぬと申すも未練、とかく覺悟仕候へば、哀れ御慈悲に切腹仰付

けられなば有難く存奉らんと、餘義なき體にて居たりけり。判官聞きもあへず、いや／＼友行さやうのまだるき誣義ではなし。聞けば御邊は逆心の者に與し、一幡公は勿論君をも失ひ奉り、千幡公を御代に立てんとの謀と聞て有り。去とては勿體なし、天罰いかで遁れんや。眞直に申されよと席を打つて罵れば、友行興さめ顔にて、や是はさて、いやはや笑止千萬、諸人の輕薄につのり方圖もなき過言、して其謀叛の徒黨とは證據あつて宣ふか。オ、サ其證據こそ慥なれ。必定汝が館に千幡公御座有るべし。誠争はゞ只今家搜しして出さんがそれにも陳せんか。友行居丈高になり、なふ時の權も事による。數ならずとも侍たる者の屋敷を捜し、若若君の御座なき時はいかに。判官えせ笑ひ、やれ其時は此能員が生鼻を削れ、汝が面へ投げつけんぞ。オ、其口忘るゝな、然らばとつく捜させて見よ、今に思ひ知らせんぞと歯噛みをなして居たりけり。判官つつと立ち郎等の早瀬を近付け、汝は侍共をつれゆき前司が屋敷を捜し、千幡公ましまさん急ぎ御供申して歸れ。若家來共異議に及ばゞ討つて捨てよ。必ずうかと心得な、大事の使ぞ、やれうかと心得なと詞を返し云付る。早瀬相圖の事なれば、畏つて候とやがて御殿を出でにけり。半時ばかり程を経て早瀬御所に立ち返り、いか程捜し候ても千幡公は渡らせ給はず。去ながら不審成物に尋ね當り持參仕候と御前にさし上る。能員請取封を切り、見れば千幡公の鳥帽子狩衣御重代の御佩

刀、是々御覽候へ、疑ひもなく御行衛は彼奴が知つて候ぞ。先はよくも正々數争うて有りけるよな。おのれ眞直に申さぬかと手ぐすねして詰めかくれば、友行とかうの詞なく呆れ果てゝ居たりしが、さりとては不思議也、夢にも覚えぬ事なれども、とかく申せば命を惜むに似たり。此上はいかやうにも御行ひ候べし。とは云ひながら口惜きは身にも覚えぬ科を得て非法の死^{しき}をする物かな。天道あらば程を經ず今に佞人顯はれん。其時こそ某が無實を得しと知り給はん。是に付けても君々たらばかゝる死はせまじきに、思へばゝゝ無念やと恨みの涙を流しけり。君御立腹ましゝ彌々言分心得ず、いかに能員急ぎ由井が濱へ引出し拷問して尋ねられよ。陳ぜば直に責め殺せと御座を立たせ給ひければ、畏つて候と友行を擣めさせ、由井の汀^ゆへ引出すはせん方なうこそ三重見えにけれ。程なく濱に着きければ方十間に矢來を結はせ、はや拷問と見えし所に、友行の妻子徒跣足にて駆け來り、なふはいか成科^{なるきがわ}有てかゝる體には成給ふぞと、矢來の内へ入らんとするを、こは狼藉と警固の者さんゝに打ち出す。打たるゝ杖を厭はゞこそ、やれ情なや科^えあらばこそ拷問せめ、何の科もなき人にかく淺ましく繩をかけ、責め苛^{ひび}まんとはいかにぞや。ア、我夫ながらふがひなし。御身に覚えなき事ならばなどか言分立つまじき。よし其上にも譯立たずは、速やかに御前にて腹搔^かき切ては死に給はぬ。あら恨めしの我夫やと恨み沈みて泣き給ふ。友行

至極の涙ながら、オ、道理なり去ながら、かつて覚えぬ事なればよもかほど迄あらじを。後れて不覺の恥辱を取る。とは思へども侍の無實を受けて死する事、有るまじき道にもなし。只おことらは命長らへ、かゝる憂目にあはせぬる讒者がなれる果を見よ。骸こそ朽つるとも魄は婆婆に残り居て、追付本望遂げ今の怨みを晴らさせんと、甲斐々々しくは言ひながらも恩愛の悲しさは、止めてもあまる涙にはよその袂も濡れぬべし。能員からくと笑ひ、いやはやかたはら痛し、やあ友行いらざる空威言言はんよりはや疾く明せ。責められて白状せば恥辱の上の恥辱ぞと云ふ。オ、其白状は汝が心にあらん。哀れ命を二つほし。濁れる世にあらんよりなまじ一つは責殺され、今一つは長らへおのれが行方を見たきと云へば、やあそれ物な言はせそ、彼奴が耳を削げ。畏つて兩耳削ぐ。姫や内方肝潰れ、なふ悲しこはいかに、殺さばたゞは殺さいで扱も酷き仕業やと、矢來を搖り駆け廻り伏轉びてぞ歎かる。判官重ねて今度は左の腕を切れ。畏て立寄る時親子の人々聲を上げ、なふ暫く待ちてたべ。それへ參り我々が有のまゝに申さんとあれば、警固の者共聞きもあへず、然らば疾くに申さでと、枝折を開けば駆け入て友行に抱きつき、こは情なき御有様やと平伏し沈み泣かれり。警固の者共引退け、さあ先白状せよといふ。いやなふ餘り遣る方なさに申さんとは云ひけれど、もとより知らぬ罪科を何と申さんやうもなし。たゞ我々

が命を召され、夫を助けて下されよと手を合せてぞ歎かる。能員親子をはつたと睨み、己奴等は女の身として某を覗るか。所詮言ふまでぞ、やあ／＼急ぎ腕を落せ。畏つて友行が左の腕を打落す。判官立寄り何と是でも落ちざるか。いやはや情剛じょうごうし去ながら、是程苛みても言はねば知らぬ事も有べし。何と其體じたいにても命を助けば助からんご思ふか。友行聞て、オ、生甲斐いきがいはなけれども、思ふ子細あれば助かりたしと答ふ。ム、聞得た、それ右の腕も打落せ。畏つて打落す。さあ此上は助くるぞ、いづくへ成なまら共行けといふ。友行つ立ちあがり、やあ畜生め我命を助かりたきと云ふを未練也みれんじやと思ふか。たとひ如何體いかにて成共命だに長らへば、無實を申開きまつ此如くおのれめを行はん爲にこそ。是にていかで命あらん。おのれよつく覚えよ、今に一念の惡鬼と成、子々孫々迄撲おぶみ挫ひじ此仇を報ぜんご、つつ立ち上ると見えけるが舌くひ切て死してげり。親子の人々判官にしがみ付き、なふ我々も諸共に殺してたべやと聲をあげ、流涕るてきこがれて歎きしは目も當てられぬ風情なり。判官振放ち、エ、おのれらも命取るべけれども、女なれば助け其上死骸し체を得さざるぞと、言捨てゝ歸りしを、憎まぬ者こそ無かりけれ。いたはしや親子の人、あへなき骸骨を引起し、ア、神ならぬ身の悲しさは、夢にも斯くと知るならば何とぞ思案も有るべきに、思へば／＼本意なやな。ア、あさましくも苛まれ、かゝる無慚の死の縁は、よツく佛神三寶に憎み果て

られ給ふらめと、死骸に取付き縋り付消入／＼給ひけり。かゝる哀の折ふし友行の下人共追々に駆け來り、扱も是非なき事共哉。先々人目も候へばと、死骸を輿に昇き入て、泣く／＼館に歸りける。定まる事と云ひながら是や非業の死と云はん。哀成ける次第なるはと聞く人涙に咽びけり。

第 四

氣ぼうじー氣保じな
るべし、保養、氣ほ
らしの義。

御いたはしや千幡公、萬壽の前が情にて木枯の森陰に、隠れ忍びておはします御有様こそあはれなれ。ある徒然に萬壽の前、銚子土器取持たせ若君のお前に參り、誠にいぶせき庵の内、ことさら人目忍ばせ給へばさぞお氣詰りもやと推し量り、恐れながら心ならず侍へば、ちとお氣ぼうじに酒を上げ參らせんとあれば、千幡公聞召し、誠に他事なき御身の情、いつの世にかは忘るべき。去ながら某は人の猜みに身も狹ければ、たゞ世を遁れさまを變へ、父上の御菩提を弔ひ參らせたう思ふ也。しかば酒は飲酒戒佛の深き戒めなり。許し給へと宣へば、萬壽涙に咽びながら、扱いま／＼し何とてさやうに御心短く宣ふぞ。日月誠を照らさせ給へば忽ち讒者顯はれて、追付鎌倉へお歸り有り、めでたく渡らせ給はんとさま／＼諫め奉る折節、表を靜かに音づるゝ。乳人誰そと戸を開き、なふ亂政さまにて

ましますか。よくも御出でなされしと鳴子を引けば萬壽の前、はつと驚き若君を奥の一間に隠さるゝ。胤政内に入り給ひ、先々久しう打絶えて便りをも聞ざる故、餘り懷しさのまゝ公用を忍び参りたり。薬鹽も文をことつてし。是々とて出さるれば、よくぞく自らも此程の御ゆかしさ、申さぬとても御すもじと、口には云ひて心には若君の御事をいかゞせまじこ思ふ所に、胤政申さるゝは、なふ此比はさもなかりしが、今日の路次の寒さいやはやと聞きも果てず、誠にさもこそや、幸ひ風呂の候へば御入りませ、さぞやさぞ路次の御難義察し参らせ侍ふ也。いざ先入らせ給へばあれば、それこそ望む所なれ、いざさら寒氣を晴らさんと座敷を立て入給ふ。萬壽ひそかに乳人を近付け、若君さまの御事を語りてもしも悪しからんかと、わざと包み参らすれば必ず色を悟られな。追付あがらせ給はんにそれゝと有りければ、乳人心得御手箱香爐に火をいけ参らすれば、御髪清めにどの香かあれかこれかと取上げ給へば乳人申すやう、さぞ此香にはとりゝ名こそ侍はめ、語り聞かさせ給へと云へば、オ、其數は多けれども、まづ名香は天が下初音手枕新枕時雨松風、短夜の有明道芝東路の、逢坂藤川法性寺夕霧龍田空蟬の衣手にしつく白菊蘭奢待、らんすあまはり鹽籠の蟹の炷さし柴人の、歸る山路は深草や、芋環小車玉椿、名月仙人山人の、面影寫し繪三吉野の早苗白菅東雲や、古木胡蝶に法々華經中川八橋杜若、似たりや菖蒲

通り者一辯人。

奥一蹴くにかく。
しやらしやれた挨拶との意。

いはれぬ一結はぬ
にかく。すがり一香の餘燼を
いふ。

紅葉の賀、富士の煙に滌標、語るに盡きじ名香の、品は概略是なりと、詞も終らざるに浴衣ながらに捌髪、しどもなげにて胤政縁に出でさせましませば、はや御上りかなぜにゆるりとなされでと、後へ廻り髪押分け櫛たよ／＼と梳きながら、恥かしやいつぞやは囁うるさくましまさんを通り者の奥様のお蔭にて、晴るゝ思ひと云ひながら、思へばそな様の胸懲ぢやいのと恨まるれば、いかにもそれはさうなれども、侍の道ならぬ事と一立立てしを破られて、今は中々戀草の葉末の露の奥よりは、御身こそと聞きもあへず、オ、しやらせて十に一つならばいの。しかしさうしたお心なるにや遙々問はせ給りたり。奥様のお文にも二三日もゆる／＼と留め参らせよと侍へば、昔の思ひ引替へて今は嬉しさ身に餘り、云ふもいはれぬ亂れ髪、今宵初音の伽羅かや君は、幾夜留めても留め飽かじつと香爐を取上げて、暫しすがりもたゞならねば胤政聞給ひ、扱々名香やして此木の名はいかに。されば山人と申すげに候。いやなふよい木や、いで某もつがんとて懷中りしを取出し、火合うかゞひ炷き給へば、なふ此木は有明にては侍らはぬか、君御私愛の木なりしが何とて持たせ給ふぞや。オ、よくも聞き給ふ物かな。我十三の年頼朝卿子細有つて下されし御形見なれどもと、聞くにつけて萬壽の前涙ながら思ふやう、此障子のあなたにこそ若君のましませば、父上の御形見とて參らせたくは思へども、胤政を憚ればとやせんかくやと思ふ折

節、又表の戸を音づるゝ。誰そと云へばいや苦しからず、朝比奈と答ふにぞはつと驚き胤政一間の障子を明けらるれば、若君是はと動顛し側成衣を被かるゝ。胤政是に又驚き前後しどろに二度びくり、されども是も衣引被き、押俯向いてぞむられける。朝比奈かくとは露知らず靜に入て萬壽に向ひ、ホウづなう寒じ申すが何事もなく候か。して若君はと尋ねれば、萬壽とかくに度を失ひ赤面ながら、されば山人と申す木、いや風呂が立つて候と、しどもなく言捨てゝ是も一間に逃げ給ふ。朝比奈不審晴れず跡につゞき行き見れば、何かは知らず秋の田の案山子の如く衣引被きつづくと坐してあり。入道呆れ果て暫し詠めて立たりしが、エ、お淋しさのまゝ此入道めに手を取らさせん爲成か、但お寒さのまゝか。朝比奈こそ參りて候。御目見えをと云ひけれどもとかくの事あらざれば、やら心得ね、いづれ若君は御一人の筈なるに二方は合點ゆかず、率爾ながらと一度に衣を引捲れば思ひもよらぬ胤政、こはそもそも如何にとばかりにて興さめ果てゝ居られけり。暫らくあつて朝比奈、是は先何ご思案しても合點ゆかず。いかさま様子有るべし。是胤政つゝます明されよといへば、胤政今は力なく、恥かしながら恥を言はねば分立たず。何をかつゝみ申さんと始め終りを残らず話し、此わけ故に見舞へども、若君渡らせ給ふとは萬壽さらゝ知らせざるが、して又御身はいかにと有り。朝比奈くつゝと笑ひ、いやはや浮世は異なるものかな。

御身はぬれ故思ひもよらぬ若君へ遇ひ奉り、我は親の勘當故思ひもよらぬ若君の御命を救ひ奉り、萬壽を頼み申せし故思ひもよらぬ御身に遇ふ。扱若君は讒者故思しよらざる御難義に遇はせ給ふ御事よと、是も始終を委しく語り、此上は其方も仲間へ入れねばならぬと云ふ。オ・サ申さる迄もなし。先以若君の恙なく渡らせ給ふは、是偏へに御身の働き、いかう言ふもおろか也。扱鎌倉には此君見えさせ給はぬ故、御乳人子の友行は遂に比企めに責殺されてあり。かれこれもつて比企めが業、いざ鎌倉へ参られよ。某も一命にかけ諸共訴訟申上げ、判官一家を滅ぼし若君の御憤り休め上げ奉らん。はや疾くとありければ萬壽の前も朝比奈も、扱頼もしし且は又かやうに不慮に出會ふ事、若君御運を開かせ給はん天運循環時得たり。此上は何をか憚り申すべき、幸ひ胤政こそ馬を引かせ候へば、若君を乗せ奉りいづれも御供申さんが、して又御坊の持參の箱は具足櫃と見えし、某が下人に持たせられよと云へば、オ・俗の時の具足櫃、只今は若君と某が守り本尊封じ込め候へば、片時も身を放つ事なり申さず。とかく是に構はずとも、はやく御用意ましませと、各々、うち連れ三重

まんじゆのまへ道行

白菅一不知にかく。
もりて一守と洞とか
く。松原の一待つにか
く。三保一見にかく。

興津一置くにかく。

白雲一か不知にか
く。

富士の根に降りおく
雪一富士の樹により
おく雪は六月の望に
けぬれば其夜ふりけ
(萬葉三)

木枯の森の下庵露深く夜深く出し月の顔、誰とかいさや白菅の、笠深々と萬壽の前若君御
馬に乗せ参らせ、義秀胤政御供し、憂さも辛さも止むべき人も名に負ふ清見が闕、もりて
榮えを松原の濱風潮風烈しくて、眞砂立つなる海の面、舟漕ぎ出て三保が崎蟹の苦屋に休
らひて、浦人にのみ謫磯馴れ松の立つるや夕煙、柴ごいふ物折りくべて、民の竈の賑ひは、
治まりし世や久かたの天つ乙女の天降り覲裳羽衣の舞の袖、今日の前に荒磯の打寄る波は
さんざら／＼、どうど打つてはさつと引く、網を興津の里を過ぎ、あなたは浅間薩陲
山、由井蒲原をあとになし、若君かなたを御覽じて、あの大空に山かともいさ白雲か白く
見ゆるはいかにぞや。太夫萬壽御馬の口を取り、あれこそは常に御所より御目馴れし富士
の高根、二人世々の歌人さま／＼に詠め置きてし富士の根に、降り置く雪は水無月の望に
消えてはその夜降りつゝ年経ても、雪の無き間はあらざれば、花か雲かはウタ雪かとのみ
ぞ見えの、山とも夕潮を持つや田子の浦、東からけの汐衣」とあ
く。夕潮を言ふにか
く。黄瀬川一著にかく。
みとしろ小田一神の
御稻を作る料の田、
神田。
神もしるしの箱根山、
神もしるしの箱根山、
一葉の箱にかく。

り義あり誠あり、天道いかで守らざらめと世の人感するばかりなり。

第五

まうす一禪家にて帽子をいふ、吳音なり。

鎌倉には國々の諸大名晝夜殿中に相詰め、千幡公の御行衛さま／＼評定まします所へ、若君の御在所注進の者とて沙門の姿成者參上仕候が、帽子にて顔を隠し、いかさま不審がましき體に候と訴ふる。各々大きに勇ませ給ひ、やれ何者にもせよ急ぎ此方へ召せ。畏つて罷出で、かう／＼御通りとあれば、承り候と少も臆する氣色なくやがて御前に出でにけり。重忠御覽じ、先以て若君の御在所注進仕る段君御機嫌甚だしし。併しながら御前なるに帽子を取て申上げられよと宣へば、仰御尤に候、去ながら某は一天下日陰者にて候へば、御前へ罷出る者にては御座なく候へども、口惜しやたゞも死なれぬ命とて飢ゑに及ぶ悲しさに、せめてかやうの事にて成とも命をつなぎたく存じ、彼方此方と尋ね奉り是迄御供仕候と、背に負ひし具足櫃あら重たやとどうどおろす。重忠聞きも敢へ給はずする／＼と立寄て、エ、推したり御身は朝比奈の三郎義秀ならずや。先久々にておどけ詞を聞きし也。たとひ重々の科ありとて此度の忠節に思召替へらるべきか。急ぎ開いて朝顔の花珍らしく御目見え致されよ。率爾ながらと帽子を取る。さればこそ／＼、先々君のおせき成に若君

せき一急き。

の御在所を早く申上げられよ。いかに／＼と有りければ義秀謹て、誠に信あれば徳有りと
や。いざさらばとて具足櫃の蓋を取ればこはいかに、思ひもよらぬ富士太郎高手小手を搦
められ、あら窮屈やと伸び上れば、各興さめなふ朝比奈、是は比企の富士太郎成を千幡公
とは心得ず。いかさま子細有るべし。有の儘に申されよとある。朝比奈聞きもあへず、何
是が若君と見え申さぬか。やら不思議や、當世は鷺を鳥ご詐りて成とも謾ふ者が出頭し、
御褒美厚く下さる」と聞きしが、さやうにては無く候かと云へば、義盛はつたと睨み、お
のれ父が勘當を受け許しもなきに御前へ出で、剩へ御老中へ對し方圖もなき過言、弓矢八
幡大菩薩御前とは言はせじと、太刀に手をかけ給へば北條押止め、暫らく／＼待ち給へ。
退いて考ふるに是義秀が過言とは思はれず。いかさま富士太郎を搦め出しは子細有るべし。
いや是義秀、包ます心底の通り眞直に申されよと宣へば、朝比奈しほ／＼として押俯向き、
誠に父の御立腹重々至極仕る。去ながら勿體なくも餘り獨れる浮世の中、若清める時こそ
と伊豆の山陰に引籠り、誰を頼まん方なれば、木實莧根を食ひつれなき命をつなぐ所に、
天命盡きて此富士太郎、若黨四人に輿界かせ、某が庵の前にて千幡公の御命、既に害し奉
らんとせしを、不思議に某出合せ御命を救ひ奉り、則ち千葉の太郎胤政に預け置奉りて候。
注進の輩には御褒美望次第と候へども、金銀所領の望なし。とかく御前の御勘氣と父の

不興ふけいを許されば有難く候はんと、鏡のやう成眼なまこなまより涙をはら／＼と流さるゝは、殊勝にも又あはれ也。何もほとんど感に堪へ、扱神妙成申條、此上は恐ながら御前の義は勿論義盛殿も御勘當許し給へと詫び給へば、はて何がさて各おのの仰をいかで背くべき。先々早く若君を御供申せと宣へば、朝比奈大きに悦びのやがて使を立てければ、千葉若君の御供し急ぎお前に出でらるれば、君を始め奉り上中下に至る迄、嬉し涙と悦びの御賑ひは限りなし。頼家御機嫌みやげの餘りに則ち千幡公へ御代を譲らせ給ひ、御實名を源の實朝卿と改められ、其後仰出さるゝは、某が不覺故佞人の讒言にて、科なき者を痛め苦しめ、今更後悔先に立たず。急ぎ悪逆の能員めを押寄せて誅すべし。軍神の血祭に先づ富士太郎めを八裂やつりにせよと宣へば、朝比奈謹て上意至極仕候、去ながら彼奴ののしやを爰にて殺すは費にて御座候。押寄する軍勢の真先に引かせ、父悪人め眼前に引出し、づだ／＼に刻み候はんと申せば、此義尤然るべしと、則朝比奈に五千餘騎を給はり千葉の太郎加勢かぜとし、都合其勢七千餘騎馬物の具とひしめて比企が館だらへと三重押懸けける。去程に比企の判官能員も早先立はやまきだてかくと聞き、木戸逆茂木かぶきをひしと固め寄する敵かたを待ち居たり。時も移さず寄手の軍勢追手搦手一同に関どつとぞ上げにける。其鳴なりも静まれば富士太郎を引出させ、朝比奈鞍高くらかさにつつ立ち上り、いかに能員巧みし智略天運盡き、只今快富士太郎が最期なるぞ。よく／＼見よと呼ばれ

金剛力士一仁王。

言甲斐一敏にかく。

ば判官下知して、やあ味方の者共富士太郎を人手にかけな。射取れや射取れと身を揉めば、承つて精兵共矢種を惜まず差詰めさん。に射懸くれば、雜兵の悲しさは恐れてたじろく其隙に、富士太郎繩取を中心に引詰めさん。に射懸くれば、雜兵の悲しさは恐れてたじろく其隙に、富士太郎繩取を中心に引詰めさん。に射懸くれば、雜兵の悲しさは恐れてた内に入り門をひつしと固めけり。朝比奈大きに怒り一期の浮沈仕出せしと、馬より飛下り大手を廣げ門の扉に手をかけて、えいや／＼と押しければ、破られじと軍勢共立ちかゝり防げども何かはもつてたまるべき。金剛力士の朝比奈えいやつと押伏せた。無慙やな軍勢共只鮓魚の言甲斐なく、いやが上にぞ死してげり。是にも怯まず城中より我も／＼と切つて出で、命限りの死軍、火花を散らして三重戦ひけり。されども城中負色に見えければ、富士太郎物の具し一丈餘りの鐵の棒輕々と引さげ出で、今こそ富士太郎が誠の最期ぞ。我思ふ者あらば討取つて高名せよと、群がる中へ割つて入りはらり／＼と三重薙ぎ倒す。すさまじかりける次弟也。時に寄手の陣よりも若武者二騎乗り出し、鎧押取延べ突かんとせしを、太郎鐵棒振上げて無二無三に打ちければ、微塵に成て失せにけり。其内に寄手の大勢一度にはつと飛懸り、棒に取付き手足に縋り引伏せんとする所を、或は四五間二三間取つては投げ／＼、又は捻ち首踏殺し、其數知らず投げ倒し棒押取つて立ちけるは、偏に二王の如く也。朝比奈たまらず駆け出で、やあおのれめを人手にかくる者にてなし。い

のる一そり反る。

で義秀が手にかけて往生を遂げさせんと、飛懸りむづと取り目より高く指上げ、大地へど
うど打付けた。うんと云てのりけるが又起上り撫みつく。や爰な棒めと膝の下に押挫ぎ、
首捻ち切て捨るを見て、判官今は叶はじと、馬一散に乘出し揚手より落ちけるを、朝比奈
すかさず大手おほてをひろげ跡を慕うて三重追駆けけり。程なく追付馬の尾筒おづつをおつ取つて引伏
すれば、判官あへなく落つる所を腕をむづと捻ち伏せ、前代未聞の大惡人何と行ふやうな
しと、二疋の馬に能員が片足づゝ括り付け、兩方へ追立れば馬は左右あわゆへ驅け出る。無慚や
な能員は二つにさつと引裂かれ、朝の露とぞ消えにける。各一度に悦びの勝鬨あひごんどつと作り
立勇みをなして凱陣かいぢんある源氏の御代の御繁昌、千秋萬歳せんしゅ ばんせいめでたかり共中々申すばかりはな
かりけり。



辨慶誕生記

辨慶…直傳一以上
十二字原本になし。
今便宜補へり。

辨慶誕生記

山本土佐掾直傳

武藏元山寺兒

さても其後序長閑に明けし四方の春、今日汲み初むる若水の、源清き千代の松、はなさい
ゑこそめでたけれ。こゝに清和源氏の嫡流源の義經の後見西塔の武藏坊辨慶が出生世の常
ならぬおさなだち、其俗姓をあらはすに、そもそも紀州熊野の別當辨心と申せしは、天兒
屋根の御苗裔中の關白藤流の後胤なり。しかるに辨心水葱の前と申て女子は一人ましませ
共男子の世嗣なかりし故、若一王子へ深く祈り、ある夜の夢想に鳶の羽を給はると見て、
北の方懷胎有りしが、十月に満つれど誕生なく、不思議ながらも日を送り、すでに三年に
及べ共、平產無ければ定めて懷姪にては有らじとて、夫婦諸共三所權現に參籠し、奉幣を
捧げ神慮をすゞしめ三重奉り、掲神前に畏り、誠に我々あたはぬ事を御神に願ひ申せし御
咎めにて、かゝる事と存する也。あはれ神慮の御許しを蒙り、病苦をはらさせ給はれど深
く祈請かけ給ふ。しかる所に北の方俄に御腹痛ませ給ひ、産の心地しきりなれば人々驚き
先神前を抱きのけ、傍らへ入れ奉れば程なく御産と聞えける。母子共に恙なく願の通り男

あたはぬ事一力に及
ばざる事。

たまお／＼一幼兒。

子也。され共、彼幼き者ことぐしく大きにして、其様人に變りければ、御介錯の女房たちなか／＼不思議に思ひし故、やがて辨心の前に抱き出る。別當つく／＼見給ふに世の常の三才ばかりの子程にして、髪長く眼大きく、奥歯向歯生ひ揃ひ、もとより手足逞しきも恐ろしき赤子のかたち、不思議也と見給ふ内に、寝させ置きたるをさあい肱をついてむく／＼と起直り、東西をきつと見まはし頭をぶり上げ、あらあかやと言うてから／＼とぞ笑ひける。辨心見給ひ、えゝあさましきこと共や、とかくよしなき願ひ故鬼子を授け給ひしよな。所詮きやつを生けて置かば、必ず親のあたと成るべし。片時も早く害せんとすでに危うく見えけるを、有合ふ者共押止め、先御待とぞ宥めける。さればにや北の方、さすが女性の事なれば失はんことの歎かしく、尤仰はざることなれ共、六趣四生の其中にいか成人か我々が子とは成て来るらん。たま／＼人界に生を受けしものを、月日の影だに拜ませず、刃にかけて修羅道に、落さん事こそ不便なれ。とにかく親の慈悲なれば、先助け給はれと深く悲しみ給ひける。別當もいかゞせんと暫し案じておはします。こゝに辨心の妹御前は都五條山の井の三位と申せし人の妻なりしが、此比爰に下り給ひ右の段聞召し、げに兄上の御心底尤にては候へ共、傳へ聞く唐土の老子は胎内にて七十年やどり、産髪白く成て誕生有りしとかや。此若も胎内にて三年が間を送りぬれば、形大きく物を云ふこそ道

素髪一産毛に同じ。

六趣 六道に同じ。

あたはす思召さーを
はのまゝにしておく
事が出来ぬと思はれ
るならは。

理なれ。去ながら御心に是非あたはず思召さば、なふみづからに給はるべし、上方へ具して上り、成人の後は出家を遂げさせ經の一巻をもよませなば、罪作らんよりまさるべし。妾にたべと申さる。別當此由聞給ひ、其義ならばともかくも御身次第との給ひて、其まゝ助け置給ふ。伯母御前悦ばしく、則ち其名を鬼若丸と付給ひ、五十一日過ぎぬれば、つれて都へ上り給ふ。是辨慶が出生也。ためしまれにぞ三重聞えける。かくて年月過行けば鬼若丸成人して今はや學問の其ため比叡山の西塔櫻本慶心の坊へぞ上りける。去程に彼寺には數多の兒達、終日の手習にたれ追ひ抜かん我人に追ひ抜かれじと、身をつめて各學問きはめ給ふ。鬼若も其中に交はり手習致せしが、學文は器用也、され共是を心に好かず、只力業・腕押・臍押・相撲などを好む故、傍輩の兒達といさかふこと度々也。餘の少人は一筋に硯を馴らし手習へ共、鬼若は只筆をとつて太刀刀のやうに振廻し、切眞似突く眞似受けつ開いつことぐしく、机を叩いて遊びける。爰に兒の中の兄弟子に、けん王丸といひし若は、平家清盛の一門、但馬の大將廣盛の子成故、平家の威勢をかうにきて、常々ともなふ兒達をも、下目にかけて居たりしが、此體を見てあゝ喧しや鬼若、筆にて物は書かずして、假初にも机をならしこと騒々しき體たらく、そうやうの妨げ只心を鎮め、手習をよくせられよと恥しめければ、殘る兒達諸共に、ちとたしなみ給へ鬼若と、口々にぞ言は

れける。鬼若何をがないさかひの種にと思ふ所に幸と悦び、やあ何と某がいづれも學文の邪魔に成との給ふか。おゝ道理也尤也。今よりしてはかたゞの意見に付き隨分手習を致すべし。去ながら異な事にて某は、紙に物書く事は嫌ひにて、只人の顔に書く事が好きにて有り、さらば手習致さんと、筆に墨付けけん王丸の頬にべたりと付けければ、是はと驚く其内に、あれにも是にも付けまはれば、又鬼若の我儘よと言うてどつとぞ三重逃げらるゝ。其折節けん王丸の父但馬の大將叡山に上らせ給ひ、櫻本の坊に入給へば、僧正對面ましまして、よくこそ登山なされつれ。先こなたへと奥に請じ給ひける。あまたの兒達残りなくいづれも座敷に畏る。廣盛見給ひて、某此程久敷參詣申さぬ其内に、どれくも兒達の成人有て候よ。定めて皆々學文に精氣も疲れ給ふらん。かたゞを慰めんため、珍しからねど酒飯の用意し參りたり。それ侍共と言付くれば、畏り候ご銘酒様々珍物共色品多く取出し、各酒を盛りにける。僧正悦喜淺からず、かゝる酒宴の興なるにいづれにてもをさないもの共、一曲歌ひ奏でよとあれば、畏り候とて廣盛の一子けん王丸並に櫻田春若丸、二人つれてぞ舞ひにける。面白の春の氣色や四方山々に霞立ち、木々の梢も色深く、匂ひ妙なる梅が枝に、來居る鶯春かけて鳴け共いまだ雪降れば、花なき里の花ぞ散る、ながめことなる折からに、汲む盃の數添へば、榮華の春も萬年経ると、謡ひ奏で、をさめける。

扱其次は件の鬼若控へたりしを、廣盛見給ひて、内々かれめが我儘をし、けん王丸共中悪しき由、何がなして此ついでに恥を與へんと思案し、さあ／＼鬼若も一曲奏で給へ。か様の酒宴の折からなれば、且は御身も慰に、謠にても舞にても一つ所望と申さるゝ。鬼若聞きもあへず頭を振つて、いや／＼某常々學文ばかりに心を入れ、外の藝はかつてたしなみ申さねば、何と致すべき事なし。只某が慰には何よりかより酒／＼／＼／＼と、言ふや其ま／＼酌が持つたる銚子をみづからおつ取り、自酌にてあく迄酒をぞ呑みにける。殘る兒達つゝやきさゝやき、やれ心地よや鬼若が恥をかきたる嬉しやと、目引き鼻引き笑ひける。鬼若是を見て、やあ方々は我を侮るな。歌や舞こそ叶はず共、さあ此中に某ミ力を比ぶる者有らば、只今出て何にても望次第に勝負をせよ。恐らくは二人や三人は片腕にても投げ殺し捨つべきぞ。近比申しにくき事ながら、たとへ廣盛殿共くらべ申たる共よも負けは致すまじ。お望なれば何時にても取て投げて見せ申さんと、腕をさすつて申せしは苦々しくぞ見えにける。慶心御覽じ、いかに鬼若それは何たる雜言ぞ。座敷の興をさまし言語道断の有様、罷りしされとの給へば、獅子象虎の勢ひ有る鬼若丸もさすが師匠の詞に恐れ、平伏せし禮儀の程こそやさしけれ。廣盛とかうの返答せず、其後酒宴をさまれば、もはやお暇申すべしと、僧正に禮儀正しく相述べて、やがて座敷を立たれたり。扱廣盛は譜代の家の子

ひらかけーひらは牛
なるべしこれ下駄の
類の物か辨慶物語の
外にひらかけの名を
見ず(柳亭記)。

市原文藏武元を召して、あの鬼若が風情にては定めてけん王丸共口論し、いか成事か有やせん。とかく心もとなし、汝を相添へ置くべき間隨分心を付くべしと、言渡して残し置き、拵山を下らせ三重給ひける。角て其後鬼若是、右の大酒に酔ひ亂れ、客殿の脇なる一間所に引籠り、前後も知らず臥し居たり。かゝる所にけん王丸、市原文藏召つれて件の所に來りしが、此體を見てけん王丸、やあ武元日比彼奴めが我儘何かに付けて憎さよ、かゝる折を幸に何とぞ恥を與へたしとあれば、文藏承り、心得て候、致すべきやう有りとやがて硯を取來り、鬼若が顔に二首の歌を書きたり。先左の方に「鬼若是平足駄とぞ成にける頬を踏め共起きもあがらず」と書き、又右には「面附もひらかけにこそ似たりけれ目より鼻緒をすげて履かばや」と書いて、しすましたりと主従悦びやがてそこをぞ立退きける。時移りて鬼若丸目をさまし起上り、すんど立て學文所へ行く道にて、小法師共鬼若が顔を見て皆くつくとぞ笑ひける。鬼若是に不思議をなし、やがて庭にあり立て蓮の池にて水鏡を見て、横手をてうど打ちて南無三寶、エ、口惜しやはは何者めかしつらん。何とぞして此主を掴み殺して捨つべしと、歯噛をなして立たりしが、よしとすべきむね有りと、やがて鐘樓堂へ走り上り、撞木おつ取り力に任せて早鐘をぞ撞きにける。此音に驚き僧正の寺中は申すに及ばず、方々の寺々より大衆あまた走り出で、只今の早鐘は何故の事成ぞ

よつぼさにし給へ
宜い加減にせよ。

と皆々 評定する所へ、鬼若傍よりつと出で、やあいづれものかやうに大勢出給ふは、今
の鐘を撞きし故か。いや／＼騒ぐまい／＼、ちつとも氣遣ましますな。某が撞いて候。其
子細といつば、僧正の寺中に我面を足駄に履かうと言ふ者有て、か様に面に書付を致せ
故、よに珍敷事なれば、辺の事に多人數を集め、其中にて履かれんと存じ、其知らせのため
此鐘をひよつと一つ撞いたれば、よう鳴るが面白さにひたと撞いて候と、あざ笑ひてぞ申
しける。時に僧正の弟子しんおん坊を始め其外大衆口々に、あゝ是鬼若狂ひもあがきもよ
つぼどにし給へ。御身の面に物を書きし主には遺恨を遂げずして、よしなき人を騒がせ給
ふはあまりなる仕業やと我も／＼こ申しける。鬼若聞きもあへず、されば其事書たる主は
僧正の寺中の者の内なるべけれど、名のつて出ねば力及ばず。えゝ扱卑怯者何奴にてもあ
れ、か様に書く程の心底ならばなぜ誠には履いて見ぬぞ。やあ腰抜め臆病者、是程に言は
れても出ぬか／＼。えゝ隨分揃うたる菜虫共の集りやと、にが／＼しくこそ申しける。時
に市原文藏堪へかね、ヤア鬼若殿たれと相手も知れざる事に、よしなき雜言無益也。さ程
に世話を焼き給はず共其書付する程の者ならば、定めていつぞは必足駄にはいて踏み付申
すべき間、左様に思ひておはしませ。誠に御身は色黒けれ共美しげなる顔ばせなれば、あ
つばれ究竟の塗足駄候はんと、から／＼とぞ笑ひける。鬼若聞いておゝ是は文藏よい見立、

ふゝ掲はおのれが我面に書付をしたるよな。其聲聞かんためにこそと惡口したるぞや。いでおのれを低下駄に履みひしやいで見せんと、飛びかゝつてしがみ付き、引被いて雨落の石たゝきへえいと/or/いうて投げつくれば、うんこと/or/いうて伏したるをひた踏みに踏付け、こりや／＼おのれこそ足駄に履け。慮外者奴覺えたるかといふ所へ、けん王丸かけ付け、鬼若に取付くを物々しやと取て引寄せ、主従共に一々首を捻ぢ切つたり。大衆驚きやれ鬼若こそ人をあやめた。のがさじと犇くを、えゝにつくき法師原やと捨て置たる棒提げ、打つてかゝれば此勢ひに恐れつゝ、どつと一度に逃げ散つたり。あたりに人も有らざれば先傍へ引たる有様、誠に生正眞の鬼若やと、皆恐れぬ者こそなかりけれ。

第二

のしたりけり一のし
は死しにて平たく剃
る義か。

角て其後、人にかはりし鬼若丸、と有る所に立忍びつく／＼と思ふやう、とかく我是よりすぐに何方へも立退くべし。是をついでに法師に成て行かんと思ひ、折節其あたりの坊に人なければ幸と、やがて湯殿に走り入り、剃刀を探し出し盥の水にて髪を洗ひ、所々を自剃にこそはのしたりけり。掲鬼若まづ法師には成つるが、名をば何と付くべきと思ひしが、げに／＼我内々聞きし事有り、昔此山に武藏坊といへる惡を好む法師有て、年六十に及ぶ

迄遂に不覺ふがをとらずと聞けば、我も武藏坊と付くべし。實名は父の辨心の辨の字と師匠の慶心の慶の字を取て、辨慶と名乗らんと思ひ、西塔の武藏坊辨慶とぞ付にける。かく僧徒の身となる上は、戒を保たんと思ひ、やがて佛前に向ひ今よりして殺生偷盜邪淫妄語飲酒、此五戒よく保つやいなやと我といひ我と又はつと答へ、み佛と御契約して出でけるが、はあ待てしばし、先五戒の内に第一殺生戒は物の命を殺さぬ事、あゝ尤もたもちたき物なれ共、憎き奴有る時は殺さではかなふまじ。扱偷盜は盜人せぬ事、何しに此戒背かくべき。又邪淫戒は女に近づかぬこと、あゝござんなれかゝる法師となる上はいかで此戒犯すべき。次に妄語戒、尤常に僞いつぱりをいふまじけれ共、我に背くともがらを殺さんための謀はりごに僞りたばからずんばかなふまじ。扱又飲酒戒の事、此辨慶においては一日も酒を飲までは堪忍ならず。いかに御佛みほ、堅く立てんと申したる五戒の内、偷盜邪淫戒は保ち、殘り三戒はへんがへ一撫摸へんがへ、變改の訛なるべし。

打物うちもの—太刀たち刀薙刀なぎの等の總名。

茶道—茶道坊主。

辨阿彌といふ者なるが、ちと火急に其方の道具求めたきやう有て、自身是迄參りたり。太刀刀二口今日の日中迄にうつて給はれ。代物はいか程も與へんとぞ申しける。宗近聞て、何とやらん此者の風情心得なく思ひけれ共、其比平家の仰とあれば何事も異議に及ばぬ時節なる故、仰の旨承り候、併火急の御所望近比迷惑致し候。其義にて候はば去方より御説の太刀刀、此間出來致御座候。若是が御氣に入候はゞ進上致し申すべしとて、件の打物取出し辨慶にぞ見せにける。武藏つくゞと見て、成程、某が思ふやうなる打物也。いかにも是を申請けん。いづれなりとも下々を我等に付けてこされよ。代物は渡し申さん。近比わりなき所望過分くと禮義を述べてぞ出でにける。宗近が下人辨慶が後に附いて行け共く値をやるべき共言はされば、下人申す様何と代物は何處にてか下され候ぞと問ひければ、辨慶ふり返り、されば我も早く渡したく思へ共、此金味知れされば何者にても切つて見て、其後値をやらんと思へ共、今に左様の者なし。いでくおことが首切つて見て、其後物取らせんと、打つてかゝれば下部驚き、あゝ許させ給へと云捨てゝはふゝ逃げてぞ失せにける。辨慶かゝらゝと打笑ひ、拵々逃足の早き奴かな。先望の太刀は求めたりと悦び、ア、誠にかくすれば盜同前也。拵佛の前にて保たんと云ひし二戒の内、倫盜戒を破るなれば、いかゞはせんとぞ案ぜしが、實々心付たる事有り、當時都に隠れなき田邊

立番丞といへる有徳の者あり。かれに財を乞請け小鍛治に作料を取らせばやと思案して、田邊の館へ三重立越ゆる。其折節立番の丞遊興の其ため廣縁さして出でけるが、辨慶案内にも及ばずつつと入り、是は奥より熊野參詣の修行者、糧米に盡きねれば藏一つ明けて勧進に入り給へとぞ申しける。行春大さに腹を立て、こは興がる法師かな。いか様夜討強盜のたゞひなるべし。あれ若黨共召捕れと云ふ所を辨慶飛びかゝつて行春を取て伏せ、あたりをはつたと睨んで、やあおのれら某に指でもさしなば、主の首を忽ち捻切り、又汝らも片端から引捕へ、彼世此世の境目を見すべきぞと、大さに怒つて申しける。此勢ひに御内の者おぢて近付く者もなし。所へ行春が女房、武藏が傍へ走り出で、なふ御僧様の御腹立御尤にて候也。浪人の習ひにて人を見知り申さず候。妾に免じて許させ給へ。いかやう共御望を、叶へ申候はんご、手を合せてぞ拜みける。辨慶聞いて、盜賊と言はれては勘忍ならぬ所なれ共、妻女の言葉に至極しねれば、いかにも許し申さうが、して亭主も何と、某が望を叶へうといふ心入か。行春震ひく、あゝどう成共仰の通り叶へませうと申しける。武藏さあらばとて許しける。行春はたゞ鬼にとられし心地して、いまだ震ひはやまさりき。女房悦び此うへは御所望次第に寶を參らせ候はん。辨慶聞いて、いや／＼多くの望みはなし。卷物十本程給はるべしといひければ、それこそやすき御事とて、藏の内より取出し、

武藏が前にぞ出しける。辨慶悦び、とてもの事に人に持たせて給はるべし、重ねて參り此禮を申すべしとて、暇乞して卷物持たせ小鍛治が宿へぞ急ぎける。拵案内を乞ひければ、最前の下人立出で、やれ又最前の法師こそ來れりと、あわてゝ内へ逃げ入れば、宗近何事やらんと表に出る。辨慶對面し彼卷物を出し、是最前の打物の返禮也。定めて不足に御座有るべけれ共、とめ置給へミ申しければ、宗近右の様子と格別違ひ却つて恐しく思ひしが、又辭退せんもいかゞと思ひ、只忝く候と抱き持ておづゝ内へぞ入りにける。拵其後に武藏坊、先宗近が作料は取らせぬるが、立蕃が實を無體に請たる事なれば、悉皆たゞ頗るを顔へ直したるといふもの也。えゝ是非もなし。又重ねて何とぞ恩を送らんと、小原の里へぞ歸りしが、日は早暮に及びける。辨慶暗紛れに向ふを見れば、何かは知らず人十人ばかり集りて申しけるは、扱々此頃は打續き不仕合せなり。いかゞはせんと寄合ひ、夜討強盜の詮義とりゞに評定す。中にも畫薦のかけの助申すやう、都に隠れなき田邊立蕃の丞が所ぞと、談合極めて盜人共皆々別れてのきにけり。辨慶是をとつくと聞きすまし、扱々立蕃が恩を何としてかは送るべきと思ひしに、幸是はよき事を聞て有り。急ぎ行春が館に行き、今の奴原残らず討取り、最前の恩を送らんと、思ふやいなやかけ出し、立蕃が館へ三重急ぎける。程なく館へ着きしかば、幸小門のあきたる折節、願ふ所とつと入れ

胸がいゝ胸ぐらに同じ。

番太—番太郎ともいふ町々の木戸を守り夜廻りを勤むる者の稱。

ば、番の者見て、又晝の御坊の來り給ふぞやと、あわてゝ行春にかくと申せば、夫婦驚き、それは何故やらんと立出れば、辨慶見てなふ人々、某只今參る事少も氣遣ましますなと、右のあらましを語り、もし又我も盜人の同類かと思ひ給ふなよ。叢山より出でたる武藏坊辨慶といふ、すんとたしかな坊主也。今宵夜盜を從へ、右の恩を報ぜんと思ひ來りたりとぞ申しける。夫婦悦び、扱々是は忝き御心ざし、一人頼奉ると申さるゝ。辨慶聞て、おゝ心やすかれたかたゞは中門をよく固め、成程ゆるりと寢給ふべしと、皆々奥へ入置て、其身一人門の際にて、夜盜の者をぞ待ちゐたり。すでににはや子の刻ばかりに盜賊共、門外に來りどしめく音せり。辨慶今こそよき時分と思ひ、内より切戸をそつとあけ、あら騒々しやといふ所を、盜人共天の與へとばらくと立て入る、其あとを武藏はたと閉てゝ、鎧をしつかとおろしける。盜人共是を見て、やがて武藏が胸がい擗んで、やあおのれは番太めか。此屋の寶の有所を詳しく述べし。さなきにおいては只今、打殺すぞと怒りける。辨慶懇とこはさうに聲を震はし、あゝ扱はいづれもは盜人様にてましますな。いかにも案内申すべきが、さもあらば私にも、何ぞ褒美を下さるゝか。盜人共聞て、おゝいかにもゝ望次第にとらせん。しておのれは先何が欲しきぞと問ふ。辨慶聞て、某はいづれも様の首が欲しう候と、言さまに腕をひん揃ぢ取て投げた。是に驚き、やれ痴者よと一面

に打てかゝるを、辨慶好みし棒打振つて力にまかせて三重打伏する。盜人共は散々に撃ぎ付けられ、逃げんとすれ共門は打たりせんかたなくて聲を上げ、なふ御慈悲に助け給へと一所に屈みて降参す。辨慶笑ひて、やあどうばう達よい氣味な。誠命が助かりたくは、おのれらが着たる物を脱ぎ、太刀刀共に置いて行け。それならば助けんといふ。夜盜聞て、あゝそれは餘りに胴慾なる仰と言へば、辨慶聞て、しておのれらは脱ぐまいかと、棒振上ぐれば盜人共、あゝ脱ぎまするゝと、皆々残らず裸に成り、打物共に投げ出せば、其時辨慶門を開き、夜盜の奴原追出し、件の着類太刀刀を、悉く立番に與へ、最前の恩を送りし辨慶が心ざし奇特也、又強者也とて皆感ぜぬ者こそなかりけれ。

第三

角て其後、但馬の大將廣盛は比叡山に馳せ登り、鬼若丸が行方尋ねけれ共知れざる故、是非なく京都に立歸り、洛中洛外探し尋ねれ共、近き比まで有りつるが今は行かたなきと聞き、扱はとにかく熊野へ隠れ下りつらん。此上は右の旨清盛公へ訴へ、紀伊の國に尋ね下り、是非に討たでは置くべきかと、やがてそれより六原さしてぞ上りける。御前になれば、廣盛有りし次第を言上し、彼鬼若めが惡逆山門において其隠れ候はず。彼奴を浮世に住ま

せなば後々は天下に對して敵をなすべき程のあぶれ者と存候。あはれ上意を蒙り南海道に下り、彼曲者めを探し出し討取度候と、憤り深く申上る。清盛聞召し、お御分が心底至極せり。左様なる邪曲者片時も生けて置く所にあらず、早速下り心の儘に行ふべしとの御説なり。廣盛悦び御前を立て手勢數多引具して熊野をさしてぞ三重急ぎける。是は扱置熊野には辨慶が父辨心は、過し比世を去り給ひ、今は母上ばかり也。され共鬼若丸の姉姫に、水葱の前とてましますを、たよりとなされ暮さるゝ。過し比より母上は心悪しくおはせしを、なぎの前權現へ日參有て祈らせ給へば、其しるしにや此程ははや常の如くに成給ふ。なぎの前悦ばしく、今日は又御禮のため參りて歸り候はんと、母上に眼を乞ひ、御供少々召つれ給ひて宮居に參詣なされける。去程に廣盛は、夜を日についで熊野に着き、別當の館に取かけ、か程多勢にて来る上は只押入れと下知をなし、どつと言うて亂れ入り、爰やかしこと探しけれど共、尋ねる敵はさらに無く、只老母一人残りは御内の者共呆れし體にて居たりけり。され共母上騒ぎ給はず、やあ和殿達は何處の誰にてかやうに押入り、かく狼藉に及び給ふ。こなたに覺えのなき事也。様子を聞かんとの給へば、廣盛聞て、ふゝ扱は其方は鬼若が母よな、何程御身知らず顔にいふ共言はせては置くべきか。鬼若はいづくに置きしそはやとく出せ。天下の主清盛公の上意を蒙り來つたり。隠し置く共かひあらじ

と、大きに怒つて罵れば、母上彌々心得がたく、扱は鬼若を御尋のためか。なふ其者は產屋の内より人に取らせて、親子の久離を切りぬれば、いかゞ成しもいさ知らず。又たとひ是迄來りしにもし給へ、幼き時さへ親の仇となるべきと思ひ捨てし物を、殊に今又科をして逃げ下りしを、何しに是に隠し申さんや。夢にも知らぬこと也と申切ておはします。廣盛聞て、ふゝ扱は是へは來らぬかや。いかゞはせんと案せしが、とかく母を生取り置きなば、彼曲者奴を打取るべき術ならんと思ひ付き、是々御身の申され分道理一々至極せり。しかし今度の一義といつば、彼鬼若丸比叡山において、數多の人をあやしめ、行方知らず成しによつて、方々と尋ね此所迄來りしが、是非において行衛知れずは親を召取り都へ引くべしとの上意也。それ侍共といへば、畏つて母上をひたゞと取圍み、いなやを言はせず引立てつれて行くこそ痛はしけれ。有合ふ者共是はゞと跡を慕へど其かひなく、御行方もなかりけり。かくとはいさや白雲の風の便もなぎの前、母の病氣平癒の、禮參つとめ給ひつゝ館に歸らせ給ひける。御内の者共出迎ひ、なふ姫君さま歸らせ給ふか。御留守の内に母上様はか様／＼の難義にて、都の武士に捕はれて行かせ給ふと語りはてぬに姫君は、なふこはそも誠か悲しやとわつと叫ばせ給ひしが、やう／＼心を取直し、やれ母上はいづれの方へ捕られて行かせ給ふぞや。いで追附かんと其まゝ走り出給ふを、皆々止め奉り、

あゝ御道理尤也。去ながら、母上様ももはや遙かに行かせ給ひ候はん。我々も其折節何と
ぞ止め奉らんと悶ゆる内に、大勢取付き連行き申せば是非に及ばぬ仕合也。只御心を靜め
させ給ひて、何とぞ此後母上を取返させ給ふべき御思案なされ候へと皆々留め申しけり。
姫は聞あへ給はず、えゝ曲もなき者共や。いか程敵大勢也とておめくと母上を渡すべき
事や有る。浮世にひとりの母上を、かゝる難義にあはせ参らせ、いかで是にはあられんや。
命限りに追付て、身はひし／＼と成るとも母の御難を救ひ申さん。わらば妾わらば行くとて汝等は頼
ましそと泣き叫び、制する者を突きのけ振放ち、かけ出させ給ひける心の内こそ 三重道理
なれ、かくて其後但馬の大將廣盛は、老母召取置きぬれ共敵かたきもあらはれ出ざる故、都へ
引具して行く道の、泊り／＼宿しゆく々ごにても、心を付けさせふれをなし、程なく今は泉州設樂しづら
の宿に付て、右の通りをふれさせければ、所の者共廣盛の前に出で、御ふれの様子承り候
に、此程あやしき法師、近きあたりを徘徊仕候。もし御尋ねの者にては御座有まじく候や
と申上る。廣盛聞てげにさやうの事も有るべし。然らば此所に逗留し、何とぞ敵が出手
だてをせん。其儀といつば此宿はづれに矢來を結はせ、其内に母を入れ置き、諸人に曝し
見すべし。さあらば辨慶此あたりに有るならば、本より人を人共思はぬ曲者、奪はんなど
とて來らん所を、おつ取撃がんと侍共に申付け、すでに用意と 三重聞えける。

なきのまへ道行

たらちめー母

音無瀧・熊野川の上
音無瀧川といふ。

糸我山一有田郡糸我
村の南湯浅町に至る
途中の坂路ないふ。
くれども一來と譲に
かく。

急げどかひもなきの前、涙とまらずたらちめを、慕ひ焦れて出給ふ。み熊野の地を離るれ
ど、いまだ母には逢はぬかや。たれに問へども音無の瀧津心もせきかねて、亂れ亂る
絲我山、くれども長き道の邊の千草の花も色々に、薺しゆんきく櫻草美しげなる鼓草、數
の草花は多けれど、今の身なればなか／＼に、口傳それをそれとも見も分かず。かゝる思ひ
をしほやつの王子の宮は思ふこと、汲みて叶ふる神なれば、鹽屋に跡を垂れ給ふ。今の我
身の願ひをも叶へ給へと岩代の、神の恵みを頼めども末をいかにと思ひやる、袖も濡れけ
り岩田川、言はねど歎く我が心、今の胸にも天つ風、ふけゐの浦に立つ波の音験がしき折
柄になほ吹上あまあらし。霞も果てぬ紀の路山松にかゝれる藤代の、御坂を越えて見渡せ
ば、名におふ和歌の浦々に、歌須磨や明石の月を見し時は／＼の、女波がどん／＼どんど
ろめきやよう夜の目もよ寝られぬ朝霞、たゆたふ舟や由良の門を渡る船人楫緒絶え、行方も
何と白波に、こがれ／＼て浮き沈む、深き思ひは我とても、母を焦れて紀三井寺大悲の誓
ひ頼もしく、なほ足曳の山口や、山中難所越え過ぎて、思ひもよらぬ憂き旅を設樂の宿に
ぞ着き給ふ。なほ行先を見給へば、宿のはづれに矢來結ひ怪しき體の見えけるを、折節先

岩代・岩田川・吹飯
浦・吹上・藤代・皆紀
州の地名。
こがれ一瀧と焦とか
紀三井寺一來にかく

より農人一人來りしを、姫君かれに近付き、なふあの向ふに矢來の結ひて候は、何事やらんと尋ね給ふ。百姓聞て、おゝあれは天下よりお尋ねの者有て、今度紀州熊野より其母を召取り是迄來られしが、彼尋ねる者此あたりに有りとやらん申して、今日も其母を、あの所にて曝し給ふと、語りてこそは通りける。なぎの前聞き給ひ、嬉しくも又悲しさもいやまさり、其まゝ行かんとし給ひしが、あゝいや待てしばし自らあれへ立越え、母上の御身代りとなり老母を助け奉れば、是以て本望なれ共、若敵が同罪と申せし時は、彌々母に憂き目を見せ奉る、あゝ何とぞして母上を助くる思案は有るまじきかと、行かんとしては立戻り、居て見立つて見ウレと節身を悶えてぞ泣き給ふ。然る所に辨慶は古郷と聞きし故、熊野路に赴き母の様子を聞くとひとしく上方さして上りしが、旅疲れにや辻堂に休らひて居たりしが、此有様をつくづくと見て、扱もゝ我身の上によくも似たりし事共かな。様子を尋ねたく思へ共、あゝ何共問ふべきよしがなければ、折節地藏のめしたる綿帽子を、これ幸とうちかぶり、錫杖を突鳴らし、いかに姫汝親に孝の心さし佛神是を哀れに思召し、我に様子を聞けとて、則ち諸神諸佛の御使として、もとより千々の願我汝に擁護を加ふる也。急いで様子残らず語り給へとあれば、姫はあつと感にたへ、扱々有難き御事かな。自らは熊野の別當辨心が娘なきの前と申す者にて侍ふ也と、母を捕られしこと共始終を語り給へ

ば・ヤ 扱は姉にてましますかと、帽子錫杖振捨てゝ、なふ我こそ昔の鬼若丸今は法師に成て辨慶と申す也。姉は夢共辨へず、是は〜とばかりにて悦び涙はせきあへず、扱々不思議に對面致せしもの哉。扱は廣盛めが我々を尋ねんため、母上に辛き目を見せ奉るよし。御心やすかれ我等か様に行合ひ申すも、ひとへに親子の縁盡きぬ故也。たとへ警固の者幾千萬有り共、踏破つて奪ひ返し申さんが、去ながら荒氣にては母の御命もあぶなし。何とぞ手だてをもつて奪ひ取るべし。いかゞはせんと思ひしが、暫らく思案し、あゝげに此綿帽子にてよき事思ひ付たり。さあ〜姉君こなたへと、打連れかしこに三重急ぎける。去程に廣盛は母上を矢來の中に押込め、さも厳しく守りける。かゝる所へ辨慶が、丸綿帽子に顔隠し、八十あまりの老の波女姿に身をやつし、腰には梓の弓を張り、やたけ心の一筋に矢來のもとに立寄り、我々は此所の土民にて侍ふが、只今此捕はれ人の子とやら一門とかや申して、侍數多奪ひ取らんと談合のためか、我々が住所に踏み込み狼藉致し、あまり物恐ろしさに娘に手を引かれ、やう〜爰迄逃げ参りかく告げ知らせ参らせ候と誠しやかに申しける。もとよりも智恵薄き廣盛、辨心が侍共と覺えたり。急ぎこなたより押懸け打つて取れと下知すれば、心得たりと若侍我さきに急ぎける。時に廣盛、もとより好色第一の男なれば、姫君をつくづく見て扱々器量すぐれし娘かな。いかに老女汝が娘か孫か、

いまだ夫は無きかとあれば、うば聞いて、あれは妾が娘にて侍ふが、いまだ婚とも候はず。あはれ殿さまに召置かれ侍らはゞ、有難く候はんと申せば、廣盛聞て、おゝ扱は汝が娘かや、是へゝと申せ共、姫恥かしげにさし俯向いてぞおはします。うばもどかしく、ハテ恥かしい事はない。うばも若き時には始めは胸が震へ共、後には大事ないものぞや。どれくうばがつれ行かんと姫君の手を取り、なふ殿さま今より後は御不憚に思召下されよと、廣盛が腕をしかと握る。扱々こゝなうばは力の強き者哉。爰を放せ、放せゝと撫け共、ハテ大事の殿さまへ二世の媒介申す也。是が夫婦の固めぞと、なほゝ強く握るにぞ、残りし侍、やあ爰なうば何とて放し申さぬぞ。二人一度に立寄れば二人が腕もひつ捕よ。なふく痛や骨が碎けてのきまする。お許しあれといふ隙に、姫走りより母の縛しめ切解き、すでに逃げんとし給ふ所へ、討手の侍立歸り此體を見て、おのれ大將を助けずは、此者共を遁さじと母上姫君おつとりまく。其時老女帽子上衣かなぐり捨て、三人を兩の足にてどうど踏へ、やれ汝ら、我こそ尋ねる辨慶よ。えゝあつたら物なれ共、命惜しくは助けてえさすべし。やれ其かはりに母上や姫御前を乗物に乘せて送るべし。さなくは彼奴らを踏み碎くぞ。さあ送らうか送るまいか。廣盛下より聲をあげ、なふ術無やどうなりと御氣に入る様にせよと、身を悶えてぞ申しける。侍共是非なく乗物昇いてぞ出しける。辨慶見てさ

あ／＼一人を一所に乗せて舁け。かゝずは忽ち首々に引抜くぞ。廣盛やれ世話焼かすな、急げ／＼と申せば侍共、ふせう／＼乗物舁くとひとしく、さあ助くると廣盛を突放せば、廣盛あれ餘すなど下知すれば一度にどつと崩れかゝる。辨慶心得たりと番所に有りし棒おつ取り、むら／＼ばつと追散らす。此勢ひに驚きあたりに近付く者もなし。其隙に乗物をヒヤウシおつ立て／＼都をさして急ぎける、辨慶が智謀のほど勇あり義あり孝ありとさて感ぜぬ者こそなかりけれ。

第　　四

かくて其後、辨慶は母上を思ひのまゝに奪ひ取り、とある所におろし置き、嬉しくもあひ奉るもの哉と、我身の上を具に語れば、母上も又有りし事共語り、盡きぬ今の涙也。辨慶申せしはさき程廣盛めを討洩らしぬるも母上姉君の事を思ふ故、甲斐／＼しき働きもなし。扱是からはたとへ追手が何萬何千来る共此辨慶が請取り申すぞ。御心安く四方を見晴らし慰みにそろり／＼と國へ御供申すべし。あはれ追手の來れかし、道の徒然の慰みにせんと、事もなげにぞ申しける。然る所へあとより追手の者共眞黒に成て追ひ来る。武藏ふり返りきつと見て、おゝ扱こそ願ひの通り面白し。いかに母上姉君某事は氣遣ひなしに

うんざい一人を罵り
ついふ詞。有財鬼
の詭略ならん

先さきへ歩ませ給へ。彼奴原を一なぐり追拂うてあとよりおつ付き申さんと、言ひもあへぬに程なく敵近付けば、辨慶心得たりと、傍なる大木根引にえいと言うて引抜き、大音上げて、やあ汝等があとをしたふ鬼若が母兄弟は、三つく先へ行かれたり。少分ながら其かはりに、彼鬼若丸成人致し、法師と成し辨慶是に残つたり。いでかたゞに馳走せんと、持つたる大木振廻し、群りかゝる追手の勢を思白微塵になぎ伏する。只大風に木の葉を散らすにことならず。さしもの大勢たまりかね、むら／＼ばつこ引退く。辨慶笑つて、おゝそれに懲りようんざいめらと大きに罵り、それよりも母上姉におつ付き、兩人一所に肩に引掛け、山路遙かに分けて入る。追手は猶も逃さじと、あとについて追かけたり。程近くなりぬれば、辨慶一人を下し置き、やあ又来るか弱者共と、側なる古木をひん抜きて、四方へどつと追散らし、扱又二人を一所に背負ひ、ゆらり／＼とあゆみ行く。追手は彌々憤り深く喚き叫んでかけ来る。武藏坊を見て、扱も懲りぬ奴原やと、又人々をおろし置き、手ごろの木の枝捻ち折り、一文字に打つてかゝれば、こらへずわつとぞ逃げにける。辨慶から／＼と打笑ひ、扱々揃うた逃上戸、此うへは手をてをもつてきやつばらが、根を絶やさんと思ひ、人々もろ共右手のかた成る高みに上り、岩の挟間に身を隠し、追手の者を待ち居たり。程なく敵件の所に來りければ、辨慶上より大石を押取り／＼投げかくれ

ひねりー武器の一種
敵の着たる物に掲み
つかせて自由を失は
しむるなり。

ば、落花微塵となりにけり。僅か残る者共はいや人間にてはあらじとて、後を見ずして逃げて行く。重ねて慕ふ者なければ、心静かに親子三人打連れて熊野をさしてぞ三重下らるゝ。是は扱置、其比又鞍馬寺には源の義朝の末子牛若丸とておはせしが、いまだ幼稚の比よりも御心猛くましゝ、いかにもして平家を滅ぼし源氏の代となすべきと、骨髓に思召し、夜に入つては僧正が谷に分け入り、大天狗を師匠となされ、兵法早業に御身をなげうちさまゝの術を得給ひしが、牛若思召すやう、我今既に武藝に長じぬるといへ共いまだ遂に人と勵みし事なし。所詮忍びて洛中に出で、往來の者に渡り合ひ、我が習ひ得し兵法の威力の程を試みん。されば當時は平家の代なれば、むかふ木草に至る迄皆是敵の事なれば、一つは父の孝養のため千人斬を始め、亡父尊靈に手向け奉らんと、一筋に思ひ立ち、夜なゝ五條の橋に出で、諸人を討取給ひける心の内こそ三重不敵なれ。去程に、武藏坊辨慶は母上や姉君を片山里に忍ばせ置き、其身は忍びて洛外を廻り、何とぞして廣盛を討たんとねらひ居たりしが、此比聞けば五條の橋に諸人を惱ます者有る由、聞くとひとしく彼奴を従へ我郎等に召使はんと、はや裝束して出立雲の、光り耀やく月の夜に、著たる鎧は黒革の緘しに緘す大腹巻、草摺長に着下し、好む所の道具には、熊手、薙鎌、つげの棒、拈り、刺叉、鉢など背にひつしとさし並べ、外にすぐれし大長刀、眞中取つ

白波の一不知にかけ
立つの序詞とせり。

柄長くおつとり延べ
一槍、薙刀の石突に
近き方を持つをい
ふ。

櫛弓の一撃きにかく
やたけ心一矢にかく

て杖につき、ゆらり／＼と只一騎五條の橋へぞ三重急ぎける。去程に牛若君、下には直垂腹巻し、上には常の装束に、薄衣取つてかみに懸け、橋の此方に佇み給ふ。辨慶かくとも白波の、立寄り渡る橋際にて、牛若君をきつと見付け、詞をかけんと思ひしが、女の姿と見えし故不思議ながらも打過る。牛若少しやり過し、抜打に辨慶がうしろをはたと切り給へば、背にさしたる道具の柄を四本切つてぞ落されける。辨慶大きに動顛し、こは口惜しや女と思ひ不覺をとつたる無念さよ。おのれ如きの小冠者めは長刀までに及ばじと、切残されしつげの棒輕々と振廻し、走りかゝつてはつしと打つを、牛若つつと潜り抜け給ふを、武藏つゞいて投ぐる棒、ちやう／＼ど切り給へば、忽ち三つにぞ折れにける。辨慶是はと驚き、今度は又鉄を打振つてかけ向ふ。牛若少も騒がせ給はず、おゝ今宵の客は健氣也。隨分馳走致さんと、太刀さし翳し稻妻の如く疊みかけて打ち給へば、さしもの辨慶合せかねて、橋桁を二三間退つて鉄にて受けければ、此柄もふつつと切れたりけり。辨慶六つの道具を失ひ、今ははや長刀ばかりになり、扱々おのれは小さき形にて世にむつかしき彼奴奴かな。よし何にもせよ遁さじと、長刀柄長くおつ取伸べ、爰を大事と切つてかられば、牛若君も上にめしたる小袖を脱いで捨てさせ給ひ、兵法の秘印を結び虚空をかける秘術の早業目を驚かす三重ばかり也。隨分猛き辨慶も今は精力櫛弓の、彌猛心も弱ると見

少人一年。

こつかに砕き一こつかは國家。主家のために薙坪するをいふ。

えしを、牛若やがて長刀をはつたと蹴倒し給ひければ、こは口惜しや手取にせんと、飛んでかゝれば其まゝ見えず、陽炎稻妻水の月、縋らんとすれど便りなし。せん方なくて武藏坊、扱も希代の少人やと呆れ果てゝぞ立つたりけり。扱々御身は誰なればまだいとけなき少人のか程健氣にましますぞ。御名を名告り給ひなば主君と仰ぎ申すべし。牛若是ぞ幸ひと、今は何をかつゝむべき。我は源の牛若丸、さ言ふおことは何者ぞ。武藏聞て、扱は君は義朝の御子にでましますか。某こそ西塔の武藏坊辨慶と申す者にて候也。降参申さん御免なれ。位も氏も健氣さも、あつばれ此辨慶が主君に頼みて不足なし。殊には某様子有つて平家に恨候ふ者也。本より君は先祖の御敵、此後は猶君諸共此身こつかに砕き、平家を亡ぼし申すべし。家臣となさせ給はれと、それより主従の契約固く仕り、薄衣被かせ奉り、辨慶も長刀を打かづいて、悦び勇みて歸らるゝ、誠に三世の奇縁なるはと扱感ぜぬ者こそなかりけれ。

第五

角て其後、牛若辨慶主従の契約して、平家を狙ふと風聞有り。廣盛早くも聞付け、急ぎ六原の御前に参り、内々某のかたき西塔の辨慶、源の義朝の末子牛若丸と心を合せ、山科

洪恩一原本「こうおん。厚恩。鴻恩。洪恩にづれにてもあたるべし。」

邊に隠れ有り。御一家をねらひ候よし。あはれ某上意を請け、即時に打滅し申すべしと、勢ひかゝつて言上す。清盛聞召し、こは安からぬ事共かな。其牛若は當座に誅すべき小冠者なるを助け置きぬる洪恩を忘れ、却つて此一門を亡ぼさんと工み、剩へ辨慶といふ曲めを相語らふこそ奇怪なれ。さあらば其方が望に任せ討手の大將たるべしとて、究竟の力者すぐつて廿四人、雜兵共に二百騎をぞ添へられける。廣盛悦び御前を立ち、軍勢を引具しそれよりも山科さしてぞ三重押寄する。さればにや、牛若君辨慶諸共山科の里に隠れ居て、平家を狙はせ給ふよし、御先祖譜第の御家人共聞付け次第に馳せ集る。凡そ百騎に及びけり。所へ廣盛大勢にて取りかけ、闕をどつとぞ上げにける。辨慶此由見るよりも、定めて是は但馬の大將廣盛が寄せつらん。某荒軋する其内に皆々用意せよやとて、長刀提げ門外にかけ出で、やあ只今爰へ寄せられたるは廣盛殿と推したり。かく申すは其方のお尋ねなさるゝ辨慶なり。まづもつて日外より某故に方々と苦勞をなされ、近比笑止千萬に存するなり。然るにいつぞやは御館へ參り御身の首を申しうけんと存する所に、幸ひ是までの御越し故先これまで出店をいたしたるに、早くも聞付け給ひ、遠路是迄あつたら首失ひに御出の段痛はしく存する也。何ぞ御馳走申さんが、先是に持合せたる長刀を振舞ひ申さん。望次第に味はひを心み給へと罵つて、かけ寄る勢に渡り合ひ片撃ぎにこそ三重難いだりけ一度は。

あんた辨慶——なんた
辨慶ともいふ。「なん
たわけもない」と
いふを涙辨慶にかけ
秀句なり。

念もない事——とんて
て。ひつそはめ——身體の
側面に近く引寄せ

り。武藏坊が荒ごなしに五十騎ばかり薙ぎ伏せられ、むら／＼ばつとぞ引きにける。其隙に味方の武士、我も／＼と用意して六原勢にかけ合せ、爰をせんとぞ三重戦ひける。去程に寄手多勢と申せ共、辨慶が働き故過半討たれて進み得ず、爰に六原の力者とさゝれし鳴瀧半平盛村、あぐばら馬之丞國かげ一陣に進み出で、とかく辨慶は我々二人が内ならでは、仕留る者はよもあらじと、廣言吐いて立つたりけり。武藏坊きつと見て、げに汝等は諸人にすぐれいか様力も餘程有りさうに見えてあり。とてもの事に辨慶と組打の勝負をせよ。去ながら汝等一人や二人はあんだ辨慶手に足らす。五六人も一度によつて組んで見よとぞ申しける。鳴瀧聞て、えゝそれは餘りなる力自慢、先づ我々が手練を見て其後廣言吐き候へと馳寄つて引組み、弓手へ捻ぢ馬手へ捻ぢ、やあ是でもゆかぬか／＼と汗を流してもみけれ共、辨慶ちつ共たじろかず嘲笑つて言ふやう、えゝいや／＼念もない事、それではゆかぬぞ。爰にすんとよい手が有るぞ。いで教へて得せんと、提げどうど投伏せ、なふ鳴瀧殿、なんとよい手でござらぬか。よく覚え給へと頭をちやうど殴り。扱もよう鳴る頭かな。御身は丞腹を立て、棒ひつそばめ駆寄るを、武藏鳴瀧を掴んで受受けければ、馬之丞が棒にて頭微塵に碎きける。辨慶大きに打笑ひ、おゝ是は見事なおはまりかな。敵をば打たで傍輩の

頭あたまを碎く棒ざんぼ三昧さんまい、必ず御無用むようとあざむけば、あぐばら彌々はがみ歯噛はみをなし、無二無三むにむさんに打つ棒を武藏潜かづつてしつかと取り、さあ此棒は辨慶が物なるぞ。早く渡せと言ひければ、寄手より又武者二人かけ出で、やれ其棒を取られては猶々なほ此方こちらの恥辱しおりなりと、三人もろ共えいや〜と、汗あせを流して引きけれども、武藏はいつかなぎく共せすにつこと笑うて、えゝ扱あつも揃うた弱者共かな。某が片手に持つたる此棒を取りかねて、二人三人が汗水にて其すう〜は何事ぞ。えゝしやまだるし放さぬかと、えいやつと引きければ、三人後あとへよろ／＼と轉まわびしを、さんぐに打ちければ落花微塵おちかわいじんになりにける。廣盛大きに驚き、とかく彼奴かれやつと懸合ぶけあひの勝負はかなふまじ。只矢やすくめにせよと下知すれば、畏おそれつたりとて精兵せいひや共、さし詰め引詰めさんぐに射たりけり。辨慶が鎧よろに立つ矢は、さながら蓑みのの如く也。いかゞはしけん武藏坊むさしよろ／＼としてどうぞ伏す。廣盛見て、扱こそ某が思案に違はず辨慶は仕留めたりぞと悦べば、軍兵共討取らんと駆く寄るを廣盛抑おさへて、あゝ暫まことにく、いで我子の孝養こうように某武藏が首取らんと、傍近く寄る所を、辨慶むくと起きてかい摑み、よう心安く死なうよな。おのれを討たんはかりごとく、首ふつと捻切れば、是を見て残る軍兵引色ひきいろになる所を、四方よのうへばつと追散おきらし、それよりすぐに牛若の御供申して奥州おくしゆさして下りける、辨慶が働き末繁昌の御吉相、千秋萬歳せんしゅうまんざいめでたし共中々申すばかりはなかりけり。

孝養こうよう一快樂がくらく。
引色ひきいろ一退却たいくせんとす
る様子。

右此本は我等持本の通ちがひなく板行致し候。初心稽古のため也。さればことぐく
かながきにして、くぎり、ふししやう、三味線ののりかた、ほどひやうし、三重、を
くりのしなぐ、秘密を残さずあらはし候。なをしんぐの口傳は筆紙のおよぶべきに
あらず。 かしこ。

山 本 角 夫

京二條通寺町西へ入町

正 本 屋 山 本 九 兵 衛 板

大
福
神
社
考

大福神社考

竹本義太夫正本

大呂一十二月の異名

荷前の使一十二月中吉日を選びて十慶八墓に貢物の初穂を奉御佛名一毎年十二月朝廷にて行はれし法會。實にすさまじき云々「源氏物語」世の人すさまじき事にいふなるはすの月夜の云々。錦鷲障一錦鷲を蓋ける宮中の御立。太平記一に「御船すでに二八にして金鷲障の下にかしづかれて玉樓殿の内に入り給へば」

雲を排きて空を見れば則ち天文清し、風をすまして水を見れば則ち川流平らか也。惡を退け國家を見れば則ち泰平なるとかは。故人のまなしる所かな。いでや人王六十一世朱雀院と號し奉るは、昌平二年の春霞晴間を待たぬ御陵に崩れ失せさせ給ひければ、一の宮豊日の皇子寶祚を保たせ給ふべきを、御年よろしからざるとて明け行く春を待つ程は、御后皇太皇后御代をしろし召れつゝ關白基經攝政にて事の儀式ぞやごとなき。賢所の御拜より御まつりごと私なく、すでに大呂になりぬれば荷前の御使立つべきとて、御陵毎の贈幣勅に任せてたて並ぶ。御佛名の満ての日は地獄繪の御屏風までいとこまやかに叡覽あり、大殿籠らせ給ひしが、實すさまじき物とかや、師走月夜の雲汎えて風に狂する木々の聲、蕭々たる夜の雨の、窓を撲つかと疑はれ、御寢覺がちなる所に不思議や音樂四方に聞え、先帝の御陵へ立たせ給はん荷前の御船、狂ひ出させ給ひしは不思議なりける三重次第也。暫く有て御聲をあげ、あら恨めしのまろが黃泉や、婆婆に有りつる其時は十善のたうへを踐み、玉樓殿の花に愛で、錦鷲障の月にたはぶれ、後世を知らざる命の終り、あな憂しとのみ

執柄一攝關をいふ。

三家一間院・花山・中
院の三家。

一人一攝關。

思ふ氣の、猶宮中に止まりて、中有的間に迷ひしが、不思議に佛の御名聞付け是まで顯はれ來りたり。こひねがはくは一の宮豊日の皇子を出家になし、跡弔ひてたび給へと、耿々たる燈火の影照り添ひて幣帛はもとの如くに立ち給ふ。君はとかうの宣旨もなく、玉體を打投げて御衣に落ち来る御涙止めかねさせ給ひしが、また御枕を離れ給ひ、扱あさましの御事や、誠に天子の御身にも、かゝる迷ひはある物か。明けなば皇子を出家を勧め御跡とはせ奉らん。さるにても今一度御聲をかはさせ給へやと幣に向はせ給ひつゝ、南無先帝出離生死頓證菩提と御廻向有り、やゝ額突かせ給ふ間に夜はほのべと明けて行く。内侍命婦のおもと人御簾をかゝげ參らすれば、執柄三家を始として諸卿冠の纓を並べ玉體を拜しかとよ、尊の下に音樂聞え、御陵への贈幣自ら動き出させ給ひ、かやうくの靈勅也。急いで皇子を出家になし、御跡とひて參らせあげよと勅諭ある。基經の卿謹んで、誠に縕言をかへし奉るに候へ共、是は正しく御夢にてぞ候らん。傳へ承る金剛經に一切有爲法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀と候時は、萬に頼なき事を夢の如く影の如く露電の光りの如くと候へば、御告なりとて頼まれず。されば夢を見候を其品十二に分ち候。是皆十二因縁流轉の道理に等しくして、其肝要をあぐる時は三の品に極り候。一つには正夢二つに

は妄夢、三つには思夢と申つゝ人心中におもんばかりの候時は、其氣胸中にむすぼほれ脾の臟苦しめ候也。さるによつて其思ひ一心の影こなつて必夢見候也。君打續き此比は御佛名を聞し召れ、叡慮陰氣に落ちさせ給ひ候故、かゝる御夢候と才辯貴く勅答有る。主上重ねていやとよ基經、まろが見だるは夢にてなし。あり／＼見し現也。せひ／＼皇子を出家になし、多くの御堂を建立し御跡を弔ひ參らせよと、御涙ともろともに再び宣旨有りければ、さしもの基經せんかたなく諸卿の方に打向ひ、兩度の論言何共勅答申し難し。但かたゞ／＼思し入るの旨有らば、今一度奏聞有り諫め給へと有りけれども、基經の申さるゝ上誰か一言いふ人なく、静まりかへつて音もなき所に、禁中守護の侍形部太夫秀國の一子俵藤太秀郷若年より武勇に長じ、十三歳より昇殿許され今年十九になりけるが、卿の御前に畏まり、近比高位高官をさしおき若輩者の東武士、千萬推參の至ながら仰に任せ言上仕候。先以て此たび靈勅の事何共愚意におち申さず。尤人死して中右に住し香を食すと申せ共、極善極惡無中有と候へば、極善の靈魂いかでか中有仕らん。先皇正に萬乘の御位なれば則ち十善具はれり。其上天照らす御末人王六十一世の賢王朱雀院と謚り奉れば、是神靈にてわたり給はずや。それ日本は神國也、其神德をふり捨て御出家あれとは候まじ。殊更靈勅有りし時、御寧の下より音樂聞え候よし、猶々心得奉らず。それ音樂を奏する事佛菩

薩の來迎ならでは候まじ。中有に迷はせ給ひしに何の音樂候べき。扱來迎の樂ならば虚空にこそは聞ゆべけれ、御辱の下にて聞え候は察する所爲の所爲にて候らんと、其理を盡し奏すれば、基經卿を始とし一座の諸卿手を打て、よろしき心の付所、尤是はさぞあらんと皆々同じ申さるゝ。關白基經六位を召れ、いかさま秀郷申さるゝ如く何とぞ子細の有るべき間、それ狩り出せと仰も果てず、御階の下を切落しあらはになして見てあれば、何かは知らず暗きより暗きに迷ふ盲人の、樂器を並べ座してあり。スバしれ者よと引出し、御前に引据ゑたり。時に秀郷大音あげ、おのれ何所の何奴ぞ。盲目の分としてかく禁中まで忍び入る、いづれの誰が手引なるぞ。サア眞直に白狀せよ。少も偽る物ならば、坊主頭を踏碎かんと怒らるれば、さん候私は四條あたりに隠れもなき八人の座頭の城雲とて、一人の業として、八人の役をなし興を催すものなるが、どなたかは存ぜぬ共かやう／＼に致せとて、大分お金かねを給はりて深く頼ませ給ふ故、内裏様やら禁裡様やら夢にも知らず參りし也。寒氣の時分長の夜を土中に座して候へば、持病の疝氣さし起り腰腹痛め候也。まつびら許して給はれと震ひわなく計也。秀郷をかしさたまられず。尤是はさもあらん。して又御幣かねの躍りしはいかに。但同類有りや／＼と尋ねれば、いや／＼同類とても候はず。是は女の髪筋をいくらも／＼もつぎ合せ、天井に細穴明け爰にてかやうに動かせば、さきにて御幣動はげ

あくちもきぬめ一乳
臭・黄口などいふに
同じく年少なる事に
いふ。あくちとは小
兒の口吻に生ずる小
疵をいふなり。

き候。此外様子は存じ申さず、御詮議相すみ候は早う去なせて給はれと、涙にくれて居たりけり。關白や御思案あり、いかにも鳴物靈勅はおのれが細工になるべきが、天井より髪筋おろし此幣帛に結び付けしが合點ゆかず。此義いかにと御詮議有る。藤太おつとりさん候かゝる一大事を存立つ義に候へば、あの盲目づれによもや知らせは候まじ。きっと推量仕るに、是は荷前の御使よく御存じ候らんと申さるれば、阿濃の中將つつと出で、
キア 粗忽なり秀郷、いまだあくちもきれずして此御大事にさし出、尾籠なり罷され。
して又 某存すべきとは何を以て申すぞ。藤太からくと打笑ひ、盜人といへば手を出す
と。扱は御邊に極まりしと言ふより早くとつておつぶせ、胸板をどつかと踏へ、コレサ中將先此荷使の御使は其方請取申されずや、然らば禁裡の御作法にて、其役たらん人の外指さ
すものも候はず。さすれば御邊が知る筈よ。何と知らぬと言はれうか。サア 有體を申され
よ。お公家方の御詮議は御思案過ぎて手間遠也。又武士方の物吟味は少し手ひどく候はん。
遅いと微塵に踏碎くかと一きめきむれば、ア、苦しや是なふ秀郷、爰をばそつと緩めてたべ。
いかにも様子を詳しく申さん。此たび將門朝家を傾け奉らんと、某方へ窃に來り、八方
より押取巻き異議をいはせぬ無理頼み、ぜひなく頼まれ申也。命を助け給はれと涙ぐみてぞ
申さるよ。基經打うなづかせ給ひ、扱は將門逆心とや。いよ／＼尋ねる子細あり。兩人共

いづな一派に類する
妖神にて之を使ひて
人を呪ひなごすとい
ふ。

竹の園一皇族をい
ふ。

に搦め置き禁獄させよと仰付けられ、秀郷を近く召れ、此體ならば築地に定めて一味の多
からん。一旦敵のはかりごとに乗せられ、一先皇子を三井寺にて受戒と偽りもてなして、
江州眞野の長者迄窺かにうつし申されよ。天下を望む將門なれば、定めて有所は知らせま
じ。萬に心を付けらるべし。豊日の皇子御出家と世間に沙汰の有るならば、敵の有所も顯
はるべし。禁裡は親父秀國と心を合せて固むる條、氣遣ひあられなきくと、すゝむる
智謀勇みぬる武勇の程こそ三重ゆゝしけれ。さる程に常州相馬大手助將門とて猛惡無道の
弓取あり。其生れ付異相にして殊には飯綱の魔術を行ひ、大地を潛り虚空を翔り水中火中
の自在を得る。世の人是に歸服して荒人神ともてはやせば、惡行次第に超過して何ぞぞ王
位を傾けんと、本國常陸を立退きて都近なる山陰に黒木の御所とて殿を建て、剩へ此比は
平親王將門と、自ら竹の園に登り世の有様を窺ひゐる。ある時將門百官を集め、此度某
朝廷を傾け一天を治めんと存立つ所に、早速駆付申さる段傍々もつてて祝着せり。追て
此勢を催し早々取かけ申さんが、しかし大將たらんものは士卒を損じ失はぬを是第一の秘
密とす。さるによつて我居ながら見事な智慧を出し、王位を失ふ手段を作り、阿濃の中將
光遠を語らひ八人座頭を忍ばせて、靈勅也と言はせねればそれを實と思ひてや、今日皇子
三井寺へ登山のよし、是計略の嘗る所、かたぐ道に待伏し先々宮を搦め捕られよ。此騒

夕暮の一言ふにかく。

當千一 謹當千。

日の岡崎一三條山上より山科に至る途中の時、温甲すべて甲冑を帶せし者のみなるをいふ。

難折一天氣の盛りて、某き事をいへば、こゝは箱柱を言へるならん。

ぎを幸に某内裏を打破り、即時に王位を奪取らんと、平の朝臣信西に三百餘騎を相添へて早打立てと夕暮の、鐘の鳴る音を相圖にて別れ別るゝ三重道直にげに武夫の心かな。かくて藤太秀郷は當千の家の子甘騎計に裝束せさせ、御免を蒙り鳳輦昇かせ其身は御跡に引添うたり。甥御籠愛深かりし上總の局長門の局、姉も妹も同じ色同じ姿の御隨身、弓押張り矢かき負ひ太刀脇挾み左右に立ち、君を守護し給ひけるは、誠にやさしき風情也。すでに鳳輦日の岡崎を越えさせ給ふ所に、十善寺の松原より混甲三百餘騎道を過つて立塞がり、是へ臨幸なりけるは一の宮にて渡らせ給ふか、供奉はどなたぞ、御輿を渡さるべし。子細有つて名を名乗らず、渡せと呼ばはつた。秀郷そ知らぬ顔附にて、ヤア緩怠也おのれら、當時日本に隠れなき俵藤太が供奉したり。皇子御出家まします故園城寺へ臨幸なる。汝等が留めて何用ある。蛆虫如きのへろ／＼武者千萬群り来ればとて、此藤太が小指一つに足るべきか。土足に疵のつかざるうち早くそこを逃げ去るべし。但しは命に死花咲き藤太が太刀風待ちけるかと、好む所の五尺八寸真向にさし翳し堅割胴切車切、高脛諸脇嫌ひなくはらり／＼と三重難いで行く。比は極月廿日あまりの雪曇り、暗さは暗し鳥羽玉の夜の軍の亂れ足、痛はしや長門の局歩み習はぬ道芝の霜折沓の裏をかき、立つかひもなき羽拔鳥泣くより外の事はなく、並みける松の下枝に辛さ譲りておはします、所へ旅人

雁は八百一諺「雁は八百矢は三文」の略。僅かの資本勞力にて價値ものを得る。

とおぼしくて、きがへかたに樽付けて破魔弓羽子板色々のつこも重しと行きけるを、御局暫しと呼びもどし、ヨリヤ下々おぬしは何處へ行くものぞ。みづからは都より江州眞野へ通る者、送りてくれよと有りければかの男ねぢ戻り、ハア女子の萬歳樂はて扱早う出られた。なふいかにも送つてやりたいが、こちは津の國難波の者、歌大津奈良屋に居たりやこそふみもなろたよ。確を、百日勤めて年取に在所へ去ぬる者にて有り、今に近江へ行く者が通らう程にと行過るを、御局重ねていやとよ我はさやうの曇しき者ならず、宮様方に召使はるゝ者なるが、君逆臣に襲はれ給ひ江州眞野へ臨幸ある、所に敵と出合つて皆ちり〳〵になりけるぞ。あはれと思へ民草よ、露取らせんとの給へば、男おづ〳〵傍によりさしのぞき見る御顔ばせ、此世の人共思はれず、いとあてやかに衣の香の薰り零るゝ御面影、田舎で見たる事はなし。そゞろ震うて居たりしが小洒には醉ふわんざくれ、とかく男は氣でせよぢや。雁は八百なんでもあれ口説き落してつれ下り、在所女にしてながめんと思ひ、扱お笑止や痛はしし、併御敵十方に満ちくてもはや跡へは戻られまじ。先此度は私等が在所へお下りあり時節を待たせ給ふべし。家は貧しう候とも某隱まへ奉らん。夜寒淋しう候はゞハテ我等が抱いて寝せましよと、お腰にそつと抱付けば二八餘りの一年も過る計のお年配、浮氣盛りや戀盛り、女子心のあどなさよ。賤が詞にほだされて、誠に民と言ふ者を初めて

氣の毒がり——自分の
心の不快なるさいふ
今の用ひ方と異り。

ゆひあひ一言合。

時一聞。

年取り物——正月を迎
ふべき物。

見しが、さりとてはほんに優しい美しい武士によろ似た者なれど、それがそちらとそれが
アノ、いやちや恐いとの給へば、賤の男何とも氣の毒がり、コレあまりに卑しめ給ふなよ。
此道ばかりは王様もこちとも情に隔てはなし、身共らが戀ぢやとて別に變りはござらぬと、
小腹こはらは立つ也氣を持たせ、オ、恐い在所おがたお下りなされていらぬ物、さかく近江へ行き給へ。
あら恐ろしや厭らしい關東くわんとうべいの剃りこかし髪ひげ面おもて共ともが取卷とりまきいて、あのゝものゝと言ふなら
ばなんば若くと一夜さの内に命があるまいと、荷物かた擔たたげて行く袂たま、じつと捕つかへて縛しばり付、
コレナフそれは胴慾どうよくな、ハテ此上はどうなりと助けてやいのと宣へば、彼男機嫌かかげを直し、然らば
御供申ごくわんさんが、いかにとしても御姿ごすの連つれには相應あうせず、先づ裝束そうぞくを脱ぬがせ給ひ是召めしめしされよ
と綿帽子、有合せしを幸と上を締つむめたる手拭てぬぐを、結ぶ片手に帶締おびめて裾きつ小短こたん立つたるは、
ぼつとりとしていとしらし。とてもの事にお詞ことわも今よりしては女房めいぼう共とも、こちのござれとゆ
ひあひの袖振合そでふりあはすも三重みえ縁えんなれや。とは知らずして人々は危うき圍かこを切抜きぬけて、やう
くとして小關越え山科近くさしかゝれば、討殘うしのされし敵の勢とつて返して追取卷おとしまきき時を
どつとぞ上げにける。秀郷驚く氣色なく、ハテ死にたがる奴原かな。そもそも先おのれら度々
の狼藉ろうせきいかなる望み有りけるぞ。但しは所の山賊なるか、年取り物が欲しいかと憎體きずたいに蔑きかし

忝あざむ

くも平親王將門位に望みこれあつて御旗揚げさせ給ふ故、宮の討手に向うたり。世變り時の移りけるは是天性の道理也。急いで宮に自害を勧め降参せよ。さなくば無體に奪ひ取らんと、抜きつれく切かくるを秀郷^{ひで}。嘘^{うそ}にて、イヤ性懲りもなき腰抜め。いでく暇^{ひま}とらせんと、鳳輦にかけ隔たり^{はざま}右手にあひつけ弓手になし、薙^{なぎ}りたて捲りたて切立てく三重追ちらし立歸りぬる其隙に、宮は落ちさせ給ひけり。秀郷今は心安しと靜々と立歸るを、信西すかさずとつて返し^{だまし}賺打^{まわ}に打付くるを、沈んで此方へ飛^と達^たへ横手切に薙^{なぎ}ければ、さしもの信西たまり得ず、跡をも見ずして逃げけるを、袈裟^{きさ}にすつばと打放し、かへす太刀にて首打落し、猶も進む奴原を東西へ追散し、宮の御跡慕ひ行く勢ひ獅子の怒りをなし、鳥獸を追て身を震ひ花に戯れし有様も、かくやあらんと書傳へ今の世迄も言傳へ語り傳ふる物がたり。

第二

年の内に云々—古今
集卷頭の歌。末句
「言はん」。
そめ—初と染とかく

年の内に春は來にけり一年を、去年とやいはん今年とや祝ひそめてき紫の頭^{かぶ}挿すてふ枝^{えだ}、
飴^{あめ}るかぎりに今宵こそ獨り寝ぬ夜^よことぶけど、妻持たぬ身は名のみなれ。爰に江州真野^{まの}
の長者^{ひき}の一人姫繼姫と申せしも、けふ節分の神參り雪の晴間を幸に乳母^{めの}計を伴ひて、忍び

やかにご囁くは、何祈るらん神垣や、馬場先近くなる所へはうり一人さしよりて、夢違ひの寶船お厄落しや厄拂ひ、御祈念〜と附添へば、乳母の女房心得て、初穂參らせ祈念頼むと有りければ、こと〜しげに印結び、お年は幾つ十六歳、殿御は幾ついや〜まだ嫁入はし給はずと、言はせも果てず小腕とり合圖の聲を立合せ、多くの宮づこ走り出で有無を言はせず引立つる。乳母の女房聲を上げ、コハ狼藉や何事ぞ、出合へ〜と叫びぬれば、いや喧い騒ぎ給ふな。かねて當社の御祭りそなた方にも知らるゝ通り、あけ十六の嫁せざる女初に参るを今日の身御供に供ふる也。もはや嘆きて叶はぬ事と姫君を引立て行く。乳母は詮方涙にくれ、なふお姫様暫く御最期待たせ給へ。今に迎ひに参らんと言捨て屋形に三重歸りけり。かくて宮づこ神前の御手洗川の岸陰に一間四面の床をかき、四方に幣帛切て押立て魚鳥果物繼姫を身御供に供へ刻限を今や〜と待居たり。あら痛はしや姫君は思ひよらざる身の難儀、死する命は惜しからねど跡に残りし帚木の、さぞや歎かせ給ふべしと、伏轉び〜泣くより外の事ぞなき。母は乳母が告ぐるにぞこはそも夢か現かミ、人目も分かぬ徒裸足姿あらはに馳付けて、とかうの事はの給はず、縋り付いてぞ歎かる。繼姫涙の隙よりも、御歎きはさる事なれ共、もはや歸らぬ死出の道、草葉に置ける末の露本の雪や世の中のおくれ先立つためし也。必ず歎かせ給ふなと、さも潔くは宣へ共、流石

荒磯波一不有にか
く。
そことなき一其處と
底とかく。

身の成る一實の生る
しかく。

別れの悲しさは、胸にせきくる涙川止かねたる計也、母は猶しも悲しくて。誠に夫の郡司殿身まかり給ふ御時は、ともかくにもなるべきと思ひ定めて有つれ共、そなた一人を老の身の杖に縋れる心地して、歎きながらも樂しびに十六の春秋を、蝶よ花よと守育て、人に優れし生れつき、天晴中宮后にも劣りはせじと悦びを重ね合る夫迎へ、一人並べて見るならば、草の陰なる郡司殿さぞや嬉しくおぼされん。いつかくと待つ甲斐も荒磯波のそことなき深き淵瀬に入れんとや。玉を歎く一人子を身御供に供へ母獨り、跡に残存へて歎き死ねとの事なるか。いかなる神の託宣にも氏子一人を千金ともかへじ。不憫に思ふとは神も僞給ふかや。恨めしの神心、あさましの浮世やと、親子は顔を見合せてわつと呼ばせ給ひしは、是ぞ哀れのかぎりなる。有りつるほふり神官。げに御道理至極やと共に涙を流しけり。さりながらもはや歎きてかへらぬ道、はやとくと御手を取り情なく引退れば、母は猶も縋り付き、心無しとよ方々よ。若木の花を先立てゝつれなく殘る老木の花、身の成る果を誰あつて母共親とも呼ぶべきぞ。とても許さぬ道ならば自ら共に沈むべし。放ちはせじと抱き付き聲も惜まず泣き給ふ。姫君餘りの悲しさに、ア・愚か也母上様、人間無常の道理は妾一人に限らぬぞや。必ず歎かせ給ふまじ。自ら故に御命共に捨てさせ給ひては、親に先立つ不孝の上又ぞや不孝重ねつゝ、冥途の障りも恐しし。只とに角に思し切り、

早く歸らせ給へやと詞清しき物ごしも、涙の雨に上疊り、目くれ心も消え／＼と伏沈みて
こそ歎かるれ。然る所へ藤太秀郷度々の難儀は切抜けしが、長門の局を見失ひ宮姉君の御歎
き、兎角せし間に夜は明くる、人目繁しと山傳ひやう／＼彼處に來りしを、宮づこ共見咎
めて、是はどなたの神輿なるぞ。何の爲此宮居へは昇きこみしと、とが／＼しう怪しむれ
ば、藤太眞先に進み出で、ヤ狼狽奴の馬鹿面共、是は當今第一の宮豊日の皇子にて渡らせ
給ふ。いさゝかの御物忌にて眞野の長者へ臨幸なる。おのれら當社の宮づこなら御道しる
べ申すべし。急げ／＼と睨めつくれば、母は涙にくれながら、御前に走り出で、何宮様と
や忝や、自らこそ眞野の郡司が配偶にて候が、代々の御役人と思召れ、假初の御物忌にも御
輿入させ給ふ事、世に有難くは存すれ共、一人の姫を當社の神事に供へ、只今命をとられ
候。然れば穢れし所をば皇后になさんも勿體なし。此義如何と涙にくれさし俯向いてゐら
るれば、秀郷一圓合點せず、何共是は心得ず、先神法はともかくも凡そ禁中の諸役人、死
罪にもせよ流罪にもせよ、訴へにより關白公其沙汰仰付けらるゝ。どなたに御免を蒙りて人
の命はとりけるぞ。惣じて神は正直を表とし慈悲なるを以て神と仰ぐ。して此神は一つの
御代いづれの君の勅により、神靈とは崇めるぞ。垂跡はいかに／＼。神祕や有らん承ら
んと反打直し問ひかくれば、宮づこ共震ひ／＼、さん候垂跡神祕はいさ知らず、百年計以前

とつこめー罵詞。
神名帳一延喜式に出

服しー食ひ。
遮つてー無理に。

やはらかなー「しや
れたまねをして居た
な」といふ程の意。

とや此山本の川面にて、若き女を幾人か神風に吹取られ、人民歎き煩ふ故所の者共打寄りて、定めて神のお咎めならんとか様に社を建立し、三上大明神と崇め、此節分を神事として身御供を供へ燎火をたき、御湯御神樂を奏し神慮をすゞしめ候へば、我々が計らひならず、正に神託傳授の神祇、ぜひ／＼古例に任せんと日々に申上れば、藤太大きに氣色を損じ慮外也とつこめら。普天の下率土の内王地にあらぬ所やある。殊更日本神道の事神名帳に明白たり。然共此神は遂に其名を聞及ばず。いづれの御代に奉幣あり大明神とは崇めけるぞ。ほのかに聞く此神道に權神邪神の差別有り。かやうに咎なき人を服し人心を苦しむるは、邪神の邪曲大惡神にてあらざるや、併し遮つて食はんといふ物を止むるも是又殺生也。然る上は、おのればら年比日比安閑に、妻子を養ふ神恩也。サア／＼身御供に供はるべしと、鐸元寛げ追立つれば、是は近比御無理也。許させ給へと涙ながら皆々床にぞ直りける。秀郷くわん／＼と打點頭き、お、よい合點／＼膳立よし料理もよし、御年忘れと思ひ儲けの爲に來りしと、石の鳥居の片柱手元輕げに振上げて、疊みかけ／＼祠を微塵に打碎く。時に山鳴り川浪は砂を巻上げ卷下し、黒雲覆ふ其中に廿丈計の百足の形、焰を吹立て水底に入れれば波風鎮まりぬ。秀郷莞爾と打笑ひ、おのれ年來柔らかな、女食ひし其天罰今月今日報いしな。思ひ知つたか思ひ知れ。是でもうろたへ長居せば、向後藤太が神官勤め堅い鳥

孫廟一廟の外側の今
一段低き間。

捕とらんと一原本ノ
萬石一殿堂なごの壇
の上方に用ふる石。
うんざい一人を罵る
詞、有財錄鬼の轉
ほでぼし一臉節。

居を参らせんと、かしこへ投捨て立つたりしは、偏へに摩薩首羅王の荒れたる氣色もかくやらん。長者親子は悦びて是ぞ誠に氏の神、あな有難や尊とやな、君々たりしるしそと、秀卿を伏拜めばオ・めでたし〜と、長者親子に案内させ、宮づと共に鳳輦昇かせ眞野が館へぞ三重移しける。其比禁裡は宮御出家と偽りて諸卿を始め在京の武士、残らず内裏に相詰めて四門を固め守護せらる。中にも形部秀國は老武者なれ共古今の勇士、殊には大將給はつて、清涼殿の孫庇にぞ相詰めらる。拵夜巡りの武士共は、十騎廿騎卅騎役所々々を馳廻る。何としてかは忍びけん平親王將門は、紫宸殿の御庭に入り仁王立にぞ立つたりける。夜廻の武士怪しみて前後左右よりおつ取巻き、何者なるぞと咎める。彼男物をも言はず、握拳を振上げて片端廻り廻せば、逸男の武士十四五騎手の下に打伏せらる。跡にひかへし鎧武者、七八十騎おつ取巻き捕とらんと犇け共、只大山を押す如く動く氣色はなかりけり。軍勢共肝を潰し是は不思議と身を悶き、撃ち倒さんとする所を一度にくわらりと投倒せば、据石捨石萬石或ひは築地門柱に、胸打ひさがれ頭を割られあへなき死をぞ仕たりける。相馬眼をくわつと見開き、尾籠也うんざい共、うぬめら如きのほでぼしに此將門が合ふべきか。命知らずの愚人めらびつくり共動いて見よ、息のねを立てたらば踏殺さんと怒るにぞ、平親王將門と名を聞くさへも恐しく、死残りたる者共も、態とひれ伏し目を閉ぎ死したる

すしな一粹な、殊勝
な。さぞくの云々一索早
く足さきをする事

千度の説一中臣の説
一千度よみて新りし
御札。

體にて居たりけり。將門彌氣に乗つて豊日の皇子は出家する、次手に天子を取て流し我帝王と仰がれんと、猶奥深く切込みしは凄じかりける勢ひ也。元來將門案内は知らず爰を跳ね越えかしこを飛び、或は樓に攀登り御階へを打越えて、清涼殿にさしかゝり玉座はいづくと立つ所を、秀國すはとやり過し、後ざまにしつかと抱き、何者なるぞと引止むれば、すしなおのが問事よ。平親王將門なるはと言ひもあへず、中に提げ七八間行く所を秀國さそくの足を踏直し、なに平親王將門とや天命知らぬ無道人、此秀國が有らん限りはならぬさせぬと引すり出す。將門進めば秀國は折を窺ひ組伏せん、打倒さんと諍ひける勢ひ龍虎の洞を穿ち山を崩すにことならず、され共相馬力優り、片手もぢりにとつて投げ首搔かつて捨ててげり。惜しかるべきは年の程五十二歳のタベの霜終にむら消え給ひけり。將門いよ／＼勝に乗り、あら心よや面白しと、太刀取直しみり擔げ御簾間深く切つて入る。不思議や千度の御祓忽大日光と、影照變つて拜まれ給へば、宮中甚だ光渡り、くるり／＼くるり／＼とくるめき渡る眩さは、朝日を頂く如く也。さしもの將門眼を明くべきやうもなく、度を失ひて居たりしが、エ、口惜や腹立ちやと、猶も御殿にかけ入る所に、有難や日光又もとの御祓となり、御箱の内よりも白羽の征矢數千筋あらはれ出で、雨の如くに三重射かくれば、せんかたなくも將門は行方知らず逃げ失せけり。主上を始め奉り關白基經百官百

寮、虎口の難を遁れ給ふ。是神徳の妙なる所、有難しき神と君との道直に、たえずたふたり日の本の水上清き五十鈴川、流れ流るゝ細石、巖となりて苦のむす迄、かはらぬ御代こそめでたけれ。

第三

平親王將門はいかなる所存有りけるにや、又改めて隱家を江州三上に移さんと、三百餘騎を引具し猶山深くわけ入つて、爰やかしこと見立つるに、野洲川上に一つの嶮岨有りけるを、是究竟の城廓と有所定めぬ柴の庵、結ぶとばかり草深み、岩根の空に枕をそばだて、苦の庭に袖を敷き、明け行く春を待ち居たり、將門士卒に打向ひ、俄に居所を變ふる段さぞ不審しと思ふらん。子細は某去んぬる夜禁中に忍び入り、天子を失ひ申さんと無二無三に切込む所に、神力の擁護にや宮中光耀きて、何分眼開かれず無念ながらも立歸る。是を見彼を思ふ時は、とかく天子に打向ひ劍戟の勝負なり難し。何とぞ生捕とつて流し世を治むるより外はなし、さりながら天下に名高き依藤太秀卿が父、形部の太夫秀國は討取たり。然る上は憐藤太定めて我を狙はんと、其妨げを慮ばかりそれ故居所を變へける也。扱てれに付豊日の皇子遁世有りしは僞にて、此江州に忍ぶ由かたゞ姿を扮しつゝ、何とぞ窺ひ

からせ一揆させ。

申さるべし。たとひ有所を見付けたり共構ひて殺す事なけれ。舟をしつらひ流すべし。必
ぬかるな方々と、河内の判官定盛に手廻を相添へて在々所々をぞ三重からせける。とは
知らずして秀郷は、長門の局行衛なく紛れ失させ給ひしを、姉君深く數き給ふ御物思ひを
察しつゝ、若も逢瀬や有りなんと、夜半に紛るゝさゞ波や、打出見れば白妙の雪を懸けた
る長橋の此方にこそは着きにけれ、時に不思議や波立騒ぎ寒風梢を吹折て物凄じと見る所
に、橋上に横たはつて大蛇の形ぞ臥してげる。弓と矢持せし戸川の九郎、あら恐しきいふ聲
の跡なく倒れ息絶えて、更に性根はなかりけり。秀郷近々と立寄りて、扱珍しの生類やと
能々見れば、兩眼は只朝日にことならず、二つの角は冬枯の森の梢にさも似たり。黒鐵の牙
上下に生え、震へる舌の紅は炎を吐くかと異しまる。元來秀郷動ぜぬ男大蛇の胴中しつかと
踏へ、湖水を眺め悠々たり。大蛇は怒れる氣色を顯し、鬼一口と飛んでかゝるを秀郷得た
りとかい潜つて、大の喉下しつかと抱き左右の腕はちげればちげれ、腕も拳も折れよ碎け
よ、呑まば胴腹引破り、出なん物をと思ひ切り、しめ付け／＼勵みあふ。大蛇は八萬四千
の鱗逆立て振立て、水中へ取て入らんと背を立つる鱗の音はさら／＼、踏む足音はどう／＼、どう／＼さら／＼どう／＼、とんどろとどろと踏む足音に、さしもの行
桁橋柱崩るゝ如く見えにけり。秀郷もとより無雙の大力少のたゆみを見すまして、手繰り
らけねばちづれら
ぎれるならちぎれ
よ。

寄せんとかい摑むを却つて大龍藤太を纏ひ、逆巻く波の引く潮に入て形はなかりけり。轉び臥たる戸川の九郎漸心や付たりけん、自脈とる手を直様に弓と矢持て立上り、君は何處にましますぞと、呼べど叫べどおとづれは、松に言問ふ白鷺の鳴くより外はなかりけり。戸川漸涙を止め、扱は大蛇にとらはれて深きに沈ませ給ふよな。よし／＼存へ證もなし、只御供と狂ひしがいや待て爰は分別所、某お知らせ申さずば眞野にかくこは御存じなく、落失せ給ふと思されん。生きてかひなき命なれ共、一先歸りともかくも成行く果をきはめんと、思ひ定めて涙ながら、此御弓は一生涯御身を離たず常々の御戯れにも、身まかりなば棺に籠めよと候へば、是より手向け奉ると漲る波に言傳て、歎きながらも歸りぬる心の内こそ三重哀なれ。かくて秀郷夢となく現心と分け難く、龍の都に入海のおぼつか波の卷遙心細くも行く所に、日比手馴れし弓と矢の風に搖られて流れ寄る。秀郷やがて拾ひ上げ、さるにても此弓は正しく戸川に持せしが是迄來る不思議さよ。扱は九郎も我如く此海水に沈みけるか。不憫の者のなれる果淺ましの我身やと、さしもに剛なる秀郷も渡り比べる三瀬川、涙にくれて佇みしが、おくれたり迷うたり、弓矢取る身の心の的死してもよもや逸しはせじ。命とられし恨の一矢大蛇が正中射通して閻魔の帳に訴へんと、思ひ込うだる勢ひにて、波路三重遙かに行く道の末は何所と白波の立重なれる築地に、樓門高く美を盡

みづからーおのづか
らとあるべし。
こヒリ一様(たるき)
の端の金具の飾。

六宮の粉黛の長恨歌に「六宮粉黛色」
一白樂天

せり。秀郷聞ゆる不敵者、案内もなくつゝと入り、宮中を眺めやるに瑠璃の砂厚うして、玉を切敷く敷瓦、落花みづから纈紛たり。朱樓紫殿玉の階、玉の欄杆飾りよく、金をもつて小尻とし、銀の柱照耀き、其壯觀綺麗といふもあまり有り。そもいかなる所ぞと暫く休らひける所に、怪しげなる男一人御前に畏り、誠に客人の御入観感甚だなめならず、先々殿に御入あつて御休息候べしと、申上れば秀郷一禮にも及ばず、シテ先づ爰はいかなる所候ぞ。さん候大海龍の都ご答ふれば、秀郷驚きこはいかに、龍宮城の習ひには死人を忌むと聞きつるが、かく請待に及びぬるは、扱は某未だ存命なりけるな。珍重／＼満足せり。さあらば參上申さんとやがて客位に直らる。左右は紫衣の官人共威儀を正し參内す。前後の官女は銚に海底の珍物をさも堆高う盛り並べ、善を盡せし饗應は粧ひすぐれて見えにけり。暫く有つて大龍王花の姿の羅綾を飾り、邊眩く出給へば、六宮の粉黛は、顔色無きが如く也。やゝ身じろきて傍に寄り、誠に遙々の波間を越え是迄入らせ給ふ事、世にも嬉しく侍る也。恥かしながら自らは此水底に年久しき龍王の一人姫ぱりてい神女と申す者、抑此龍宮城開元此方二千餘廻、めでたき都なりけるを、此五年はいかなれば地を争へる敵あり。龍城全う安からず、剩へ父大王敵の爲に失て、残るは自ら一人也。さるによつて神國の武威を頼まんと其ために、貴賤往来を試し見るに主様程な武士はなし。哀とおぼす心有らば

せき弦一巻きたる糸
に満なひき漆ざかけ
たる弦。貞文雜記に
よればせきは關とい
ふ地名よりふに非
ずして、弦に胡糸を
巻きしひねり目の戻
るを防ぎ相應に満れ
ては弱る故漆にて塗
りて防ぐ心なれば、
繩弦とかくなりとい
へり。

食ひしめらし一弦を
口にくはへて濡らす
なり。

平野高根一比良の高
根。

仇をとりて龍宮の惱みを助け給はれと、涙ぐみたる目遣ひやとんともたれて宣へば、荒木の松の雪折れや、秀郷色に絆をうたれ、それ何よりも安い事、某かくて候上は必ず氣遣有るべからず。たとへば敵鬼王の勢ひあり共、藤太めが矢先にかけ、龍宮安穩ならしめん。若仕おほせなば日の本へ具し参らせ、わが女房に仕が、それが合點で候かとぎごつなげに宣へば、姫君顔を打赤め、扱も／＼客人のぬれにうつらぬお詞や、去ながら思はぬを偽かざるあたよりは、實な戀こそ嬉しけれ。自らも下紐を解け参らせ度候へ共、龍宮城の習ひにて餘國の人と枕を並べ、契りをかはす事はなし。許させ給へる有りければ、秀郷重ねていやさ爰にて添はんと言はゞこそ、龍神咎めも有るべけれ。我朝におはせんを誰か咎め申すべし。いざゝせ給へと手をとれば、エ、沒義道なお人ぢやは。目の前大事をさしおきて心に染まぬ戀衣、染むると色は候まじ。敵を討て其後はともかくにもなり申さん。先々敵を討てたべ。スハ刻限も程近し、あら恐しと龍神は上を下へと三重 かへしあふ。され共秀郷少も騒がず、日比好みし五人張、せき弦かけて食ひ濡し三年竹の節近なるを、十五束三伏に饑の中子筈本迄、打通たる大の雁股、只一手をば手挿みて今や／＼と待けかけらる。

平野高根の方より物こそ怪しと鏡ひより、能々見れば扱いかに此比三上の麓より追出したる蠍蛇の形又こそ顯れ出たりけれ。秀郷から／＼と打笑ひ。何やらんこそ思ひしに扱は

忽ち一立ちにかく。
忘るゝばかり一十分
に引絞る形春。
弓を返す一矢が弾き
返るといふ。

おのれがなす業な。毒虫の分際にて障碍をなさんは推參也。され共矢比も遠ければ今暫く
と待つ所に、不思議や龍宮震動し大風大波忽ちに、渦巻上る水煙雲と成雨と成、龍神現は
れ悪虫を寄せじ入れじと三重戰ひけり。秀郷矢比やよかりけん、忘るゝ計引絞り能引て
ひやうど射る。其手應へ黒鐵を射るが如く筈を返して立たざりけり。頼む所は矢一筋南無
八幡大菩薩と同じ矢壺をはたさ射る。此矢肩間を誤またす喉下迄射抜いたり。蜈蚣は射ら
れて安からず、眞一文字に飛んで懸るを飛遠へてはたと切り、返す太刀にてちやう／＼
ど切て離せば、波風も治まる都と成にけり。秀郷悦び大音上げ、さしも龍城妨げぬる毒虫
を討取たり。龍女は何處にましますぞ。契約達へ給はずは、いざ日の本へ渡り給へと有りけ
れば、神女悦び現はれ出で誠に武威の矢先を以て、龍宮靜謐なりける時悦び參らせ候也。
自らも幾程か君が切なるお心に、迷はぬにてはなけれ共心に叶はぬ事あれば、先此度は許
させ給へ。遠からぬ内日の本にて、必見みえ參らせんと言ふかと思へば水の泡、消えて形は
荒磯の波どう／＼と水庭に有りつる玉樓玉殿も、其儘もとの橋上となりて「み居たりける。
秀郷あまり心ならず呆然として立たりしが、傾く日影をつくづく見て、扱は暫の現の隙日
數立ちしも程知れず、先は長門の御局より宮の御事氣遣はしと、波を見捨つる村鳥の飛ぶ
が如くに 三重　歸りけり。戸川の九郎光定は辛き命を助かりて、漸々眞野の御所に着き、

秀郷の入水の躰委細に申上げければ、宮御涙と諸共に、我落人の身となりて萬に便なけれ
共、藤太一人を頼もしくさりともとこそ思ひしに、扱ははかなく成けるかと御衣を濡らさ
せ給ふにぞ、上總の局眞野親子共に、袂を濡らしける。折節春を節季候と、山草かさす男
共數十人込入りしが、先に進みし荒男覆面ちぎつてつつと出で、是に渡らせ給ひけるは豊
日の皇子成けるな。平親王將門より河内の判官定盛が御迎に來て有、遁しはやらじと亂れ
入る。光定軀て立塞がり。勿體なしあのれら、俵藤太秀郷が守護致し家來戸川が控へしが、
それでも汝等が請取るかと討て出れば有つる侍、戸川が跡を防ぎゝ亂れあひてぞ三重は
げみぬる。隙を窺ひ河内判官宮を生捕り奉り、行方もなく失せてげり。かく共知らず戸川九
郎彼所を切抜け立歸れば、長者親子も御局もかうくなるはと宣ふにぞ、光定堪らず馳出
るを、後れて歸る郎等共先暫と押止め、宮は虜とならせ給へど、天威に恐れ奉るにや御命
は取る迄なし、聞けば直様淀伏見宇治川なんどの邊より釘付の舟をしつらひ流し奉る由風
聞ず。何とぞ伏見の川傳ひ、御跡慕ひ給ふまじやこ申上れば、光定聞いていかにも御供申さん
が、只今直に立ち給はゞ又ぞや淀か伏見にて、敵に出来給ふべし。然ば女中の御供申難義
の上の難義たり。とかく敵を退けて後より御下り候べし。只御命だに候へばお舟はいつで
もこなたの物、先々今宵は年とりて目出度く御立遊ばせと、光定祝ひ奉れば然らば汝とも

かうも能比知らせ參らせよ、いさ先かた／＼稻積まん。明日は長閑き三重

つぐ姫道行

ひめ始一飛馬始、告事始、廻始等諸説あり。
かざんで一門出の音便。
長門の局一原本のまゝ。上總の誤なるべし。
白波の一不知にかく。白波は盜賊の異名。

四方の春開き初めぬる初曆、吉書始めと墨黒に濃くも色よく染めなして、着衣始、ひめ始、弓始、舟乗初、馬の乗初、旅始、かどシでよしと壽きて、櫛取初むる初島田、結下髪の御所風は、今御身に似氣なしと、互ひに直し直されつ、長門の局繼姫は、母諸共に行く道の案内はいさや白波の立ちもしつらん恐しと、戸川の九郎其外の武夫少々具せられて、御館を忍び出給ふ、御有様こそ唯人なれ。まだ仄暗き岩戸關、明けもやすらん雲の根の、紫だちしそなたより梅の開くる音遙か、千里の外も静かにて、ア、よい春の景色やと、あと振返り眺むれば、山は朝日に化粧して面影寫す鏡山、見えもわかぬを誰が呼びて、名にし近江の名所や、比良の高根の初綠、小松うみだす薄霞、晴間を羽搏つ諸田鶴の、八千世を籠めし竹生島、浪また浪に隔たれど、同じ流れを瀬田の橋、渡りぐるしや、此處こそよ、往來の人を渦巻きて、深き思ひに沈みぬる、水を見るさへ恐しく、手をとり又は目を閉ぢて、走り過れば石山や、歌お寺の鐘の音を聞けばの、／＼、風に／＼ヨイ、つれてのナ、鳴る音の末はこんご、／＼と告げくる、春の心や物の音も、道も艶の苔清水、人は若井と掬

大汽一達ふにかく。
粟津一達はずにかく。

葛葉の里一男山の南
方にあり。

べ共、我は別れの水に立つ沖の澤標木よ、明暮と流され舟を轡化びて、乾く間もなき袖の
裏、堅田に通ふ舟人に問へば答ふる御行衛、大津と言へば嬉しきに粟津の森と戯れを言う
て過るが憎てさに、睨む目元の露涙、睫毛こさぬを見てとりて、御いとほしと繼姫は、あ
れ／＼三井の古寺より、此方の方を御覽ぜよ。春を飾りて幾千代と、連理の松竹比翼の下
羽交重ねに祝ひしは、世界の戀を一里へ、よせて商ふ所とて男結びの眞柴垣、結ひ立られ
し浮節に、二上り歌沈み果てぬる身の憂き勤め。枕よせ／＼契りはあれど、君は來ぬ／＼來ぬか
の、お連れなり共見まほしや。ア、憂枕我も寝る夜やあらんと、面恥かしき笑ひ顔、襟に包め
ば御局我は枕の有りながら、君が別れを慕へばや誰と伏見の夢もないもの、ありし昔は淀
鳥羽を寫繪にこそ見もしつれ。今は自ら杖行膝笠をたよりに雪霜や、霰霧に袖朽ちて、追
風寒き夜もすがら、神も佛も世も人も、恨み葛葉の里過ぎて、行けば岩間に波越ゆる渚の
狩の歸る里、渡り比ぶる渡邊や大江の岸にぞ着き給ふ。

第 四

扱も江州園城寺は阿字顯密の道場、殊更三井の玉水を代々の皇子の産湯に捧げ、寶祚安全
民安き目出度き靈場なりけるとて、諸人尊み奉る。時なるかな初春五日朝六つ過ぐる比か

とよ、當番の若僧共御燈をかゝげ莊嚴し、御庭を清める所に、不思議や目なれぬ寶共講堂の前に飾り、誰が捧ぐとも知れざりき。番僧共肝を潰し、一所にさし寄つて不思議な事が有る物かな。宵の六つより明六つまで懲門は固めて置く、外より來べき様もなし。地よりや湧きけん天よりや降りけん、是たゞ事にてよもあらじ。とかくは下にて濟まぬ事、急ぎ訴へ申されよと、阿闍梨にかくと告げけるにぞ、御堂の前に御出あり、具にこれを御覽するに一通の添文あり。何々。今度龍宮城都を爭ふ強敵あり、滅亡既に遠からぬを藤太秀郷の弓勢にて、龍城泰平なりける事諸龍の喜びこれに過ぎず、よつて武功を報ぜんと十種の寶を送り畢んぬ。中にも一つの梵鐘は自ら成佛の爲め當寺へ寄進し奉る。法味をなしてとぶらひ給へと、読みも終らず阿闍梨御手を打たせ給ひ、さてく稀代の事どもこれ佛法の一不思議、有難し／＼、是等の趣き秀郷へ早々届け参らせん。去ながら此比は朝廷のお騒ぎ故、宮様を守り奉り、當國眞野に深く忍びてまします由、窃かに使を立つべきなり。さて今日は最上吉日、鐘の供養を遂ぐべき間、在々所々へ觸をなし、人夫を集め急いで鐘樓へ引上げよと、仰付けられたりければ一々次第に三重觸れにけり。此事よもに隠れもなく、近郷の老若こは有難き御結縁、鐘の綱手に手をかけて、二世安樂を祈らんと皆々御寺に相詰むる。彌勒院の玉若丸佛智坊の八重若、さも清らかに立出でて、采おつ取つて引

立つを見捨てゝ一春
霞立つを見すてゝゆ
く雁は花なき里に止
みやならへる(古今)

いづれあやめと源
平盛衰記には源三位
頼政の作、沙石集に
は梶原三郎の作と傳

へたる歌「五月雨に
沼の岩垣水こない
づれあやめと引きぞ
わづらふ」(沙石集
のは小異あり)共に
金葉集(さみだれに
沼の岩垣水こなて蘿
がるべき方も知られ
ず)によりて作りし
話ならんといふ。

今一聲の一行きやら
で山路暮しつ郭公今
「歌の聞かまほしさ
に(拾選)」

かせけり。歌や引けや引け春の始の初子の日、君に引かれて萬代と松吹く風もエ、松吹く
風もうらやかに、山より山に引く霞立つを見捨てて行く雁金、暫し止まれ暫し待て、飾り
松引く綱も引く、若菜引く野の花を見しよ見せう程に届く聲か、呼べどつれなや雁の傳、
引きは返さじ武士の矢走を過る越の海、帆を引く舟の其跡にさつと引たる細波、引くにつ
れだつ水の泡消えて一度引く虹は、西日眩き眺めなり。扱夏川に引く網は袂涼しき小村雨、
紫そゝぐ杜若、いづれあやめと引きやわづらふ濡色を、分けつゝ行けば長繩手、舟引馬引車
引ひく牛も引く、綱を手繕りて打つ鞭は、歌ヲイカケ中の綱見事よう揃た。やれ中の綱子共、聲
をかけぬか時鳥、今一聲の聞かまほさに夏木立、草も搖がぬ暑き日は蜘蛛の巣をひく軒の
端、風鈴ばかりが涼しくて、風蘭常に香を搖ぐ、風の薰りにつれて聞く、田草引く女の揃
へ歌、聲を比べて秋近き景色の森に鳴く蟬の、涙の露や染めぬらん。下葉は色づきて、
さながら秋の始め也。歌たそかれは踊り子共の身振や髪のしなぐ、振袖は姿かいとる振
らぬは淺黄の帷子、嘗世塗笠通し紐、しやなら／＼しやなら／＼と踊り浴衣の袖ひくな。
袴は引く共帶ひくな。寢もせぬ帶の解けなば、他に浮名の立ちやせん。仇名立つ共よしや
只、來よこ言うたが嬉しくて、眞木の板戸をひかで待つ間の、さても來ぬ夜はとけしなさ、
鳴子引く屋に言問へば、雲棚引くと告ぐるにぞ、待つ夜の辛さ腹立ちて、枕引き寄せ具

牌もうけがや一戀せ
じと御手洗川にせし
みそき神はうけずも
なりにけらしも(古
今)。
降りみ一神無月ぶり
みふらすみ定めなき
時雨ぞ冬のはじめな
りける(後撰)。
すこと一秉翠か。

つに、嫌ふ心のはや嫉刃引きもわづらふ折々に、己れ計が露こ寝て、色美はしき朝顔は、
引てほかしてかなぐりて、捨てばや水の引きがてにふつつと思ひ切るべきと、誓ひを立て
し祈る戀神も請けずや神無月、降りみ降らずみ定めなく時雨るゝ冬の始には、猶戀しさの
いや増り、思ひ重なるゆかしさを、せめての事と引寄せて抱いてしめたる心をば、三筋の
糸に調ぶればつれなや松の木枯しは己がすとに引消して、憎いばかりか稀に逢ふ囁盡き
せぬ闇の内、こかく許さぬ、歌鐘を又撞けばエ、涙の別れヤツタつれなけれ共待つ宵は、心
だよりになる物ぞ。今一引きと聲をかけ力を添へて勇むれど、大盤石を引く如く、少も動
く氣色なし。多くの綱子音頭取り、寺中の僧俗諸參詣是はいかなる事やらんと、各々不思
議をなしにけり。然る所へ秀郷は若黨少々引具し使僧と打つれ來られしを、阿闍梨早くも
御覽じ付け、扱も久しや藤太殿先は變らぬ御重年めでたく存候也。それに付かやうの
子細にて、龍宮城より御自分へ様々の贈り物、相届け申さんため申入候所に、早速の御入
寺愚僧も満足致したり。誠に武士多き中に武勇に優れ給ふ故、珍敷龍の都御一覽候上か
る寶を得給ふ事武運に叶はせ給ふの所、類稀なる御働き、ちと御物語承らんと有りければ、
さん候某義不慮に龍宮世界に至り、毒虫退治仕り弓矢取つては稀有の働き致せ共、宮を奪
はれ父を討たせ世に口惜しく存するなり。其上御局長者親子家來戸川を御供にて、御跡慕

ひ給ふ由傳へ承り候故、追馳け奪ひ返さん爲既に打立候所に、使僧に預り罷越候也。只今
の折柄なれば寶は御寺へ預け候。先々宮の御行衛心許なく候へば、罷向ひ候條御命恙なき
様に、隨分御祈禱有るべしと、言捨てゝ立給ふを阿闍梨重ねて袂を控へ、數々の御寶いか
にも預り申すべし。併し一つの梵鐘は當寺へ寄進と候故、鐘樓へ上げんと今朝より大勢立
寄り引く所に、いかなる故にや地を離れず、そなたは聞ゆる無双の大兵ちと御力を添へて
たべ、偏に頼むと有りければ辭するに及はず秀郷、安き間の御事ご弓手片手に綱をとり、
えいや／＼と引きければ此鐘已れと鳴出し、苦もなく鐘樓へ上りしが、龍王忽ち現はれ出
で秀郷に打向ひ、誠に申交しし如く御言の葉の捨て難く、再び現はれ參りしかど、是は浮
世の假の姿誠は勢田の長橋にて見候へ申せし大蛇の形、遂に隠れのあらざればとかく妹脊
の中々に、添ひ果て申す身にしもあらず、必おぼし切てたべ。扱此十種の寶物は龍宮代々
相傳の目出度き寶成けれど、弓矢の恩を報ぜん爲此土へ渡し侍ふ也。又朝敵將門は當國野
洲川の川上に、深く忍びて有るぞとよ。急いで勢を催ほし今宵夜討に打ち給へ。自らも共
々に力を添へて參らせん。早く思し立たれよと、勧め給へば秀郷も心よくうなづき、オ、
よくこそ知らせ給ふ物かな。朝敵といひ親の敵有所を存する上からは、即時に討取申さん
と、基經卿の御方へ忍びやかに人を走らせ、京勢を待つ其隙に阿闍梨神女に宣ふは、不思

蟻のかるもに云々
蟻のかるもに住む虫
の我からと昔をこそ
なまめ世をば恨みじ
古今)。

議の縁にひかれつゝかゝる尊き御寶、嘗寺へ入らせ給ふ事目があたりなる奇特かな。傳へ聞く八歳の龍女は釋尊に寶珠を捧げ、忽南方無垢の成道をこなへし例げに有難や頼もしや。今之龍女もさの如く成佛疑ひ有るべからず。逆の事に此鐘の昔を詳しく述べと有りければ、其時神女手を合せ、是に付ても彌増に法の力を頼む也。我曠劫の以前より末世の今に至る迄、五衰江海の海に沈み、蟹の荔藻に住む虫の我から濡らす袂かな、それ撞鐘と言つば諸佛の御聲を表しつゝ、十二律の響有り。晝夜の刻限告ぐる事生死の命期を示すごかや。さればにや此鐘は祇園精舍の北面に懸けし鐘にて有りけるを、立辨三藏渡天の時、龍神法樂の其爲に流沙川に沈め給ひしを、守護して今に至る也。我此鐘を撞初めて、一切衆生の冥闇を晴らさんと、東方に廻りて鐘をつけば諸行無常の響あり。扱南方は是生滅法、西方に向へば又生滅々已、北方は寂滅爲樂と撞けば、其聲心耳を澄まし聞く人菩提に至る也。扱秀郷へは金銀瑠璃水切と名けたる浪の鎧にうづ兜、是を着する其時は方七丁が其中は、水中あたる平地の如し。また邯鄲の玉枕二股竹の世々を経て、裁て共盡きぬ唐錦、一つの俵に五穀を納め取れども酌め共量れ共、盡きぬ泉の酒の壺一獻酌んで軍神、祝うて打立つ人々よ、自らも止まりて軍の下知をなすべきと、宣ふ聲と諸共に搔消す如く失せ給ふ。形は有りつるうづ甲に小龍残り止まりける、末の世迄も武士の甲の鉢に龍頭、此時よ

うづ兜一堆积く立派
なる兜。堆島く立派
世々一節にかく。

當今一今上天皇。

すもうりー古歌なぞに
ては孵化せぬ卵をい
へば、こゝは番人な
きの意。

りの三重例也。すでに京勢三萬餘騎、三上の嶽に攀登つて鬨をどつとぞ上げにける。山には思ひよらざれ共、物に馴れたる軍勢共同鬨の聲を合せ、石堂彌五郎くれるの兵藤坂口に突立ち、何者なれば慮外者、平親王將門の御前也。馬より下りて意趣を申せと呼ばはつたり。秀郷眞先に駒駆寄せ、いや舌長なりおのれら、當今の勅を蒙り形部太夫秀國が一子俵藤太が向ひしそ。將門が逆心以ての外の逆鱗也。急いで切腹仕れ。さなくば藤太が山を崩しへ谷の巣守になすべしと、鞍橋に突立てば將門につこと打笑ひ、イヤ小癪な奴が有る者かな。あれ打撃者共と鋒を振立て下知すれば、兩勢互に群りあひ追つ返しつ 三重 戰ひけり。山には無勢といひながら大將將門魔術を行ひ、山頂に水を湛へ河水に炎を吹きければ、寄手は是に氣を奪はれ少し白けて見えにけり。所へ七尺豊の法師二人黒革緘の鎧を着、素頭に鉢巻しめ冰の如き長刀を、馬手の小脇にひつそばめゆらり／＼と歩み出で、是は當國園城寺に隨れもなき光明坊遍照坊修羅道萬人切の開闢也。御信心の方々は參詣あれと待ちかけたり。石堂彌五郎くれるの兵藤憎き法師の雜言いで物見せんとつとより、萬人切のお出家達心ざし也受け給へと、疊みかけ切懸くるを込む手につけ入り開く手に、さらりと拂へば水の波車切にぞ成てげる。礪波早川松浦の者共遁さぬ引くなと追懸くる。二人の法師ふり歸り大勢づれの御參詣、近比殊勝に存する也。いでお剃刀頂かせ、法體せんと

打笑ひ、八方八花木末の風はらり／＼と薙倒し、味方の陣へ引たるは心地よくこそ見えて
げれ。寄手の勢は勝味に進み備へを破つて我一と、嶮岨悪所の嫌ひなく續きてこそは攻寄
せたり。大將將門イヤ物臭い奴原、一追追うて夜軍の眠り晴しをして見せんと、一丈餘りの鐵
の棒輕々と提げ、打て出でしが不思議や左右も同じ將門立並びて打挫ぐ、音は山河に衝し
て百千のなる雷、一度に落つるが如くにて凄まじかりし三重働きなり。將門の一軍に都
勢一萬餘騎同枕に薙倒し、有りし所へ立歸るは本身計ぞ立たりける。所を秀郷遙に見付け
勢をもつれず只一騎、岨を傳ひにつつと寄り馬手の脇より當てゝ組む。將門すはやと組み
直し、何者なれば卑怯者、其名を名乗つて勝負をせよ。誰とはおろか藤太秀郷、親の敵君
の敵遁さじ物をと、鎧の上帶ちぎる計ぞしめたりける。將門弓手の足踏直し向ふへきりと
と振廻し、おのれは聞ゆる健氣者餘程こたへて面白し。親秀國も手にかけたり、一所に冥途
の跡を追ひ、死出三途をも超越せと嵩にかゝつて押懸けたり。秀郷彼奴を仕損じては一期
の浮沈と思ひ定め、汗を出して組んでける。彼方へ押伏せ此方へ捻伏せ暫し勝負も知れざ
りしが、秀郷力や強かりけん難なくかしこへ取つて投げ、首を搔かんとする所に弓手馬手
より小腕取り、平親王將門なるはと口／＼に呼ばはれば、さしもの秀郷ぎよつとして、ヤア
將門が幾人ある。ふ、汝等は郎等ござめれど、星の光に透し見ればいづれも同じ將門、是

大嘗の手一急所の負
假。夕波に一言ふにか
く。尊まさらぬは一はま
ざるばの謂。

は不思議と思へ共何分是も遁されずと、二人を引寄せ組伏せん組倒さんとする隙に、下なる將門つつと抜け山の頭頂に立たりけり。秀郷是には眼も附けず二人の敵を取つて伏せ、首を切らんとしてければ、人にもあらぬ埋れ木の切株計を取て押へ、敵は消えて行方なし。南無三寶と振仰向き彼處を見れば、いかに、三人一所に立並び嘲笑うてぞ居たりける。秀郷あまりの本意無さに鐵壁の心も落ち、呆れて佇みたる所に、龍王弓と矢携へて影の如く顯はれ出で、彼は分身自在を得誠の姿を人に知らせず、其上總身鐵身にて切る共突く共叶ふまじ。弓手の鬚先三寸に肉身少つじきたり。是を矢壺に射て落し早く本望遂げ給へ。自らは宜き時分龍燈掲げ見せ申さん。幾人立つ共人影有るが將門ぞ。是を相圖に討ち給へと又こそ消え失せ給ひけれ。秀郷是に力を得相圖の火影を待つ所に、はや龍燈の影ほのかに見ゆる所を引しほり、思ふ矢壺をはたと射る。矢先は馬手の小耳下裏搔いて射通したり。將門暫しは堪へたれ共大事の手なればたまりもあへず、眞逆様に落ちければ二人の居影は消え失せぬ。秀郷透さず首打落し切先にさし貫き、鬼神と呼ばれぬる平親王將門を、俵藤太が討取つたりと呼ばはり給へば、野洲川に龍神二度顯れ出で、めでたし藤太殿、是迄なりと夕波に入て形も無き跡を、名残惜しげに秀郷は見歸りく、それよりも、官軍引具し凱陣ある。唐土天竺我朝に、類稀なる勇士やと、貴賤老若おしなべて尊まさらぬはな

かりけり。

第一五

世の中の妹脊の縁と松苗は、吹連れて行く風次第落る所が住所也。扱も長門の御局は思ひもよらぬ戀草の、根から解きし帶ならねど、丸寝ばかりもならぬ夜の枕一つをあひ逢へば、いつ馴染むとはなけれ共、威す恐さと賺す子に、つい紺されて嬌の女となるも不思議の縁也。寝せば寝世の習ひ、馴れぬ手業の袖濡れて、手桶片手に水掬び荒屋に歸らせ給ひけり。折節姉の御局は長者親子に誘はれ、戸川九郎御供にて尋廻らせ給ひしが、互にそれと見るよりも思はず知らず抱き付き、わつと呼ばせ給ひけり。やゝあつて長門の局、去んぬる亂の落足に後れて行かん便なく、既に命も危うかりしを、此屋の主に助けられ是迄は落延びたり。其後御跡慕はんと千度、百度勇め共、はや都には關振り人の往來もならざる由、今日よ明日よと思ふ内恥かしながら自らは主の男と夫婦になり、かゝる所に日を送り、今更御目にかゝる事姉様のお心には、淫奔故とおぼされん。エ、口惜しや死にたやと歎き狂はせ給ひしを、御局は笑止がり全くさうは思はぬぞや。惣じての妹脊の縁、是いたづらの外ぞかし。とするも又かくするも皆神達の結ぶの縁、殊には命の親なるぞ。父様や母様の此世に

在す身ではなし。兄弟とては只二人、短氣な心を持たず共、とかく男を大切に隨分共いとしほがりや。それに付宮様はかうくならせ給ふはと、秀郷の入水の事又は御身の只ならぬ、憂きも辛さも立ちながら、語合はさせ給ひつゝ又御涙せきあへず。所へ藤太秀郷は禁中より直様に御迎の爲下られける。基經卿の御長男大納言基忠卿公卿は以上十七人、隨兵は三千餘騎御輿車やり續け、すでにかしこへ着き給ひ是はとばかり也。主の男それとは知らず、かいづかに御衣冠引懸け我屋に歸り、人々を見るよりも是はいかにと騒ぎあふ。長門の局立寄りてかやうと宣へば、コハ何とせん恐しやと御衣と冠を持ちながら狼狽へ廻る計也。秀郷立寄り是をあるじ、先以て此度は御局の命を助け、其上隠まへ置かるゝ段近比く神妙の至り、且又此裝束いかなる子細にておことが手には入りけるぞ。思ひ合する事のあり、詳しく述べを承らん。見れば家居は荒れたれ共屋敷どり廣かりしが、先祖は何といふ者ぞ。便によりて召上られん。眞直に申さるべし。さん候廣田の彌傳次と申す者、父は廣田の長者と呼ばれ代々有徳の者なりしが、私幼少なれば父母深く佛神を貴み多くの寶を明暮と三寶に供養し、貧しき者に寶を分け、もはや正眞の慈悲倒れ、か様の躰と罷成駄しき業に命を繋ぎ候か、今日も沖に出入津の舟に商し、家路へ歸候刻何かは知らず釘付の小舟一艘流れ來り、あれなる浮巢の岩に着く、内より是を着是を冠り、女共父男

共え知れぬ者が現はれ出で、岩の上にて四方を拜み、此二色を櫻標木に懸け、身を投げ空しく成て候。幸是はよき襦袢よき懸燈蓋なんめりと、そつと拾うて參りし也。盜物では候はずと御前にさし出せば、人々驚き横手を打ち。扱は疑ふ所なし。しなしたりく、淺ましの御事やと御落涙は限りなし。中にも上總の御局は御涙の下よりも、扱々是非なき事共や。去ながら秀郷も一度入水りけれど、戻られし例もあり。何とぞ浮巢の岩ほ迄、我をば連れて行きやとて嘆き口説かせ給ふにぞ、秀郷御側に立寄りて、御歎きの段御尤、然らば御供申さんと皆々船に乗せ奉り、主の長が案内にて漕がれ、出させ 三重 給ひけり。彼處になればとある岩まで御船を寄せ、もしは空しき御屍もや上らせ給ふ事あらんと、波間を眺める所に、不思議や皇子海上に浮み出させ給ひつゝ、誠に是迄跡を慕ひ、遙々下る心ざしこそ嬉しけれ。去ながら我は是、攝津の國西の宮に年久しき三郎えびすなりけるが、此度天子に御難あり玉躰に變らん爲、豊日の皇子と再來せり。故は神代の其昔八頭の大蛇といへるもの、此日の本を魔界になさんと障碍をなす。時に素戔鳴行き向つて難なく大蛇を打從へ、日本靜謐なりける事星霜遙かに越たりけり。然る所に大蛇が惡靈平親王將門となり、三上の邪神を語らひまた神國に仇をなす。さるによつて素戔鳴今秀郷と分身して、是を退治し世を治む。又繼姫は稻田姫、いよ／＼今も夫婦となり朝家を守護し申すべし。

そも／＼我をえびすといへる事、そのかみ天神七代の第一國常立の尊始めて天の御鉾を下し、此海底に國や有らんと探し給ふ。その逆鉾の一零落ち固まりて嶋と成、淡路を國の始さす。其第一より三代は、男の姿計にて女といへる事はなし。第四にあたり給ひぬる宇比地邇の尊より淡母陀流の六代まで、男女の姿は有りながら夫婦婚合あらざりしが、第七代の伊邪那岐伊邪那美天の浮橋の御許にて、始めて夫婦の交合きり、一女三男を産み給ふ。所謂日の神・月の神・水蛭子・素戔鳴、是兄弟の始めなり。先姉尊日の神を此國の主とし天照大神。其次是月の神山を守つて高野なる丹生大明神これなりけり。第三は蛭子皇子われ三年まで足立たず、さるによつて姉尊天の岩楠舟に乗せ、此止まらん所にて海里を守れよと、西海に押流れ波路遙かに津の國や西の宮居に世々を經て、富を施こす神となる。扱當年は此所都の吉方に當りぬれば、今より後は此浦に宮造りして影を残し、猶々富貴萬福を諸人に授け得させんと、蛭子は波の満潮に入らせ給へば 三重 其まゝに、三郎えびすと拜まれ給ふ。主が家の衰へも再び富家と榮えつゝ、七珍萬寶満ち／＼たり。されば皇子の御神託基忠の卿白紙を綴ぢ、寫して禁裏へ捧げ給ふ。是ぞ日記の始めなる。祝ひを末の世々までも金銀米錢大福帳、正月十日の帳始め萬の寶かき取りて、納まる宿こそめでたけれ。

正月吉祥日

右此本者依爲懇望文句音節等悉校合加秘密令開版者也

竹 本 義 太 夫

京二條通寺町西入町北側

大阪高麗橋一丁目

山 本 九 兵 衛 板

曆

暦

「寡孤獨一孟子に出づる語。」
龍々腰曲り脊高き病なり。史記平原君傳に臣不幸有龍之病と見ゆ。

乾坤開け萬物生す。形象饒かなる時津國、抑人皇四十一代は持統天皇と祝し、世の御政正しく鱗寡孤獨を憐み罷癃殘疾を救はせ給へば、諸天の恵み久方の太上天皇とはじめて崇め奉る。朝暮玉座の左右には、大納言の輔少納言の輔二百餘人の宮女まで、衣紋のかざし色映えて御殿輝くばかり也。時の關白には膳司の公經に従ひ、諸卿冠を上げざりき。扱又天下の記錄者として三條前ノ中納言兼政・大伴ノ朝臣忠頼此兩家として、國土の善惡を糺され治まる時も今日は早白鳳二年卯月一日に成りしかば、上一人より萬民まで着更へて今朝の薄衣錦の袂翻へす。春過ぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天の香山と、御製の風か曙も未だ霞の八重立ちて、夏の風情はなかりけり。實に去年詠みし歌の様、此景色には本意ならんとの宣旨也。かかる折節天文の博士木津良、廣信傳奏を以つて奏するは、そのかみ欽明天皇の御宇に新羅百濟國より暦の秘書を渡し畢んぬ。それより世々を經て例へば日月のめぐり、又は節の變る事つらく是を考ふるに、一年の行事にさへ一日四分度の一刻程縮まり候。さるによつて萬木千草の開落まで悉く違ひ、時候さんれい切ならず。願はくは新暦

さんれい一三令か。
三令は日令・月令・時令をいふ。

筋なき腹一身分睡し
き女の腹。

梶松桂云々一梶鳴
桂枝孤蘋蘭菊叢(白
氏文集)。

の二卷元嘉曆儀鳳曆にして年中晝夜の呼吸まで審かに仕うまつりなば、萬人の喜び末世の重寶是に過ぎずと言上す。君聞召され、誠に欽明の曆書程經れば此度曆の改正すべし。則當國の大社なれば三輪と春日に參詣し、萬神慮に任すべしと兼政忠頼に勅命有り御簾は下らせ三重給ひける。古き軒端に名を埋む高橋宰相吉連とて先帝天武に仕へ給ふ人なるが、定めなき世の定めとて廿二歳にて死し給ふ。されども筋なき腹に忘形見の姫君つい宿らせ給ひ、蘭帳の内に銀燭の光りを受け、秋の夜月も明けやすく春さへ日影暮れ早く、あてな遊び品かへて、玉琴玉筆玉手箱悔しや昔忍ぶの草、宿はさながら野と成りて、梶松桂の風の外高家の一類もましまさねば、吉連の息女ぞと申し上ぐべき便りもなく侍人迄見捨て行きしに、やうやく乳母の玉水が流れを汲みて源を濁さず、嬰兒總角の御時より育て奉りて慈しみ、娥皇女英の古を歎き、見し人消ゆる露なれば、朝顔の姫と御名をなればに變へけるが、今思へばよしなやな。所もしかも朝日の里此儘委ませ給ふかや。我こそ賤しき腹を貸し奉れ、父の御名は朽ちまじと蘊をけて匂やか成る顔ばせより、繫がぬ玉をはらへここぼし、ア、扱うたての憂身の今、さりとては恨めしや歎かし辛し悲しやと、暫し魂なかりけり。姫も思ひは諸聲の沈みは果てず袖の淵、水なき里にかなはぬは包むに洩るゝ涙川、渡りかねたる高橋の家は絶え行く女ぞと、身の上恨む明暮の、せめてや憂きを

繫がぬ玉一涙。

遠く遊ばず、戀語の
爰をせに云々聞か
ずともこゝをせにせ
む時鳥山田の原の杉
の村立（西行・新古今）。

男子して一男子がの
意。

一つなる口。一旅酒
が飲める口。

忘る」と、手飼の鳥の馴染籠鳥の雲を戀はざる有様は實にも優しう見えにけり。されども此度一天の君の御恵み深き故、生けるを放てと觸れければ力及ばず、姫君は汝も名残の今ぞとて手づから籠を開け給へば、遠く遊ばず卯の花の亂れし枝に羽を垂れて、爰を瀬に瀨にほとゝぎす様々聲を三重重ねける。かゝる所にかつて目馴れぬ田夫野人、とがり桟に鎌を携へ打連れて來りしが、此鳥を見付け何の苦もなく捕へしを姫は垣間見走り出で、なふそれやこちのぢやが何故捕りやる。田夫共聞きも敢へず、何羽の有る物をこちのとはどこから許しを取られるぞ。扱も世界を我儘なる言分と、一度にどつと笑ひけり。げに尤也、去ながら心有ての放ち鳥ひらに許せと有ければ、小憎き男子して、心有りとは此の男の内何れか思ひつき給ふ。相性よくば入聟にといへば、又一人進み出で、いや／＼無用の縁組如何なる賤しき女ぢやも知れず。兎角論を止めて今日立つ市の味酒も今宵は是を肴にと、一つなる口々に雜言はけば姫君塩ふるに堪へられず、守刀を抜きそばめ打つてかゝれば田夫ども、いや大膽なる小女郎め。只打殺せとひしめく所へ、兼政春日の下向也しが此由を御覽じて、やあ／＼こは何事ぞと宣へば、母はお馬に縋り始終を申上ぐれば、扱々につくしき爲業かな。王城近く有りながら今度の御觸聞かざるか。殊更人家の狼藉かれこれ以て重罪也。一人も遁すなと宣ふ聲に驚き、皆散り／＼に逃げてけり。母は餘りの嬉しさに、扱

有難やお蔭にて姫を一人まうけしと、手を合はせ禮拜すれば、めでたし／＼仕合と宣ひながら、姫君に移し心の遣瀬なく、胸ときめけど如何にとも詞をかくべきよすがなく、扱も唉きたる卯の花かな。あれ一枝給はれかし、土産にせんと宣へば、あつと答へて姫君惜しげもなく手折りつゝ差出せしが、暫らく扣へ持ちたる花を打眺め、うつゝなや自らは日蔭に萎む身にし故、明暮心うの花と眺めをりしに縁とて都へ貰はれ行きぬるか。扱美しあやかり物と、しを／＼として差出す手を花共にじつと締め、いや此花は媒介よ。誠は御身の花の顔幾重に思ふ縁の紐、障りなき時蔭に來て、姿の蕾手折らんに必ず忘れな忘れじと、互に詞を残しつゝ別れ／＼て三重歸らるゝ。去程に大伴の朝臣忠頼は一家一族召集め、此度記録の兩家とて暦の改正仰せ付けられ、兼政は儀鳳暦、某は元嘉暦を差上げしに、兼政が儀鳳暦抜群勝り一々道理に徹し言句絶すの所也と、是に御詮議極り、則兼政を飛島の大納言に任せらるゝ事全く彼が學徳の厚きにあらず。是皆關白公經が取持つ故也。其上重ねて宣旨有り、富士の高嶺に五丈八尺の銅の柱を立て、三日三夜の晴天を見合はするよし、彼是以て當家の滅亡、所詮兼政と刺違浮へ世の妄執はらさんと、思ひ定めて暇乞各々さんこ静まれり。爰に豊油の虎若とて忠頼が甥なりしが、世上の人を人共せず公家共武家共片付かぬ傍若の嗚呼の者進み出て申す様、御憤り至極せり。さりながら死して二度歸る身でな

し。先づ此事は思召しとまらせ給へ。某が計ひにて彼奴めを一人轉びさせ、此方は世に榮
える手段。但し否かと云へば、やれ虎若それこそ望む所、して其手段はいかに、いやく
お前にては憚る事有り。先づ兼政が書たりし色紙あらば給はるべし。某先だつて駿河に下
り思ひ付たる計略、それは其痒き所を搔く如く御本意遂げさせ申すべし。心安く思召せと、
扱同じ心の浪人に戸無瀬宇右衛門語らひて其内談を牒す内、はや兼政の富士禪定彼赤銅の
柱をば引出すと告げければ、遅なはりて詮もなし。とかくは路次の相談ぬかるな宇右衛門、
柱をば引出すと告げければ、遅なはりて詮もなし。とかくは路次の相談ぬかるな宇右衛門、
急げや。おつとせくまい此智略、粹をこかする嵌らする一人轉びぞ勇めや
勇めと、打連れ館を出でにけり。

第二

三枚肩一駕籠を三人
にて昇くこと。

通路や姿の入物三枚肩、駕昇夫が急げは中宿の、貸編笠の目付紋、丸の内に二つ星是も逢ふ
夜は織り姫のあまの安倍川徒步渡り、嬉しや誰やら招きぬる、手越の新七末社にて粹の出
立の替衣裳、男自慢や懸知りやわけよき都の大臣と、虎若や宇右衛門はばと出口の茶屋よ
りも先へ知らせて待つ暮に、揚屋町へぞ三重ナグ節恨みながらも月日を送る、扱も命はある
もの、嘘で固めし身の勤め、是淫奔の外ぞかし。扱も我親の爲とて色里に、公界十年と定

せはしくも、ませよ
りせは、とかてつ、
けたり。
あとより遣手のー古
今集「枕よりあとよ
り戀のせめ來れば」
の歌をもぢる。
身あがりー遊女が自
ら揚代を出して休む
こと

中戸一情へと會ふに
は多く中戸にて首尾
するなり。
死一倍ー親死したる
時元金の倍にして返
す。親約にて借る金。

わつさりとー賑に陽
氣に。
正月買ー正月に女郎
を買ふこと。

め禿の時はするなり。掲水揚の初姿髪も形も替小袖、しやならーーーーーと歩み行く。
素足素顔のなよやかに、昨日に變り今日よりは宿屋の嘆も様つけて呼びましや。おうお立
ちなされませはしくも、あとより遣手のせめくれば仕舞太鼓の遣瀬なく、紋日ーーの物思
ひ、頼む方なき男あまの治泉節幾度沈む身あがりの、鐘の別れやまだ夜深きに捨てて行かる
く床離れ、好いた男は寝ても覺めても夢にも更に忘られず、格子叩くを合圖にて戀の中戸
の腰掛や、是さゝやきの橋となり忍びーーの間夫狂ひ、たんと氣毒有る時はいつそ殺して
貴ひたや。ア、まゝならぬ世の中に、思はぬ客にも逢はねばならぬ三瀬川流れの身こそ悲
しけれ。それさへあるに無理口舌、言葉の山に登り詰め書ける誓紙も聞き馴れて、神も罰
をば當て給はず。例へば爪をはなつとて誠の爪とな思しそよ。諸譯知らずのお敵達、賢顔
をばし給へどこの仲間の仕掛にて遂に身代疊ます。ましてや親にかゝりなど、死一倍
も借りたえて・所の住居もならざると聞けば我からわが心、思ひ廻せば恐しと思ふばかり
ぞ誠なる。扱親方の手前より四度の仕着の其外は、皆借錢と積り行く。年の暮過ぎわつさり
と、正月買の初君は神ぞいとしさかはゆさの、餘りーーそれながら、更に勤めと思はれ
す。あはれ子の日の松ならば根引になりて凌ぎ来る席の苦患を遁れんと、嘘に誠の物語隨
分洒落たる男共、それはさうよこ不便がり白けて座敷は三重見えにけり。かゝる所に虎若宇

細道ながら一葛屋の
縁。

ゆふつゆー言ふと夕
とかく。露は祝儀の
こと。

通者一辯人。

さはりませう一さ
れし盃を受けぬ時「
さはつた」と言ひて
ことわるなり。
こみつく一手強くや
りつめること。

右衛門さゞめきて、葛屋は是かと内に入る。細道ながらお通りと、亭主が輕口聞き捨てゝ、
ばつと座敷に居流れ、扱内儀呼出し近付に成り、新七が知る如く身共らは此里嘗て不案内
萬事頼むとゆふ露を重く打てば押戴き、先づお慰みに女郎様がたを借りてお目にかけうと
いふ。いやさ借り者はむつかしき。此所にて隨分張強き太夫を逗留中の約束せよ。畏り候
と、女房立てば亭主が代り、問はず語りの高笑ひ追従たらば申しけり。時に虎若いふや
うはそちは通りものさうなれば、若し都へ上りし時必ず尋ねて來れ。我是三條ノ大納言兼
政といふもの、それなるは聞きも及ばん木津良の廣信とて日本名譽の博士なり。此度勅を
受け富士にて天の氣を計る。必ず爰へ來たる事人に沙汰ばししてくれな。是は某が自作自
筆こ、かの兼政の遊ばせし色紙を亭主に取らすれば、有難し。子孫までの寶也。やれ
先づお銚子／＼と手をはた／＼と叩く所へ、松の位の名も高き三歌。三夕ゆるぎ出で、上
座に居流れ、三夕は先づ盃を改めて虎若に差しければ、こは珍しと一つ受け、乾して戻せ
ば三夕、爰は一つさはりませう。虎若眼を据ゑ何人のさす盃突き返すは慮外也。飲むと飲
ませうが飲まずともこみつけんと、腕を捲つて肘を張る。喰は輕薄笑ひして、いや是殿様、
此所の習ひにてお一つ上げたき挨拶と、様々上手を盡せども、いやさ未だ馴染もなきに何
の一つ。所詮我を振らんたくみ八幡其手は喰はぬといふ。三夕から／＼と打笑ひ、扱々素

いお客何共知れぬ仕懸かな。新七さらばと立ちけるを、取つて押伏せ何素いとは誰が事ぞ。白くて悪くは赤くせんと、三歌諸共引寄せて耳をそぎ髪切れば、こは狼藉と騒ぎつゝ、手々に棒を提げ遁すまじきとひしめけば、いや推參なりおのれらと薙ぎければ、わつと/orて逃げし間に、首尾こそよけれ宇右衛門と打連れ都に逃げ歸る虎若が仕業の程、見る者聞く者おしなべ皆憎まぬ人こそなかりけれ。

第三

月の影二つ一謡曲松
風「月は一つ影は二
つ満つ沙の」
吉野は磯一之に比す
れは吉野も劣れりと
鳴澤一磯になるとか
夕附日一言ふにか

眺めなり富士は日本の蓬萊山、嶺は削り成せるが如く其高さ測られず。かくて兼政廣信は勅命に従ひて、行屋に入る月出る日を考へ、陰陽の高樓登りて見れば、甲斐嶺に今日も白雲立ちにけり。先正月の山の姿細眉作る薄霞、春山笑ふかと思はれ聲の鶯、初朝の雪まだ残る竹取の翁が娘の所縁かや。誰が結び置く玉篠の去年の葉の戀の道、覚えて迷はぬ人もなし。二月は雲に入る鳥の別れや歎く涅槃の空、釋迦は遣水遠近の峯は八葉ともいへり。喜見城の遊樂も心の月の影二つ、満つ潮を擔ひつるゝや田子の浦、東掲げの汐衣、暇波間の憂き仕業、彌生は花の吹雪吉野は磯に鳴澤の、景を都に優女、駕籠立てさせて此所只是本意無と夕附日、西に傾き入間川、平家水に音有り松に聲、旅の寢覺と名付けたる琵琶

水車の一東山殿追善能には「水くさの」と
なれり。扇面逆しまの云々
石川丈山の詩句「白
扇倒懸東海天」によ
る。東山追善能には
「せんめんぎやくの
びさん也」とあり。
川社一六月絞の時川
の邊に假に設くる神
櫛梅々々一東山殿追
善能には「さんじ
に六根興障おしめ
に八十八金剛童子」
とあり。
其夜降りつゝ一萬葉
の歌による。
松原感化一東山殿
追善能「松原こえて」
え松原「こえて」
望月一持ちにかく。
五千里の外の云々一
白染天の詩「三五夜
中新月色、一千里外
故人心」の心より。
心詞とづけたり。
菊月一聞くにかく。
車を停めて云々一杜
牧の詩句による。
川の森一駄河國安倍
川の邊にあり

かき鳴して歌ひける。白日青天も頼まれず、臘の夜の山見えぬは、人の心の雲、櫻に嵐、
月に雨、世にや哀れのまさるらん。卯月はさくや水車の浮島が原行く螢、里の童の打とめ
て、光りを埋む玉澤の、水鷄やたく川遊び、淺瀬の沼の花がつみ、笛に太鼓に風車、お
のがさまぐ日暮しや、五月の空は梅の雨、晴間の山を繪にかきて、いざ唐土の人に見せ
ん扇面逆しまの美山也。譬へてこゝに詩を作る、世々の歌人の眞砂の種、神代に蒔きて盡
きせざる末は興津の川社。扱六月は富士詣、白衣の袖はさながら雲、難行難所攀ぢ登る懺
悔々々六根懺悔おしめに八大金剛童子、南無淺間大菩薩、さつと消えにし罪科も其夜降り
つゝ絶えぬ氷室の谷深し。七月は七夕の逢瀬ありとやいざ來て三保の羅歎松原越えて、
清見寺鐘の拍子がちやん、として扱面白い面白いぞや類なき、名を望月の今宵しも、
二千里の外の故人の心詞もいかで及ばんと、眺に倦かぬ中空に初雁金の雲間より、ちら
りとつれて鳴く音を菊月は、四方の山々色どりて、今車を停めて坐に愛す
楓林の暮、紅葉を焼けば煙の山、是煖めて飲む時は劉伯倫が樂みも、遂に事足る盃、三國
一ぢや酒になりすまいた。扱十月は山路昨日時雨して、急ぐ足柄箱根なる、葉守の神の瑞
難も梢淋しく、霜月は猶木枯の森の下枝の白妙に、それとも知れずすくみ鷺、身の色翻す
に、せはしき聲の枕より、旅泊の夢の覺めて行く年の暮には、野も山も雪に風情を奪

南殿には陰陽師云々
一以下宮中追儺の儀
式のさまなり。

御所染一寛永の頃女
院のお好みによりて
染められたりといふ
上品なる染色をい
ふ。
結文一立文に因して
略式の手紙。

はれて、かれ／＼しばねふりける。それが上にも雲霞のとだえ無く願ひの晴天有らざれば、兼政廣信心中に南無大日大權現、衆生の爲めの御方便奇特を顯はし給へやと、天に向つて祈らるゝ、時に風雲晴れ續き、日月和光のめぐりをつもつて喜び、勇み山下有り大和の國へぞ三重急がるゝ。是は拵置すでに其年も除夜の暮にぞなりにける。大内の御儀式松立て飾り御垣守衛士の焚く火の耀き、南殿には陰陽師集りて祭文を讀上ぐれば、仙華門には大舍人寮鬼の形を三重勤めける。殿上人は桃の弓に葦の矢を番ひつゝ邪氣を射拂ひ給ひける。抑追儺といふ事は年中の疫を拂へる行事也。拵御吉例の衣配、禁裡の御作法官女の宮仕に帥の典侍とておはせしに、かの朝顔の姫父の御名を深く隠し、帥の典侍に従ひ御名を宮内とかへさせられ、官女の業を習ひ給ふに勝れて賢くましませば、帥の典侍も頼もしく、我もはやよる年の物事うとく成ねれば、新院様の御事どもそなたに頼み参らすべし。先此衣の色品も覺え給へと有りければ、人も多き其中に宮内は時の面目と、廣蓋に千代重ね模様さまゝ御所染の色は春とぞ見えにける。實に初色の梅重ね、表も裏も濃き紅に入日の鳴門立つ波を、白糸の貝盡し、島に洲崎に立つ鳥のちりやちり／＼縞緬は、檜垣の左大臣道綱。扱松重ねあをかりきうら吹き返す禁色、鞠に柳のたよ／＼と、亂れて／＼戀風の、袖より落つる結文、誰様參ると見てあれば、近衛前の入道則房也。次は地無しに

上交—衣服の前襟の
上部
つまか—襷と要とか
腰替—綾錦の絹の名
競斗目—腰の所に筋
を織りたるものといふ。

人も咎むる一人も注
目する程の。

唐花の五色の下葉玉の枝、玉の忌垣の鮮かに千早振る／＼、ふつた所がどうともかうとも、否と言はれぬ上交の、妻かゆかしや懷しや、是はどなたと見てあれば、西門院橋ノ照政。優しや裾に春の野の、雉子の床の草隠れ、萌黄の袂腰替、菊桐並ぶは古川の權中納言正家。末に流るゝ水車、くるり／＼と纏はるゝ藤の懸波主や誰、大伴ノ忠春也。帥の典侍聞きもあへず、不思議や此御小袖は幾年か三條の家に下し給はるが、若も筆者の誤りかと宣ひも敢へぬに、本宮の中將囃き寄つて、いやなふ世は知れぬものかな。大納言兼政と博士木津良の廣信は、此度駿河の國にて不儀なる様々洩れ聞え、本坂藏人増田式部に預けられ流人と成つて配所へと、語りもあへぬに姫君はつとばかりに伏沈み、人も咎むる涙也。帥の典侍見給ひて、宮内は何を歎かるゝぞ。我こそ兼政殿の母上の御取立故により、かく宮仕も仕うまつれば外の様には存ぜぬなり。誠に日もこそ今日の暮、明日は改む春なるに、御いとほしや哀れやと、深く悔ませ給ひける。姫君今は前後を忘れ、御涙にくれながら、今迄は深く隠し候へども、もはや名乗らん自らは高橋吉連が娘朝顔の姫なるが、兼政殿と申交せし事有りと。あらまし宣ひ果てざるに、帥の典侍大目に驚き、なふ今迄はゆめ／＼知らず、様々に心ならざる慮外のみ、たゞお許し給はるべし。諸事はかゝる折なれば御慎みおはしませ。此上ながらも自らに御任せあれと、よきに諫めて住み馴れし局をさしてぞ三重入

給ふ。かくて増田・本坂は佐保の川のあたりにて兼政・廣信に行合ひ、とかうの子細は存せ
ねども、兩人ながら流罪の宣旨我々承て候と言へば、兼政の郎黨岡崎平内平七大きに怒り、
宣旨とは何の科有つての流刑、オ、今思へば駿河にて風聞せし忠頼めが讒言よな。たとへ
ば我々づだ／＼に刻まるゝとてもこの實否を糺さずば、君を都へも入れ奉らじ。方々にも
渡すまじ。此佐保川こそ配所なれ。かく言ふが憎しとて必ず手向ひして後悔すなど、仁王立
ちに立たるは面を合はせん様もなし。兼政暫しと靜めさせ給ひ、尤汝等が鬱憤道理なり。
去ながら假令無實の讒にもせよ、勅に向ふは勿體無し。我身に彫り有らざれば、遂には月
の都にて晴行く空を待てやとて、涙ながらに宣へば、流石勇める兄弟も、御一言にてしほ
／＼と途方を失ふ其隙に、警固の武士取囲み、はや遠ざかれば弟の平七、こは無念と馳出
るを、平内とつて押止め、やれせくな平七、察するに讒人は忠頼に紛ひなし。とても死ぬ
べき命ならば、忠頼虎若もろ共に路次に待受け斬るものか、夜討に入て討つものか。安穩
にては置くまじき。暫し／＼と言ひながら、片時も遁し置く事の思へば／＼無念やと、血
の涙をはら／＼はらり／＼と流しつゝ打連れ一先歸りける、兄弟が心の内道理せめて
尤やと感ぜぬ者こそなかりけれ。

第 四

いたはしや兼政は罪も波路の物思ひ、赤松の伊呂波船四十八番並べたる中にも御召大船と
て竹虎落網をかけ、或ひは刃物を改めらる流人の身こそ悲しけれ。所はしかも難波津や梅
けはしく一烈しく。

いたはしや兼政は罪も波路の物思ひ、赤松の伊呂波船四十八番並べたる中にも御召大船と
て竹虎落網をかけ、或ひは刃物を改めらる流人の身こそ悲しけれ。所はしかも難波津や梅
の濱より押出す。しかる所にさも險しく、なふ／＼御船々々、其船待たれよ御船よと、呼
ばゝる聲も程近く、見れば白き小袖に淺黃袴を着連れたる少人やう／＼磯邊に馳付き、二腰
脱捨て手を束ね、是は大納言殿に召使はれし右丸左丸と申す伴共にて候。かゝる時の御供
をこそ御情にて頼み奉ると涙共に申しけり。定元船縁に立出でて、志は神妙なれども、
是私ならねば叶ふまじきと答ふ。なに御船へは叶ふまじきと宣ふかや。扱も是非なき次
第、しかば御船暫く待て給はれ。いかに左丸、君自然の御時は殉死の契約今也。死別る
ゝも生きて別るゝも同じ思ひ。いざ御目前にて腹切らんと支度するを兼政御覽じ、やれ待
て汝等暫し／＼。誠に若契の誼とて、淺からざる心底返す／＼も嬉しけれ。世に有る時の
二眺め、花に紅葉に代へて我妻なし千鳥の床の海、情に沈みし波枕の戯れし夜の誓ひにも、
三つ有る命行く水の消えなば一度に泡沫と、言交せしかひもなく一人残して沖つ石、頼む
島なき身なれども命だにあらばなれ。死ぬな右丸必ず死ぬな左丸。死なば恨み身を悶え

自然の時一萬一の時。

若契一男色の契り。
沖つ石一置にかく。

口説き歎かせ給ふにぞ、かつて衆道を辨へぬむくつけ男楫取迄、女の情忘れける。定元見る目も痛ましく、たとへば後日の沙汰にあひ生害に及べばとて、いかに哀れを知らざらん。去ながら二人は如何、いづれにても一人乗られよとあれば、兩人大きに喜び我乗らんいや我こそと、押退け押留め互ひに亂れ藻の虫の、我から人からと鳴く音争ひ時節移れば、定元はせんかなくて櫂櫂を早め船は遙かに別れ行く。一人ははつと途方にくれ、なふ明石の殿様、今は一人と申すまじ。せめて一人と叫べども別れていつか淡路灘、しるしの煙立消えて物の淋しき黄昏の、星の林と成りにけり。扱も／＼しなしたり／＼。何の詮なき争ひは、あゝ暗きより暗きに迷ふ思ひの道照らし給へや佛國。いざや最期をきはめん。去ながら君刃を止めさせ給へば、所詮これなる岩に座を占めて、四つの借物を返さん。して念珠は有るか。いやはたと失念せり。オ・尤也某は持ちたりと、一連二つに引分ち、今まで結びし玉の緒を絶えなば絶えよ右丸、命々鳥の語らひも、はかなく定めし有様は傳へ聞きつる唐土の、伯夷叔齊にもまさるべき。いつの日の何時にも息絶え入らば手を擧げよ。臨終一度に舌食ひ切らんと、夢に夢見る心地して、迫る日數も重なりて夕の嵐朝の霜、立掛髪の髪の名。もと江戸半太夫の始めし形なりといふ。

淡路灘一途にかく。
命々鳥一佛經に見ゆ
る二頭一體の鳥。
立掛髪一髪を短く切
りて大形に結びし男
の髪の名。もと江戸半
太夫の始めし形な
りといふ。
東坡が作る詩一東坡
の九想詩。

四つの借物一人體は
もと地水火風の四大
よりなる。

鳥が取り、髑髏に鳥が嘴を争ひ、是ぞ東坡が作る詩の九つの形の末、人の限りの 三重あ

さましし。是も哀れは折節の冬野となりて朝顔姫、兼政の遠島を悔ませ給ひ、互に忘れな
忘れじと言ひ捨てし詞の末、世にましまさば訪ふまじきが、人の情はかゝる時、せめて訪
れ参らすべし。ぜひ御暇おひまと願はる。帥の典侍涙とと共に、さりとは優しき志、情も義理
も此時なり。いかでか止め参らせん。心任せと有りければ、こは有難き仰かな。さあらば
御暇おひま申すとて乳母の玉水伴ひ、人見しりてはと變姿かわざ、杖有り笠有り抱帶、旅の振袖三重

朝顔姫道行

山かづら一山の端に
かゝれる曉雲をい
ふ。
家あらなくに云々
「苦しくも降り来る
雨か三輪が崎佐野の
わたりに家あらな
くに萬葉」。
今般日云々一春日野
の飛火の野守出で、
見よ今いくかありて
若菜摘みてむ古今
歸り三笠山一顧みに
かく。

忍ふ道の邊くらぶの山の夜も明けず、八入の岡の村躡躅、濃きも薄きも戀ひ迷ふ、闇の錦
と眺め捨て、まだ山かづら曳く方に、覺束無くも呼ぶ呼子鳥の傳授は聞かず耳梨山、片輪
車に積む柴の、櫻やあたら春惜む花の八重薔薇やせぬ家ぞなし。家あらなくに三輪が崎、綾
杉めぐむ木間このまより、神の神籬物さびて、舊りにし事も石の上、人の影さへ埋井の、井筒に
玉の井筒に袖濡れて、別れ比翼の羽交山、飛立はしだつ方は飛火野よや、今幾日かありて旅を
さめ、わがたらちめ故郷ふるさとへ、歸り三笠山さほのかり、二十五絃は夜月に彈し、雲井の宿り
庄駒じょうこが嶽松は時雨の染め残し、衣の浦に寄せ貝の離れて逢ふも姫貝の、嬉しや憂きを忘貝、
淺刺潮あさり噴空しほうそ、蛤簾貝あわらめい、船は出て行く帆立貝、歎荒い風をもようやよやよ、夜着厭よきはれし三

津の浦風濱風、ア寒いぞや。哀れ浮寝の旅の空、今日初島の便りかと戀ひ渡りぬる武庫の川、心の淺みしらづくし知らぬ道にて抄取らす。誰かつげ野の妻鹿も、人に聞けとや夜只鳴く秋は悲しさまさるべし。それを思へば夢の浮橋廣田の宮、生田の小野の花筐、手ごとに摘みし茅花交りの、つくづく／＼し。わけて末黒の薄原、いつか招きて草枕、それら船一絆路の鈴をつける船。おぶさ一不群の誤なるべし。

叶はぬ世なりせば、執心の津の松原漁火の燃上りては消えては燃え、間なく時無くこりすまの寢覺に騒ぐ鈴船の、おぶさは空に夕雨の身を凌ぎ行く印南野や、零涙のさゝれ川、君が柵強くとも破れ柳にやれさて今、顯はれ渡るほの／＼のこかの浦にぞ着き給ふ。憂さも辛さも哀れさも、あらめ／＼さもこそあらめさもあらめと、聞く人毎におしなべ皆絞らぬ袖こそなかりけれ。

第五

聖賢の世のためし大和の國壺坂に、温泉一夜に湧出づれば、俄に湯桁の數をしつらひ施藥院を建てさせ給ふ。則典藥の頭には養壽院の法印立昌、諸國の難病集めさせ給ひしは、君徳古今に耀きて有難かりける次第也。某は丹後國宮津の者なりしが、世を渡る浦の習ひ獵漁取の暇も無く、小舟の篝影消えて波間の餌に手を食はれ、かくあさましき身の痛みたゞ

みつはぐむ一老後再
び齒の生えることに
て、老の甚しきさま
にじふ。

御慈悲とぞ申しける。我等は山城の國西嵯峨の者なるが、此子をつれて玉鉢の祇園祭の車に轢かせたいけ盛りの足立たず、不憫は親の心也と涙に深く沈みける。拙者は肥後の國八代にて隠れなき荒岩と名乗りし相撲とり、四十八手は得たれども大力にはぜひもなく、上げて落され骨々の碎けて、今は細石のものとの巣になり難く、いまだ若きにみつはぐみ腰抜業と悔みける。扱自らは駿河の國と申上ぐるもお恥かし。安倍河の遊女なりしが年月の勤めに肌を冷し、それ故聲の通はねは情無しとて身を恨む。玄昌聞給ひそれは世になき事にもあらず。去ながら傾城の所作とて指を切るとは傳へしが、何とてさやうに耳は切りけるぞ。さん候是は大納言兼政殿とやらん、いつぞや富士詣の御時逢ひも馴れざる始めの日、科も無き身をこの如くさりとは酷き御仕方と言へば、ア・音高し〜。何事も昔と思ひ其沙汰する事なけれとて、數多の看病取行ひよきにいたはり 三重 紿ひける。其比又伊勢太神宮の御造營有りて、當秋九月二十一日遷宮に相極まり、則勅使として菊亭ノ大納言師經神書の古例を見合せらるゝに、眞の御柱といふ事を書き記せり。諸卿僉議あるに此事正しからず、記録者忠頼に相尋ねても明かならず。都は只聞の如く、さるによつて兼政廣信を召返さるゝに、しづくか天子の心の海萬里の風波靜かにして、はや都にもなりしかば、急ぎ參内なされけり。時に關白公經右の次第を述べらるれば、兼政謹んで笏取直し、抑眞の御柱

といふ物是遷宮の神祕也。三笠山の松を切り寸尺の大事、一子相傳なれば是を調へ差上ぐべきとあれば、國土の寶は兼政と一度にはつとぞ感ぜらる。關白重ねて仰せけるは、近日御身と忠頼を召上られ、善惡の御詮議有るべし。構へて後れ給ふなとあれば、それこそ願ふ所にて候へ。天誠を照らせ給へば此時疊り晴れなんと、勇みに勇み御前を立ち館をさしてぞ三重歸らるゝ。かくて其日に成りければ是ぞ天下の檢斷所、攝家清華を始めとし公卿殿上諸司百家、左右へ分つて相詰むる。忠頼方には舍弟忠春同じく甥の虎若。兼政の御方には廣信續きて座を固め、風さへ鳴をぞ止めにける。時に關白忠頼に向ひ、兼政富士大願の砌遊女弄びの證據はいかに。忠頼承りさん候無き事をよも安倍河より申來るべきや。それは兼政の心に覺え候べしと嘲笑つて申しけり。兼政聞召しいや某は覺えなし。かつて跡方なき事、但し證據や有るゝと宣へば、オ・證據こそあれ。其時御分遊女に取らせし自歌自筆是に有りと、やがて御前に差上ぐるに、兼政の筆蹟に疑ひなし。兼政暫く御思案あり。ふ・是はいつぞや櫻井の御所の御會にて、逢うて別れの御題に詠みたりし歌也。其日の披講はそれなる忠春が勤めしが、其時の詠草に紛ひなしと宣へば、忠頼聞きもあへず、否々いづかに罪が遁れ難きとて出來合の陳じ様仁體には似合ひ申さず。但し安倍川に櫻井の御所とて又有りや否や。關白暫しと宣ひ、櫻井の御會には兼政いまだ中納言の時也。

駿河下向の刻は大納言に任せらるゝに、何とてそれには中納言と記す。是不審と宣へば、忠頼道理にせめられて暫らく返答無かりけり。弟の忠春見かね、いや其色紙の詮議はともかくも、安倍川の傾城を兼政配所まで取寄せられし事、世に此沙汰専ら也といふ時に定元罷出で、なふ某預りのうちさやうの不義は存じもよらず。オ・爰に高橋宰相の息女朝顔の姫どやらん、兼政へ好誼有りとてはるべく下り給へども、中々大納言殿には知らせ申さず、其まゝ追返し申せしが、定めて此事をやと申せば、各是は高橋家三條家の契縁さも有るべきと宣ひ、是にても落ちざれば、虎若哉つてつと出で、いやさ確かなる證據は、すでに兼政安倍川にて遊女が氣儘にならぬとて理不盡に耳を削ぎ、あまつさへ所の者に手を負ふせ切散らせし事都まで隠れなし。かく惡逆の兼政を、歴々御最員と見ゆれば何を言うてもかひあらじ。是叔父者人、急ぎ館に歸り分別致されよといへば、闕白聞召し、オ・理には最員あり非には最員なり難し。若此列座にさやうの沙汰ばし聞きつる人や有る。時に養壽院末座に有りしが罷出で、此比安倍川の遊女とて耳を削がれし者候が、是やはと申上ぐればそれゝ急ぎ召せとある。畏て候とやがて御殿に召出し、養壽院に仰付け、此内に其方が耳を削ぎし人や有るといへば、かの女虎若にひしと縋り、なふ大納言兼政様扱もく御情なや、科も無き身を此如く恥ぢ幾度か今日も又死なれぬ命と歎くにぞ、いづれも横手を

てうど打ち、さて恐しき大伴の一族、人面獸心の積惡罪跡遁るゝ所なし。忠頼忠春兄弟を
隱岐の島に捨て置くべし。虎若は頭を刎ね公家武家の例にせよ。畏つて搦め捕り斷罪に
行はれ、折兼政には朝顏姫を給はり、再び照らす都の月、日を追つての御繁昌千秋萬歳^{はんざい}萬
々歳、改まる年の始と暦の始、めでたしともなか／＼申すばかりはなかりけり。

貞享二乙丑歲正月吉日

右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開版者也

加賀掾

二條通寺町西へ入町

山本九兵衛判

東山殿追善能



東山殿追善能

それ人は衣食住此三つ缺けざるを富りとす。三つの事僕約ならば誰の人が足らずせん。
一つれぐ草の語。
私撻わたくしのお
きて。
白旗の一本としにか
く。

假初にも威光を借
りにかく。
慈照院殿一義政の法
名

それ人は衣食住此三つ缺けざるを富りとす。三つの事僕約ならば誰の人が足らずせん。
爰に足利九代の公方征夷大將軍源義尚公は、政道に私撻なく五月涼雨の如くなれば、曲れる枝も葉も伸べて、直きを本と白旗の源氏の御代こそ久しけれ。御子一人おはします。萬榮丸と申して十六歳、御器量すぐれて麗はしく艶に優しくましませば、御父母の御悦申すも中々おろか也。折御執權には島山駿河ノ守政長・細川左京ノ大夫政元・斯波左兵衛ノ佐義廉・望月立番國貢、此國貢は若君の御乳母が弟、先祖はかくしからね共御憐愍の餘りに執權の座を許さるれば、さまでの智慧もあらずして、御威光を假初にも子細らしくさし出る。其外在番の國守城主日々の御出仕隙もなし、君人々に仰せけるは、慈父慈照院殿御在世の時神樂催馬樂を本とし昔物語に節し、其名を諸と改め觀阿彌・世阿彌・音阿彌に程拍子仕方を付けさせ、能と名付け興じさせ給ふ。然れ共御他界以後所々の兵亂によつて、天下數年困窮故させる道も打絶えぬ。然るに當年尊靈の二十五回忌に相當る。尤も法事は銀閣寺にて嚴かに取行ふべし。就いては御存生の時相興じられし一曲を棄て置かんは不孝の道、

つゞく一々。

泥眼、ふかひ一共に
能面の一種。

且は御追善の爲なれば、催ほせんとぞ仰せける。各々謹而承り、あつばれ深き御孝行、是に如くべき御追善いかでか以て候はんと、詞を揃へて申さるれば御感甚だ限りなく、彌其沙汰有るべしと御座を立たせ給ひぬる、道の道たる時つ風長閑けき國こそ三重めでたけれ。かくて老中常の座席に立寄て、能の評定有る所に立番國貢遙り出で、して其能と申すは如何様の事ぞ。某一圓合點參らす。様子承度と云へば各聞給ひ、實々年久敷事なれば御身はかつて知り給はじ、中々言語に絶し面白き事。やあ音阿彌はそれにやある。是へ出で道具の次第一々語れと有りければ。音阿彌は罷出で、つどく覺え候はね共、先能と申す其大概は、神代の神樂催馬樂を本とし神歌の音を取り、御神樂の樂器をうつし、大鼓小鼓太鼓鞶横笛、面は翁三番三、姥尉おきな小面泥眼ふかひ、其數九十三面也。衣裳は唐織縫厚板半臂狩衣指貫等、是も二十四色也。冠鳥帽子鬘鉢、木太刀長刀舞扇、舞臺の廣さは一丈八尺橋懸幅五尺長さは七九十一間、先概略と述べければ、國貢子細らしく目を塞ぎ打仰向いて聞き居しが、フウ面白さうな事なれ共、是は圖なうお物が入りませう。如何に御追善なればとて、先年諸事御簡略と仰出され今又かやうの奢りの沙汰、先此立番は同心ならず。たとへば上意有とて、各は御先代に其費を知りながら早速お受領申さるゝは、いやはや無調法千萬と嘲笑うてぞ居たりける。政元聞き給ひ、實々御身の申さるゝも其理なきには

づなう一共外に、非
常た。

愛宕白山一誓詞。

ぎめく一せりあ
ふりきむ。

は拙者に當事のやうに聞ゆ。愛宕白山隨分奢らぬ男、但し微塵程にてもお目に背く奢り有
か承らんとぎめば、オ、御身は勿論此一座残りなく身に應ぜざる奢有。いで聞度くは先
其小袖、一つにも好かるべきに何故重ねては着給ふぞ。立番聞いていやせん方盡きたる詮
義、これは寒さの重着奢とは申されまじと云。ホ、奢か奢でなきか、其重着さへ有るに、
御分の着らるゝ小袖も公方のおめしも相變らぬ絹布の類、何とは奢りならずや。費を費と
知るならば河内木綿を紺に染め唐綿をふつさと入、只一つ着給へとかんらーとぞ笑はる
ゝ。立番大きに赤面し、いや言はすれば言ふ事と人も無げ成過言かな。忝も御目鏡にて御家
老をも勤むる身に、下襷童の着す成る木綿衣服を一つとは侮つたる雜言と、詞を荒らげ罵へ
しれ共政元騒がす、是々餘急くな、汝が浪人の時を思は木綿の衣服が相應ぞ。昨日
今日まで公家方の瘠所帶を賄ひて、升を握り秤はかりをため、厘毛を争ふ身の、今引變ほりかうて方量
なき間廣き天下の御事業、汝が小さき心の定木に當てゝも寸法違ふべし。要らざる汝が簡
略沙汰、猿が佛を笑ふに似たり、傍痛しと笑はるゝ。立番彌腹を立て、何某を畜生に譬へ
ふつさとーたゞく
と多く。

秤をため一秤の目を
熟視すること、ため
つすがめつなし、いふ
時のタノなり。
猿が佛を笑ふ、小智
の大智を測り知るこ
と能はざる職。頬脇
落出に、本多くつ
／＼笑ひそれは猿が
佛を笑ふとやらん。

猿と云ひし頬骨を、引裂きくれんと飛んでかゝるを、人々慌て押し隔て、さりとては御前近し、先々静まり給へとは是非に宥め制せらる。政元居直りもせずえせ笑ひ、エ、人がまし何をし給ふ方々、近付き寄せて踏み殺さんと思ひしに、命冥加の有る奴かなこ、空嘯いて居られる。此事上へ聞えしかば千葉の城之介出給ひ、暫々各上使なるはと宣へば、はつと一度に頭を傾け謹而承る。城之介笏取直し、兩人の口論以つては君の御爲を重んじての故なればと、甚だ感じさせ給ひ、兎角互ひに論を止め、諸事宜しき様の相談然るべしとの上意にて候。時に政元、誠に上聞をも憚らず、存外成口論今更後悔仕る由、御前然るべく頼入存るこ、云も敢へぬに國貫居丈高に成、何人にじめんを與へし奴にも與へられし某にも、理も非もつかぬ料簡、上意にもせよ仰にもせよ、早速某は返辨申す。あた胸惡しと座を蹴立て我屋をさして歸るにぞ、人々齒痒く思すれど、殿中なれば堪忍し、拳を握りおはする所へ、義尚公御出有り、旁若無人の緩怠者、とかう批判に及ばれず、急ぎ政元馳せ向ひ、誅伐せよと仰付られ、御機嫌悪しく入給へば、畏て政元は手勢すぐつて三百餘騎、取る物も取あへず立番が屋形へ三重押寄する。望月立番國貫は急ぎ我屋に歸り郎等共を招き寄せ、我細川政元めに數年意趣の有けれ共胸を擦て堪へしに、今日殿中にての慮外、最早堪忍成り難し。今宵夜討にやせん但明日晝軍にやせんずらんと、詮義評定區々なる所へ、細川勢三

大柄さはきしなーさ
ほくは振舞ふ意。

渡り侍一定まるる主
人なく轉々と奉公し
歩く侍。

百餘騎、逆寄にどつと寄せ鬨の聲をぞ上げにける。屋形の内には思ひ寄らざる事なれば、上を下へともて返し門木戸固め騒ぎけり。政元紺の鎧白星の兜を着、黃川原毛なる馬に乗り門外に歩ませ寄り、やあ立番國貫やある。汝日頃の御高恩を忘れ法に漏れたらる雜言、君御立腹まし〜、急ぎ首を討て參れとの上意を蒙り政元是迄向うたり。尋常に腹を切れ、異議に及ばゞ踏み潰すぞ。如何に〜と呼ばれば、國貫櫓に駆け上り、何尋常に腹切れとは誰が事ぞ。定めて人違ひならんに耳垢を取て能く聞け。言うても我は萬榮殿の乳の親の弟なれば叔父分遁るゝ所なし。然れば汝は家來筋、冥加の程をも辨へず馬上にての雜言天罰を蒙らんぞ。急いで下馬し立歸り、公方へも此趣言ひ聞かせよと罵れば、政元腹筋を撓つて打笑ひ、扱は實から左様に思ひ日頃大柄さばきしな。やれ國貫の厚皮面、それも寸法違ひたり。忝も征夷將軍の若君を汝如きの下賤の身が、戯言にも甥分とは汝こそ冥加知らずよ。其上我を家來筋とや、いで〜家來か主筋かそれへ參て極めんと、馬より飛下り走りかゝつて門の扉に両手をかけ、えいやつと押しければ、貫木中よりほつきと折れ、左右へばつとぞ開けける。立番が一家肝を消し、わつとわなゝき逃げて行くを、我も〜と亂れ入り、追うつ捲つつ息をも繼がず、刃を碎きて三重戦ひけり。寄手は多勢殊に又、數代傳はる剛の者、立番が勢は小勢といひ、渡り侍雜兵故、討残されし者共も、一騎も残らず落

ち行けば、立番大きに腹を立て、エ・未練成る奴輩かな。いで某が一撃と、大長刀を振廻し、八方無窮の死狂、此勢に寄せ手の勢暫し弛んで見えければ、勝に乗りつ切て出、政元目懸けて渡し合ふ。暫しあしらひ搔潜、長刀をもぎ取て俯伏に踏み倒し、胴骨しつかと踏まへつゝ、今日始めてのお主筋に引手物致さんと、兩の耳へ指を入れ首引抜いて差し上げ、さあ悪人は仕留めたり。此陣引けや尤と勝鬨どつと作り立て、ざんざめかいて歸らるゝ。彼政元の勇力は、異國の樊噲我朝の朝比奈が門破、斯くこそあらめあら恐ろしやと、見る人聞く人舌根を巻かねはなかりけり。

第二

政元上意を蒙り立番が討手に向ふ由、下には端々沙汰すれ共、上にはさのみ知る人なく、常に變らぬ賑ひは大様なりける次第也。さるによつて萬榮君の御前には音阿彌を召れ、今朝父上の仰には、追付能の興行あらん、我にも仕れと仰られしが、何をかはせん此比は、打絶え稽古もせざりければ竟束なしとぞ仰ける。音阿彌承はり、誠左様の御沙汰にて候。然らば芭蕉か羽衣か、杜若もやと申上れば、實々羽衣こそ好からめ。さりながらついしか裝束して舞ひし事なし。一つはそれも稽古なれば、衣紋付袖捌き足取扇の差引に、心を付て

春霞云々春霞たな
びきにけり久方の月
の桂の花や咲くらん
(後撰集)春と張とか
く。
三保崎一見にかく。
波も一葉にかく。

君が世は云々君が
代は犬の羽衣まれに
きてぬづとも盡きぬ
巖なるらん(拾遺集)
佛説に天人が三千
に一度來りて、大石
を羽衣にて撫でく
して、遂に其石を撫
でつくすを一劫と
す。來てと見てとか
く。
浮島が拂々一原にか
く。
根ざし一心體の意。

直せやと、御裝束改めて、素面に天冠召しければ、誠の乙女も斯あらしと各心ぞ惑ひけ
る。さも懃々と扇押取り立ち給へば、地謠聲を春霞、謠たな引きにけり久方の、月の桂
の花や咲く、げに花桂色めくは春の駿かや、面白や天ならで、爰も妙なり天津風、雲の
通ひ路吹き閉ぢよ、少女の姿暫し留まりてこの松原の春の色を三保が崎、月清見漏富士
垣の、内外の神の御裔にて、月も曇らぬ日の本や、君が世は天の羽衣稀に來て、撫づ
こも盡きぬ巖ぞと聞くも妙也東歌、聲添へて數々の笙笛琴笙箋、孤雲の外に満ちて
て、落日の紅は蘇命盧の山をうつして、綠は波に浮嶋が、拂ふ嵐に花降りて、實に雪を
廻らす白雲の袖ぞ妙なると、いまだ半へ將軍出御なされ、暫々その稽古を止めよ。やあ
任せ國貫を即時に誅伐仕候と、軍の次第詞戦、一々言上有ければ、君暫らく打笑ませ給
ひ、誠に萬榮丸を安穩に、育てあげし乳母が弟と思ふ故、人並ならぬ立身に、己れが昔を
忘るゝ事、尤根ざしの二らぬ所是非もなし。如何に萬榮丸、彼奴が討たれしと聞かば
さぞ乳母が歎かんに、始終の段々語り聞かせ宥めよと宣へば、さん候乳母が歎く事聊か以
て候まじ。只今政元が物語にて存當り候は、姉が事は申に及ばず、某にも大方ならぬ盧外

うたかた一歌にか
長月一陰曆九月。

鶴鼓島一闇古鳥
黒染一住にかく。
ひたち一女房達。

を盡し候へ共、若輩故心易さにこそこそ勘忍度々に及び候。勿論姉には不孝故、内々申上げ勘當せんとの所存なれば、更々悔み候はじと仰上ぐれば、我君は呆れさせ給ひ、扱は天罰遁れざる、惡逆無道の愚人かな。彼が一言を服せしに似たれ共、人を治め天に仕ふるは、吝きより好き事はなしと聞けば、先此度は能を止むべし。ついては北山の紅葉盛りとて萬榮丸が訴訟有。何時にも心に任せ催すべしと宣ひて、御座を立たせ給ひければ、若君御悦喜限りなく、時めく色の紅葉狩花に負けじの御出立、様々くろひ給ひしは實に異様にぞ三重聞えける。是は扱置、其比前の關白の御息女直衣の前と申して、御年は三五夜の月花に心を寄せ、詠む泡沫の水に鳴く、蛙の聲まで身にしめて、情の時雨戀の山、色どる繪にも及ばじと見る人まばゆく成にけり。折しも長月初めつ方、露踏み分て入鹿の嵯峨野に近き双の岡、乳母の姉尼と成り住み侘びし柴の庵、爰も此世の内成や。いつ人訪ひし跡もなく、道は苦蒸し葛葛、葎横切りて戸ざしたり。偶言問ふ物とては、梢に弱る蟬の聲、岩の挿間をかすかにも、滴る水のとくとくと、いそぐ日脚の影早き、時をつくるや鶴鼓島、ア、短きは秋の日ご浮世の中と歎きてや、かゝる所に墨染の、袖の露霜雪の暮、嵐木枯山嵐、いこゞ寒さも寂しさも、猿狼集ひ來ん。あら怖、怖し恐ろしと、若き御達の口々に、婢女呼んで紅葉葉を拾はせ搔かせ、林間に酒煖めて戯れの尼諸共に打交り、

鳥ならば一坂にか
く。

ござり一集り。

擣足一踏集の上にあ
がること。

ふた／＼ほた／＼
と騒ぐ意。

土砂ぐるめ一土砂
つきたるまゝ。

昔話の二つ三つ益めぐる折からに、公方の御息萬榮丸、御供多きは氣詰と遙か後に留め置かせ、年老いたれ共音阿彌は心軽きが御意に入り、只一人召し連れられ、伊達な振袖ふり振つて、歩ませ給ふ御姿、これも命を鳥ならば、孔雀もはたとけ壓されん。四方の山々御覽じて御機嫌よろしき折節に、一通り降る村時雨、是は無興と音阿彌は御手を引き、木陰もがな彼方や此方やと柴の戸の、家こそ見えて候と彼草庵に駆け寄れば、やれ人音よ、簾下せ障子をさせよと女房達、ひとつとござり居られしは無人聲共謂ひべし。され共若君音阿彌は、其氣もつかず縁際立に立ち休らひおはせしが、何と音阿彌かゝる所にも人住むにや、定めて隠者か遁世者か、ア、物痕びたる住居やと宣ふをお腰ども間よりさし覗き、差し足し跡へ返り女房達に囁くは、あれにましますお若衆は將軍の御公達、萬榮殿とやらんに紛ひあらじと云ひければ、何其萬榮殿とは名に高きお若衆、我も覗かん我も見んと、障子を破り物の隙、高窓には纏足し櫻子格子に取付きて、立かゝり掩ひがゝり息を詰めてぞ覗きける。さすが姫君はふた／＼共し給はず、物見猛し騒がしとのたまひながら、堪へかね女房達の後より、ためつすがみつし給ふが、餘に舉り迫り合ひて、障子をはたと押倒し、敢へなくも二三人ころり／＼と轉び落ち、是は／＼とふためくは可笑しいやら笑止やら、興の醒めたる風情也。漸く起きて逃げ上り土砂ぐるめに隠れけり。されども

とゞろ／＼と鳴る神
も一天の原踏みとゞ
ろかし鳴る神も思ふ
中をほさくるものか
は(伊勢物語)

姫君は枯野に立てる糸萩の、いと恥かしげに口掩ひ御顔赤め、若君と目と目をじつと見合はせて、互に見とれ給ひしは、花か紅葉か月雪の光合ひたるごとく也。音阿彌お側に参り、最早時雨の止み候が、又降り申さん告有て、女房達神鳴の魁を致さるゝに、早お歸りと勧むれば、ア、忙し戀知らず、とゞろ／＼と鳴る神も、思ふ中をばよも離けじ。よし神鳴が落ちもせよ、時雨が降らば降りもせよ。それが望みぞ落ち合ひて濡るゝ縁と成るならば、何か思はん坊主めと、背中をはたと打ち給へば、音阿彌ぎよつとし御顔を眺め、いやはや油斷のならぬ、今迄は何にも御存知なきかと思ひしに、戀知りの譯知り様。ならぬ／＼と頭を撫で、採手をして居る所へ姫君たよ／＼と來らせ給ひ、一樹の陰の雨宿り、一河の流れを汲む酒を、いかでか見捨て給ふべきと、袂に縋り留むれば、諸さすが岩木にあらざれば、心弱くも立歸る所は山路の菊の酒、いざさら一つと宣へば、姫君取上げ恥づかしげに若君へさし給へば、忝しと押し戴き受け持たせ給ふ時、女房達寄り舉り妾戴き奉らん、いや妾が先ちやはの、いや妾こそ我こそと縋り貪り取付けば、音阿彌大聲上げ、はあ是は又何事ぞいの。悉皆伊勢の相の山比丘尼坂の比丘尼ぢや迄。先の障子に懲もなく、大事の此方のお旦那を押潰いて給はるなと、押分け押退け若君のお盃を奪ひ取り、姫君へ奉り、最早暮方近ければ、御所のお首尾も如何ぞと頻つて勧め奉れば、力及ばずしほ／＼とさすが岩木にあらざれば心弱くも立歸る所は山路の菊の酒、いざさら一つの意。いざさら／＼と意。

立ち別れ行く御名残、互に影の見ゆる迄、見返り見送り見返りて、涙ながらに歸らせ給ふ
若君の御思ひ、掲姫君の御歎きいづれをいづれとたくらべん。あはれ優しき戀慕成るは
と、感ぜぬ人こそなかりけれ。

第三

眞芝一塔にかく。

思ふこといはで云々
思ふ事いはでぞ只
にやみぬべき我とひ
としき人しなければ
(伊勢物語)

震ひ聲一降るにか
く。

現なや戀の山路に踏み迷ひ、思ひ眞芝の露の間も忘られもせで、若君は只うかくと遣
る方もあらぬ風情に見え給ふ。音阿彌察し申せどもそれとはさながら憚りて、此比は君の
御機嫌勝れさせ給はぬ様に見請け奉りて候。若し御心にかゝらふ給ふ事候はゞ、此坊主め
に仰せ聞かされ候へかし。あつばれ思召のまゝに爲了せ上と申せば、若君笑みの御色見
え、思ふこと言はでたゞにや止みぬべき。双の岡の紅葉狩ちらと見初めし面影を、忘られ
もせず明暮と、思ひます穂の糸薄穂に出来るか恥づかしや。ア、異なる物ぢや。心は我がま
なれど、まゝにならぬは異な物よ。音阿彌小聲にて、さればこそく。さぞと察し参らせ
早手段を廻らし置て候。今宵逢はせ奉らんに勇ませ給へと申すにぞ、枯野に雨の震ひ
聲、そぞろ浮き立つ御氣色にて、神ぞ嬉しい過分なと、手立の譯のよきやうを、功の入た
る音阿彌に、俄に習はせ三重給ひけり。雲井の餘所に、馴れ衣、名のみばかりや直衣の前、

ことならう一格別、特
に。

おさ文字ーおさびし
いの意。

さぜー聲女。

人の見る目も恥づかしの、洩りて餘れる戀草の、結びも留めぬあだ人を、誰が見よとてか
見初めけん。あら悔しの紅葉見や、恨めしの雙の岡。せめて日なりと違ひはせで、同じ日
影を行く雲の、立ち掩ひたる我が思ひ、夢現にも見えよかしと歎き崩折おはしけり。爰に
常々参り馴れし軒端といふ旨御前、お見舞とて來りけり。御乳母女房達、よくぞく好き
所へ。今日はことならうおさ文字さう故何をがなと思ひしに。お側へ参られわつさりと、お話
あれと手を引てやがてお前に連れ出る。姫君御覽じ、扱珍しや軒端、いつのまゝやら定め
て此比は、月見紅葉見に彼方此方と流行りつらん。さぞ面白き事あらめ語りて成り共聞か
せよと、四方山の事序に軒端申けるは、只今中京に佛と申御前候。筑紫琴の上手にて、折
々連引致候と申せば、それはさぞ面白からん、聞き度いものやと宣へば、御乳母承り、ア
それはお易い事、呼びに遣はし候はん。去ながら軒端の方より能く言遣り給へとあれば、
然らば公方さまのお同朋衆、音阿彌殿と申す方に昨日より参りて有り。妾が方よりとて直
に御使遣されよ。心得たりとて御乳母かくと使を遣さる。斯くて黄昏過ぐれ共免角の返事
知れざれば、待ちかねさせ給ふ故、又お使をと有る所に、もはやは是へと告來れば女房達出
で迎ひ、是へへと手を取て靜に連れて出にけり。御乳母立寄られ、扱々能うぞ上られし、
今よりしては軒端と連れお出入し給へや。なふ見れば見る程貌氣高き生れ付、顔容の美し

ふた／＼しーべタ
／＼とあわた＼＼し。

鏹珊瑚を碎く一兩曲
云々一此語近松の猫
間達第二にも見ゆ
白染天五絃彈時、
鐵壁珊瑚一兩曲、
水窓玉盤千萬聲を
誤りて、太平記卷十
八に鏹珊瑚を碎く云
々とせるに據れり。

すがりて一焚え盡き
て。

さ、さぞ親達のいとほしくや思はれん。是なふ軒端、餘りふた／＼しけれ共御待ちかねな
されしに、いざ一曲と云ふまゝに、蝶鉢の玉琴取出し、二人の前に置きければ、引寄せて
搔き調べ、韓神といふ祕曲をば、連引し唄ひけり。春風の吹き初めて散る花の花の、雪は
白妙の、衣手に昔忘れぬや、花橘よ袖の匂ひもなつかしやな。秋風にもみぢ散りかゝる
袖は紅ゐの、衣手に時雨降る。板屋はばらり、ほろ／＼り、降るは木の葉と窓の月に知
られて、秋暮れて／＼と彈き收めし其聲は、織珊瑚を碎く一兩曲氷玉盤に落ちて千萬聲、
褒むるに詞も及び難し。姫君ことなう感じさせ給ひ、扱面白き祕曲かな。今一手とは思へ
共、夜々の勤に草臥れん。明日又聞いて慰まんに、今宵は是に留めよと云捨てお寢間に入り
給ふ。御乳母おさんを招き、あの二人の人々を妾が部屋へ伴ひ床取りて參らせよ。是々誓
女達ゆるりと休み給へ。折柄ながら夜寒なれば風ばし引かせ給ふなと、いと懇に心を付け
御寢所としてぞ三重入りにける。軒の端山の夕嵐、遠寺の鐘を誘ひ来て、早初夜も過ぎ後
夜近し。姫君衾に移らせ給へど只うか／＼と寝もやらず、叶はぬ戀に亂れ髪梳かせて留め
て伽羅の香の、すがりて空に燐るにぞ、ア、辛氣さなきだに胸の煙を凌ぎかね遣方もなき埋
み火に、薪加ふる果敢なさは、やあとの戸を明けよ簾掲げよ、端居して月見見んとあだし姿
も惜々と、欄干に立ち盡し、其方の空よと眺むれば、君が方へと行く雁の、ア、心なやせ

ほに一ほんに。

松虫一待つにかく。
簾竹一戀を爲にかく。
夜々に一節々にかく。

なげの替り節一當時
はやりしなげ節の替
り節。「歎きながら
も云々」の歌は投節
の文句。

めて扱、落ちて問へかし一筆の、文の便を頼まんによしや由なき我戀と、鳥もあはれを思
はずや、憎やつれなきあの雁やと、せんなき恨みの御涙。かくとは知らで女房達、今宵の
琴の連彈を、とやかく噂有所に御乳母申さるゝは、何と皆々思召す、今宵の瞽女^{くぜ}の俳は誰
にやら能う似たが、誰にやらハアと言ひければ、ほに誰にやら／＼口々に言ひけるを、
姫君は聞し召し、扱もどかしやそれ、雙の岡のと聞もあへず女房達、實に其萬榮殿よと揃
ひし詞はたゞならじ。暫して御庭を、しどろもどろに下駄の音、怪しやと女房達、差覗
き見てあれば宵に參りし俳也。なふ／＼其方はいまだ寝給はずや。さればの事暫し枕を傾
けしに、誰松虫のりん／＼と、ものあはれげに啼く聲は、彼も戀をや簾竹の、夜々にあ
こがれすだくかご坐に忍ぶ袖の露、起き出でて侍ふよ。なふしほらしや今もごて御身の
噂有りしぞや。いまだ姫君さまも御寝ならせ給はぬに、參りてお話をませ。左よ右よ
と教へつゝ、お縁際より手を引いて御側近くぞ直しける。姫君御覽じ、能くこそ來れ、誰
とも、山鳥の尾の下垂尾の長々し夜の獨り寝は、物憂きものぞ語れとて、流行小歌の様
々に有るが中にも思ひ川、うき身をなげの替り節、歎きながらも、月日を暮す、扱も命
は有る物よ。何と俳、戀をする身は誰とも、かく思はめと宣へば、如何にも／＼餘所事
ならず、我身に知られ候と、互に色に出つ出すもせめて慰み給ふうち、夜は丑三つに更け

しそもなししそけ
なし。

せき／＼しき／＼
に同じ、たび／＼

富士は磯一高低深浅
比較の限にあらずと
の意、磯は沖に對し
て卑近の意に用ふる
流行語。

にけり。夜々の宿直に女房達、睡さ頗れば彼處爰假寢射しどもなし。今は早姫君と佛と只
二人、飽かぬ咄の次に姫君宣ふは、おことは方々へ参る由何處々々へ行きぬるぞ。さん候
御所様方公方様へは取分せき／＼參り候と申。フウ誠其公方とやらんの御子をば、いつぞ
や餘所にて見みえしが、男にも女にも、か程打揃ひたる顔容又有るべき共思はれず。お心
いきもさぞとあれば、いや申し、それにて存じ出したり。双の岡にて貴方にも御覽じられ
候とてそれは／＼御なづみ、是でも命あらんかと懲ひ焦れさせ給ふとあれば、姫君そ
ぞろ嬉しげに、實や思ひ餘り其里人に言問はん。同じ岡べの松は見ゆやと、とは言ひなが
ら我思ひに、あなたの戀を比べなば富士は磯よと宣へば、いや／＼あなたの御なづみも少
も變らせ給はじ。が誠さ程に思召さば御媒申さんが去ながら後にお變りましませば妾迄
も首尾惡きが、しつかとお變り有るまじきな。ア、由なしそもやそも女の身にて斯した事明
様に言ひ出すは、能くせん方なき餘りと思ひ遣りなきおことは扱戀も情も知らぬかはと、
恨み岬たせ給ひけり。實誤りて候也。然らば何とぞ計らひ首尾能く逢はせ参らせん、ア、
まゝならば妾が身が萬榮さまにて有るならばさぞお嬉しうましまさん。して先づふつと萬
榮さま爰へ來らせ給ひなば如何渡らせ給はんとあれば、はてそれは言ふが管、兎角なしに
此如く御手を取てと佛の手を取らせ給ふ時、佛も姫君の御手をじつと締めながら、然ら

ば我こそ萬榮丸と御目を開き髪を取らせ給ふにぞ、姫君興さめ御肝潰れ立て遁げんとし給ふを若君縋り引留め、情なや今迄宣ふ御詞最早變らせ候かや、よし君はともかくも我が戀路の積る雪、解けて語らん其内は放つ事はならぬぞや、ならぬぞならぬと引止む。姫君御顔打赤め、ア、恥づかしの我風情、實は女の淺ましさは思ひ寄らざる御手立、眞しからで驚きしを淺はかなくや思すらん。戀路の習と云ひながら、斯く迄心を盡し給ひ由なき今宵の御姿、皆我故と思ふにぞ、いとゞなづみも十寸鏡御身を映す佛とは今こそ思ひ合て侍ふ。せめて夢にも現にも見えさせ給へと希ひしに是は夢かや現かや、誠と更に思はれずと餘りの事に打凭れ嬉し泣きにぞ泣き給ふ。萬榮丸聞し召し、いや／＼それは御僞、眞實思召すならばいかで驚き給ふべき。富士は磯とは宣へどもそれでは富士も磯ならじ。何方が富士ぞや磯ぞやと、詞詰めに姫君はほうどあぐませ汗たら／＼の御詞言有所に、側に臥したる御乳母むく／＼と起き上り、あら怖や恐しい夢を見しといふ聲に、慌てふためき姫君は衾の下に臥し給へば、若君ちやくと目を塞ぎ氣もない顔にてまじ／＼と、塵を捻りておはしけり。御乳母の通り者から／＼と打笑ひ、さつても能う似た晉女様や、萬榮さまに生寫し必ずお目を明き給ふな。若しも明かせ給ひなば萬榮様かと妾迄よい年をして濡れかゝり、なまじ要らざる詰開き、富士は磯かは物かはと口舌いふ間に夜が明けば、悔みも甲斐も有

まじきに、とかく妾は外しませう。是萬榮さまの佛さま、富士の磯のは古いぞえ。口舌話はお氣詰帶紐解いて打解けてしつぽと語らせ給ふべし。是から妾が瞽女の番見ぬ顔知らぬ顔ぞやと、言ひ捨て局に入ければ、若君あつたら興さめながら通り者めに氣を付けられ、恨みも口舌も打止めて、比翼の枕直衣の前連理の衾打重ね萬榮榮花の契りの初め、めでたかりともなか／＼申すばかりはなかりけり。

第四

山は塵土より起り海は一滴の水よりなれりとかや。されば萬榮丸直衣の前の御方へ深く忍ばせ給ふといへ共、早くも公方の御耳に入大きに驚顛まし／＼、御執權の人々を密かに御前に招かせられ、斯様／＼と聞きつる也。そも此息女は當今御后がねにも立給はんかと沙汰の有り。若し此事世に洩れては大事の上の大事ぞ。今夜の内に萬榮丸を駿河の國へ追下し、清見寺の住持にしつかと預け置くべし。暫時もためらふ事なれど、以ての外の御機嫌なれば各驚きお請を申し御前を立て、忍び／＼に若君の御下向其夜の支度ぞ三重慌し。此事遂に姫君傳へ聞し召し、肝魂も消え／＼と戀の重荷に増す思ひ、今の歎きに歎ぶれば昔は物を思はざりしと、人目包みの御涙あはれと言ふもおろか也。餘りの事の物憂さにお

庭に出て立ち忍び月に卿ち星を拜み。あはれ願はくは命の内に今一度廻り逢せてたび給へ
と、涙貫く玉の緒も絶ゆる計に祈らるゝ。誠に天の納受にや、數年御所に住み馴れて白き
狐の有けるが、悄々として姫君の御側近く参りけり。常見慣れさせ給ふ故お戰慄もましま
さず、扱々優しき汝が風情いつに變り萎れしは我が歎を憐む躰、人に語らぬ道なれば獨り
胸を焦せしに能くこそ、嬉しやな。誠に汝は前業にて童類と生るれ共、爲せる善根有ける
にや神變自在を振舞ひて智慧賢き物なれば、何とぞして自らを萬榮丸のおはします在所べ
伴ひ逢はせてくれよ。やあ年月馴染の知るべにはとて、口説き立ててぞ仰せける。實にや
別れを恨みては鳥もあはれを思ふとや。狐忽ち女性こな成、御歎の体餘りとあれば御痛はし
く、假令仰せのあらずとも萬榮君の御在所へ連れ参らせんと思ひしに、御心安かれ、去な
がら、斯嚴しき御所の内此まゝにては忍ばれまじ。鳥に變じて連れ参らん。必ず御驚顛ま
しますな。姫君飛び立つばかりにて、愚かな事をいふ物かな。火の中水の底なり共潜りて
行きたし逢ひたしと、思ふ心の如何でかは驚く事の有べきや。片時も早くと宣ひし詞の内
より驚と成、姫君を搔き東路さして飛び行ひしは、不思議といふも三重餘り有り。かく
とは知らで女房達彼處や此處と駆け廻り、お姫さまはと尋ねれど誰知つたりといふ人なく、
御縁にやお庭にや其處の爰のと騒ぐにぞ、御所中驚き不審をなしお倉お文庫残りなく、餘り

溝見寺と申すにぞ
辯しさ限なく一此句
省略に過ぎて、文意
明瞭を缺く。

の事に下々の部屋へ御門の外迄も、尋ね搜させ見けれ共御行方のあらざれば、父上御臺聞し召し、こは如何に情なや、變化化生の業なるか。などお乳乳人女房共は側を離れ油斷して見失ひては有りけるぞ。尋ねて返せと伏し轉び流涕焦れて泣き給ふ。御痛はしや御臺所は咽ぶ涙と諸共に、ア、しなしたり。又二人共ある子にや、女とは生るれど一人も一人甲斐有て月花に心を寄せ、雪の朝の寒きにも歌を詠み興をなし夫婦の心を慰めしに、今よりしては誰をかは姫とや言はん子とやせん。共に誘へ、鬼住む嶋へも露塵命は惜まぬ物をと、消え入るばかりに歎かる。殿下も頻れる御涙を押さへ、實々歎きは理なれ共死して別るゝ道ならず。定めて變化の所爲ならん。天に上らば力なし。大地の上に在るならば鬼界高麗朝鮮迄も谷峰分けて尋ねさせ、取還さで置くべきか。心安く思はれよと、様々諫め参らせ、先々恙なき様にと、諸寺諸山へ御祈念の御使者遣はし三重給ひけり。通力自在の白狐なれば刹那が内に駿河ノ國興津が原の片傍へ姫君下し奉り、我は又下女と成りざぞ氣疎くも思召されん、今四五町参りねば若君のおはします溝見寺と申すにぞ、御嬉しさ限りなく、さるにても汝が情いつの世にかは忘るべき。とてもの事に自らが初々しき田舎住み居馴るゝ迄は頼む也。仕へてくれよと宣へば、何がさて、兩御所さまの御子なれば追つ付け御歸洛ましまさん。それ迄は宮仕へ御供申して歸らんと、勇め申せば自から

御足軽く浮き立ちて清見寺にぞ着き給ふ。先づ姫君を傍かばに置き參らせ、門前に立ち寄れば内より大共躍り出で、大きに猛り懸るにぞ、流石野干の果敢なさははつこ驚き度を失ひ本の正體顯るれば、犬は透かさず飛び懸り何の苦もなく咬ひ殺し、門の内にぞ入りにける。姫君は恐しくも情なくも悲しさも兎角前後に昏れながら其まゝ死骸に抱き付き、搊恨めしくも死したるかや。由なき妾を救はんとて雲路を凌ぎ霧を分け來りしもあだと成、非業の死しをしけるよな。ア、つれなきは我戀路、なまじ都の内にして焦がれ死しなば今更にかゝる憂き目は見まじ物、是に付ても汝が刲殺す犬より自らをさぞや恨みに思ふべき。許してくれよさりとてはと、聲も惜しまず泣き給ふ。歎きの聲に驚き、何事やらんと寺中残らず我わもわと駆け出る。萬榮丸も立ち出で給ひ姫君を御覽じあへず、なふそれなるは直衣の前ならずや。何萬榮さまなるか。是ははと抱き付き悦び泣きにぞ泣き給ふ。され共若君不審晴れず、して先づ遙々の道なるを何として來らせ給ふぞ。其上是成狐の死骸に愁傷の體心得す。如何成いかなる事ぞと問ひ給へば、實に御不審は御理じゆり、斯様かやの次第にて是迄參りて候所に、御寺の大共駆け出て斯る仕業の情なさ、思し遣らせてたび給へ。斯様に廻り逢ふ事も是皆彼が恩なれば、如何成御業をなされて成り共、彼が前業未來をも助け得させてたび給へと、又さめめとぞ泣き給ふ。萬榮丸は勿論寺中の僧衆諸共に、刲も不便の次第

三保の一見にかく。

斯て一書くにかけた

やと感涙袖をぞ絞らるゝ。住持宣ふは、御物語を承り人間物を知らず候。畜類様々有りといへども、狐は神に通達し仇を爲せば仇にて報じ恩をなせば恩にて報す。いでく神に齋ひ得せんと、御寺の内に社を立て、稻荷明神と崇め、よきに供養まし／＼て、拵寺中の御鬱氣を察し奉り候へば、幸あれ成る松原に僅かの轡にて候へ共、海面富士の眺望いと面白き所なればあれへやはと申さるれば、若君笑壺に入らせ給ひ、然らば左様に致さんと、姫君を誘はせ氣疎き秋の野道をば、辿りて三保の草屋形に移らせ給ひ 三重憂き事を憂しと思はゞ棄つべきに、猶色添ふる濡れ衣、昨日までは歌にのみ詠みし富士の根、今日は又居ながら三保の松風や、楓の戸叩く夕間暮、葦の枝折に濱底、いつしめなれぬ葦簾、よしや玉樓金殿に芙蓉の衾敷くとても一人寢覺は物憂きに、君と添寝の草筵紅絹の裏ふく蒲團より、しやんとしてよや中々に昔戀しと思はずと、互に解けし御心、包む方なき明暮に或は富士の四季の景、歌に連れ寫し繪に斯て月日を送らるゝ。其比同國浮嶋が原に稻妻六郎とて夜盜強盜の大將有り。從ふ盜人十餘人、是等に向ひ云ふやうは、聞けば三保の松原に將軍の若君流人と成りおはする由、定めて金銀衣服の類なきことは有るまじき。いざ忍び入り取るべきと、ある夜更けて忍びけり。折節若君御目さめ、あら不思議や何とやらん物臭し。如何様只事ならじと、御太刀取て脇挾み燈火を打しめし妻戸をそつと押開き、暫し透し見

給へば、向ふの塀下切り明けて密かに潜り入る者有り。若君静かに寄り給ひ、太刀抜きかさし丁ど斬る。心地よし首は内、胴は外にぞ踏ん反りける。夜盜共肝を消し、思ひ寄らざる次第やと暫し呆れて居る所に、程が谷喜六といふ盜人塀をひらりと飛び越せ共、暗さは暗し火は持たず、前後のあいろ見えされば沈んで窺ふ體なれば、若君は縁際の木陰に隠れおはしけり。外に在し蜻蛉四郎喜六が入りしを力にて、切明けし塀下をそろりと潜り立ちけるを、喜六は四郎と知らずして若君成りと心得、飛懸り斬り倒し、やれ物奴は仕留めたり路次口へ廻れ、明くるぞと、戸を明けに行く所を若君遣過し、横に拂へば程が谷は二つに成てぞ倒れける。大將稻妻腹を立て、すは爲損ぜし此上は塀押潰し入れやとて、我もくと兩手を懸けえいや／＼と押す所に、松明手々に振り立て大勢の聲々に、やれ盜人よ、強盜よ、一人も遁がすなと、喚き叫んで駆け来る。強盜共驚顛して、命有ての盜みぞや。引けよ逃げよと云ふこそあれ、皆散り／＼にぞ落行きける。加勢の者共駆け集り御庭に畏る。若君御覽じして、方々は誰人なれば斯深更に及びし事を早くも知つて來れるぞ、不思議さよと宣へば、さん候我々は清見寺の寺中稻荷明神の仰せを蒙り、當國中の野干共殘らず參上仕る。猶此上も我々が晝夜の守護と云ふ下より、皆々狐の面を顯し消すが如く失せにけり。若君姫君諸共に、扱は稻荷の明神と祝ひにし恩、且は又年月馴染みし姫の恩、彼是遁れぬ

恩愛の夫婦の中を千世迄もと、頼をかけさせ給ひける神變奇特不可思議の、奇妙有りける御神靈、有難かりける次第なりとて、信仰せざるはなかりけり。

第五

且而一かつて。

親子不快一不快は不
和の意。

大内には萬榮丸直衣の前非義とは兼て聞し召せ共、其義は且而御穩便にて只親子不快の沙汰とし、御詫の宣旨有る故に、兩家肝に銘じ有難く、急ぎ迎を遣はされ兩人上洛ましませば、殿下には直衣の前公方には萬榮丸、御親子打連れ御禮の參内有るこそめでたけれ。内よりの宣旨には、二人ながら年にも足らで永々鄙の憂き住居、さぞ心憂く思ひつらん。付いては萬榮丸と直衣の前婚姻の結び仰せ下さるゝ間、兩家共其心得有べしと、則ち萬榮丸を官職に任せらる。殿下將軍冠を傾け、扱有難き勅諭やと再禮してぞおはしける。重而の宣旨には此度田舎住の内富士山十二月の風景見つらん、申げ上よとの御事也。萬榮謹而承り、ひ奏で候と申上れば、君叡感淺からず。然らば其寫繪御前にかけ、歌舞し教へ奉るべし。逆もの事に庭上に田子の鹽籠をうつし潮汲む體を學ばせよ。早疾くと宣へば、堂上堂下一同に是は興有御事と喜びのゝめく三重

先づ正月の山の姿一
以下前出脣の二一四
頁九行以下二一六頁
一行迄に全く同じ。
一二の異同は脣の方
に註せり。

ながめ也、富士は和國の蓬萊山、峯は削りなせるが如く其高さ測られず。かくて若君姫君
は勅に應じて立田山、顔にも紅葉や色變る四季の次第を述べらるゝ。先づ正月の山の姿、
(中略)それが上にも雲霞のと絶え無く、沖も汀も白波のさす潮時と蟹少女、袖を結んで肩
にかけ、いざ／＼潮を汲まんごて寄せては返る片男波、さら／＼さつと汲み受けて、もつ
振袖のしほらしさ。裾に立波自ら濡れし姿の打揃ひ、聲を揃へて君が代は千世に彌千代
と歌ひつれ、上下壽き治まる御代、萬々歳／＼めでたかり共中々申すばかりはなかりけ
り。

右此本者依小子之懸望附秘密音節自遂校合令開版者也

加賀 機

二條通寺町西へ入ル 山本九兵衛刊

富士山十二月の風景

道 中 評 判 敵 討

一心五戒魂切上るり

道中評判敵討

竹本内匠利大夫正本

近江源氏一真ふにか
く。
なさけしがらむ一情
の纏ひからまる。
もりすけは一ははは
の誤なるべし。

掲も其後栗の花咲けば梅雨入の雨零、杜鵑花は落ちて葵花、咲く頃しも雨のあがりかとり
がてらに干す衣や、武具馬具調度の徽る彼の土用干まで待たれじと、いづれの御館屋敷に
も、細引渡す屋の内は又焚代ふる伽羅の香の、薰じ渡るぞたゞならぬ。わきて名高き武士
の名にし近江源氏の末佐々木氏波之丞此屋敷にも眞々と、腰元仲居はした者男噂や戀話、
戯言交る笑草、ねよげに見ゆるお娘御さのさままでも手づから衣の仕舞の玉襷、情しが
らむ姿かな。御草履取守助ば男稀なる御座敷も律義者とて許されて、御手道具の塵埃掃く
手もたゆき玉襷、鼻唄うたふ手すさみや、手癖悪きはわがものゝ思ひこぼるゝ常なるに、
まして器量や色盛情盛の御娘御、佐野のわたりの雪見より消えば一緒の御情、忝けなし
や夜なゝに可愛がるゝ面瘦は、猶鼻筋も高師の濱仇波かくる故ぞかし。狼御髪斗に燃
ゆる火の胸に焦れて何となく、守助來よと召されつゝ、火髪斗の手が足らぬ。そこを持つ
てとくどからぬ御點頭に零れつゝ、差櫛もるゝ前髪の亂れかゝれる隙間より、男見る目の

吉野の一好しにかく。

木枕八つ打割つて
種々工夫思案するこ
とを枕を割るとい

襟につく一権勢に阿
附すること。

いたづらは、親生付の外ぞかし。守助はつと御側へ夜の寝巻のはで模様、とめ木の薰御座敷へ零すが如く引散らし、守助なんと此模様思ひ付ぢやが悪いかえ。一村薄穂に出でゝ亂れ合うたといふ模様、自らが身にうけ嬉しい模様ぞと、わざと寝巻に染めたるは可愛らしであるまいか。これは自ら一人でなし。妾が夫になる人は心意氣をばかあいしと思うてくれたがよい筈と、山の彼方の遠いから通ふ心の戀流し、言葉の水の淀みなく漏りて流るゝ守助が、心の淵の情河深き御恩と思へども、もしやは浅き淺澤の底見ぬかんと思ひつゝ、さて／＼これはおぼしつき。承れば武藏野の一村薄の穂に出る月見る頃には何方へやら御嫁入りと聞きつるが、いかさまにも御二人様、一村薄のもつれ寝にしつぱりとした御挨拶、さゝめ盡きせぬ御契り二世も三世も變るまい。變るなどと合ひて、お仲吉野の初櫻、花のやうなる御子様を並べて御覽じましましたらば、これほど目出度い事とては又ま一つとも候まじ。いや申し私奴も晒布半匹求めまし、木枕八つ打割つて模様を案じ出しましたが、恐らくは思ひ付、友禪染の一筆繪に不心中の草盡し、伏猪の床の一人寝に恨みの夢を見る所、一念の鬼百合が一心有る姫百合を、下に敷きたる其風情只口先でねつぺりと、男たらせし女郎花襟についたる其憎さ、男郎花が腹立てゝ面恥かゝする所をば、さつと書かせて候と言はせも果てず胸つくしつかと取てこれ男、當事言うていやがらせ思ひ切ら

肩背に結ぶ一弊衣を
着るをいふ。

際づく一しみの出来
るをいふ。

せん企なるか。誓文くされ馴染みてより暫し忘るゝ隙もなく、親兄弟の目を忍び幾瀬の思ひするぞとよ。そなたごても知る如く去年の冬の始めより、縁につけんと仰せられ様々の衣小袖道具までの沙汰あれど、そなたに別るゝ悲さに、女の悪き病氣と偽り親の氣に背き、御主一人を樂しみてかやうに月日を暮すなり。重ねてかくと有るならばさう／＼嘘もつかれまじ。何卒急に分別し、コレ此所をつれて退きや。たとへ野の末山の奥蟻住む磯の憂き住居、肩背に結ぶ世なりとも、いかで恨みと思ふべし。機嫌を直しや直してたも。なに／＼の誓文ぞ。さもしい心は持たぬぞや。コレ此寢巻が出來てからよい首尾無さに寝る間なし。幸ひ父様もお留守ぢやに機嫌直しに寝々してたも。餘の心無き證據には、村薄の亂寢に露をこぼして際づかせ又逢ふまでの記念にせん。鬼の來ぬ間の洗濯ぢや。ちやつと／＼と抱付く。其手枕の戯れは餘念無うこそ見えにける。ところへ旦那御歸りと告げ知らすれば二人の者、小陰に隠れ終りける。一子佐源次出迎ひ、今日は御歸り常より遅く候て心許無く存する上、何とやら御機嫌のすぐれぬ様に候が、お氣ばし悪う候かと尋ねらるれば波の丞、いや／＼氣分に別義なし。今日歸る途中にて不思議な事を見付けしが、いかにとしても氣懸り也。扱それに就き其方に申渡する事有り。かね／＼聞て置かるべし。某盛の古へは赤松源次左衛門とて人も知つたる者なるが、少しの事にて浪人し、父常樂老もろ

共に大津に住居してけるが、父常樂老別懸に語りめさるゝ侍に、石田宇左衛門といふ者有り。我浪人の身なる故奉公かせぎの其爲に、暫くこれに隠まはれ苦勞になりて暮せしが、些かの事これありて其宇左衛門といふ者を、密かに打つて立退いた。其伴兵右衛門、我を打たんと附窺ふ。されども隠家知れざればつり出し打たん其ため、某が父常樂を思ひのまゝに打つて取り高札を立てける故、無念さ止むるに所無く添書をして出つくはし、しやつめも即時に打つて取り武運に叶ふ侍とて、此御家へあひ住んでそなたしゆをば儲けたり。もう宇左衛門一族に我狙ふべき者無きとよに心よく思ふ所に、思へば某立退く節、五つと三つとになる悴兩人有りと覚えしが、ヤレ不思議といふはこゝの事、今日途中で御家中の上村彦左に出合ひしが、二十五六な草履取後に控へてうづくまる。よく見れば某が手にかけ打つたる宇左衛門に似たとはくそれはその微塵も違うた所無し。某もはつと思ひ挨拶をするうち目をも放さず眺むれば、草履取奴も某を不思議と言はねばかりにて目をも放さず眺めをる。どうやら拙者も氣味悪くそくそくに挨拶し、互に別れ歸りしが、いか様打つて立退きし其年數を數ふれば當年確か二十一、丁度彼奴めが年配とその年數が相應せり。よしはしやつめに紛れなく某を狙へばとて、ありのたけとも思はねばよも打たれうとは思はねど、仇持つ身は油斷がならぬ。もしもの事が有つたり共、もう三代

の仇討其方討つ事叶はぬぞ。これに附ても悔しいはいつかに若氣と言ひながら、少しのことに人を打ち、我親までを打たせしは扱々後悔千萬也。とにかく人の短氣なは大事の基なりけるぞ。内々これを心にかけ短慮を嗜みめされうと、言捨て奥へ入りければ左源次は我部屋の扉へこそは入りにけれ。縁の下なる守助は始終をとつくと聞きすまし、喜び勇み手を合せ、盲龜の浮木優曇華の花待得たる親の仇、逢ふは稀なるものなりと思へば／＼易かりけり。いで／＼兄にかくと告げ日頃の本意を達せんと、思はず知らず駆け出すを娘御暫しと縋り付き、是なふ守助なにとした。顔の氣色が違うたが、なんと／＼どうぞいの。ものはや父様ははいらしやる。退かば今ぢやと氣を急いて、おろ／＼涙に聲上もり更に性根は無かりけり。守助引止め、申し只今の御話を聞かせ給ひて候か。何をか包まん私奴は、且那が御手にかけられたる石田が憚半之介、兄傳之丞もろ共に且那を討たん其爲にかゝる曉しき身となりぬ。もはや御前と私が契りも是までなりけるぞ。只今までの御情は死しても忘れませぬとて、涙にくれて佇めば、娘御重ねて嬉しなふ、曉しき下部と思ひてさへ戀が因果といとしうて、命かけたる色の道、まして父様と同輩のお侍と有るからは、誰を憚かり忍ぶべし。そなたもこゝの一通り、とつくと合點をして見や。もはや夫婦に成るからは、そなたが爲にも父様は舅親にて有らざるや。そんなら討たれはせまいぞや。此段々

を父様へ詳しく述べ参らせて仇討をばさりと止め、誰恐い共思はず女夫になつたがましであらう。我はこしてもかくしても添ひさへすれば嬉しいと、女心のあとなさは女夫詮鑑ばかり也。守介成程御尤さりながら、武士の道をば捨てゝ情とは何共世間の義理立たず。何分兄のふ右衛門に知らせて是非を相談し、日頃の鬱憤晴らさんと又駆出るを引留め、そんなら私が情を捨てぜひに父様を討つ心か。おんでもないことくどいゝ、娘御重ねてやい畜生、妾が情の道を捨て夫婦の縁を切るからは、あかの他人になつたぞえ。そんなら父様を狙ふ奴、いかで助け置くべきと守介が脇差をすらりと抜いて打ちかくるを、ひらりと潜つて捌落し、拟邪魔なと突倒し、又駆出るを轉けながら裳裾に縋つて引留め、守介討たうと言ふは偽りよ。とにかく女夫になりたさぢや。死んでも女房ぢや。女夫ま一度確かに言直し、いつそ殺してどうなりと分別極めて守介こ、裳裾に取付き離さぬを、むんずこ切つて捨てながら又駆出るを走り付き、袂に縋つて引留む。エ、未練也 あさましと振切りかけ出る。後には思はず聲高にとかく争ふ聲々を父波之丞聞付て、やら不思議やと走り出で、木の間をすかせば人影有り。やれ盜人ござんなれ。火をとぼせと言ふ聲に、侍下部火をとぼし思ひ／＼におりあひて、よく／＼見ればおさの様下人守介只二人、同じ所にうづくまる。父波之丞立腹有り、詮議に及ばぬ不義者共、見ればなか／＼腹が立つ。そ

れ二人共打殺せと再應怒られたりけるにぞ、是非に及ばず若黨共前後左右よりおつ取巻く。守介ちつともわるびれず左右の手を上げ、これ／＼各々まづ待ち給へ。拙者が一通り且那へ申上げたき事候間、まづ靜まつて給はれ。これ且那殿、今は何を隠しません。先年お前の御手ににかけられ相果てました石田宇左衛門が憚、同苗半之介とは私でござる。ア、御前を見るも恨めしうござります。親宇左衛門が御前に討たれたるといふ事を兄の傳之丞が知らせました故、拙も無念やなと兄弟心を合せまして、此年月狙ひましたれども、御前の名はもとより、行方もさらに知れぬ故、兄弟は力無く、一所へ寄つて言ふは、ア、拙は程まで方々を尋ね廻れども、敵の行方が知れぬは、よつと佛神三寶にも捨てられた兄弟やと思ひ切り、既に刺違へて死なうとも思うたれ共、いや／＼死は易し、どうぞしてと又刀を鞘にをさめ、空しく月日を暮せ共、長々の事なれば金銀も盡き果て、或時は兄弟野に伏し山に伏して寒き夜を凌ぎ、明けなば兄弟左右へ別れて仇を狙ふ。年去り月變り、あさましや兄傳之丞諸共かゝる草履取奉公をして、様子窺ふ所に此御屋敷へあり付きましたが、いか成る縁にや御娘御様と忍び／＼の御情の數重なり、今宵も忍んで逢ふ時節に、且那御歸りといふ由を聞き、はつと思ひてこれなる縁の下へ隠れて様子を窺ふ時、御前の最前仰せらるゝ事を聞けば我身の上の御話、聞くと嬉しく兄傳之丞にかくと告げ、兄弟一緒に御

前を討たんと駆出るを、御娘御別れを悲み止給ふ故、振放し行かんとするその足音が御前の寝耳に入り、かくの通りでござります。今までには主人、今からは親の仇波の丞、遁さぬと刀を抜け側へ寄る。波の丞騒がず待て、汝は汝は石田宇左衛門が伴半之介か。でかしたくうい奴ぢや。成程汝が言ふ通り、わが親を討つた波之丞は某ぢやが、ヤイ半之介、よく身の言ふことを聞け。其方が身で此波之丞はえ討たれまい。なぜと言へ、某は汝がためには主人でないか。其主たる者を只今討つたならば主殺しとあつて、國中を引渡し、絞首しおりくびを打たるゝであらうが合點あてが行たか。半之介こりや、某が料簡そくかんをしてとらせうと、手形箱てがたばこ取出して請状うけじやうを出し、ヤイ半之介これは奉公人の請状なり。此請状を汝へやる間頂いて歸れ。もとより請状が無ければ主でもなし家來でもない。重ねて兄弟心を合せ、尋常に某と勝負をせよ。此場では叶はぬ。早々立たれといへば、半之介は理に服し、扱頼もしきなされやう悉しつ。兄傳之丞にかくと告げ重ねては尋常に名乗り合て討ち申さん。まづ今日はと禮儀をのべ、おさらばと別れ行く心中こそ三重ゆきけれ。治まる國の容かたちとて民の屋影にょぎと、町の肆藏畫しやくぞうがとなく夜もすがらに店明けて、戸閉され御代とぞ榮えける。所へ是も御家中にて指折方さだわと相見えて、前後は若黨わかだん目付やら、挾箱いざなにて後を押へ静かにこそは通られける。所を兄弟ひつ包み、コリヤ波の丞珍しや。石田が伴

傳之丞、同半之介遁さぬと斬りかくれば、やあ遁さぬとは推參也。汝等を遁さぬ助けぬと、
思ひくに切込みしは危うかりける三重次第也。誠に兄弟孝行心諸天も納受し給ひけん、
思ひのまゝに討ちおほせ、つれて御前へ上りける。前代未聞の仇討やと今に盡きせぬ話な
り。

一條通寺町西へ入ル 正本屋 山本 九兵衛 版



賴
光
跡
目
論

賴光跡目論上之段

筑後掾正本

序諸行無常と響きつゝ菩提を知らする遠寺の鐘、生者必滅四季轉變の花の色、定めなきは娑婆世界、こゝに六孫王の御孫多田の満仲の御嫡子、攝津の守源の賴光は數度の戟塵うち平らげ、平安城に御所を立て帝都を守護し申さるゝ。しかるにいかなる御宿運にや、過ぎぬる如月の頃よりも御心地例ならず。さるによつて御子息賴親卿を始め、御家の臣下武藏の守渡邊の綱・播磨の守平井保昌・三河の守坂田金時・遠江の守碓井の定光・駿河の守占部の季武・渡邊が舍弟三田の源太廣綱・其外在京の諸大名、日夜御殿にあひ詰めて御機嫌いかゞと伺ひける。しかる所へとむはら入道御廣間に罷出で、扱も君の御病氣何ともはかどらざるにより、三條の大納言光季卿をもつて、跡目の義を奏聞なされ候へば、異國にもさやうの例多き事なれば、とかく國穩かなるやうに相計らへとの宣旨にて候間、各々工夫をとつくとをさめ、天下の御執權御實子賴親卿か、又は御舍弟賴信公然るべきか、心底を残さず言上有るべきとの上意にて候と、委細こまかに相述べて奥をさしてぞ入りにける。いづれも大事の詮議なれば座中ひつそと静まりける。時に渡邊扇を取直し、人々は何と思ひ給

ふぞ。是は一大事の評議也。しかりとはいへ共御尋ねあるを御返事申さでは叶ふまじ。先此渡邊が欲する所を申すべし。尤御子頼親卿しかるべしと申したけれ共、頼親卿は色に亂れ酒に長じ、萬端我儘成る御心入也。此君天下の御政道行はせ給はゞ、萬民の歎世の苦み有て、御家の滅亡遠かるまじきと存するが、していづれもは何と思ひ給ふぞと座敷をきつと見渡せば、保昌・金時・定光・季武目を目と見合せ、渡邊殿の申さるゝ如く頼親卿の御身持は、唐の玄宗とや申さん、桀紂にやたくらぐん。國土を亂さんと思はゞ此君守護にしかるべし。又天下長久ならしめんと思はゞなか／＼無用のいたり也。されば君も現在の御こ、又は御舍弟頼信公いづれかと、それと上意はなけれども頼光の御心底にも頼信公然るべしと思召るゝは著しと、憚り無くぞ述べらるゝ。こゝに渡邊が舍弟三田の源太廣綱膝立直し言ふやうは、何と候かたゞ／＼は現在の御子息頼親卿をさしおき、頼信公の政道よからんとは世に新しき評定かな。各々は頼親卿にいかなる宿意有てかゝる詮議は候ぞ。世間の批判も有るべき也。よく／＼工夫候へと苦り切つてぞ申しける。保昌聞きて、いやこれ廣綱、それ天下は一人の天下にあらず萬民の天下也。たとへば五人十人の子を持つても、其子共悪人なれば代を譲らぬが法儀たり。是民安全國土泰平ならしめん爲にて有り。すでに唐土の堯王は八人の太子をさしおき、賤しき民の舜をあげて位を譲り天子となし給ふ。まづ其

例は數多し。殊に頼信公は頼光の御舍弟、頼親卿の御ためには叔父にてはましまさずや。しかば何の隔てか有らん。我々は御家久しきあるべきことを思ひての詮議也とぞ申さる。廣綱重ねて申すやう、あゝ愚か也保昌殿、其堯舜は大唐四百餘州にも類稀なる大聖人、それを定規には寸法外れ申すべし。まさに齊の龍王は賢王の首を斬り、太子に國を譲り給ひし例もあり。頼親いまだ御若年にましませば、惡しき事は面々の家老役に諫言有り、道を道に正されんこそ眞實の忠孝ならんこ座を打つてぞ申しける。金時いらつて進み出で、いやさ廣綱、さなきだに惡には移ろひやすき人心、善きを手本にせずして惡しきを定規にせよとは心得難きこと共也。されども頼親卿には某御物の具を着せ奉りし事なれば、餘人よりは大切に存ずれ共、頼親卿の惡逆ゆめ／＼もつて直るまじと、嘲笑うてぞのべらる。いやそれはさもなし金時殿、提婆如きの惡人だにも勧めによつて佛智に入りしためしもあり。まして頼親はそれ程までは候まじ。心なき草木も矯むれば直る習ひ有り。たゞ／＼方々は頼信と一味のやうに存ずると、こみ出で／＼申しける。渡邊あまりに堪りかね、やあ推參なり廣綱、汝が申す事は皆悉く惡事也。かく五人の人々は數年天下の執權を蒙り、御家長久民安全と心がけ五常をもつて身を碎く。かゝる大事の評定をおことらが宵惠の尺に及ばんや。いやはや小鳥共が集りて、鷺を蔑みする心底、近頃もつて慮外たり。罷り立てとぞ怒

られける。廣綱もとより怒者きょうしゃ、やや御分ごぶんも我わも變らぬ父ちちが子こにて有り。さきに生れて兄兄なればとていかで所存の變るべき。弟わがわが打つ太刀兄おとぎりに立つや立たざるやと、太刀の柄つかに手てをかくる。こは推參也、おのれ首踏折くびひしきつて捨てんと飛んでかゝれば人々取て抑おさへ、さりとては大人氣おとなけなし。靜より給たまへ渡邊、平ひらに／＼と制せいしける。綱は大きに怒おこをなし、えゝこは聞えざる人々かな。かやうなる悪人あくじん奴やつを助け置くは渡邊が家の疵きず也。全く人手ひとてにはかけまじこゝを退しのき給たまへ、いや放はなし給たまへと振ふ切り／＼かけ出だるを、人々やう／＼おし靜しずめ、まづ傍そばらにぞ入いにける。廣綱無な念ねん晴れやらず、所詮しょせん只ただ頼親よりへ御謀叛むほんを勧めつゝ、天下てんかを覆ふくさんと思おもひしが、いや／＼古いそへより親おやと戰たたかひ主ぬしに弓ゆみ引き、本意ほんいを遂とげたる事こと難むずし。なまなかに後あとれをとつては末代すゑだいまでの後難ごなん也。是これを菩提ぼだいの種たねとして娑婆さつばの絆きずなを離れつゝ、靜かにうき身みを送おもてらんと、髻きり切きりつて西にしへ投なげ諸國修行しゆぎょに三重出みえで出でにける。此事四方よんぽうに隠かくれなく頼親卿よりは聞召きめしめし、御乳母みゆの杉田の平八ひらはちときかどを近づけ、扱あつも三田の源太廣綱は跡目あとめのことにつき、四天王と口論くろんし世よを恨うらみ遁世とんじよす。これにつけても頼親よりが身上じんじょうを案あわするに、父ちち頼光よりみつ我わを見限み限り給たまへばこそ、叔父おとう頼信よりのぶと某そなといづれか跡目あとめに定めんと、家老共いえしらに著しるく仰あおはなけれ共とも、頼信政道よりのぶよからんと思おも召めしめさるゝ所ところ也。其上四天王一人ひとり武者ぶしやが、此これ頼親よりを様々さまさま譲譲りし故ゆゑにより、叔父おとうに權威けんゐを奪だつはれて此この面目おもてはいかゞせん。もはや此上これよは何處どこへも引籠いざなり潔きよく討死とうしし、

屍は野外に曝す共名をば雲居に知らせんと、やがて近習の諸侍三百餘人召具して、忍び
くに館を出で越前さしてぞ三重急がるゝ。はや柏山になりしかば、旗馬印を立並べ、興
力の勢を待ち給ふ。されば頼親卿類なき悪人なれども、日頃は頼光の威勢によりいづれも
他事なき體に見えけれ共、今は頼光の御勘氣を蒙り給へば誰か心を通すべき。只こゝかし
このあぶれ者野武士の外より加勢の者はなかりけり。頼親御覽じて、いやたゞ人を頼みて
戦ひをせばこそ、日頃のよしみを翻へし道を知らぬ愚人等はなかくなきこそましならめ。
我一戦の本意を得ば皆我先にと来るべし。元より此柏山は四方に難所をかゝへつゝ、類な
き要害なれば幾萬騎にて攻むるとも、すこしも危うき事はなし。さしとり引詰め射落して
敵弱らば鎌を傾げどつとかけ、真向堅割片手斬將棋倒拂^{はねきり}、おつつめく斬るならばやれ
浮世の慰み是ならんと、かんらからと打笑ひ木戸逆茂木菱亂杭、其品々に下知をなし寄す
る敵を今やくと三重待ち居たり。此事花洛に隠れなく頼光の御前には四天王を召され、
抑も頼親めはおのれが非議を恨みずして、頼光に不足をなすこそはかなけれ。親の身とし
て只一人の子を見限るは、よつと悪しきと心得ぬ、天命知らぬ愚人めを時を移さず踏潰し、
末代までの悪人の見懲りにせんと、坂田金時に在京の諸侍、五千餘騎の著到を下され大
將にぞ補せらるゝ。金時上意を蒙りわうまう二年五月廿六日、雲居の空もゆたかなる月の都

を打立つて越前としてぞ三重急ぎける。夜を日についでうつ程に早杣山になりしかば、東西南北一度に闇をどつとぞ上げにける。かくて金時はたゞ一揆にとしきつて下知をなしければ、城の内には敵を木戸へつけまじと手先を廻し割つて出で、大手搦手入亂れ火花散らして戦ひけり。され共寄手は多勢と言ひことには名代無双の金時が、軍法の手段を盡し揉立つれば、城中の軍勢共残りずくに討たれけり。頼親大きに怒りをなし、エ、あさましき風情やな。ヤア二瀬はなきかあれ蹴散らせとの給へば、廣春承り、いで某暫時に勝利をつけ申さん。慮外ながら廣春が働きを御見物候へと、枯木に鳩のとまりたる家の印を家人に持たせ、ゆらりと立出でて、我は是二の瀬の源六廣春也。こと新しき様なれ共、拵も此指物は我等が先祖二の瀬の會良、宿願有つて氏神八幡宮へ參詣せしむる所に、一族共俄に逆心を起しあとより押寄せ來りし時、會良あたりを見れば朽木に鳩のとまりてある。是ぞ八幡大菩薩まさに正直の誠を照らし給ふと禮拜し、多勢が中へ割つて入りこつて押へて捻首し、息をもつかず宗との首八つ討取り、件の朽木の枝にかけ、其外の軍勢を秋の木葉と打散し、急難を晴らせし事は大菩薩の御恵ぞと、それより此方代々家の印とす。されば中に作れる鳩は八幡の御正體、一念一佛己心の彌陀、八つの枝は八相成道を象る也。心さしの輩はかけ出て此木の枝に首を貫き、無爲の都に赴き給へと大音上げてぞ罵りける。

揚巻一錠の逆板に裝
飾として結び付けた
る粗語をいふ。

時に寄手の陣よりもいまきの源六源内と名乗り、何二の瀬殿にてましますな。花待ちえたる見参、すはまゐりさふと二打三打打つかと見えしが二人は四つになつてぞ倒れる。やがて首を打落し雪の中より咲く梅花紅はなまがふ桃の花と梢にこそはかけにけれ。其後寄手の陣よりも卯の花纏の腹巻に、鉄形うつたる兜を著たる武者一騎しづぐと立出でて、是は江州の住人三科の兵庫元春といふ者也。二の瀬殿の働き日頃承り及びたり。そつと披見致さんと走りかゝつて切結ぶ。互に名を得し太刀打の名人なれば、上段下段に絡んで付いて廻ればひらりとしさり、受けつ開いつこゝをせんと勵みしが、元春何とかしたりけん右手の目付を誤まつて、左手の高股拂はれて仰向にかへす所を首中に打落し、さしも名譽の三科殿、浮世の暇を嗜む日影にきめる朝顔の花の、首ぞと打笑ひ同じく枝にぞかけにける。木芽きのめの小太郎見るよりも、花と見ながら散らすは傍若無人なると切つて掛るをつつと入つて搔か掻かみ、彼處へどうど押伏せ首ふつつと搔切つて、おのれが分際ぶんざいにて二の瀬が印の數に入らんは緩怠なれ共、心さしのやさしければ是も數に夕顔と同じく枝にぞかけにける。日向の前司見るよりも、四天王一人武者二の瀬と呼ばるゝ剛の者を、木の芽きのめが腕に及ばんやと走りかゝつてむすと組み、跳倒はねおとさん打伏せんと押せ共引け共二の瀬ちつ共たぢろかず、前司が揚巻かい掻かみ弓手ゆのてへからりと打倒し、首ふつつと搔落し立上る所へ、白山兵衛本庄

刑部が馳せよつて、弓手馬手より組みけるをもの／＼しやと兩の小脇にかい挟み、四天王一人武者ならでは二の瀬と組まん者は日本に覚えずと、前へ引寄せむすと締め一々首を捻つて、一つ二つは常の事花の盛や吉野山、落花枝に返らすといへ共また喫けばこそ誘ふ無常の風、再び梢を耀かす花の吹雪を残せやと、枝引寄せ／＼うちかけて、いかに寄手の人々、二の瀬が家の吉例の首もはや七つは給はり、いま一つになりてあれば心あらんさもがらは、懸合ひ二の瀬が印の數に入り、後の世助かり給へかし。いかに／＼と呼ばはりける。金時是を見て、げに二の瀬に及ばん者は味方の内には覚えず、時の大將蒙る身が差當つたる味方の恥辱是非なしと、太刀引側めかけ出でて、坂田金時是にあり。相撲がつくれば行司が出て轉ぶとかや。身不肖なれども某が首の數に入申さん。いかに／＼と申さる。二の瀬聞きもあへず、先此間は久しう候坂田殿、年頃日頃肩を並べ膝を組み、互にさいづきれつ酒酌みたりしも移れば變る夢なれや。二の瀬が首を御肴に進上致すか、又其方の首を申請くるか。有無の酒宴こゝ也とたゞ一打にと打つてかゝるを、金時はつしと受けひつ外して、切込めば、二の瀬又ちやうど受けて引はづし、太刀の寸は伸びたりと、捲り立て透もあらせす打立るを、金時はづみを見すましひらりと飛び、肩先より乳の下迄はらりすんど切据ゑて、返す太刀にて首打落し、拵件の印の枝にかけ、サア望む所の八相成道よ

つく成佛仕れ。首の七つや八つを家の印と悦ぶは端武者のわざ、此金時は欲しからず。汝が、冥途の土産にせよと、かしこへからりと投捨てしんづくと引返す。かの金時が體たらく、天晴天下の稀者やと扱褒めぬ者こそなかりけり。

中之段

城の内には頼みきつたる二の瀬の源六討たれければ、今ははや城中も保ち難くぞ見えにける。頼親此由御覽じて、此上は我自身に打つて出で金時めが首を取り、二の瀬に手向け得させんと、居たる所を立ち給ふを平八やがて縋り付き、さすが一家の郎黨に御手を下させ給ひつゝ、少の御あやまりもましまさば末代までの御後難、一まづ此城を御開きまし／＼て、重ねて御本意遂げさせ給はんこそ、さすがの君には似合ひたる御行ひたるべきこ遮つて諫言すれば、頼親聞き給ひ、なんてふ金時め程の奴をいかで仕損じ申すべき。眉間二つに打割つて、殘る奴原將墓倒しに薙伏せんと、飛出で／＼し給ふを平八猶もかけ塞がり、御疵になるべき事を某いかで申さんや。さやうの荒儀は端武者の業、只大様に事遂げられ、天下の權威を取らせ給ひてこそ、眞實の御本意たるべけれ。かくいとはしたなき御心にてこそかやうにはならせ給ひてあれ。あさましの御所存や、かく申す段憎しと思召すならば、

先某そなめが首を取らせ給へ。命のあらんかぎりはゆめ／＼放ち申すまじと涙を流し申しける。頼親とつくと聞き給ひ、オ、此上はともかくも御分が計らひに任せんと、怒りを靜め給ひければ杉田大きに悦び、然らば今宵雨風の紛れに御忍びなされ候へと、扱討死したる死人を積重ね、城に火をかけ山傳ひに東の方より落ちらるゝ。寄手は火の手を見るよりも、すは城の陥るはと一度に馬を乗入るゝ。され共城には人もなくたゞ焼残りたる死骸はがり計そぞ有りにける。扱は落ち行きぬると覺えたり。いざ追懸けんと我も／＼と進みける。公時是を見て、暫くかたぐ方々よ。是は自餘の敵かたとは違うたり。悪人とはいひながら現在の御子といひ、殊には此公時も具足を着せ申せしことなれば、よそのやうには思はれず。さるによつて落ちば落し申さんためわざと手ぬるく攻めて有り。金時程の者が是程の城内を今迄手間てまを取るべきや。所存有つてひかへたり。いざ凱陣かいぢんせん人々と、諸軍勢を引具して花洛をさしてぞ三重いづき歸りける。帝都になれば討取る所の首共を取持せ。急ぎ御所に上りつゝ戸井原入道を以て軍の次第を言上有り。戸井原やがて奥に入り、やゝ有て立出て、只今の趣一々言上仕候へば、頼親卿形の見えぬは定めて焼け失せてぞ有らん。たとへ落ち失せたりとても、三國無双の悪人いつまで全かるべきや。先城を早速に乗り潰し、殊には二の瀬の源六を討取る事珍重の至也。ついては御病氣故、此度の軍勢の働き其出立を御覽せざる事いづれも本ほん

意なく思ふべし。かつうは御病中の御慰みの爲、凱陣の輩が武者振を櫻の馬場にて一見有るべきとの御上意にて候。其用意仰付られ候へ。委細心得候戸井原殿。さあらば申付けんとて急ぎ御殿を罷立ち、用意の品々下知をなし、一々次第に三重 ふれさせけれ。ゆゝしかりける儀式也。かくて其後頼光は四天王を召具して櫓に上らせ給ひけり。其外の人々も思ひ／＼の棊敷を打ち、上下色めき渡りけり。思ひ／＼の家の幕、黄色青色紫や吳服あやどる綾の紋、錦紅様々にうつり心や染色の節にあらねど櫻馬場、今や春かと疑はる。矢竹心や武士の、取傳へたる梓弓其家々は多けれど、流れも清き源の唐土迄も響く鏑の弓矢の道、まして我朝一圓に治まり靡く日の本の源氏の威勢ぞめでたけれ。扱刻限になりしかば、様々の馬皆具傳へ置きにし手綱の秘書、爰を晴とぞ三重乗出す。花やか也ける次第也。かくて其後右京之進頼親は企みし惡逆徒らに秋の霜と消え失せて、世の中豊かになるにつけても、頼光の御氣色宜しからざるにより、御世嗣頼信公四天王保昌、其外の諸侍を召集め、内議評定とり／＼也。時の典藥の頭吉田の法印、篠村法橋御前にかしこまる。頼信御覽じて、先づ今日の御機嫌は何と伺ひたるぞ。心もとなしと仰せければ、兩人承り、さん候今日の御機嫌として變らせ給ふ御事も御座なく候。たゞ御病氣底心迄御草臥れ候て、御心のむすぼれ深く見えさせ給ひ候。とかく御心をほうじさせ給ひ、御氣の滞り少晴れさせ給

ひ候はゞ自から藥力も廻るべきやうに存じ奉候と謹んで言上す。頼信聞召し、いかに方々さらば御慰みを何とぞ工夫を廻らし、心底を残さず申上げられよとの上意也。いづれも暫し默然たる所に、公時やがて進み出で、げに御心慰みの風景何か然るべし。先某の存じ候は、それ人の心をいさむること酒宴にましたること候はず。唐土の樂天が酒功讃のまなび、御庭前に酒の泉を湛へ、美女を揃へ今様朗詠様々に、音聲微妙を盡さん事いかゞあらんと申さるゝ。時に保昌進み出で、是ぞ希代の風景もつともよろしく候はん、扱某が存ずるにはそれ病ふと申すも邪氣のわざ、その濁れるをはらはんにはしやうくれいゝたるにしくはなし。南の御殿の花園に仙郷の體をまなび、時にあらずと園のもの、いろいろの風情を盡しからくみ御目にかくる物ならば、少御心も晴れさせ給はんと申す。渡邊の綱是を聞、オ、兩人の催し尤も面白うは候へ共、それは異國のことわざ也、近き我朝の風景を申すべし。嵯峨の天皇の御宇かとよ、融の大巨と言つし人、思ひや空に陸奥の、ちかの鹽籠を堪へ忍び、六條河原の院に鹽籠をうつし、難波の三津の浦よりも、潮を汲ませ遊興有りしは、何とやらん妙なるやうに存すれば、御庭前に鹽屋の體を飾り、美女を集め鹽少女につくり潮を汲ませ、又は鹽木の翁などをあひませ、鹽焼く體の夕景はいかゞあらんと言上ある。頼信つくづく聞召し、何れを分けて言ひ難し。とかく書付を以て言上なるべ

しと、やがて一々にあひ記させ、扱人々を召具して御前をさしてぞ出でらる。御前になれば右の次第を言上あり。頼光御覽じて、先以て某それがしが病中を悲しみて、誠精を盡さるゝの段、誠に以て祝着せり。よつて此書付の段いづれも宜しき事ながら、中にも此千賀の塙籠のことは、我盛さかんの古いにしへ陸奥みちのくへ下りし時、少見物申して有り。昔の體てい、一入いり懷いだく思ふ間、先鹽籠のしおのくらの風景のぞ望み也と、御機嫌宜しく仰出さるゝ所へ、紀州熊野の新宮の別當べつとう慌あわしく參上し、扱こも若王子の社破損に及び候間、修理のため後の方を破り候へば、かくの段の物を籠め置き候とさし上る。即ち御前にて開き見給へば、厚き板に人ひとを書き胸板と首には矢の根を強く打込み、鎮守府の將軍頼光と書付け、裏には南無日本第一大龍權現、奇瑞を頼み奉る誓願ちがん達へ給ふな、頓首源の頼親と書記し、調伏の願書を添へて置いたりけり。人々大きに驚きて、是はいかにと騒ぎけり。時に頼光御涙をはらくと流させ給ひ、扱こも天命知らずの頼親めや。子として親を調伏すること例あしあらざる次第也。それ神は非禮ひびを享け給はず、何きやつご彼奴かれめが祈る共、我定業業われぢやうじやうらすは死ぬまじけれ共、運命盡くればかゝる業病わざびやうぜひもなし。されば先日の合戦に落ち行きぬると推量すいりょうはしけれ共、恩愛離れぬ親と子の中の悲しさは、世の憂き事も身に入いまば少心の直りやせん、もしさもあらば折を得て國の一箇國や二箇國は申行ひ、又さもなくは出家僧の身となしても、頼光が浮世の形見に殘さんと扱こそ

宥免してはあれ。かの唐土の獅子王は、畜類なれ共子をかなしみて地に伏せば、子はさる道を辨へず。毒矢を放つて親を射る。是頼親めに相同じ。頼光空しく成るならば、いか成る佛事供養も何ならん。たゞ頼親めを尋ね出し揚め取り、頭を刎ねて某が塚の前に手向くべし。草の陰にて實檢し、浮世の無念を晴るべきはと、怒れる御眼に御涙を浮べさせ給へば、頼信公を始めこし鬼をあざむく四天王一人武者、げに御道理也ことわりやと各涙を流さるゝ。やゝ有つての上意には、よし何事も定なき世の有様と知りながら、申すは愚痴の至也。先かたゞが志の優景の支度あれ。せめては憂きを晴らすべし。それくとの給ひて御座を立たせ給ひければ、各々御前を罷立ち、俄に用意と三重聞えけり。

しほがま

心も詞も及ばれず。上下妙なる遊びにて、さゞめきわたり勇みけり。かくて其後頼光は人々を召具して紅葉の殿に出給ひ、四方の景色を見給ふに、げにもうつせる鹽屋の體、何につけても世の中は、憂節滋き竹柱、葦の垣根に草の屋根、露もたまらぬ茅屋は、月見んための蟹のわざ、葦が軒端の葛雲の嵐に吹きとぢて、羨しくも鹽籠の煙いぶせく立登る、籠が島の景氣まで、今目前にあらはして、過ぎし昔を陸奥の名所を問ひ續けつゝ、一入興

須磨—澄むにかく。

誰を松風—待つにか

ふりにし—降と舊と
かく。

今宵來ん—古今集秋
上に出づる歌
汐汲車わづかなる
詠曲松風の文句。以
風下松の文句によ
る所多し

持つや田子の浦云々
1 詠曲歌の文句

に入り給ひ、四方を遙かに見給へば、優に妙なる御遊び、心もこゝに須磨の浦、飛火の昔あらはれて光源氏の大將は、藻に住む虫のわからと、犯せる罪の身を責めて、三年の思ひ絶ゆる間も、波の夜な／＼あこがれて、藻鹽の烟と立登り、消えては空に行平の、關吹き越ゆると詠めしも、誰を松風身に入みて、袖そぼ濡るゝ村雨の、ふりにし方の浦曲まで、思ひ續けて松島や雄島の蟹の濡衣、乾く間もなき賤が業、あだに暮れ行く月と日を、數へて今宵しも、げに初秋の七日なり。くゆる思ひ立登り空にも戀があればこそ、雲に浮名は棚機の糸繰返し／＼つゝ、戀の染衣織姫の天の川原に立わびて、逢瀬の波に浮き沈み、年に稀なる契りとて別れも辛き涙川、渡せる橋や鵠の、身も紅に染むとかや。されば歌にも、今宵來ん人には逢はじ七夕の久しき程に待ちもこそすれと、故事までも思ひ出て、昔信夫の浦までも、いとしん／＼とすみ渡り、松の嵐の音凄く、鹽汲車わづかなる世を惜めども慕へども、返らぬものは行く水と、去りにけらしな年の暮。あゝさてはかなき浮世やと無常を觀じおはします。其折からに蟹少女、麻の衣の袖を結んで肩にかけ、櫛戸節我も／＼と磯邊に出でて、いざ／＼鹽を汲むべし。さあなふ鹽を汲まう、だんぶ／＼と汲み分けて詠持つや田子の浦、東掲の鹽衣、汲めばぞ影は桶にある。げに／＼雲らで照らせ日の光り、月の出汐を汲む桶に、映ろふ影はいつまでも盡きぬ泉と菊の酒と、壽

きして戯れければ、頼光御悦喜まし〜て、おゝめでたしやめでたやと御漫嫌宜しく見え
ければ、其時に蟹少女鹽木の翁もろ共に皆一同に、君が代は〜千代に八千代をさゞれ石
と祝言歌ひ立ちければ、座中に在りし諸大名、皆萬歳を唱へつゝ本所〜に歸らるゝ。千
秋樂は民を撫で、萬歳樂には命をのぶ。頼光の御威勢めでたかり共中々扱何に蟹へん方も
なし。

下之段

松樹千年遂にこれ朽ちず、誰か盛者必衰の道理をまぬかれん。あゝ悲しきかなや頼光は御
年五十四歳を一世とし、遂に御他界有りければ、頼信公を始めとし四天王一人武者、御家
の諸侍たゞ暗夜に燈火消え、日月の影を失ふ如くにて各々涙を流さるゝ。され共人々涙
を抑へ。今ははや歎きて叶はぬ死出の旅、とかく君の御命を取りし御敵は頼親卿、骨を微
塵に碎きてもせひ〜首を討取つて、御孝養に報すべし。扱明日は一七日の御法事なり。
營過ぎて其後は各々手段を廻らさんと、先々御法事の營を皆々有ること三重殊勝なれ。是
は扱置右京の進頼親は和泉の國吹井の浦にて旗を上げ、與力の勢を待ち給ふ所に、頼光の
御他界と聞くよりも、近國の諸侍我も〜と馳せ附く事只布を引くが如くなり。既にはや

與力の勢十萬八千餘騎とぞ註しける。頼親諸軍勢に打向ひ、父頼光我を悪人也と見限り給へども、天は誠の鏡にて天下を我に與へ給ふ。驗正に現はれたり。世に有り顔なる叔父頼信、憎かりし保昌四天王が首一々に打落し、親ながらも父頼光は敵なれば、塚も廟所も壇返し、日頃の無念を晴らすべし。はや打立てや方々と、帝都をさしてぞ三重押寄する。此事四方に隠れなく、頼信公は四天王一人武者を召され、頼光の五んぎやうとて賤山賤に到る迄、憂の色をなす所に、現在の子として忽ち弓矢を起すこと、天命知らずの悪人かな。此上はぜひひもなし。急ぎ方々馳せ向ひ、暫時に退治申されよ。渡邊承り、上意の如く一七日も立つや立たざるに、戰場の懸合本意には候はね共力及ばぬ仕合也。さりながら人の批判も候へばたゞ敵の仕掛を待ち、都にての一戰然るべう候はんと申上ぐる。公時聞きもあへず、こは延々なる詮議かな。君の御遺言にもいか成る施佛の供養より、頼親の首を墓の前に手向けよとの上意を早くも忘れ給ふな。よし人はともかく此公時においては、過ぎにし軍に討洩らしたる故により、君を調伏せられし也。現在の親を祈りし貪欲無道の頼親を、いつまで安穩ならしめんと、居たる所をすんど立てば、四人の人もたまりかね皆々支度を三重せられける。是は拵置きこゝに頼親の御乳母杉田平八時景は、器量人に勝れ案深き剛の者なれば、紀伊の國の住人小鹽の源太園部の藤内とて、南海道にて其名を得たる勇士を近づけ。

事の體を察するに、頼光相果て給ふより保昌四天王怒りを含み、軍の立様も定めず、我先にと抜駆せんは必定也。いざ道に待受け有無の勝利をたゞさんと、味方の内をぬきんで津の國阿倍野が原になりしかば、先杉田の平八は一村松を小楯に取り小高き所に控へける。二陣には園部小鹽相並び、たとへ鬼神成共洩さじと腕をさすつて控へけり。しかる所へ金時馬に白泡はませ馳せ来る。平八すは誰成らんと松の陰より立より、近づき見れば金時也。なふ久しう候坂田殿、是は杉田の平八にて候、近頃面目なく候へ共、いかやう共頼み入候とさも有りさうにあひ述ぶる。何杉田成か降參とや。侍は渡者ちつとも苦しからざる事にて有り。さらば敵の案内致されよ。働きにより本領子細あるべからずご申せば、さらば御先致さんと寄るよと見れば金時が、草摺を疊みあげて突かんとするをさしつたりとひらりと飛び、かいつかみ押伏せ、エ、最前より謀事とは知つたれども、おのれ程の奴が何事をかし出さん。おきて事を見んためわざと許し置いて有り。おのれ如きの腕にて此金時が及ばんやと、首かゝんとする所へ小鹽の源太かけ合せ、金時が弓手に廻り指透さんとする腕骨をひつ捕へ前へ壹所に引寄せ、二人を左右の膝にて押詰め、あごより續く園部の藤内をかいつかみ、遙の岨へ投捨て、二人が首一々に打落し、是も軍の門出につこと笑ひ立にけり。かかる所へ渡邊・保昌・定光・季武軍勢を引具しはせ來り、やあ金時我々を打捨て

せいいこん一誓言か。
必ず頼親に弓矢を捨てさせんとの意ならん。

拔懸はいつもの癖とはいひながら、頼親は大事の敵也。とつくと備を致さんと、いひもあるに頼親は數萬騎を引具し發向し、互に鬨をつくりたて軍は花をぞ三重散らしける。都方は小勢なれども三國無双の五人の者、自身に手を碎き戦へば、數萬の寄手かけ立てられ右往左往に逃げ散りけり。頼親大きに怒りをなし、エ、未練なる冠者原かな。いでぐ頼親が手練を見せんと五人張に十五束、さしとり引詰めさんぐに射給へば、一矢に二騎三騎づゝ射落され、さしも勇みし都勢むらくばつとぞ引きにける。時に金時進み出で、こは後れたり汝等と、一文字に飛出るを渡邊取て押へ、あの頼親の弓勢には盤石とてもたまるまじ。此人に弓矢を持たするは龍に水を興へ、鬼に鐵棒を得さするにひとし。何とぞたばかり弓矢を捨てさせ申さん。先暫くこせいいこんす。こはいかに渡邊、戦場に向ふ身が敵の失先を恐れつゝいかで働きなるべきや。運は天にありこゝのき給へとかけ出るを渡邊なほも押止め、運は天にも有り敵にも味方にも有り。少しは人の言ふ事を用ひ給へ。是渡すぞかたぐ構ひて放し給ふなと、無體に取て押入れ扱大音上げて言ひけるは、それなるは頼親にてはましまさずや。是ぞ渡邊の綱にて有り。昔は三代相恩の主君なるが今は八逆罪の科人也。現在の父上を調伏ありし冥罰いかでか遁るべき。あつばれ三國無双の悪人かな。かく申すが無念ならばサア近づき給へ。眞向たゞ一討の勝負なりと、わざと憎さげにぞ嘲る。

きける。案の如く頼親血氣盛んの勇士なれば、此言葉に怒りをなし、エ、推參なる惡言かな。おのれ如きの奴に弓も太刀もいらばこそ、手取りにせんと弓矢を投捨て走りかゝつてむすと組む。渡邊もとより早業なればはねつ開いつこゝをせんともみけれ共、三國無双の大力、物の數共せず引寄せ投げんとすれば渡邊しとゝ纏ひて放さす。コハものゝしやと弓手の方へはね倒し、首を搔かんとし給ふ所へ定光・季武・走せ來り、兩方よりもむすこ組んで引伏せ、鎧の上帶引ちぎり高手・小手に縛め、今こそ本意遂げたりと殘る軍勢打平げ、都をさして引上せ天下安全に治まりける。なほ／＼源氏の御繁昌、目出度しともなッか／＼申すばかりはなかりけり。

右此本者依爲懸望文句音節等悉校合加秘密令開版者也

竹本筑後掾

大坂高麗橋壹丁目

山本九兵衛門板
山本九右衛門板

冬 牡 丹 女 夫 獅
子



冬牡丹女夫獅子

加賀掾 正本

祇園精舍の鐘の聲諸行無常の響き有り、沙羅双樹の花の色盛者必衰の道理、奢る者久し
からず、遠く異朝をとぶらふに秦の趙高唐の祿山、近く本朝をうかゞふに天慶の純友承平の
將門、間近くは六波羅入道前の大政大臣平の朝臣清盛公の有様こそ心も詞も及ばれね。我
身の榮花を極のみならず嫡子小松の重盛内大臣の左大將、次男宗盛中納言の右大將、三
男知盛權中納言、四男重衡三位の中將、門脇の宰相經盛、前の大納言教盛、池の大納言賴
盛越前の三位通盛以下一門の公卿十六人、其外諸國の受領衛府八省すべて六十餘人、官祿
前代に超過じ、榮花天下の目を側め花族の三公英雄の公達も肩を並ぶる者はなし。されば
一朝の怒に其身を忘るゝとや、院の御所を恨み奉り天命をもかへり見ず、後白河の法皇を
鳥羽の北殿に押籠め、卿相雲客四十三人流罪に沈め、小松殿の教訓をもいさゝか用ひず、
擅なる入道相國、驕る平家の行末を浮べる雲と頼みなく、思ひ積りて雪折れの小松殿の御
所勞、良藥醫療の驗もなく御病氣重らせ給ふとて、一門残らず西八條入道の屋形に預參あ
り。靈佛靈社の御祈禱の大法有るべきかと評讖取々なる所へ、播州書寫山の衆徒中として

英雄一大臣を出す家
柄、中院、開院、華
山院を三英雄家とい
ふ。

溢れ者一いたづら

三衣一袈裟をいふ。

しゃつ頭一しゃは怒
罵する時に添へてい
ふ接頭語。

として訴へしは、去年の春より比叡の山育ちと申す悪法師、學問の爲とて登山致し候が並びなき強力劍術早業に調練し、同學の兒法師を疵付け能化指南も恐れぬ溢れ者、一ツ山もてあつかひ夜中に追拂ひ候へば松明持つたる下僧を攔んで本堂の家根へ人蝶に打上げ、松明軒の檜皮に移り折節山風烈しく、諸堂學寮一宇も残らず回祿に及び候。名は西塔の武藏坊辨慶と申す惡法師、搦め捕て候と引出す。面椎筋骨高く頬骨荒れ、繩取六人中に引立、睨廻せる面黒く、護摩に燻る不動尊、玉眼光るに異ならず、清盛入道様先に躍出で、ヤア憎い法師が面付かな、己如何なれば、諍喧嘩を好み、諸人に疵付け、剩大伽藍を滅盡すは、頭を丸め、三衣を着す法成か。察するに叡山法師、平家を傾うとし給ふ法皇に組し、己を頼み方々を荒れさすると覺えたり。サア、真直に申せ、僞らば是を見よ、淨海が此握拳にて、しゃつ頭微塵に撲碎んと、睨付け給ひし面色は、白いと黒いと、辨慶が二人有かと妻し。武藏かツらゝとえせ笑ひ、扱色々のお尋ね、一ツも辨慶存ぜぬ事、先諸人に疵付け手を負はせし事、是は相手の臆病、なぜ其時に討留ぬと、相手を詮義なさるべし。又書寫山回祿の事は、松明持たる下僧を人蝶に打て候へば、時節悪き山風、辨慶が知らぬ事、風の神にお尋ねあらば明白に知れ申さん。且又出家の法に背とは、さの給ふ入道相國、袈裟衣をかけ、頭を丸めながら、法皇を押込、諸人を流罪死刑に行ひ、此法師がしゃつ頭を撲碎い

てくれんと、只今の握拳（いりこぶし）、是も法師の道なるか、御心に問給へ。又辨慶が諍（いさか）好み、喧嘩（ざざ）好は、生れ付ての辯（べん）なれば、是も我等（われら）が存ぜぬこと、親こそは知つらめ、定て胎内に宿る時、父と母とが小夜の口舌（くちばし）、諍紛（いさかひまぎれ）の天の逆鱗（さかまき）、逆立（さかだて）たる一滴が固つて、喧嘩好の辨慶と生れたさうなと、空嘯（そらうき）いてぞ居たりける。さすがの清盛理窟詰（そらうきづめ）、生中彼奴（なまなかのやつ）に物言すな、打首（さくしゅ）か獄門（ごくもん）か、兎角方々計（とくかくかくかく）はれよと有ければ、宗盛知盛詞（しのぶこと）を揃へ、元叡山育（そだちやぶる）と申せば、彼を罪に行（あこなは）れば、例の三千坊如何成仇（いかがり）をか仕出さん。己と滅る御仕置（おのれほろぶ）あらまほしくとの給ふ所へ、筑後の守貞能（あわた）、慌敷參上（あわててさんじょう）し、去る卯月下旬より、五條の橋に十六七の小童、夜往來を惱（なう）し、討れし者九百餘人、夜廻り掛（よまわりがり）の役人召捕（めいひ）と働け共、蝶鳥などの如くにて力に及ばず、京中難義仕（なんぎし）る由毎日の訴訟、如何計申さんと言上すれば、入道相國、ム、それはかねても聞しこと、何でふ其小童、魔法飯綱（まほうはんのう）を行ふ共、變化鬼神も討ば討。軍兵を差向け、早討取（はやとく）と下知せらる。門脇宰相進出、仰にては候へ共、さ程の童一人、軍兵を向られんは却つて都の騒動、夜廻り掛（よまわりがり）の者共が手に餘るしれ者ならば、味方多く損ずべし、然れば當家の恥辱と申し、殊に小松殿の御病中、旁御遠慮有るべきこと、されば敵を以て敵を亡す手立、あの法師めを放ち遣はして、打合て御覽あれ。相討に討れば、二人の悪黨亡ぶる道理、さもなくとも、一人は手を濡さずの御誅罰、此旨いかゞ申さるれば、辨

慶聞もあへず、ア、面白き御政道、元來某武藝ぶぎを好み、日本にはびこる手柄てひしたしと思へ共、手痛いたき奴も無かつしに、洛中に持て餘す天狗冠者てんぐかぶしゃと勝負せんは、嬉しやくうなふ嬉しうて堪らぬと、すぐく立たつてぞ悦びける。入道も悦喜有り、それ繩解ミサよ、出来でかいたく、うい坊主、先太刀先だら、刀、長刀かたななどが入るならば、取らすべきかとの給へば、いやく、此まゝ罷出はりだで、行遇むすふ人の太刀、刀目に付いたをもぎ取るべし。此法師生れてより人に物貰うけはず、お床に立たるあの長刀、御門に懸し突棒、刺叉、火消道具の熊手、鋸、大槌など、貰は致さぬ、欲さに取ると、引寄せく、一つに取てからげたり。入道猶も機嫌まねよく、ム、扱あ々氣味きみよい法師めかな、千騎萬騎の軍兵の頭に立ん人相有と、簾中のれなかにつつと入り、銀の鉗くわ打うちたる鐵の棒ひつ提つげ、是は源氏の大將鎮西八郎爲朝が得道具、去ル卒治そつぢの軍に、義朝一家をせめ亡ぼし、討取うそつたるしるし、是にてわっぱを打ちひしげ。やりはせぬぞ、サアとれとなげ出せば、辨慶ひとつにつかんで數をよむ。三本、四本、五本、六本、是こそ忝たんじけ、七つ道具といさみ行く、平家の威勢引かへて、源氏は鬼にかな棒の武運の末ぞ、三重頼もしき。世につれてかはればかはる常盤御前、我子の命たすけん爲め、清盛にしたがへば、心にのらぬ乗物や、御供びごくふしくかしづきて、小松殿の御祈禱に、清水ままでの下向道、姿は花をかざれども、覺悟は出家同前の、心に衣胸に袈裟、五條の橋にぞ着き給ふ。

盤桓はんかん一立ちもとほり
て進み難きさま。
ねばさ一巡まいたる
事。よぐま一巡まいくる間。

弟子しに一弟子珠しにじゅの略。
歐珠えじゅの珠じゅの内四箇のうちよんの
小珠こじゅ。一同じく八箇はっの
大なる母珠ぼじゅ。

こゝに源の牛若丸、三年の日參の願も今年は秋の日や、早暮れかゝる橋の上、ゆゝしき女乘物に、茶辨當かたげしは、折々鞍馬へ使に來たる喜三太と云ふ下しも脇。却是我母常盤御前、すりちがうて通るならば、見しりし者も有りやせん、人に心をつけがほに、戻られもせず盤桓はんかんと、編笠かたふけおはせしに、喜三太見付け乗物へ知らせんと、あの若衆の道のねばさは、あれこそ本ほんのくらがりの牛。鞍馬の牛とかすらする。常盤はそれぞと心付き、人目よぐまのやるせなく、ハア、悲しや、數珠を落した、我身の菩提は兎ともかくも、平家の御代の御祈禱に、三とせ此かた隨求陀羅尼さるぎだらに百萬遍、此たび小松の御願の爲め、千手の眞言十萬遍、唱へこみたる大おほじの數珠、勿體もつたいなくも氣にかゝる、水晶と琥珀こはくと半裝束の紫房、弟子と達磨は珊瑚樹さんごじゅぞや、皆立返つて尋ねてたも。拾うた者の有なれば價あたひをとらせもうふておぢや、喜三太獨ひとり付け置いて、皆々早うとの給へば、今迄落ちてはよも有あまじ、拾うた人を詮議せんと、方々へこそ走りけれ。常盤與より轉び出で、やれ牛若か母成は。鞍馬へあげしは七ツの年、それよりは喜三太に、文の便を聞く計り、十年ぶりの我子の顔、見せてたもやと引留め、抱き付て泣き給へば、牛若夢の心地して、涙に沈みおはせしが、故督の殿におくれしは三歳の時なれば、おも影も見え參らせず、母上の御顔は慥に見え候が、見かはす程の御やつれ、かくゆゝしき御身にて、何不足の候ぞ、敵清盛

に御身を任せ、平家繁昌の祈禱、小松殿の祈りとて、^{しらべだら}真言陀羅尼の歎珠の所作、清盛への追従か、心のかはつた母上様、其お心では牛若を、ふびん共おぼされじ。何しに父も戀しからん、御涙はそらごとよ、恨めしの母上やと、恨みかこちて泣き給ふ。母上わつと涙にくれ、たまくあうて愛らしき、親子の詞をかけもせず、情なの恨みやな、母が心を文にも知らせんとは思ひしが、師の御坊や、傍輩に洩れもやせんとひかへしを、知らで恨みも道理也。督の殿討れ給ひてより、御身を母がほゝに入れ、伏見の雪に凍え臥し、

大和の國うたとやらんに隠れしを、平家にさがし出され、御身も二人の兄共も、殺さるゝ

筈なりしに、清盛入道自らに心をかけ、おもひ者にせんと云。ニ、無念やな、口をしや、

源氏の大將義朝に枕を並べし此常盤、さすてきの平家に、はづかしめらるゝこと、恨めしのみめかたち、面に焼鐵さし顔を傷ひ、此無念聞くまじと思ひしが、待てしばしと、思案をかへ、清盛が心に従ひ、さまぐに口説しかば、色にひかるゝ愚の清盛、拵こそはわごぜ達が命を助け置きしそや。母は女の道立たず、末代に名を捨つるも、御身達を成人させ、平家を亡し、源氏の代とひるがへし、妻の敵も氏の恥辱も、雪がんと思ふ爲計、老入道の清盛、光る源氏か業平か、何に色香の有るべきぞ。床をならぶる寝臥には、火燄の上に寝るよりも、其苦さを推量あれ、語るも涙がこぼるゝぞや。され共小松の重盛は、日

妻の敵一夫の敵。

ほゝ一慎。
うた一字陀。

おもひ者一龍妾。

さすてき一指す敵。

修羅前一修羅場即ち
戦場に於けるの意。

本の賢人、此人あらんかぎりは、平家は亡びがたしと云、時しも重き病氣也。みづから御祈禱の七日詣と偽り、清水の觀音さまに、重盛の命を七日が中に取ころしてたび給へと、調伏の爲め繰る數珠は、我身ながらも恐ろしや。聖人賢人の命を取るは菩薩を殺すに同じくて、五逆罪にまさると聞く。妻の爲め子の爲め、現世後生を取うしなふ母が心を思ひやり、恨みを晴れよ牛若と、かきくどき給ふにぞ、牛若も手を合せ、知らで恨みし恐れの段、眞平御免と計にて、悲歎の涙せきあへず。常盤重ねて、聞けば此比此橋にて、十六七の小わづばの、往來をなやますとは、疑ひもなくお事よの。大義を思ひ立つ者は、無益の殺生せぬことぞ、數珠落せしとは、供人避けんたばかりごと、これを持て神佛を信心あれとて給びければ、牛若戴き懷中し、まつたく無益の殺生ならず、源の牛若が下人一人持たずして、大事は思ひたれずと、千人切を企て、手なみを見届け召仕はんと、夜前まで九百九十九人切て候へ共、是ぞと思ふ下人もなしと、語り給へば、喜三太、おそれ多く候へ共、拙者を召れ下されかし、外の事はいさしらず、修羅前の御馬の口は、蛇に綱つけても引まはし、雑兵の首四つ五つは、寝起になり共仕らんと申せば、母も悦びて、オ、幸々、跡は妻に任せ置き、すぐに供せよ。あれ／＼下人共が立歸る、何を云ふ間もないわいの、氣早な心持やんなや。喜三太萬事に氣を付よ、さらば／＼と乗り給へば、名残つきせぬ親

馬に乗る迄云々。馬に乗るまで牛に乗れ
の諺による。

夕雲の行方云々。夕
顔の云々。漏曲懸
處の文句による。

長刀の柄元を云々
これも漏曲懸處の文
句。以下もその文句
に多くより。

普良一太將の着る
鎧。

ゆきひた一行術。

子の中、ありかへり／＼、ヤイ、喜三太、己は馬屋を得たるとや、當分それはいらぬ事、馬に乗る迄牛若が、草履直せと笠かづき、半町計過ぎ給ふ所へ、其の人々立歸り、いか様に尋ねても、御數珠は見え申さず、拾ひし者も是なしと申上れば、オ、其筈／＼、喜三太奴が拾ひ隠せしを、袖口より見付けられ、直に欠落したさうな。内府様の御祈禱、沙汰なしにしてやりやと、有さうにの給へば、扱いきずりのどうぼう憎や／＼口々に、云ひ繰り返す水晶の、數珠より清き常盤の前、涙にくれの日は入りて、月は出けり、三重夕雲の、行衛はそれか夜あらしの、聲すみわたる秋の風、むさし野ならぬ武藏坊、いづくにてとつたりけん、おどしにおどせる黒革の、大鎧大長刀、さながら鬼神と夕顔の、五條の橋の橋板を、とよろ／＼と踏みならし、わづば遅しと待ち居たり。牛若は母上の教訓に力を得、そよろ／＼と立つ出立は、赤地の錦の着者長に、美精巧の大口、重代の御はかせ、とつてかづきし薄衣の、ゆきげた遙かに見渡せば、二王の様なる法師武者、人か見こし入道か、何にもせよ心見て、おさへて下人にせん物をと、悠々と歩みより給ふ、辨慶は、かくぞとも、白柄の長刀欄干に横たはし、しかけを待てば牛若丸、通りさまに長刀の、柄元をはつしと蹴揚げたり、すはしれ者よ手並を見せんと、切つてかゝれば、鎧薄衣引きのけ、太刀抜きはなつてつめつ開いつ、くじつて切ればそむけてはづし、裾を掃へば足

押付一鎧の背にある
最上部の板。

きぶとい一本と氣太
いとがく。

をためず、中をはらへば頭を地に付け、三塔にかくれなき長刀の達者と、僧正坊に授かりし打物の名譽と、甲乙わけめの戦ひは、巣立の鷺の若鳥と、深山を出し荒熊が、野邊に争ふ如くにて、さしもの辨慶あぐんで見えしが、物々し小冠者めと、たゞみかけて打つ所を葱寶珠に飛びあがり、片足かけて長刀を、からりと踏んで踏み落す。さしつたりとかけよつて、取らんとすれば、打物取のべ、辨慶が押付をしつかとおさへ、なんと御坊いかにいかに、我千人切を思ひ立ち、根性見届け下人にせんと、九百九十九人切る、されども汝程のけなげ者に出手はす。主従に成るべきか、我こそ左馬ノ頭義朝が八男、牛若と名乗り給へば、やア、願うてもない主君、我らは熊野の別當辨真が一子、武藏坊辨慶と申す者、清盛に頼まれ君討ち奉る筈なれども、約束^{へんかく}變改^{へんか}世の習ひ、今日より生々世々、お主と頼み奉ると、降参すれば御悦び、主従三世の縁^{えん}のはし、五條の橋のはし柱、きぶといお主・根づよい下人と、薄衣かづけ長刀かたげ、立歸らんとせし所へ、難波の二郎が弟なんばの十郎經時、夜廻りの足輕二三十、洛中なやます天狗冠者、討手に向ひし惡魔坊主が一味せしは、あれ討ち留めよとどつと寄る。新参の喜三太見え隠れの供せしが、其處御退きとつゝと出で、是ていに御太刀を合されんは勿體なし、下拙こなし申さんと、面もふらず切かくる。難波の十郎きつと見て、彼奴は御馬屋の喜三太め、己もあばれ者の同類か。オ、

私は馬の口も取る、時々人の首も取る、うそなら取つて見せうかと、かけよせ／＼雜兵の兩足小腕ひつつかみ、橋の下へ取つて投げ取つてなげ、七八人投ぐるを見て、皆ちり／＼に失せてげり。されども十郎ふみ止め、たゞ一打と打つ太刀を、ひつはづいて裏へぬけ、背抱にむんずとしめ、さし上げて橋板にどうど打付け、太刀もぎ取り首かき落す早業は、げにも下腐の手かどみと、末世に殘るも理なり。牛若ます／＼勇みをなし、でかした／＼、一人不足の千人切の、數に入れてくれんとあれば、喜三太かぶりをふつて、いや／＼、君の數には恐れ也。我等御奉公の手見せ、蠅同前難波の十郎、其の十の字に蠅が留まれば、千人ぎりと、主從どつと笑ひの聲、鳥は八こゑの閑や、曉近き三重松の風、無常の嵐吹きすさぶ、小松殿の御病體、日に隨つて頼みなく、かぎり近しと聞えしかば、一門は云ふに及ばず、公家武家町人農夫迄、六波羅に群參し、眉をひそむる折からに、清盛入道御入なりと有ければ、枕元に請ぜらるゝ。やう／＼扶け起されて、衰へはてし顔に、鬼のやう成る入道も、やゝ涙ぐみおはせしが、御邊の所勞大事の由、當家他家の歎きなり。然るに此たび宋朝より、耆鵠天と云ふ名醫日本に渡り、病人の顔色を見て肺肝を知り、聲を聞いて六脈を察し、一粒一七の藥を與へて、死したる者を蘇らせ、長生不死の壽命を授くること、恰も神のごとし。則ち其醫者召つれたり、脈を見せて藥を

受け、本復の色を見せてたべ。入道無病息災の身なれども、唐土の醫者の名方、不老不死の藥を、はや一廻り飲だれば、千年の命は體也。又二廻り服したならば、二千年は生き延ぶべし。たとへ萬々年にも、入道計ながらへ、孫子の跡のとひ吊ひ、なふやかましむつかし。御邊も共に生きてたべ、耆鵠天是へ召せとの給へば、今を限りの重盛公、起きて直つて、しばらくへ、其唐の醫師が不老不死の藥を、父禪門ははや聞召され候か、中々常に身をはなさず、夜に三度日に三度、用る也との給へば、重盛公、涙をはらへと流し、ア、淺ましや、平家の運命つきはて、代は魔道に落けるかや。それ乾坤の間に生を受け、形チ有者は天命有り、初、あれば終り有り。三界の教主大覺世尊、耆婆が良藥叶すして、跋提河の涅槃に入り給ふ。病者は佛體醫師は耆婆、定業の天命藥に頼らば釋尊入滅有るべきか。秦の始皇は不老不死の藥を得んと、上は碧落下黃泉を探せ共求めず、但天竺の外道の法は、億萬劫を保ち、中華の仙術、形チをはなれて氣をくらひ風を呑み、千歳を延ぶれども、生死の悟を得ざる故、六道の苦輪をめぐつて、地獄に落ると承る。我朝には天狗の法、我慢功慢の人の心をすみかとして、善根をにくみ惡行を悦び、夜に三度日に三度藥候はず。疑ひもなく愛宕鞍馬の大天狗、平家の驕をかたうどに、世をくつがへさん天魔方。かたうど一方人、味

の見入、其藥重盛に見せ給へ。生を食る愚蒙の目には良藥と見ゆるとも、五戒を保ち五常を修め、正法を守る重盛が清淨の目にからば、藥の邪止は顯れん。よしは誠の藥にもせよ、位大政大臣に經あがり、日本六十六ヶ國、三十餘國は平家の知行、齡六十に越え給へば、出離生死の御營み、無上菩提の願ひの外、何御不足の候て、煩惱業苦の浮世に長命の御願ひ、淺ましさよと計にて、又むせ返り給ひけり。入道あざ笑ひ、又々癖の生悟、其心より煩はるゝ、御邊は兎もかくも、この入道は文盲なれば、藥を飲んで長いきせん。それ／＼と有りければ、輿の内に入られし唐桑の筈より、堆朱の香箱御前に差出せば、入道謹み頂戴有り、蓋を取らんとし給ふ時、香箱の内燃え出て、燄煙をまき上げ、微塵に碎け飛ぶ音は、瓦礫を破るがごとくにて、さすがの入道色變じ、上下身の毛を立たりけり。重盛公涙をおさへかね、御覽候へ、天狗の所爲、毒氣五體にしみ渡り、大熱病を受け給ひ、火の病となつて御命をとらん事、三年は過ぐべからず、それより平家の運命傾き、源氏に世を切とられ、今の榮花は引かへて、一門屍をさらすべき、重盛が未來記は、その時思ひ知らるべし。ア、淺ましの運命や、はかなき平家の行末を見んよりも、重盛が命を取りてたべと、熊野權現に祈誓をかけし病なれば、藥も療治もかなふべきか。臨終も早今夜の中と存すれば、是今生の親子の別れ、心の亂れぬ其中に、正念の床に座し、淨土の道をも

踏み分けて、御菩提の下種し奉らん。さらば／＼と涙にくれ、御子達の肩にそひ、泣々佛間に入り給ふ、平家の柱折れたりと、惜まぬ者こそなかりけれ。入道相國大きに怒り、すつと立ち、ヤアおろかなり内府の詞、此清盛が威勢に、木の葉天狗の見入などゝは思ひもよらず、源氏の奴等が業ならん。唐人醫者めひつ立て來れ、穿鑿せんとの給ふ所に、辻風さつと吹き來り、梢を鳴らし、木の葉を捲き、軒を破り、瓦を飛ばし、遣戸障子を吹折つて、震動するぞ三重恐ろしき。御供の瀬ノ尾の太郎ふるひ／＼罷出で、彼の唐の醫者、一丈餘りの鳶となり、車輪のごとき翼を擴げ、風を起し雲に乗り、鞍馬のかたへ飛び失せて候と、申す間に空晴れて、風收まるぞ不思議なり。入道大きに仰天有り、さては小松が詞に違はず、天狗に毒氣を吹込まれた。三年の中火の病で死ぬるとや、三年の立つは今の間、入道は死ぬるか、ア、拗是は何とせん。エ、死にともない／＼、妙藥は有るまいか。天狗のあたつた療治はないか、誰ぞが高い鼻をそいで、煎じて飲で見ようかと、顛倒周章うろ／＼と、周章へ給ふぞ見ぐるしき。ア、思ひ付たり、黄金は毒を消す、先年奥州の黃金三千兩、内府が藏に込めさせたり。それ取出せとの給へば、小松の執權主馬の判官盛國罷出で、平家の御運末危うく、日本にて御一門の後弔ふ人も有るまじとて、唐育王山佛照禪師の御寺へ、資道に御渡し候ごいひもあへぬに、飛びかゝつてしや首取つ

てひつ敷き、主が主なれば己迄が馬鹿律義、目前日本の寶を、見えもせぬ後世の爲め、異國へ渡すうつけ者、それこそ唐へ投金と云ふもの。入道が命三年切り、存命の間に源氏の末葉根を絶やす、軍始の血祭と、肩を踏まへ盛國が、たぶさを擱んでえいうんと、首引抜いてかつはと投げ、サア、常盤御前も討て捨て、法皇を流罪に沈め、蛭が小島のせがれめ、鞍馬山の童わらわを始め、かたはしに攻め伏せん。馬に鞍置け、物の具せよ。入道年は寄つたれ共、保元の弓勢、平治の太刀風、草木も靡かす赤旗を真先に押し立て、三軍心を一ツ致にして、親が進まば子も續け、兄が引かば弟は駆けよ、主が討れば下人は飛び越え、先陣討れば後陣が乗こえはねこえ、隙すきを有らすな、息つがすな、無二無三に攻め入らば、秋津島は拵置ぬ、鬼界高麗白濟國、南蠻北狄残りなく、平家の下に屬けん事、案の内に覺えたり。小松が別れ悲んで、心落すな憶するな、勇めやいさめ一門と、中門のあゆみの板をとう／＼、とう／＼とうと踏みならし、物に狂ひの勢は、惡魔、天魔、邪魔、心魔、四魔の首領の僧正坊、大天狗の所爲成はと、鼻に顯はれ見えにけり。

中 之 卷

源は渴れて埋れて濁江の、水に離れし魚とかや、源氏侍方々の、底の藻屑もよに身をそばめ、

すもヒ一推量せよ。
てんさう一戯言。

いつ世の中に這ひ出て、甲を乾すべきしるべなき、龜井六郎重清、晝は人目もあば玉の、小行燈さへ身の油、擔ひ賣する身代は、吹けば散るてふさざれ砂、蒟蒻豆腐の塙梅よし、あんばいよしとぞ賣りありく。ア、今夜も月は八つ前、扱も賣れぬ事かな、蒟蒻は今夜食はいでも、明日まで置かるゝが、豆腐が廢る。一挺を廿四に切り、二挺で四十八串、彌陀の誓願、ア、何處ぞに阿彌陀の光りはせぬかい、賣つてのけ度いな。ア、南無阿彌豆腐なまいだ、ア、南無あいだ、あだ口念佛高塙より、若き女の顔出し、これ、おぢやつたか、宵からたんと待ちこがれたと、忍びやかに呼ばゝる聲、あいく、すんど焼立て味噌べつたりのぬくく、顎が落ちます。十串ばかり上げましよかと、いへば女は、ア、うるさ、違うたげなとて入りにけり。ヤア、こりやなんぢや、ム、聞えたく、こゝは清盛が、手かけ共を置く對の屋のうらと聞く。清盛の古入道が、塙蛸頭に喰ひ厭いて、生魚好むいたづら女、念佛を合圖の男引入れ。ヤア、なんでも是はよい慰と、打あふのいてなまみだ、ア、南無阿彌陀なむあみだと、張上ぐれば以前の女、是々來てか、何として遅かりしそ、待ぼうけに氣が盡きた。こゝへくと小手招き、さし心得て、ア、待つ身より待たるゝ身の、千々の思ひを御すもじ。宵から腰が魂は、抜けてそさまのお袖にと、思はせぶりの詞つき、エイ、いやらしいなんぞいの、てんがうも折による。コレ、是に大

篠窓一くはん一横笛
一管。
小結の鳥帽子一小結
の結びあまりを左右
へ長く出せし少年用
の鳥帽子。

二佛の中間一釋迦去
りて阿難未だ出世せ
ざる間ざいふ。中間
を奴の中間にかけし
洒落なり。

事のおかたみ有りと、袋一つなげ出し、見咎められてはむつかし、早うと云捨てて、女はかくれ入りにけり。龜井案に相違して、必定是は盜物、後の難儀になるまいか、どうか、かうかと、分別袋の口を解けば、螺鉢の手箱に窮窓一くはん、小結の鳥帽子五色の糸にて、さまぐの縫ひ物したる直垂、大口ともに疊み込められたり。いかさまよし有る公達の御装束、不思議に我手に入ること、武運開けてよき大將、主に取るべき瑞相と、歸り仕度する所に、あかどね鍔も物さびて、雲の空鞞剝げまはり、月山の端に二合半、物むつかしきあたまな奴大聲上、なまだ、はゝ、なまみだ、南無阿彌陀佛、なむあみだ、壇を見上げて高念佛、立とまりては又念佛、是ぞ二佛の中間也。こりやあんばいよし、今身が様に此所を念佛申して通つた者はなかりしか。あの高壇から女中などは見えなんだか。されば、私さき程ふと念佛申したれば、壇の上より美しい女中が、なふおぢやつたかこぬつと出で、ハア、違うたとてぬつとひつ込み、それより念佛申す人一人も通られず、こなたの念佛待つてさうなと、なぶるも知らず、其苦ぢやと打點頭き、なまみだぶく、なまいだく、ア、喉が痛い、こりやあんばいよし湯はないか。いやく、湯も茶もすつきりしまうた。それよく、蕃椒味噌は有るけれど、是ではむせてたまるまいのと、賣物かたげ逃げんとす。こりや待てく、大じの手笞の念佛、一人

とつこの皮一すっぽ
の皮と同じく盗賊の
事

の聲は届かぬさうな、同音に申してくれ、恩に受けう頼むといへば、お易い事ぢやが宗旨がちがうた、御免あれ。なんぢや、ちがうた。さうは言はせぬ、たつた今念佛申したと言つたではないか。いや、只今は魚食うて、口がなまぐさい、明日來て申して進ぜうと、駆け出る掲ひきあひて、袋どうど落ちたりけり。掲こそく、先へおのれがしてやつた、いきがたりめと云ひ捨てて、かゝへて走るをひつたくり、おのれこそ横取のとつこのかは、掲のむね打いたゞくかと、ふりあぐれば、飛びしさり、呑みこまぬやつぢや、やい下郎奴、身が旦那は御牢人、母御よりの御かたみ、命かけて大じの物、戻して旦那出世の後、きつとお禮にあづかるか、無理取して首斬らるゝか、勝手にせいとひるまぬ體、

牛若ひたゝれの模様

龜井もさすが心にくゝ、ふゝ、しかとそれが定ならば、袋の中に何が有る、云うて見よ、違はずはそちにくれうし、もし又ちがふと我やらぬぞよ。中間ちつ共臆せず、それを知らいでよい物か、青貝蒔繪の手箱に、小結の鳥帽子笛一管、五色の糸の滋縫の直垂、大口有る筈、なんとちがひは有るまいがな。ふゝ、然らば笛はいか様の笛なるぞ、オゝ、吹け

ばひい／＼鳴る笛よ。うろたへ者、ヤイ、鳴らぬ笛がある物か、竹の恰好言うて見よ。されば竹は空竹、節込めて蟬のかたちに小枝を切つて残されし、是にちがひは有るまいがな。然らば直垂大口の、縫の模様は何々、地は何色と問ひければ、オ、言うて聞かせんよ。つく聞け、ひたゝれは紗綾綿子、純子縫珍の類ならず、ごきんの綾のもとわたり、山鳩色に薄紅まぜて、さつと一はけはかせかけたる、八重がすり、八ツ色五色のくみ糸にて、十二の菊とぢ四つの紐付、とんぼうむすびてふむすび、雌蝶雄蝶の翅をまなび、つがひむすびに結ばれたり。右の方の折目より、左の袖のはづれまで鞍馬は大悲多聞大、賀茂の御社、糺の森、貴船、松の尾、梅の宮、高きお山に愛宕山、麓には三國一の釋迦如來、蔓を並べしけしきを、手をつくし氣をつくし、上手をつくして縫はれたり。脊筋に源氏のうぶすな石清水正八幡の宮所、朱の鳥居はあかき糸、瑠璃の玉垣るりの糸にてぬはるゝ、百八間の廻廊に廿四孝八景の影物をうつして、一ト間／＼に金糸を入れ、鷺に澤瀉葡萄に栗鼠、車に蠍蟬きり／＼、桐壺筍木若紫、是も源氏の壽の、御代を祝ひてぬひ物せり。こゝに翠の千本松、白鳩千羽ひな鶴千羽、竹の小枝と子の日の松、ひつくはへ／＼、梢／＼に巣をくふ態、源氏の白旗百ながれ、平家の赤はた百ながれ、威勢を争ふ山おろし、神風山かぜあきつ風、平家の赤はたさつ／＼、吹拂ひ吹まとひ、八重の塙路

に引壇の、波間を照らす白旗は、朝日と輝く雲の色、金銀の糸にてぬはれたり。大口ばかまの裾のぬひ、唐のましも千疋、日本のましも千疋、唐土の猿は大國にて、尾を長く色うすく、形を大きにぬはれたり。日ツ本ノは小國の、かほをませく、ませの小猿のすんど小猿の猿、さる／＼、こけざる小猿が唐と日本の潮境、ちくらが沖の、沖の小島の波にしよぼ濡れて、日本のかたへ越すを、越させじ、越さん、越させじ我慢の相、天下分目の軍をまなび、針目たゞしく糸筋きよく、ぬひ仕立てたる直垂を、我朝にて着る人は、我らが主人ならずして、又と二人有るべきか、サア、渡せとぞ申しける。龜井一々聞くに付け、是八幡の引合と、小聲に成つて、扱覺えたり申したり。お主と申すは源氏方のゆかりよの、我は紀州熊野の住人、龜井の六郎重清といふ、代々源氏の下人すぢ、主君と頼む御かたあらば、引合てたべといへば、喜三太、ム、扱は聞及ぶ龜井殿か、我らがお主と申すは、義朝の八男牛若君、御母常盤御前を、清盛入道害せんとの催し故、此所を忍びおち給ひ、此御かたみを若君へ、届け申せとの相圖にて、扱こそか様の次第也。君は近日奥州へ御下向なり、追付跡より下り給へ。某は喜三太と申すお馬取、かねて御披露仕らん。先それ迄は穩便に、其商ひして豆腐に串を挿さう共、腰に刀はさすまいぞと、袋かたげて別るれば、龜井悦び打うなづき、兎角御前はよい様に、追付下つてお目見えし、多

にくれてしまふと、をがみし事も候はず、追付御幸の時節故、此草鞋を捧げん爲め、いそぎ作り候也。あれへ見えさせ給ふ、必ずそれと知らぬ顔、常體の鉢ひらき同前の挨拶と、知らする風の秋の山、たどろくと御幸なる、頭陀の袋あさ衣、鐵鉢を御手に据ゑ、八つめの草鞋召るれば、二人の内侍鳩の杖、綱代の笠を携へて、昔にかはる御供人、賤が門々鉢々と、の給ふにぞ、主の女進ぜましよと、貧女が一錢手の中の、かた搗き麥を御鉢に受け、三寶供養六道の、有縁無縁と御回向あり、頂き給ふぞいたはしき。旅人もわざとしらぬ顔、近比殊勝の修行者、わづかの報謝いたし、受け給はんかと云ひければ、法皇聞召し、さん候、四分律に、十二の頭陀を説かれたる、中にも次第乞食とは、長者をも親します、貧者をも厭はず、次第の門並を、乞って通る法なれば、いかにも申受くべしと、仰せもはてぬに旅人肩にかけたる皮籠を開き、重たさう成一包、御鉢の中へ入れんとすれば、ア、是はおもたげな御施物、金銀でこそ有るらめ、不作餘食と申て、一時の食の外とては、受けぬが頭陀の法ぞかし。只一錢一粒の施あれとの給へば、修行の法はともかくも、此金子三千兩、御僧の外餘の人に、ほどこす金にて候はずと、云捨ててかけ出る。とまれと内侍達、呼ぶ聲耳に聞入れず、田の畦傳ひ逃げて行く。折しも龜井はあきなひより、もどる所を女房是こちの人、あれ捕らまへさつしやれと、

呼ばれれば、まつかせと畠も疇も踏みあらし、あなたこなたへ追ひまはし、なんなく追つめ、どつこいやらぬとむんずと抱く。ヤア、尾籠千萬、何あやまりにかくするぞと、言へば女房走り出で、あやまりないとは言はれまい、今朝起くにひよつと来て、茶一つ飲みやつたばかりぢや。合點のいかぬ顔付ぢやもの、人がなんの講とらうと、わめくを男は聞ちがへ、そりや見たかなあ、男の留守に女房のねごみへしけけ、かゝが出花をよう飲んだなあ。なんぢや、金で済まさうや、一百十日に風は吹かず、かゝが出花の相場が、イヤ、いつ三百目に極つた、サア、うせいと、引すつて立歸れば、法皇御覽じ、ヤレ、さなせそく、其者聊咎はなし、法に過ぎし施物をかへさん爲めなり。いかに旅人、愚老が一鉢は、んがほ、旅人は手をつき頭をさげ、涙を流し居たりしが、一天の君に向ひ奉り、申すも憚多けれども、某は紀州熊野の八姓氏、鈴木の三郎重家と申し、平家の被官にて御座候。拵も小松の重盛、平家の運命末危うし、憂き恥を見ぬ其中に、命を取つて給はれと、三所權現に命乞し、卯月始に熊野參籠有りし時、某を密かに招き、父の入道天命に背き、法皇を鳥羽殿に押籠め、憂目を見せ奉る、冥罰子孫に及ばん。淺ましくも恐ろし。我死して後、此黄金三千兩、法皇へ獻上し、貧苦を慰め參らせよ。世間へは此黄金菩提の爲め、

松柏の云々—論語子
等篇の文句。

震筆—宸筆の誤。

宿紙—遞返しの紙。
論旨を書くに用ふる事あり。

唐へ資道に渡すと披露して、頼むは汝一人、深くつゝめと申されし、此鈴木めを人と見られし、小松の遺言、草葉のかげにも、腑甲斐なく、かつは小松が寸志の忠義、遂げぬも便なく候へば、御そばの上薦達、御取次下されかしと、身をなげ伏して奏しけれ。龜井、さては幼少より別れ育ちし兄なるよと、女房に目くばせし、小くびをかたげ聞き居たる。法皇御手をはたと打ち、松柏の凋むにおくるゝとや。諸木の霜にかゝる時、松の常磐は見ゆるぞや、小松が忠義顯はれたり。それには似ぬ清盛一家が不忠不義、天下の煩國土のうれへ、ごくに亡ぼすべかりしを、小松に免じて助けしなり。いで／＼平家誅罰の院宣をなすべしと、内侍達の懷中の、御硯宿紙にて、震筆の院宣うす墨に遊ばし、義朝が末子牛若、京近邊にありと聞く、此黄金は軍の用意、ともに鈴木渡すべしとて、たびければ、鈴木飛しさり、宣旨背きがたく候へ共、某父かたは鈴木にて、平家の被官、母かたは龜井を名乗て源氏の下人筋、さるによつて、親にて候鈴木の庄司、一人の弟を幼少より引分け、母かたへ付け置き、今にも源平軍となれば、兄弟鎧をけづる中、亡びかゝる平家を捨て、末榮ゆべき源氏に従ふなど、笑はれては、他人よりも耻かし。七歳になる倅をつれ、平家の味方に參る某、院宣の御使は、余人に仰付けらるべしと、申捨てゝ駆け出る。龜井走りかゝつて引止め、ハテ、又してはく、びちくはねる鈴木殿、尾鰭を付け

てなまぐさい云分召るれど、くだらぬ。是もと法皇さまは、平家亡ぼさんとなされし故、かく押籠れおはします、然れば平家の大敵は法皇様、それに金をあてがひ、敵の城へ兵糧をこめながら、源氏に付ては弟が、さげしみが恥かしいとは、一も理のつまらぬいひ分、頭は鱸尾はゑぶな、跡先がそろはぬと、かツら／＼とぞ笑ひける。鈴木はつたとにらみ、ヤア、ぼてふりめ推參千萬、おのれ弓取の法は知るまじい。弟龜井は侍なれば、汝らが推量とは雲泥萬里、そこ立去れとねめ付る、イヤ是、買人も人による、彼の行燈の書付を御覽ぜよ、すんど心底のあんばいよし、さらば其弟の龜井殿に、此あんばいよしが成かはつて回答せば、一言も明せはせぬと、布頭巾取つて捨て、拐腰に脇挟み、膝立て直し、是兄じや人、鈴木殿、僅一人の兄弟を、源平兩家にわけ置かれし、父の心を御存じか、子を思ふ親の慈悲、我子で思ひしり給へ。傾く平家に従うて、兄弟が譽もなく、やみ／＼と屍をさらし、孫の命も有るまじと、子孫の絶ゆるを悲しみ、末繁昌と見え渡る、源氏へ龜井をつけられしは、兄の鈴木を見立てよと、云はねばかりの親心、痛はしとも有難しとも、推量なきは不孝人、親をまなぶは子の作法、七歳の男子を平家がたと名付置き、御身源氏へ忠功あらば、其子も命助かつて、道も立ち子孫も立ち孝も立ち、家も立つ。勅命に背き平家にかたうどし給はゞ、其身は申すに及ばず、七歳五歳もいはせばこそ、胎内迄子孫

を断たれ、親の墓も引毀たれ、道も立ず名も立ず、家の名字も絶やさん事、不孝の罪の第一也。弟は源氏に身を立て、兄の身命果させ、龜井が嬉しかるべきか、曲もなき鈴木殿、けんどんなる兄上と、引寄せ／＼すがり付き、まつ此ごとく本の龜井が悲しまば、何と返答し給ふミ、詞は他人向なれど、涙ぞ誠の涙なる。鈴木横手を丁と打ち、ハア、あやまつたり／＼、院宣の御使して、兄弟諸共源氏がた、牛若君にしたがふべし、汝がいさめを聞くに付け、さこそ龜井が恨むべし、なつかしさよゆかしさよと、そぞろに涙をうかぶれば、なふさ程にしたひ給ふかや、何をかつゝまん我こそ龜井の六郎よ、ヤア、さては弟の重清か、母の名字をついだれば、御ぶんは母のかたみぞや、父の名字をつぎ給ふ、兄こそ父のかたみぞと、兄弟ひしといだき付き、聲もをしまず泣きければ、女房も涙にくれ、供奉の内侍法皇も、御衣の袂を、しほらせ給ふ、歎慮の程ぞ有がたき。かくて龜井は牛若の御ありか、喜三太が口うつしつぶさにかたり、片時も早くとすゝむれば、鈴木もおいとま申せしが、立とゞまつて、思へば／＼小松殿、平家に向つて弓ひけとて、此重家は頼まれじ、苔の下にて亡魂の、安魂もいたはし。院宣の御使して、源氏の味方に参る共、源平兩家の戦ひの、軍のお供は仕らじ、おくれたり臆病と、後ゆびをさゝばさせ、其かはりには牛若の、御行末若し一大事のあらん時、千里もいとはず馳せ参じ、腹十文

字にかき切つて、冥途の御供仕らん、それ迄は重家が、生國藤代に引籠もり、軍に出ねば身は農人、たち刀無用也と、するりとぬきはなし、石に打あて、段々に、打折つてからりと捨て、是ぞ冥途の小松殿へ二心なき未來の忠義、この御使は牛若君に、現世の忠義の初ぞと、守袋の紐をこき、院宣をさめ首にかけ、叡慮を伺ひ立ち出る、兄は正直順路の武士、形一つを源平兩家、現世未來の忠義を立て、弟は孝行武達の勇者、心一つを父と母、兄と君とにたゞせりと、叡慮深く還幸有り。名も水に住む龜鱸、魚と水とのごとなり。

下の巻

車を碎く云々一白染
天の太行路の句によ
る。

敵を見て云々一敵を
見て矢を矧ぐの謡を
用ふ。

車を碎く岩よりも、人の心はさかしくて、船をうかぶる淵よりも、深きは人の心とて、
鈴木三郎重家は、院宣を首にかけ、御曹子の御跡を、したひて奥へ下りしが、義を守つてしましが程、農民となりたれば、太刀をもはかず主従の、見参始いかゞとて、弟龜井打つれて、忍ぶ菅笠美濃尾張、三河にかけし八橋や、水の源頼む身は、平家をいつか打つべきと、常の心に敵を見て、矢作の宿にぞ着きにける。折しもけふは寅の日の、峯の薬師の御縁日、矢作の長者參詣の下向道に行き逢うたり。鈴木は一とせほのかに顔

を見覺えて、是申し、卒爾ながら矢作の宿長者殿にて候な、都三條金賣吉次信高の定宿と承る、此度の下向にも、さぞ泊りにて候はん、十六七の少人を、同道にてはござなきか。若し左様にも候はゞ逢はせてたべと有りければ、長者聞き給ひ、さればとよ、信高殿は、わらはが方に逗留有り、東の名所見物とて、氣高き若衆も御同道、さの給ふ人々は、どなたぞやとぞ答へらる。鈴木兄弟嬉しくて、それこそ源氏の督の殿の若君御曹子、我々は紀州熊野鈴木の三郎重家、舍弟龜井ノ六郎重清と申す者、後白河の法皇より、平家追討の院宣を蒙り、拵こそ尋ね參らする、牛若君に逢はせてたべと、心もいさみ氣もせきて、早う／＼と云ひければ、ア、音高し／＼、數年馴染の吉次殿、みづからにさへあかされず、粗忽にはいかゞ也。まだ逗留の筈なれば、御兩人も我方に、二三日もとゞまりて、折をうかゞひ吉次殿に申こみ、其上には兎も角も、我も人もそれ迄は、知られず知らぬ旅人の宿かり合はせし風情にて、間所も多ければ、緩々休息遊ばせや、さらば案内申さんと、長者はさきにたつか弓、矢作の宿へぞ、三重歸らるゝ

閏 十 三 段

都にまさる、東路や、矢作の長者のひとりびめ、淨瑠璃御前と聞えしは、みねの薬師のま

一人も一人から
講。一人子の愛らし
さもその子の人物い
かんによるの意。
くはんぎなんー歡喜
園(クラシギエーン)。
帝釋天の花園。

たてを所存の一たて
作者を仕事とする。

うし子とて、瑠璃をのべたるかほかたち、ひとりもひとりからなれや、大内そだちにかし
づきて、若紫のをさな立、和歌の道文字の道、繪もうつくしう花むすび、天せい琴の妙を
得て、百の媚もゝのしなくはんぎえんの花のもと、錦華殿の月かけに、明けて三五の
春秋を人に戀られ忍ばれて、戀しと思ふ人はまだ、持ちそめて見ぬ闇の中、およるのもの
ゝ重ね着に、枕一つの丸寝こそ、何に不足はなけれども、物たらずなる寢覺なれ。秋もな
かばの、萩の聲、籠飼の虫の色々に、音をそめ出す萩桔梗、むら／＼薄の露ごとに、うつ
る月かと見るまでに、立て並べたる鏡臺は、だてを所在の女房達、淨るり御前の夕化粧、
其役々をぞ定めらる。先御めのとのれいぜいはおぐしの役、十五夜は額の役、玉藻の前は
ほそまゆの上手なり、そらさゆ月さゆ千じゆの前、白粉油紅の役、有明はお爪の役、さら
しなはとめ伽羅、まがき、さごろも、そつのすけ、楊子手拭ゆするつぎ、さだめの役々勤
めつゝ、淨るり御前はすがた見の、ますみの鏡に向ひ給へば、十五夜れいぜい衣紋つ
くろひ参らする。もうよいわいの、どうたしなんでもつくつても、見せるはをなごばかり
成り、身は闇の夜の花ぞとて、たとへられてもなか／＼に、花も及ばぬ姿なり。かゝる
折ふし御曹子、こよひは父の遠夜ぞと、烏帽子装束あらためて、姫の闇とも白露の、か
ら手水手向草、此ひたゝれ大口は、母の手づからぬひものし、せみをれの一管と、共にか

ゆする一 髪用の
水。

かん五云々一千五上
勾中六下口。笛の歌
口の名稱。みもひも榮
し一催馬の文句。みもひは水
のこと。

まんこが玉一萬戸將
軍が御宮へ叛られた
りといふ玉。まごうて一
債ひて。

たみにたび給ふ。何とかならせ給ふぞと、いとおほつかなつかしく、思ひの數もちく
さの露、かん五上さく中六げく、八つの歌口打しめし、父母の手向の樂なれば、夫をお
もふ想夫戀、みもひもさむしと歌ひけん、昔おぼゆる木枯に、吹きあはせてぞ、三重聞え
ける。さしきには女房達笛の音色に聞惚れて、目をほそめ身をねぢて、腰もふな／＼なり
にけり。姫君感に堪へかねて、おもしろの笛の音や、ことに天満天神の、惜み給ひし樂な
れば、此秘曲を吹く者は、只人にてはよもあらじ、みづからこれにて琴をしらべて合せん
に、いかにととがむる人あらば、簫木の巻と答ふべしとひき寄せて、かき合せ、爪音ゆ
たかに遊ばせば、十五夜、冷泉、太鼓簫簫あひしらひ、まがきへだつる京竹は、心もう
ごく、三重ばかりなり。牛若笛を吹きさして、かゝるあづまに誰なれば、このつまお
との優しやと、のぞき給へば座敷にも、聞きうしなひて茫然と、まんこが玉の玉琴の、
調子まばらに狂ひけり。耳をすまして姫君は、あれ／＼笛がやんだは、まどうてかやし
や、笛かやしやと、御機嫌そんぜしをりからに、御曹子の面影、鏡にうつれば十五夜、な
ふ笛を誰ぞと思ひしに、美しい若衆が、鏡の内にそれ／＼と、走り寄つて姿見に、ひつ
たりと抱き付けば、冷泉も女房達も、騒ぎ立ち、此鏡には袖が有りこちには髪のつと計、
こちの鏡はかんじんの、袴の前腰、ア、うまさうなとくひ付くやら、抱き付くやら、顔は

上氣の濃いもみぢ、女護の島の夢ばなし、男見たるもかくやらん。姫君そぞろの御目もと、是はしたない十五夜、みづからが鏡なれば、内の若衆も妾が若衆、見ぐるしいこち退きや。ほんに是は不調法と立ち退くあとに入かはり、御覽有るまに牛若は、小萩が本の一村に、立寄る姿かぐろひて、鏡に影は止まらず。ホウオ、よい事しやつた、若衆をみなにしやつた、元のやうに入れてかやしやと、御機嫌いよ／＼損すれば、今までありしに不思議な事、誰もかくしはしやらぬかと、騒ぐ人音夕嵐、庭の萩原女原、洩るゝや戀の風ならん。牛若さすが奥ゆかしく、つま戸あらはに押し開き、立聞き給へる御姿、又こそ鏡に映りけれ。十五夜嬉しく、それ／＼御神體が、鏡のうちに顯はれ給ふ、をがませ給へと御手を取り、なふ能く見れば、金賣吉次同道ありし、都の君お目の張の氣高さ、此口元のしほらしさ、御はだぎの白小袖、壓さるゝ程の色白、上がさねは唐綾、上品のひたゝれ、此品々の縫物の手ぎはゝ、心も及ばれず。お烏帽子は左折、黄金作りの御ン佩刀、あのさしぶりの尋常さ。百萬騎の大將と申しても、おめはせじ、ウ／＼いとしらしいお顔や、ほつかりと喰ひ付きたい、お姫様も我々も、鏡で見たは仕合、直に見たならば今頃は、きつけが入るで有らうと、ぞく／＼すれば冷泉、御年は十六七迄は行くまい、姫君様には似合比、十五夜、我々にはちとはしかからうと云ひければ、ア、驕つた事ばかり、はしこうても

こそばうても、たとへゑぐうて跡で口が腫れても、身は構はぬとさゝめく聲、ほの聞ゆれば半若は、きやうとくも逃げ入らず、玉虫拾ひ玉ざゝの、露を飼うてぞおはします。淨るり御前も戀草の、ほに現はるゝ詞の色、さもあれ、此君は源氏方の御ゆかりと覺えたり。いたはしや御代ならば、かく輕々しく有るべきか、苦しからずは暫しが程、御宮づかへ申したしと、思ひしみたる御顔ばせ、冷泉見てとり、なふ十五夜、何卒あの笛をちとの間借りて見せましたし、機轉はないかと云ひければ、オ、おかげにて我々も、ちよつと戴く爲めなれば、隨分借りて參らせんと、庭の薄砂すな／＼と歩みより、今遊ばせし物の音の、笛とやらん申して、火吹竹のやうなもの、我等がお主の姫君、ついに見た事候はず、かりて參れと申さるゝ、お心あれと有りければ、あまり卑下なる御口上、辭退申す筈なれ共、御ことを聞しるべ、吹き汚して候と、幅紗に歌口清めんとし給ふを、いや其まゝが添しとおつとりて、足ばやに様の上へくわら／＼と、一足飛びに駆け上がり、サア、借りました／＼、お口のついた歌口の乾ぬさきに姫君さま、それからはだん／＼に、ちよつちよとねぶつてまはしやと、御口びるにさし附けぬり附け、又用無心も云ふため、約束ちがへずはや返さんと、云へば冷泉、いや／＼今は返さぬ、姫君様のお寢間へ、都人のお忍びで、お手からお手へ請取わたし、それ迄は姫君様、大事の殿ごの御笛握つて／＼

ひとよの情——夜と
一節とく。

東の伽羅——伽羅はこ
にては美人といふ
程の意。
きします——ぢらす。

握りつめてござんせ。それ女房達お寝間とりや、火をともしや」と打連れて、皆々奥へぞ
三重入り給ふ。ふけ行く鐘の初夜も過ぎ、夜露にぬれて御曹子、笛の返事はいかゞぞ
と、つま戸の内に入り給へば、十五夜見参らせ、是和子様、御笛を遅なはり面目もなき事
ながら、妾が姫君、御姿をかいまみの戀風が、ぞつとしてよりお枕あがらず、あはれ
おねまへお忍びあり、御手枕の上にて直にうけ取り給ひなば、薬師まさりの若衆様、さあ
お手引かんと云ひければ、是は思ひもよらぬ事、妹脊の道はまだ知らず、旅の空にてそ
れがまあ、さもしい事とて逃げ給へば、是、それを知らねばお侍のかなはぬ事、すは
夜戦夜討と云ふ時の、一ばん鎌の稽古に成る、萬事のこなしは此十五夜に、まかさせ給
へと押し遣れば、力なくふるひ／＼牛若は、局々を打過で、浮るり御前の闇の戸や、几帳
のかけにぞ忍ばるゝ、十五夜さゝやき、やさしい聲にて、何なりとも云ひかけ給へと、ほ
のめけば、やさしい聲とは笛の音か、母のかたみの一管戻してたべと仰せける。エ、もど
かしい妾に任せて置き給へと、若衆聲にて十五夜は、枕屏風をほと／＼と、數ならぬ
峰の松風琴の音に、通ひまよへる笛竹の、ひこよのなさけをかけ給へ、あづまの伽羅と
ぞ申しける。おそばに臥したる冷泉、それ彼のさまが／＼、少きしまして見さんせと、申
せば姫君どうなりともよい様にしてたもと、お聲も震ひひとつりと、玉ぬく汗もいとしら

し。冷泉は姫君の聲をうつしてほそんと、誰そや誰そ、枕屏風に音するは、聲がはりせぬ鶯の、塔にまどひ給ふかや、よそにも人の聞くものを、還らせ給へと有りければ、十五夜、それ／＼お返事／＼と、云へ共若君身をちゞめ、いか成る責にあふ事ぞ、戻して下され拜む／＼とばかり也。こゝが大事の機會ぞと、又十五夜が聲細め、つれなき事なの給ひそ。九重の塔が高しとて、鳶や鳥がはね打立てゝ飛ぶ時は、九重の塔も下に見る、滄海深しと申せども、櫓櫂のたゝぬ海もなし、山と云ふ山に霞のかゝらぬ山もなし、谷あひと云ふ谷あひに、ちり／＼草の生えぬはなし、駒に踏まれし道芝も、露に一夜の宿は貸す、風にもまるゝさゝ竹も、小鳥に一夜の宿はかす、蘆のかりねのときふねも、比丘尼に一夜の宿はかす、こよひ一夜はなびかせ給へ、つれなの君やと仰せける。姫君はせき給ひ、もうよい加減仕損うてたもんとの給へ共、いや／＼戀は機會が大事ぞと、雲に梯霞に千鳥、木幡山にはあらねども、こちや口なしとて音もせず。十五夜わざと荒らかに、及ばぬ戀との醫かや、とてもこがれ死なんより、腹搔き切て煩惱の犬となり、猫となつて、癒所へぐす／＼とはひ入り、爪を立て、どこもかしこも搔いて／＼搔きたくり、ひり／＼させて我があもひ、一度は晴らし申さんと、足拍子とん／＼、こゝんとんと踏みければ、誠と思ひ姫君は、覺えずねまきほら／＼と駆け出て、ひたゝれの御たもと、ひかへら

るゝもひかふるも、笑顔ばかりの梅櫻、ながしひかへのにらみあひ、しんには中のおもひかや、かくて十五夜冷泉は、これではらちもあか月近し、ア、しんき、／＼と夕づけの、あれ鳥が鳴く鐘が鳴る。先出立が堅くろしい、鳥帽子被たは畫にもありと、寄つてかゝつて直垂や、常陸帶解く紐を解く、淨るり御前の瑠璃の肌源氏の君のひかり肌、お肌比べと押しやれば、いやちや／＼とかぶりあり、後はうなづく花すゝき、亂れ伏す猪の床の内、しつぱりひつたり、しつぱりひつたり、しんそこ／＼、その心ぞ、三重解けにける。かゝる所へ鞍馬山の大天狗、僧正坊けん有り、あらおろかや牛若丸、御身やさしく思ひ立つ、心ざしを感じつゝ、源氏の代とせさせん爲め、劔術軍術残らず教へ、士卒を乞ひに奥へ下すに、淺ましくも色に溺れ、かやうの有様大かたならず、急ぎ東に下るべし、いざ／＼我も伴なはんと、大きに怒りの給へば、牛若はつと立出で、何僧正にてますか、凡心の愛着今更先非を悔ゆといへども、甲斐なき上を御見捨てなく、東へ具せんとは、有がたき御いさめに預るは、言語につきぬ御詞、申上ぐるもはづかし。此上ながら御ゆるされを蒙むり、奥へつれさせ下さるべし、御機嫌なほされ御めぐみ、頼み上ぐると歎かるゝ。然る所へ、又雲中に妙なる聲、僧正しばしと有りけるを、ありあふぬき見給へば、多門天の神勅とて、美童せつなに影向あり、しばらく／＼僧正坊、おこと

知らずや、我朝の佛法破却せんきて、大唐の天狗の首領是界坊、此土に渡り障碍さまぐ
火急なるゆゑ、即ち僧正召し寄せて、唐土に返せと、毘沙門天の神勅により來つた
り。早々歸り是界坊鎮められよと仰有り。僧正坊頭をさげ、いともかしこきみどうじの
神勅つぶさに承り候、扱は是界われ山になきを見すまし來ると見えし、エ、愚なり神ノ國
の直なる道の神風に、追返さんと出給ふを、牛若袂にすがり給ひ、恐れ多くは候へども、
然らば御弟子の中一人、我にみつがせ下さるべし、去とては便なやと餘議なき態、げに誠、
これも御代を鎮めんため、其まゝにも捨て置かれじ、心は二つ身は一つ、行くも行かれず
うろくと、さすがの僧正せんかたも、途方にくれて居られしが、エ、忘れたり、通力は
今此時、氣遣あるな牛若丸、東へも同道せん、都へも此身を分じ、自由自在の飛行のわざ、
見よ／＼と詞もいらぬに、僧正二人に、三重成り給ふ。若君あまり尊さに、はつと禮す
る夜もしら／＼、明行く末は源氏の春、四海波風をさまりて枝を鳴らさぬ御代とかや、
千秋萬歳／＼。

右此本者依小子之懸望附祕密音節自遂校合令開板者也

加賀掾印

二條通寺町西入町
山本九兵衛
刊

發

行

所

文

獻

書

院

東京市神田區錦町一ノ一(振替口座東京六〇〇六一)
京都市下長者町油小路西(振替口座大阪六三〇九二)



昭和三年十一月二十五日印 刷
昭和三年十一月三十日發 行

校註淨瑠璃稀本集(十)

定價壹圓八拾錢

著作者 藤 井 乙 男

京都市下長者町油小路西

兼印刷者
株式會社 文 獻 書 院
代表者 武 藤 欽

印 刷 所
京都市下長者町油小路東
文 獻 書 院 印 刷 所

文學博士 藤井乙男氏編輯及び解説

六

國文・歌謡名著叢刊

四六判布表裝

竹取翁物語解	定價貳圓 送料十二錢	我國物語の祖といはれる竹取物語を詳解したるもの 田中大秀著原本六卷
伊勢物語新釋	定價壹圓六拾錢 送料十二錢	原文の語句を註釋し又章句の大要を述べたるもの藤 井高尙著原本六卷
宇治拾遺物語	定價壹圓六拾錢 送料十二錢	宇治大納言隆國の名によつて古今世間の異事奇聞を 集録したるもの原本十五卷
沙石集	定價壹圓八拾錢 送料十二錢	無住法師の著佛道に關する雜話を集録したる、十卷 百二十餘話
平家物語	定價貳圓 送料十二錢	鎌倉時代の戯記文學として平家物語は代表的である 元和七年の古板本を底本とす
近松世話物全集(上)	定價壹圓五拾錢 送料十錢	近松巣林子の作品は其世話物に金玉の響を殘す、本 集は曾根崎心中外十一篇を收む

雅文笑話集

定價壹圓五拾錢

送料十錢

六樹園のしみのすみか物語、秋成のくせ物語、翁滿の童話長篇、廣道の芦の葉わけ、其他を收む

萬葉集略解(上)

定價壹圓八拾錢

送料十二錢

萬葉集註釋書中の代表的大著、橘千蔭の著にして原本三十卷

古今集遠鏡

(附六歌仙集)

定價貳圓

送料十二錢

古今集の口語譯として本居宣長學生の名著、山崎美成の頭註あり原本六卷

芭蕉七部集

定價壹圓六拾錢

送料十二錢

芭風の代表的俳書、冬の日、春の日、曠野、ひさご、猿蓑、炭俵、續猿蓑の七卷を收む。

萬葉集樺の杣

定價貳圓四拾錢

送料十二錢

上田秋成の萬葉集秀歌評釋にして無二の珍書、原本五卷

蜀山歌集

定價貳圓

送料十二錢

蜀山人の狂歌、狂文、狂詩を收録し、併せて蜀山人の傳記を附錄とす

橘曙覽歌集

定價壹圓六拾錢

送料十二錢

一名志渡夫廻舍家集といふ。曙覽の純眞な美はしき歌想を味ふべきである。

方丈記・徒然草、近松世話物全集下、淨瑠璃稀本集、浮世風呂・浮世床、萬葉集中、同下、舞の本、舉白集、長歌撰格、短歌撰格、鶴衣——【以上近刊】

京都帝國大學教授
文學博士

吉澤義則氏

裝幀及挿畫

菊池契月氏

全王朝文學叢書

平安朝文學の現代語全譯！完成！

圓錢錢錢
拾拾拾拾
貳五五八
圓圓圓圓
參參參參
卷卷卷卷
10 11 12
2 3 9
8 1.4.7
5 7

- 一、竹取、伊勢、大和、堤中納言物語
- 二、三、狹衣物語
- 四、五、六、七、八、九、源氏物語
- 十、落窪物語
- 十一、蜻蛉、土佐、泉式部日記
- 十二、とりかへばや物語

【大阪毎日新聞評】——日本文學の精華として其價値の高い王朝文學が、用語の變遷によつて次第に読みにくくなり、それに親む人の少くなるのを嘆いて企てられた全譯王朝文學叢書は、原文其儘を逐字譯したもので、裝幀も王朝文學として似つかはしいものであり、王朝時代の優しい戀物語の數々が、現代に移し植ゑられたものである。現代の人は本書によつて、もつと日本的な氣持を養ふことが出来る。

【讀賣新聞評】——王朝文學の精粹を、現代口語體に全譯し、さながら王朝時代の人物と精神と風俗景趣を題材とした現代小説を讀むかのやうな平易さと愉悦とを感じしめる。然も忠實な逐字譯を以つして、これ程までに古文學の香氣を見事に傳へ得た譯者の努力は誠に容易ならぬものであらうと察せられる。家庭文庫必備の快書である。

東京一ノ六
京東一六〇〇
市神田口座
町錦區

文獻書院

大坂六市六西
大阪市長振三
京小路口
都下【座二九】

本進呈内見

